# 田原本町文化財調査年報 22

2012年度

田原本町教育委員会

# 田原本町文化財調査年報 22

2012年度

田原本町教育委員会

# 例　　言

1．本書は、田原本町教育委員会が2012年度（平成24年度）に実施した文化財事業の概要をまとめたものである。

2．埋蔵文化財の発掘調査については、土地所有者・施工業者ならびに近隣の皆様にご協力とご理解を賜った。記して感謝します。

3．本書は、Ⅰ．１を清水琢哉、Ⅰ．２を清水・奥谷知日朗の各調査担当者、Ⅱを藤田三郎・西岡成晃、Ⅲを西岡、Ⅳ．１・２を丸山真史（奈良文化財研究所 客員研究員）・藤田、Ⅳ．３を中村泰之（琉球大学熱帯生物圏研究センター）が執筆した。Ⅰ．２の遺物は清水・奥本英里・野尻昌宏・江浦至希子・児玉駿介が実測し、江浦がトレースをおこなった。Ⅳ．２の遺物は藤田が実測し、江浦がトレースをおこなった。本書は西岡が編集した。

4．本書の作成にあたっては、下記の方々からご教示を賜った。ここに記して感謝致します（敬称略・所属機関は当時）。

青木敬・石田由紀子（奈良文化財研究所）

木下亘・前野俊雄・坂靖（奈良県立橿原考古学研究所）

広瀬時習（大阪府文化財センター）

池田裕英・池田富貴子・宮﨑正裕・三好美穂（奈良市教育委員会）

# 目　　次

Ⅰ．田原本町の埋蔵文化財
1．町内における開発と遺跡の異動
（1）町内における開発と発掘調査……1
（2）遺跡の異動……2
2．埋蔵文化財の調査
（1）発掘調査の概要……4
1．唐古・鍵遺跡 第113次調査 ……6
2．羽子田遺跡 第37次調査 ……10
3．十六面･薬王寺遺跡 第29次調査 ……15
4．十六面･薬王寺遺跡 第30次調査……18
5．多遺跡 第25次調査 ……48
6．保津・宮古遺跡 第40・41次調査 ……52
7．常楽寺推定地 第８次調査 ……58
8．黒田遺跡 第３次調査 ……63
9．保津・阪手道 第１次調査 ……67
10．寺内町遺跡 第13次調査 ……71
11．平野氏陣屋跡 第14次調査 ……74
12．十六面･薬王寺遺跡 試掘調査（Ｓ－201201）……77
13．千代遺跡 試掘調査（Ｓ－201202）……84
（2）工事立会の概要・……88
1．唐古・鍵遺跡 工事立会（Ｒ－201226）……90

Ⅱ．資料の整理と活用・普及
1．文化財資料の整理・保管
（1）埋蔵文化財の整理・保管……97
（2）木製品の樹種同定と保存処理……99
（3）図面・写真の保管と資料撮影、写真のデジタル化 ……102
（4）図書の受領 ……103
2．遺跡・文化財の保護
（1）町指定文化財 ……103
3．講座 ……107
4．学校教育等への支援
（1）小学校出前授業・教材貸出 ……108
（2）中学校職場体験学習 ……109

（3）大学の学外授業 ……109
（4）講師の派遣 ……110
5．刊行物一覧 …… 110
6．資料の活用
（1）資料の貸出 ……111
（2）写真掲載・撮影 ……112
（3）資料調査 ……116
7．ボランティア組織
（1）ボランティア組織の概要 ……116

Ⅲ．唐古・鍵考古学ミュージアム
1．常設展示
（1）田原本ギャラリー　今回の逸品 ……121
2．企画展・ミニ展示
（1）春季企画展「村を守る―乱世の考古学―」 …… 122
（2）特別展示「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」……126
3．入館者・ホームページ
（1）入館者数 ……127
（2）節電対策夏季無料入館 ……129
（3）入館者アンケート ……130
（4）視察・研修・学校等からの来館 ……130
（5）ホームページ ……131
4．ボランティアガイド
（1）ボランティアガイドの実績 ……132

Ⅳ．資料の報告
1．唐古・鍵遺跡出土の魚類遺存体について（丸山真史・藤田三郎）……135
2．唐古・鍵遺跡出土の古墳時代中期の馬骨について（丸山真史・藤田三郎） …… 149
3．唐古・鍵遺跡出土の両生類遺存体（中村泰之）……157

# Ⅰ．田原本町の埋蔵文化財

# 1．町内における開発と遺跡の異動

## （1）町内における開発と発掘調査

本町における2012年度（平成24年度）の民間開発行為等による埋蔵文化財発掘届（第93条）は52件、地方公共団体等による通知（第94条）は13件で、計65件を数える。昨年度と比較して町事業による94条通知件数が半数以下となっているが、これは昨年度に田原本町の総務課が実施した防災無線設置事業に伴う無線拡声子局設置工事の通知が18件あったためで、これを除くと平年並みである。

本年度の発掘調査は14件である。内訳は、個人住宅等の建築４件、史跡整備に伴う事前調査１件、公共事業５件、民間開発４件である。

第１表　田原本町における2012年度の発掘届・通知件数一覧

| 発掘届<br>93 条 | 発掘通知<br>94 条 | | 発掘調査 | 工事<br>立会 | 慎重<br>工事 | 先行<br>工事 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 52<br>(うち取下 1) | 13 | 通知内容 | 10 | 24 | 30 | － |
| | | 実施分 | 町 14<br>県　0 | 32 | － | － |

第２表　田原本町の発掘届・通知と発掘調査件数の推移

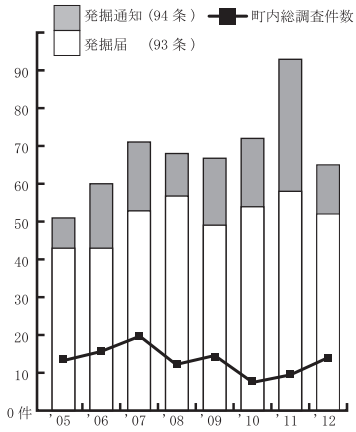
| | | ’05 | ’06 | ’07 | ’08 | ’09 | ’10 | ’11 | ’12 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 発掘届（93 条 | | 43 | 43 | 53 | 57 | 49 | 54 | 58 | 52 |
| 発掘通知（94 条 | | 8 | 17 | 18 | 11 | 18 | 18 | 35 | 13 |
| 計 | | 51 | 60 | 71 | 68 | 67 | 72 | 93 | 65 |
| 発掘件数 | 町 | 14 | 12 | 18 | 11 | 13 | 7 | 10 | 14 |
| | 県 | 0 | 4 | 2 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 町内総調査件数 | | 14 | 16 | 20 | 12 | 14 | 8 | 10 | 14 |

第３表　町教育委員会が実施した発掘調査の原因別推移

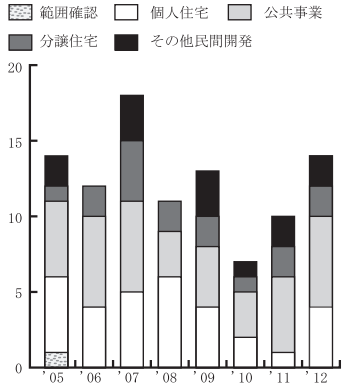
| | | ’05 | ’06 | ’07 | ’08 | ’09 | ’10 | ’11 | ’12 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 範囲確認 | | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 個人住宅 | | 5 | 4 | 5 | 6 | 4 | 2 | 1 | 4 |
| 公共事業 | | 5 | 6 | 6 | 3 | 4 | 3 | 5 | 6 |
| 民間開発 | 分譲 | 1 | 2 | 4 | 2 | 2 | 1 | 2 | 2 |
| | その他 | 2 | 0 | 3 | 0 | 3 | 1 | 2 | 2 |
| 計 | | 14 | 12 | 18 | 11 | 13 | 7 | 10 | 14 |

第４表　町教育委員会による調査の面積及び出土遺物数の推移

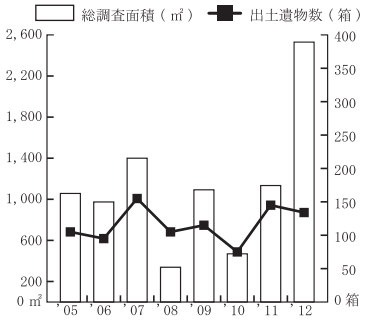
| | ’05 | ’06 | ’07 | ’08 | ’09 | ’10 | ’11 | ’12 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 総調査面積（㎡） | 1,030 | 986 | 1,400 | 341 | 1,117 | 457 | 1,152 | 2,530 |
| 出土遺物数（箱） | 104 | 95 | 146 | 103 | 118 | 74 | 140 | 134 |




第１図　発掘届・通知と調査件数の推移




第２図　発掘調査原因の推移




第３図　調査面積と出土遺物数の推移

（２）遺跡の異動

2011年度および2012年度におこなった遺跡の異動は６件である。１件は新規遺跡の発見、３件は新規古墳の発見である。また、工事立会により遺跡内容が明らかとなったことによる新規名称付与および内容変更が１件、遺跡の範囲および内容の変更が１件である。なお、2011年度分については施行日が平成24年４月１日であったため、本報告に掲載する。

**羽子田29号墳・30号墳**　羽子田遺跡第35次調査で検出した５世紀後半の溝は、周囲の状況等から方墳となる可能性が高いことから羽子田29号墳とした。また、同調査で検出した６世紀前半の方墳とみられる溝を羽子田30号墳とした。

**小阪細長５号墳**　小阪細長遺跡第２次調査で検出した直径15m前後の円墳である。遺物が僅少で詳細な時期は不明だが、６世紀頃の遺構と考えられる。

**大網遺跡**　平成22年度の下水道工事に伴い工事立会をおこなったところ、中世～近世の溝を検出し、室町時代を中心とした遺物が出土した。大網集落の西側には「教行寺」があり、文明末頃（1480年代か）の兵乱により百済村新子（現広陵町）から大網村に移転したと伝えられる。今回の遺構・遺物はそれに関連する可能性が高い。このため、周知の遺跡外であるが、新規遺跡としての登録をおこなった。

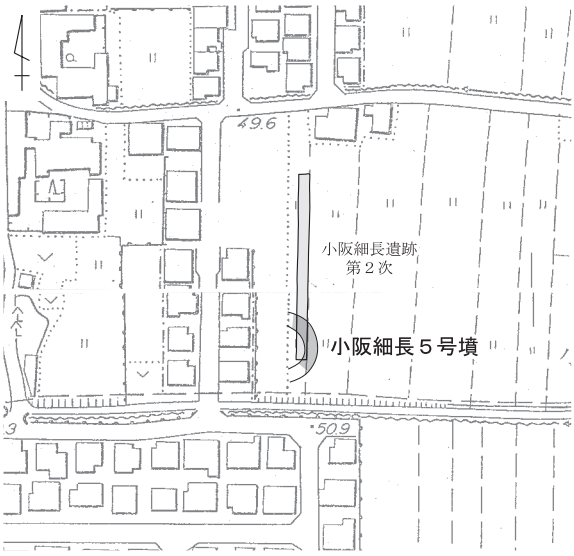
**大木遺跡**　大字大木に所在する遺物散布地であるが、下水道工事に伴い工事立会を実施した結果、古墳時代前期および鎌倉・室町時代の遺物包含層を検出した。大字名から大木遺跡と命名し、判明した内容の登録をおこなった。

**十六面・薬王寺遺跡**　遺跡南端で実施した第27次調査で、弥生時代中期や古墳時代前期の遺構・遺物を確認したこと、また、以前の第11・24次調査の成果を総合すると、墓域・集落域が従来の遺跡範囲よりも南東に拡がることが確実になった。なかでも、同調査で検出した弥生時代中期の方形周溝墓は、これまで本遺跡で知られていなかった内容である。

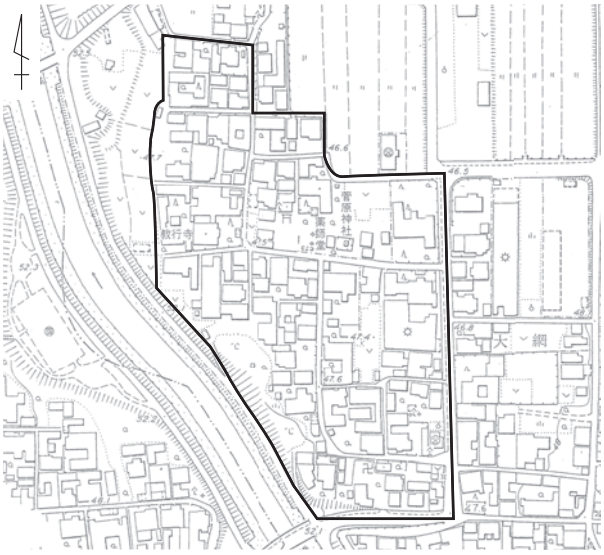
第５表　遺跡の異動一覧表

| | 遺跡番号 | 遺　跡　名 | 異動内容 | 異動原因 | 遺跡概要 | 報　告 | 通　知 | 施行日 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 11C-0164 | 羽子田29号墳 | 新規発見 | 羽子田遺跡第35次調査 | 方墳（５世紀後半）南側・東側周濠確認 | 23.6.9 田教文 第83-1号 | 24.3.19 教文第7005号 | 24.4.1 |
| 2 | 11C-0165 | 羽子田30号墳 | 新規発見 | 羽子田遺跡第35次調査 | 方墳（６世紀前半）北側・東側周濠確認 | 23.6.9 田教文 第83-2号 | 24.3.19 教文第7006号 | 24.4.1 |
| 3 | 11C-0166 | 小阪細長５号墳 | 新規発見 | 小阪細長遺跡第２次調査 | 円墳（６世紀前半）東側周濠確認 | 23.6.9 田教文 第83-3号 | 24.3.19 教文第7007号 | 24.4.1 |
| 4 | 11C-0167 | 大網遺跡 | 新規発見 | 工事立会（下水道工事） | 中・近世の集落跡・社寺跡 | 23.6.9 田教文 第83-4号 | 24.3.19 教文第7008号 | 24.4.1 |
| 5 | 11D-0659 | 大木遺跡 | 新規名称内容変更 | 工事立会（下水道工事） | 古墳時代前期の遺物包含層を確認 | 23.6.9 田教文 第83-5号 | 24.3.19 教文第7009号 | 24.4.1 |
| 6 | 11C-0032 | 十六面・薬王寺遺跡 | 範囲・内容の変更 | 十六面・薬王寺遺跡第27次調査 | 弥生時代中期と古墳時代前期の方形周溝墓等を確認 | 24.5.11 田教文 第81号 | 25.8.8 教文第7020号 | 25.8.15 |

羽子田 29・30 号墳（Ｓ＝1/2,500）

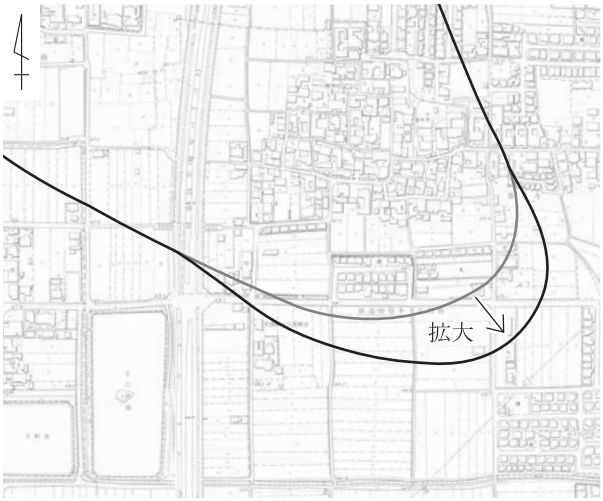



小阪細長５号墳（Ｓ＝1/2,500）



大網遺跡（Ｓ＝1/5,000）

大木遺跡（Ｓ＝1/5,000）




十六面･薬王寺遺跡（Ｓ＝1/10,000）

第４図　2011・2012年　遺跡の異動位置図

## 2. 埋蔵文化財の調査

（1）発掘調査の概要

本年度は12件の発掘調査、2件の試掘調査を実施した。弥生時代～古代では、羽子田遺跡、十六面・薬王寺遺跡、多遺跡で成果が得られた。十六面・薬王寺遺跡では、遺跡北西部での大規模店舗建設に伴う調査を実施した。その結果、古墳時代前期末頃の玉製作関連遺構および遺物を確認したほか、飛鳥時代の水田開発に伴う水路、奈良時代の建物群等を検出した。特に、奈良時代の柱穴から出土した軒丸瓦は平城宮東院で使用されたものと同笵であることが確認された。多遺跡では、古墳時代中期頃の溝を検出し、初期須恵器を含む一括遺物が出土した。

中世～近世では、常楽寺推定地・寺内町遺跡等で成果が得られた。常楽寺推定地では、中世～近世にかけて機能したとみられる大溝を検出した。

第5図　田原本町の遺跡と調査地点（S＝1/40,000）

## 第６表　2012年度　発掘調査一覧表

| | 遺跡名 | 次数 | 調査地 | 原因者 | 原因 | 期間 | 面積 | 担当 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 検出遺構 | | | 出土遺物 | | | 遺物量(箱) |
| 1 | 唐古・鍵 | 第113次 | 田原本町大字唐古小字田中 139・140 | 田原本町長 | 史跡公園整備のための発掘調査 | 2012. 5. 9 ～ 8.18 | 312㎡ | 奥谷知日朗<br>田中友貴恵 | 総合政策課 |
| | | | 中　　世：土坑１基、小溝３条、柱穴群<br>中世以降：土壇１基 | | | 弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、石器等 | | | 40箱 |
| 2 | 羽子田 | 第37次 | 田原本町大字新町小字池ノ内 70-1 | 細山商事㈱ | 宅地造成 | 2012. 4. 9 ～ 4.19 | 36㎡ | 奥谷 | 受託事業 |
| | | | 弥生時代後期：土坑１基、溝１条<br>古墳時代初頭：方形周溝墓？１基、土坑１基、小溝３条<br>古墳時代後期：溝？１条<br>近　　世：素掘小溝群 | | | 弥生土器、土師器、須恵器、木製品等 | | | ３箱 |
| 3 | 十六面・薬王寺 | 第29次 | 田原本町大字薬王寺小字坊田 374-10 | 個人 | 個人住宅の建築 | 2012. 4.16 | ３㎡ | 清水琢哉 | 国庫補助事業 |
| | | | 弥生時代：溝１条<br>古墳時代：溝１条<br>中　　世：溝１条 | | | 弥生土器等 | | | １箱 |
| 4 | 十六面・薬王寺 | 第30次 | 田原本町大字十六面小字 竹原田55他 | ㈱オークワ | 大規模店舗の建築 | 2012. 4.23 ～ 7.17 | 1,540㎡ | 清水<br>石井恵子 | 受託事業 |
| | | | 弥生時代　　：溝１条<br>古墳時代前期：竪穴住居５基、土坑６基、溝５条、河跡２条<br>古墳時代後期：溝１条、土坑１基、河跡２条<br>飛鳥時代　　：河跡１条、溝２条、土坑１基、小溝群<br>奈良時代　　：掘立柱建物跡10棟<br>平安時代　　：井戸１基<br>中・近世　　：小溝群 | | | 弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦、木製品等 | | | 66箱 |
| 5 | 多 | 第25次 | 田原本町大字宮森小字<br>池田川内80-1他　北側道路 | 田原本町長 | 下水道工事 | 2012. 6.25 ～ 6.26 | ８㎡ | 奥谷・田中 | 下水道課 |
| | | | 弥生時代　　：溝２条<br>古墳時代中期：溝１条 | | | 弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等 | | | ２箱 |
| 6 | 保津・宮古 | 第40次 | 田原本町大字宮古小字<br>坊ノ北浦151-1他　北側道路 | 田原本町長 | 下水道工事 | 2012. 7. 9 ～ 7.11 | 13㎡ | 奥谷・田中 | 下水道課 |
| | | | 弥生時代：落ち込み１条<br>古墳時代：溝？１条<br>古 代 ？：溝１条<br>中　　世：溝１条、小溝１条 | | | 弥生土器、土師器等 | | | １箱 |
| 7 | 保津・宮古 | 第41次 | 田原本町大字宮古小字<br>坊ノ北浦136-4　北側道路 | 田原本町長 | 下水道工事 | 2013. 1.15 | ６㎡ | 奥谷<br>奥本英里 | 下水道課 |
| | | | 古代以前：小溝１条、柱穴１基<br>中　　世：小溝２条 | | | 土師器、須恵器、瓦器等 | | | １箱 |
| 8 | 常楽寺推定地 | 第８次 | 田原本町大字宮古小字石橋 455-2他 | 田原本町長 | 下水道工事 | 2012.10.25 ～10.26 | ６㎡ | 奥谷・田中 | 下水道課 |
| | | | 中世後期～近世初頭：大溝１条<br>近　世　後　期：大溝１条 | | | 土師器、瓦質土器、近世陶磁器、瓦等 | | | １箱 |
| 9 | 黒田 | 第３次 | 田原本町大字黒田小字堂ノ北 399-2 | 個人 | 個人住宅の建築 | 2012. 6. 5 | ４㎡ | 奥谷 | 国庫補助事業 |
| | | | 中　世：溝１条、小溝２条<br>近世～：素掘小溝３条 | | | 土師器、輸入磁器等 | | | １箱 |
| 10 | 保津・阪手道 | 第１次 | 田原本町大字宮古小字<br>南ドン川1-3他　南側道路 | 田原本町長 | 下水道工事 | 2012.11. 5 ～11. 8 | 13㎡ | 奥谷・奥本 | 下水道課 |
| | | | 古墳時代？：河跡１条<br>近　　世？：溝１条 | | | 土師器等 | | | １箱 |
| 11 | 寺内町 | 第13次 | 田原本町小字南町415 | 個人 | 個人住宅の建築 | 2012.11.27 ～11.28 | 10㎡ | 奥谷・奥本 | 国庫補助事業 |
| | | | 近世：土坑２基、小溝３条、柱穴１基 | | | 土師器、近世陶磁器、瓦等 | | | ２箱 |
| 12 | 平野氏陣屋跡 | 第14次 | 田原本町小字奥城ヤシキ 792-2 | 個人 | 個人住宅の建築 | 2013. 2.21 | ３㎡ | 奥谷・田中 | 国庫補助事業 |
| | | | 中世：素掘小溝？１条<br>近世：溝１条 | | | 土師器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器、瓦等 | | | １箱 |

## 第７表　2012年度　試掘調査一覧表

| | 遺跡名 | 調査地 | 原因者 | 原因 | 期間 | 面積 | 担当 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 検出遺構 | | | 出土遺物 | | | 遺物量(箱) |
| A | 十六面･薬王寺遺跡<br>S-201201 | 田原本町大字十六面98-1他 | ㈱コメリ | 大規模店舗の建築 | 2013. 1.12 ～ 1.29 | 567㎡ | 清水・奥谷<br>田中・奥本 | 国庫補助事業 |
| | | 縄文時代後期？　：溝？１条<br>弥生時代中期初頭：溝１条、落ち込み？１条<br>弥生時代中期　　：落ち込み？１条<br>弥生時代後期　　：溝１条<br>古墳時代前期　　：方形周溝墓？１基<br>古　　代　　：溝２条<br>中　　世　　：素掘小溝群 | | | 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器等 | | | 10箱 |
| B | 千代遺跡<br>S-201202 | 田原本町大字千代小字ヒロト 872 | 奈良シティ建設㈱ | 宅地造成 | 2013. 2.22 | ９㎡ | 清水・奥谷<br>田中・奥本 | 直接執行 |
| | | 中世：溝１条 | | | 土師器、瓦器等 | | | １箱 |

## １．唐古・鍵遺跡　第113次調査

### １．遺跡・既調査の概要

唐古・鍵遺跡は初瀬川（大和川）と寺川の間、標高約48.0m前後の沖積地に立地する弥生時代を代表する環濠集落遺跡である。現在、遺跡中央部が国史跡に指定され、本町による史跡公園の整備事業が進められている。

遺跡中央北の唐古池は江戸時代に築造されたことが判明しているが、その東側には周囲の水田より一段高い畑地が点在する。これらは「唐古東氏居館跡推定地」として中世豪族居館跡と推定されている。さらに、1070年の興福寺雑役免庄坪付帳によると唐古池およびその周辺は興福寺雑役免庄「田中庄」の田地が拡がることが知られる。田中庄の中央に位置するこの畑地部分は田中庄荘官の屋敷地である可能性も考えられた。なお、この田中庄は、長保元年（999）の時点で藤原宣孝（紫式部の夫として知られる中央貴族）の所領だったことも判明しており、荘官は文氏が務めていた。

唐古池東側の土壇のうち北端の一つは、一辺約25m、高さ0.8～１mの正方形で、昨年度実施した土壇の確認調査（第109次調査）により、中世以降に造成されて土壇となったことが判明した。ただし、土壇部分とその周辺は平安時代後期には集落域となっていたことも明らかとなっている。

この土壇部分には、下層遺構として弥生集落の最内の環濠「大環濠」が存在することが過去の調査により判明している。公園整備においては、土壇の約半分を削り取り「大環濠」を復元する計画となっており、本調査では土壇のうち「大環濠」復元により削られることになる北東側1/2について工事深度までの掘り下げをおこなった。

### ２．調査の成果

（１）層序

Ⅰ：灰褐色土〔検出標高48.8m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：淡茶灰色土〔48.5m〕、Ⅲ：茶褐色土〔48.3m〕、Ⅳ：褐灰色土〔48.1m〕、Ⅴ：暗褐色土〔48.0m〕、Ⅵ：黒褐色土〔47.9m〕、Ⅶ：暗褐灰色土〔47.7m〕、Ⅷ：灰黒色土〔47.5m〕

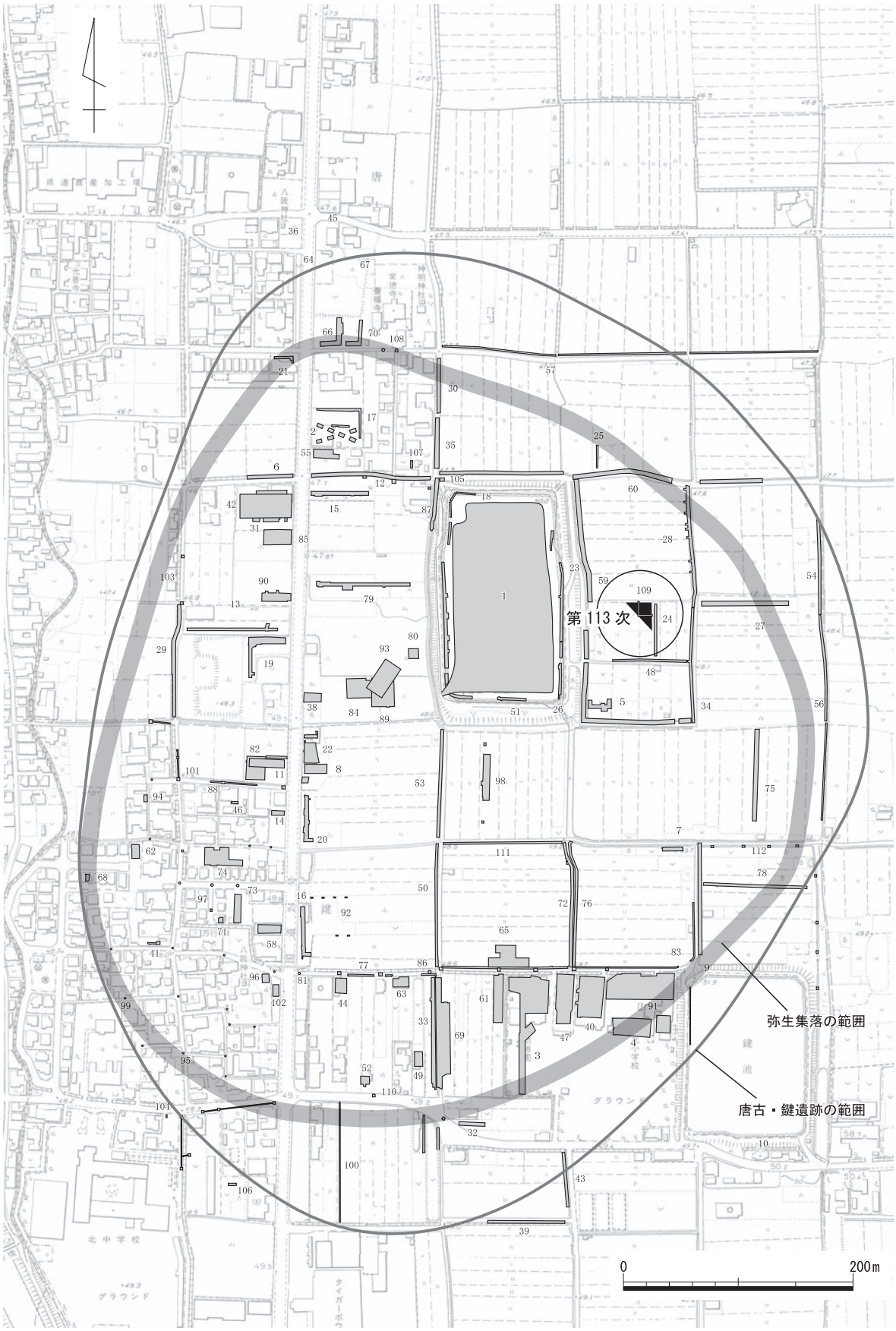
調査地はもと畑（柿畑）であった。本調査では、第Ⅰ～Ⅲ層までを重機で除去し、それ以下は人力により掘削した。第Ⅶ層以下は工事深度より下となるため掘削していない。

第Ⅰ層は現代の畑土である。第Ⅱ・Ⅲ層は近世後期以降の造成土と考えられる。第Ⅳ～Ⅵ層は弥生・古墳・古代・中世土器の細片を多く含む遺物包含層である。第Ⅴ層は若干の瓦質土器を含むことから室町時代に、第Ⅵ層は鎌倉時代頃に形成された層とみられる。

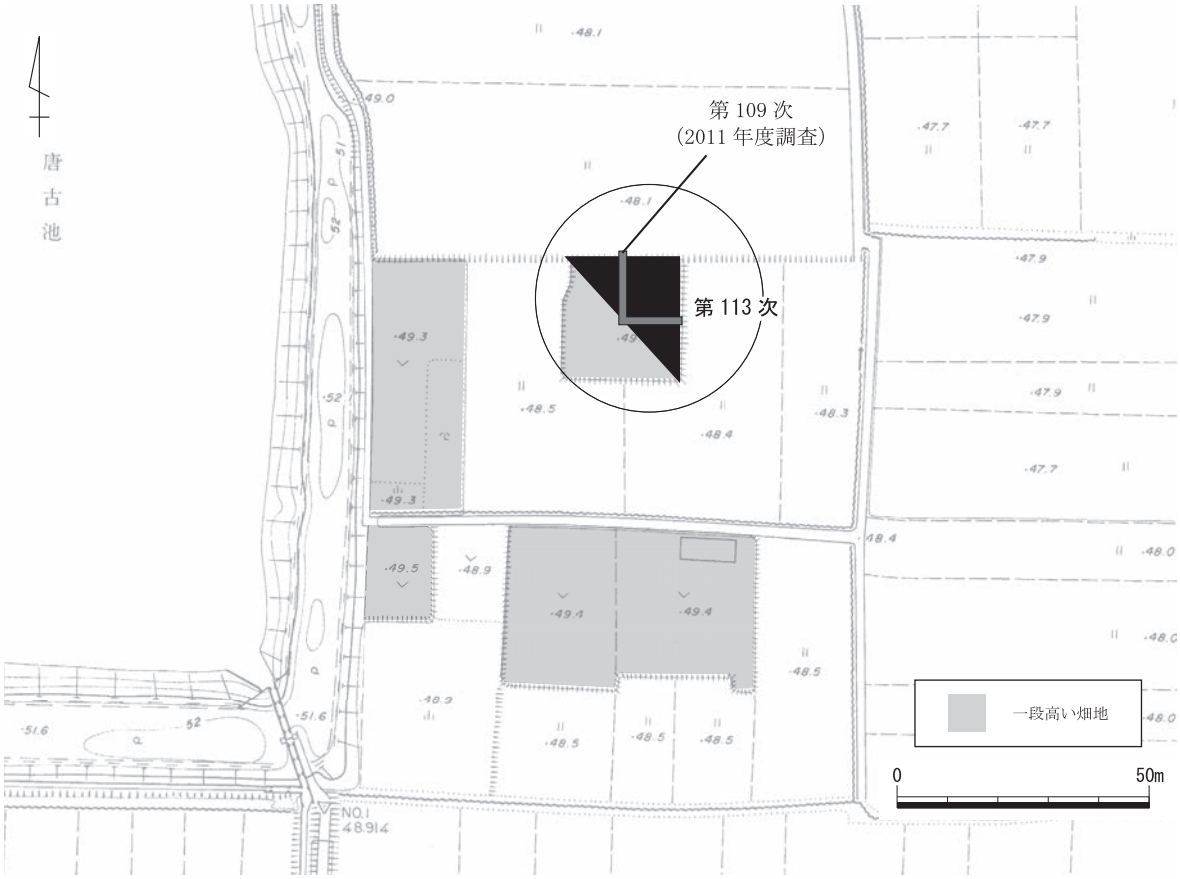
第Ⅶ層は平安時代頃の層とみられ、その上面が平安時代後期の遺構検出面である。第Ⅷ層は弥生～古墳時代の遺物包含層。第Ⅷ層直下には暗黄灰色砂質土が拡がり、その上面が弥生時代の遺構検出面である。

（２）遺構と遺物

中世以降の削平が少なかったとみられる調査区中央部付近のみ第Ⅶ層上面が露出し、土坑１基、小溝３条、柱穴群を検出した。小溝は直角に屈曲するものもある。これらの遺構は検出のみに止めているため詳細は不明である。




第 6 図　調査地位置図（S＝1/5,000）




第７図　第113次調査地位置図（Ｓ＝1/1,500）

このうち、本調査区の東端で検出した土坑は第109次調査で一部深掘りをおこなっている（ＳＫ－2051）。平面形が楕円形を呈し長径が約２ｍ、深さが約0.9ｍを測る。上層から土師器中皿・羽釜片が出土したほか、下層から底は打ち欠いた土師器羽釜１点が出土した。12世紀前半の井戸とみられる。

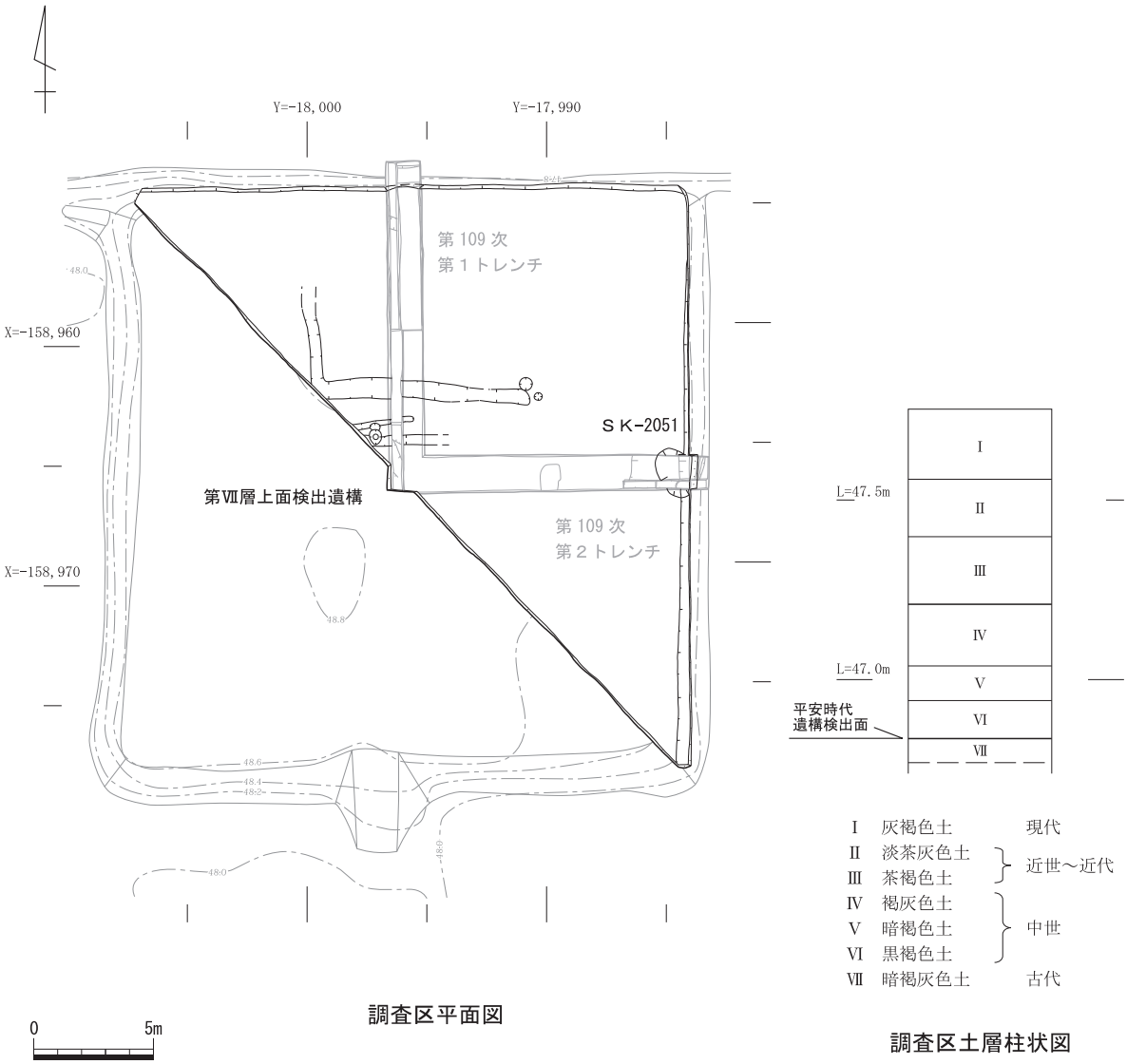
なお、基壇造成層からは多数の弥生土器のほか、初期須恵器片や黒色土器片等が出土している。

## ３．まとめ

昨年度の第109次調査と本調査により、土壇の形成時期を把握することができた。

第Ⅶ層上面で検出した12世紀の遺構群は「田中庄」との関連がうかがえる。田中庄は10世紀頃に形成され、興福寺雑役免荘として組み込まれていったとみられる。周辺の調査でも10～11世紀の集落遺構が検出されており、本調査においても黒色土器等の当時期の遺物が確認された。

集落遺構が埋没した後は、鎌倉時代頃に第Ⅵ層が、室町時代に第Ⅳ・Ⅴ層が盛土をおこなうように形成されたことが判明した。中世豪族の唐古東氏の居館に伴う可能性もあるが、当時期の遺構等検出されず、その性格は不明で、今後の課題である。




第８図　調査区平面図及び調査区土層柱状図（左：Ｓ＝1/300、右：Ｓ＝1/20）

１．調査地全景（南東から）

２．調査地全景（東南東から）

## ２．羽子田遺跡　第37次調査

### １．遺跡・既調査の概要

羽子田遺跡は田原本町中央の遺跡で標高約46m前後の沖積地に立地する。これまでの調査では、弥生時代中期～古墳時代前期の集落遺構と、古墳時代前期末～後期の古墳群が検出されている。古墳はこれまでに後期の方墳を中心に30基が確認されており、羽子田古墳群と名付けられている。

今回の調査地は遺跡の中央にあたり、周辺の調査でも集落遺構・古墳が多数検出されている。

### ２．調査の成果

本調査は宅地開発に伴う事前調査である。敷地内を２つの宅地と共用道路に区画する工事で、共用道路部分において東西12m、南北３ｍの調査区を設定した。

（１）層序

０：茶褐色土等〔検出標高48.8m、以下数値のみ記す〕、Ⅰ：暗茶灰色土〔48.1m〕、Ⅱ：灰褐色粘質土〔48.0m〕、Ⅲ：淡灰褐色土〔47.9m〕、Ⅳ：灰色粘質土〔47.8m〕、Ⅴ：黄褐色土〔47.7m〕、Ⅵ：黒褐色土〔47.5m〕、Ⅶ：灰黄色粘土〔47.3m〕、Ⅷ：暗灰褐色粘土〔47.0m〕、Ⅸ：淡黄灰色粘土〔46.9m〕

本地の現況は駐車場である。第Ⅰ層は現代の造成土でコンクリート等が多く混じる。第Ⅱ～Ⅲ層は旧水田の耕土・床土層である。第Ⅳ層は中世包含層である。第Ⅴ層は土師器・須恵器を包含する古墳時代に形成された遺物包含層で、上面が古墳時代後期の遺構検出面である。その直下、第Ⅵ層上面が弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構検出面である。第Ⅵ層は周辺の調査から縄文時代に形成された層、第Ⅶ層以下は地山である。

（２）遺構と遺物

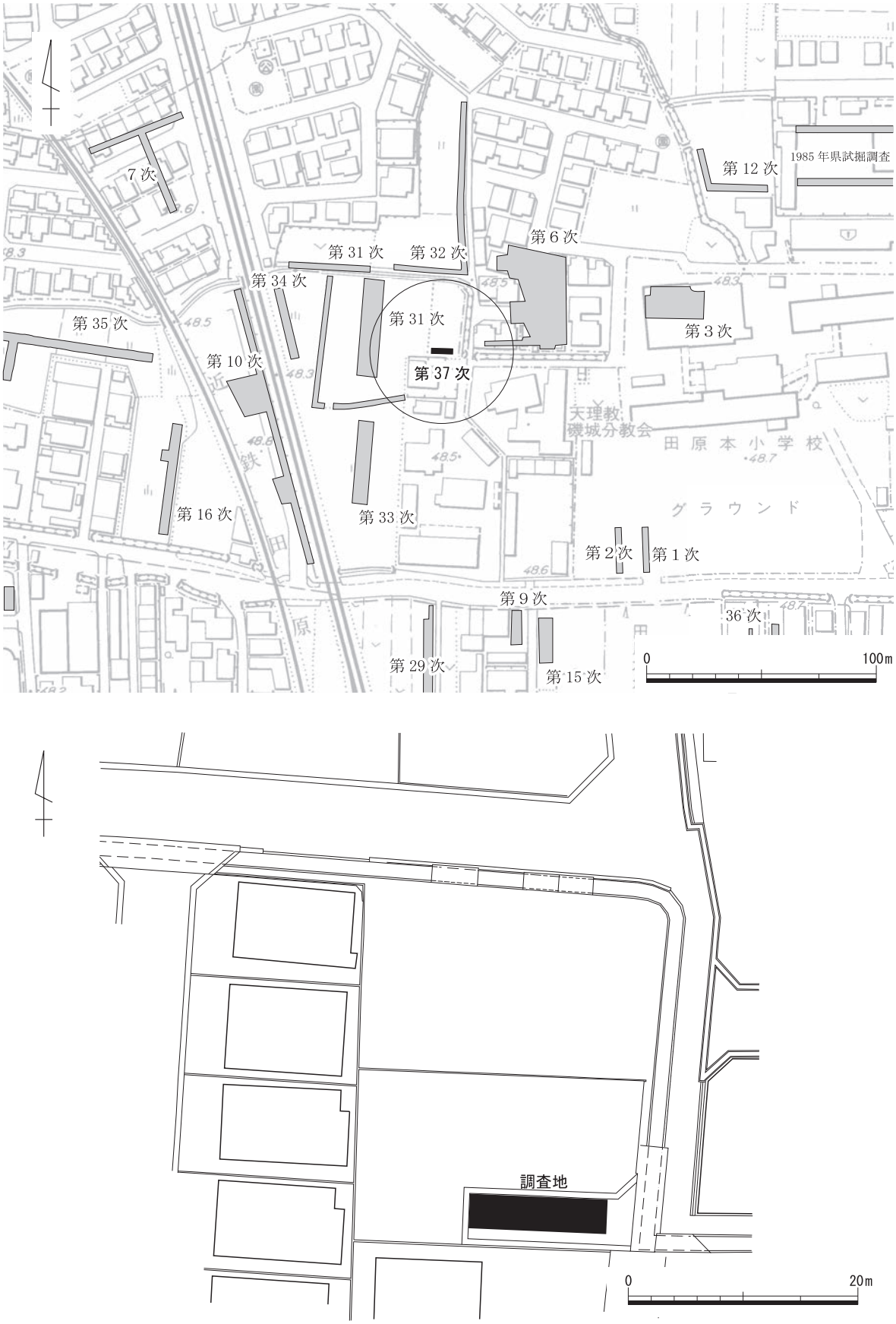
**弥生時代～古墳時代初頭**

第Ⅵ層上面で検出した遺構群である。

**ＳＫ－101**　トレンチ中央で検出した土坑である。土坑の北半は調査区外にあたる。平面形がほぼ円形の浅い皿状を呈した土坑で、土坑西半がやや深くなる。平面径は2.7m、深さは0.3mを測る。遺物量は少なく、時期は庄内期とみられる。

**ＳＫ－102**　トレンチ西半で検出した土坑である。土坑の北半は調査区外にあたる。後述のＳＤ－104を切っており、それより新しい遺構である。平面形がほぼ円形の擂り鉢状を呈した土坑で、平面径が2.5m、深さは0.7mを測る。最上層から奈良盆地東南部の完形の甕が１点出土した。時期は大和第Ⅵ－３様式で、本土坑の性格は井戸が考えられる。

**ＳＤ－102・－103**　トレンチ東半で検出した溝をＳＤ－102、トレンチ西半から中央にかけて検出した溝をＳＤ－103とする。どちらも片方の肩部を検出したのみで、溝幅は不明である。ＳＤ－102はほぼ南北方向に走行し、トレンチ南端近くで西へ屈曲する。深さは0.4mを測る。遺物量は少ない。ＳＤ－103は東南東－西北西方向に走行し、北へ緩やかに曲がる。深さは0.4mである。遺物量は少ないが、調査区南端に近い位置で完形の小形壷１点が出土した。時期は庄内期である。ＳＤ－102とＳＤ－103は遺構規模や堆積土等から一連の遺構とみられ、一辺約９ｍの方形周溝墓の周濠




第9図　調査地位置図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/500）

と考えられる。

**ＳＤ－104**　トレンチ西半で検出した南北方向の溝である。ＳＫ－102やＳＤ－103に切られる。溝幅は２ｍ、深さは0.5ｍを測り、粗砂層で埋没する。最下層から完形の甕１点が出土している。時期は大和第Ⅵ－２様式である。

**ＳＤ－105**　トレンチ東半から中央で検出した小溝である。東西方向で緩やかに弧を描いて走行する。溝底面がやや凹む箇所もある。溝幅は0.4ｍ、深さは0.1～0.2ｍを測る。平面・断面観察よりＳＫ－101とＳＤ－102に切られる。遺物量は少なく詳細な時期は不明である。本溝の性格も不明。

なお、本溝に切られる浅い小溝２条も確認している（ＳＤ－106・－107）。出土遺物はなく、詳細不明。

**古墳時代後期**

第Ⅴ層上面で検出した遺構である。

**ＳＤ－101**　トレンチ中央から西半で検出した溝である。南北方向に走行し、溝幅は６ｍ、深さは0.2ｍを測る。古墳時代後期の土師器や須恵器の小片が出土している。

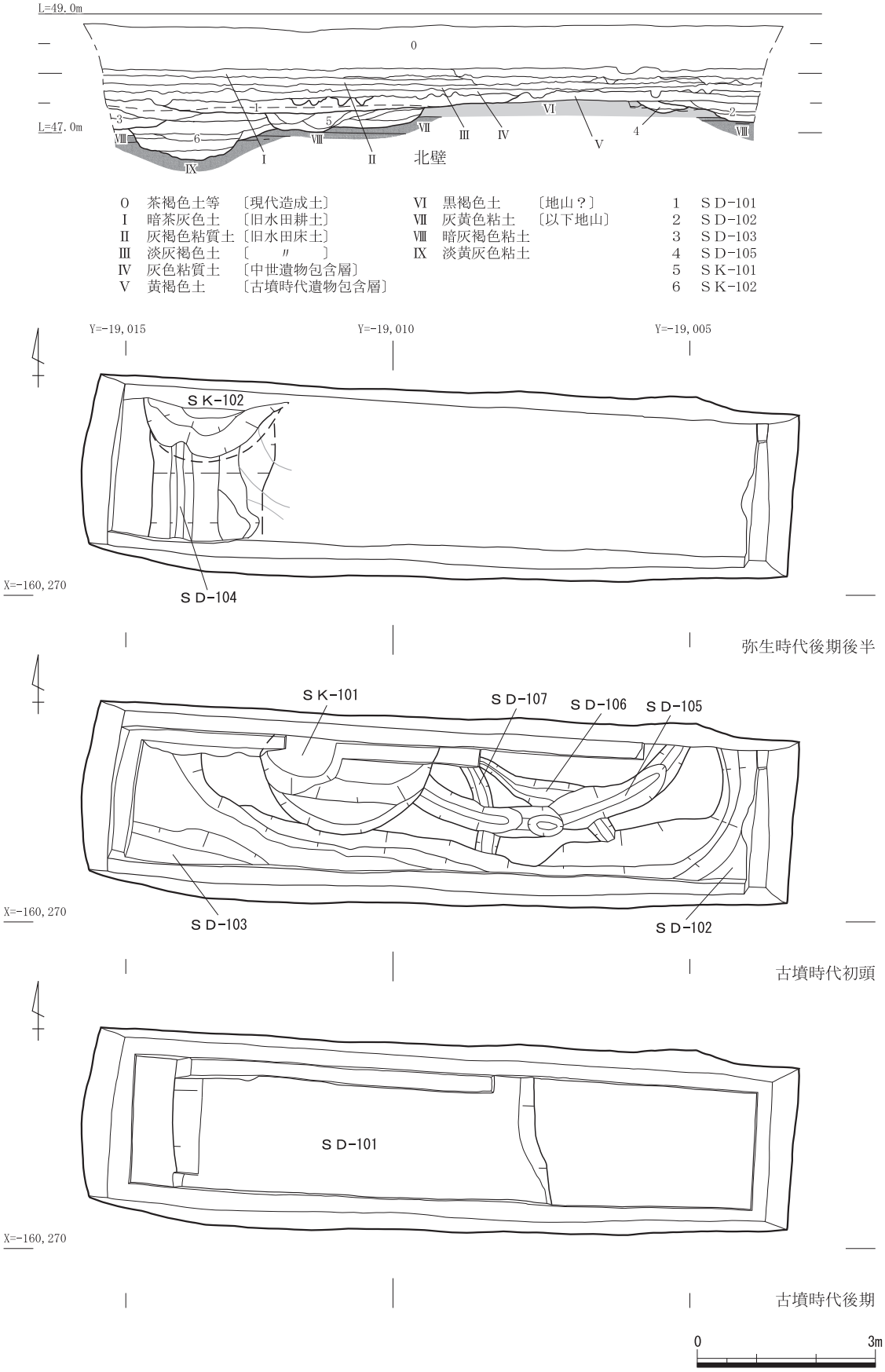
**近世**

**素掘小溝群**　トレンチ全域で15条の小溝を検出した。多くは北北東－南南西方向に走行する。幅0.3～0.4ｍ、深さは0.2ｍを測る。本地周辺の地割りはやや斜行しているが、これは本地南側にある古代道路の保津・阪手道の影響を受けたものである。

## ３．まとめ

本調査では弥生時代～古墳時代にかけて顕著な遺構を確認した。

弥生時代後期の遺構として、井戸とみられる土坑と溝を検出した。これらは短期的に営まれた集落に関わる遺構とみられる。これまでの調査成果から、この集落は本地周辺（田原本小学校から西側にかけて）を中心として布留期まで存続し、前期末以降は羽子田古墳群が展開するとみられている。本調査で庄内期の方形周溝墓は、集落から古墳群に変遷していく過程において重要な成果といえよう。




第10図　遺構平面図及び北壁断面図（Ｓ＝1/100）

1．調査地全景（西から）

2．ＳＫ－102・ＳＤ－104完掘状況（南から）

3．ＳＤ－101完掘状況（南西から）

4．近世素掘小溝群完掘状況（西から）

5．ＳＤ－101遺物出土状況（南から）

6．ＳＤ－103遺物出土状況（西から）

## ３．十六面・薬王寺遺跡　第29次調査

### １．遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高48m前後の沖積地に立地する。これまで調査で、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。遺跡東南部では、弥生時代から古墳時代前期にかけての周溝墓と、古墳時代中・後期の古墳が検出されている。また、遺跡南部～南西部にかけて古墳時代中・後期のまとまった集落が形成されている。遺跡北半では古代の埋没水田がみられる。現在の十六面集落の南側（字十六面周辺）では、平安時代末～鎌倉時代の墨書土器や箸・扇子・墨書のある長方形曲物（折敷）等が出土しており、遺跡の特殊性を窺い知ることができる。遺跡中央北半では室町時代の環濠をもつ屋敷地が形成され、周囲の小字名から、保津氏居館跡の推定地となっている。

今回の調査地は、遺跡東南端に位置し、平成23年度に宅地開発に伴い分譲された区画の一つである。調査地南側の共用道路部分（第27次調査地）では、古墳時代前期の方形周溝墓を検出している。柱状改良による影響面積が大きいため、個人住宅の建築に先立って発掘調査を実施した。

### ２．調査の成果

（１）層序

調査地の現状は、昨年度中におこなわれた工事により宅地となっている。

Ⅰ：淡茶灰色砂礫土〔検出標高48.2m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗褐色土〔47.8m〕、Ⅲ：暗青灰色粘質土〔47.6m〕、Ⅳ：暗青褐色粘質土〔47.5m〕、Ⅴ：淡褐灰色土〔47.45m〕、Ⅵ：黒褐色粘質土〔47.25m〕、Ⅶ：黄褐色シルト〔47.2m〕

第Ⅰ層は昨年度の宅地造成土、第Ⅱ層は昨年度実施した第27次調査時の廃土、第Ⅲ・Ⅳ層は旧水田耕土および床土、第Ⅴ層は中世包含層、第Ⅵ層は弥生時代頃の包含層、第Ⅶ層以下が地山で、第Ⅵ層上面が古墳時代および中世の遺構検出面となる。

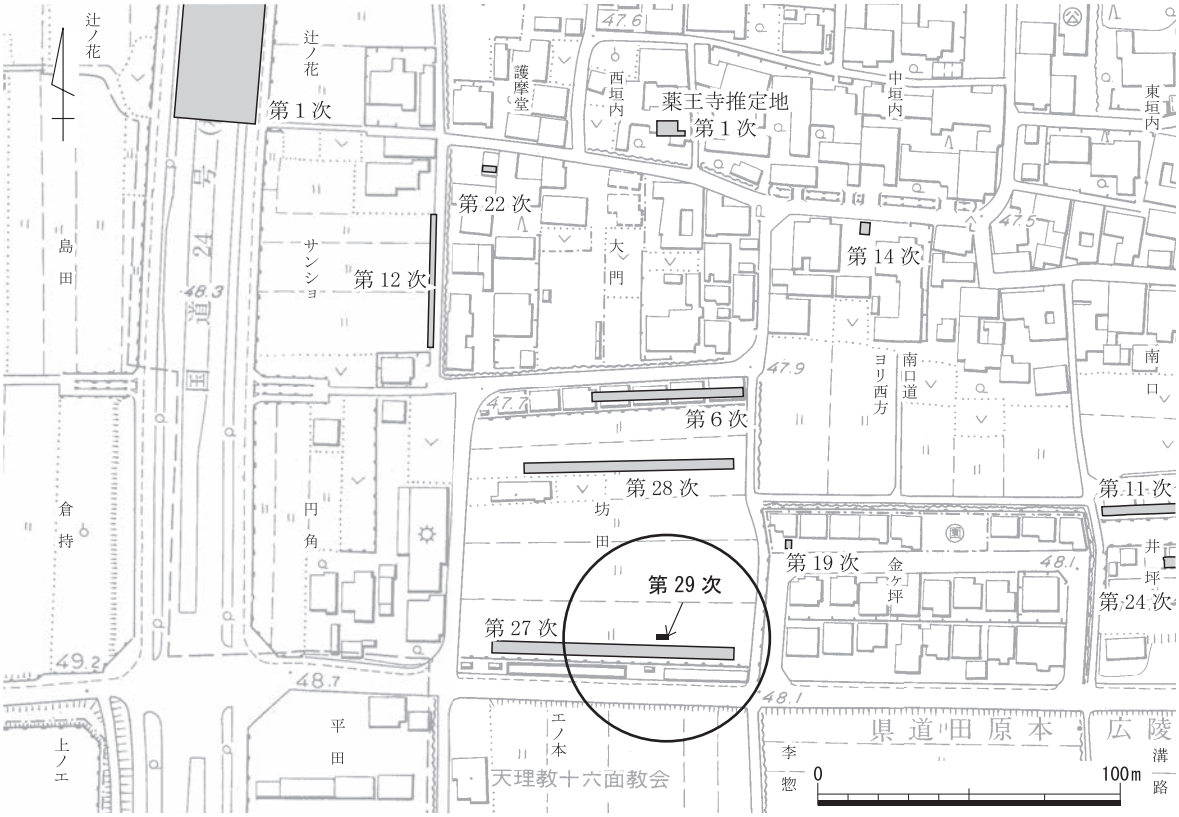
（２）遺構と遺物

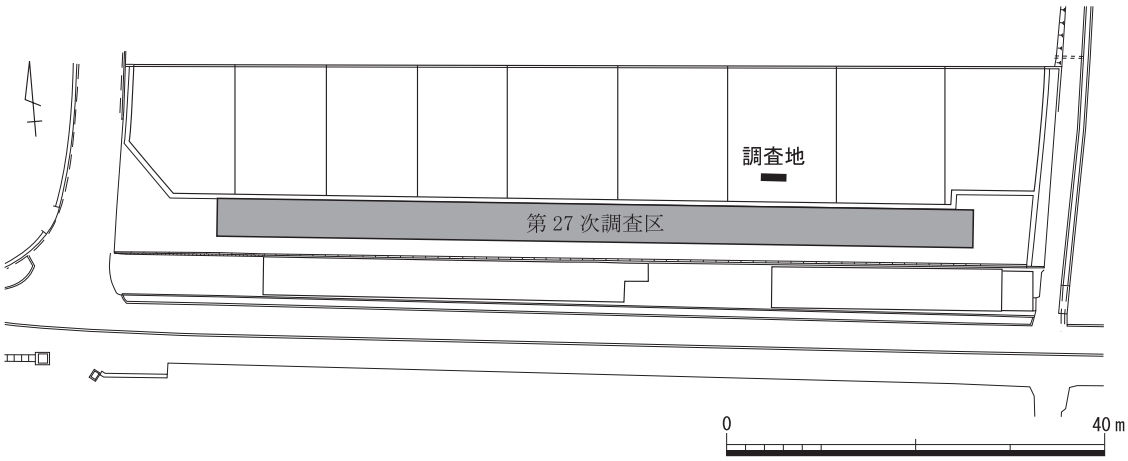
**ＳＤ－101**　調査区東端で北西－南東方向の溝の西肩を検出した。位置関係から、これが第27次調査の方形周溝墓北東側周溝となる可能性が高い。古墳時代前期の遺構であろう。出土遺物はない。

**ＳＤ－102**　調査区中央で検出した南北方向の溝である。幅１ｍ。弥生時代頃の遺構とみられるが、遺物は出土しておらず、時期は明らかでない。

### ３．まとめ

今回の調査は、南側隣接地で実施した第27次調査の成果を補足する成果を得ることができた。小規模な面積での調査ではあったが、布留期の方形周溝墓の北東側周溝を確認したことで、方形周溝墓墳丘部の規模が１辺9.2mであることを確認できた。

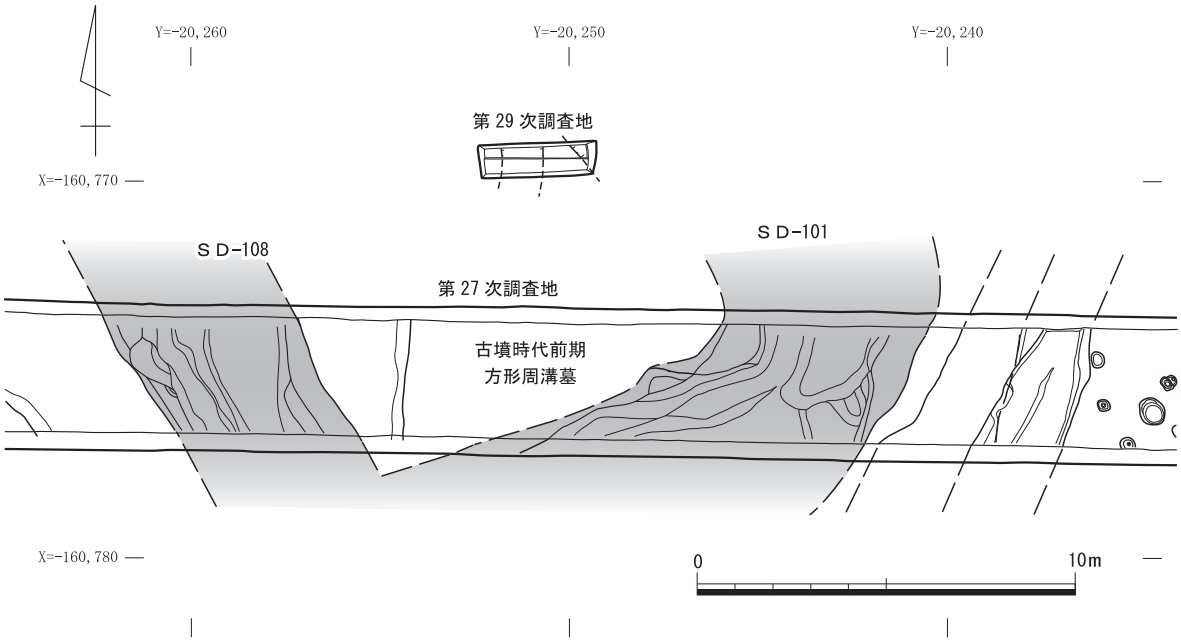


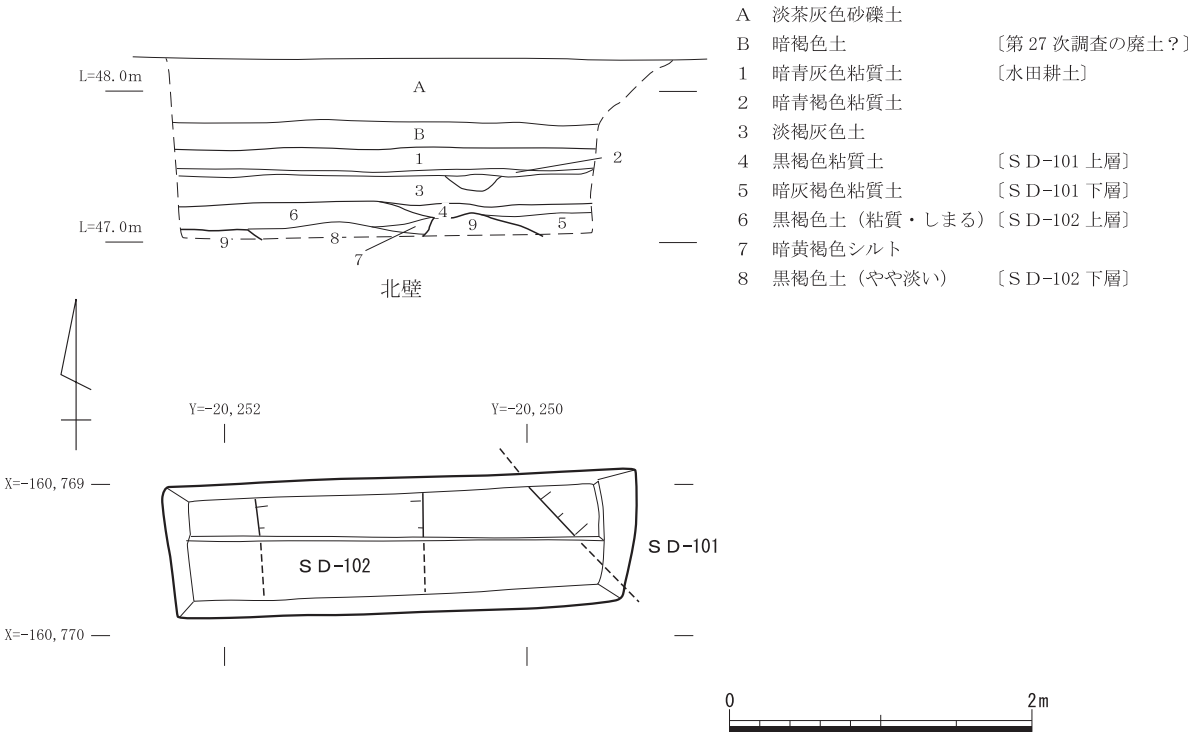

第11図　調査地位置図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/800）

1．調査前（西から）

2．調査地全景（西から）




第 29・27 次調査地位置図




第 29 次調査区平面図

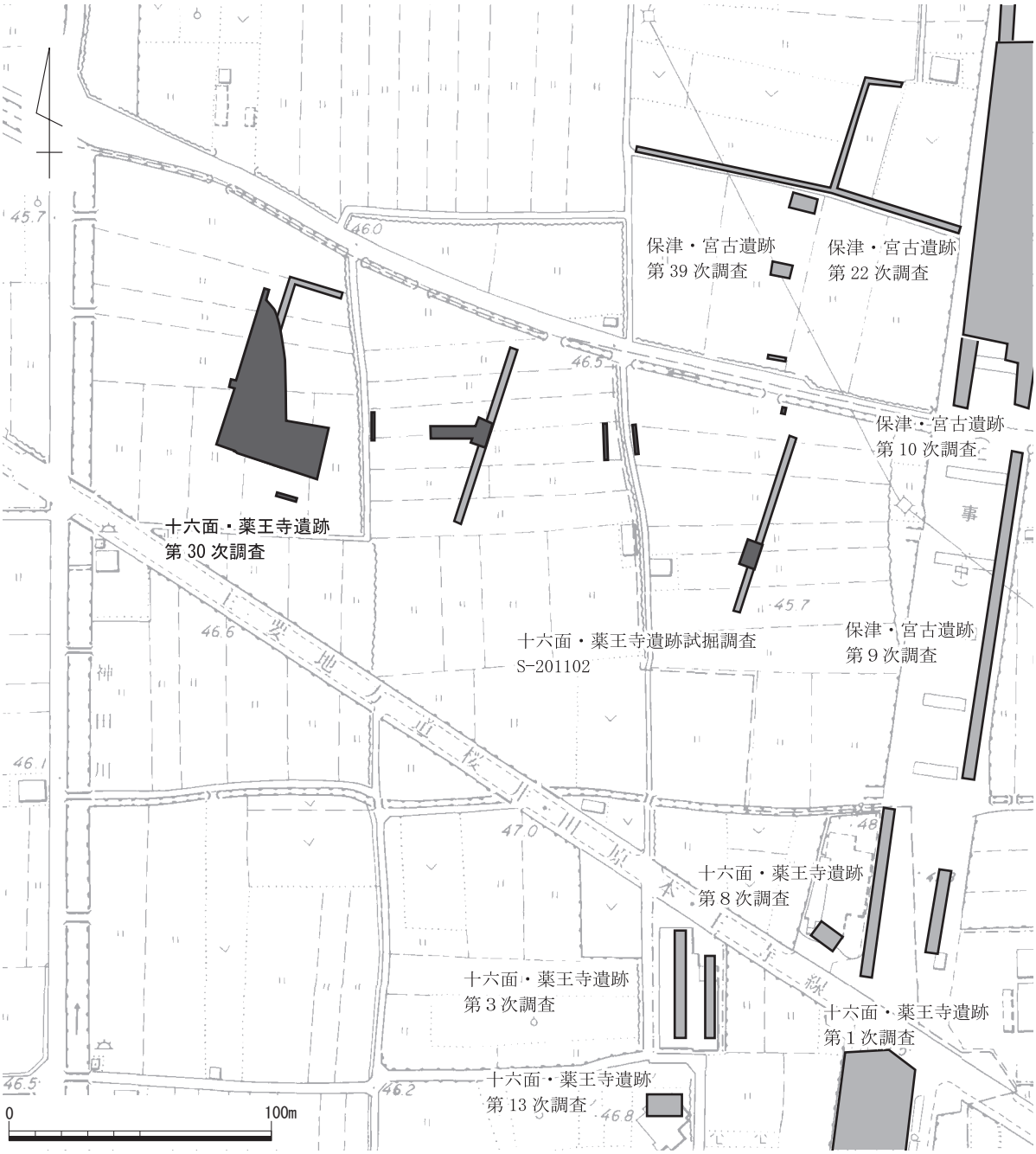
第12図　第29・27次調査地位置図及び第29次調査区平面図・北壁断面図（上：Ｓ＝1/200、下：Ｓ＝1/50）

## 4．十六面・薬王寺遺跡　第30次調査

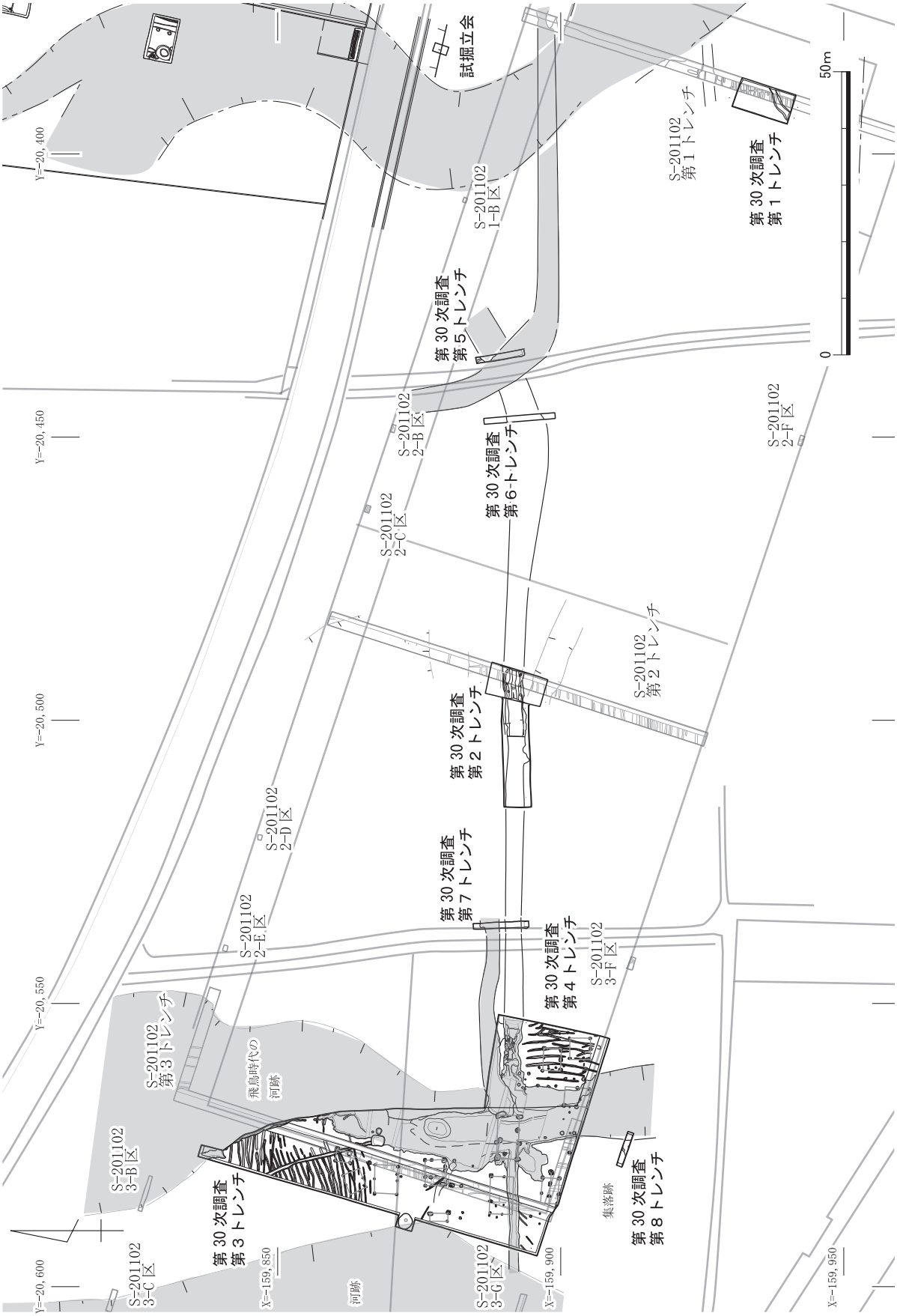
### 1. 遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高46m前後の沖積地に立地する。

今回の調査は、遺跡北西端での大型店舗建設に伴って実施した。３万㎡以上の大規模開発であり、平成23年度に試掘調査を実施して敷地全体の遺構分布状況を確認した結果、奈良時代の建物群および古墳時代前期頃の遺物包含層を確認した西側部分について本調査を実施することとなった。また、中央地区・東地区についても試掘調査で遺構を確認した部分を中心に小規模な調査区を設定した。




第13図　調査地位置図（Ｓ＝1/2,500）




第14図　調査地配置図（S＝1/1,000）

## 2. 調査の成果

（1）層序

調査地の現状は水田である。本調査を実施した西側地区の層序は以下の通りである。

Ⅰ：暗青灰色粘質土〔検出標高45.5m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：淡褐色土〔45.35m〕、Ⅲ：灰褐色粘質土〔45.25m〕、Ⅳ：暗褐色土〔45.15m〕、Ⅴ：黒褐色粘質土〔45.1m〕、Ⅵ：黒灰色粘質土〔44.9m〕、Ⅶ：暗褐色粘質土〔44.7m〕、Ⅷ：黄褐色シルト〔44.5m〕

第Ⅲ層が中世包含層、第Ⅳ層が古代包含層、第Ⅴ層が古墳時代後期包含層、第Ⅵ層が古墳時代前期包含層、第Ⅶ層が弥生時代以前包含層、第Ⅷ層が地山である。第Ⅴ層上面が飛鳥時代～奈良時代および中世の遺構検出面となる。また、第Ⅴ・Ⅵ層自体は古墳時代の水田開発に伴う耕作土の可能性があり、第Ⅵ層中より古墳時代前期後半頃を中心とした半完形の土器が出土している。なお、古墳時代前期の遺構は第Ⅵ層上面で確認されるべきであるが、実際には検出が困難であり、第Ⅶ～Ⅷ層上面に至ってようやく確認できた遺構も多い。

（2）遺構と遺物

**弥生時代**

**ＳＤ－1101**　試掘調査第１トレンチで確認していた幅1.5m前後の溝である（第15図）。今回掘削をおこなったところ、深さ0.7mの断面逆台形を呈することが確認できた。遺物は上面で弥生土器の可能性がある細片１点が出土したのみで、集落等に伴う遺構ではないとみられる。また、緩やかに屈曲していること、試掘調査時にこれ以外の遺構を確認していないことから方形周溝墓ではないとみられる。耕作に伴う水路であろうか。なお、最下層には流水により形成されたとみられる粗砂堆積がみられた。

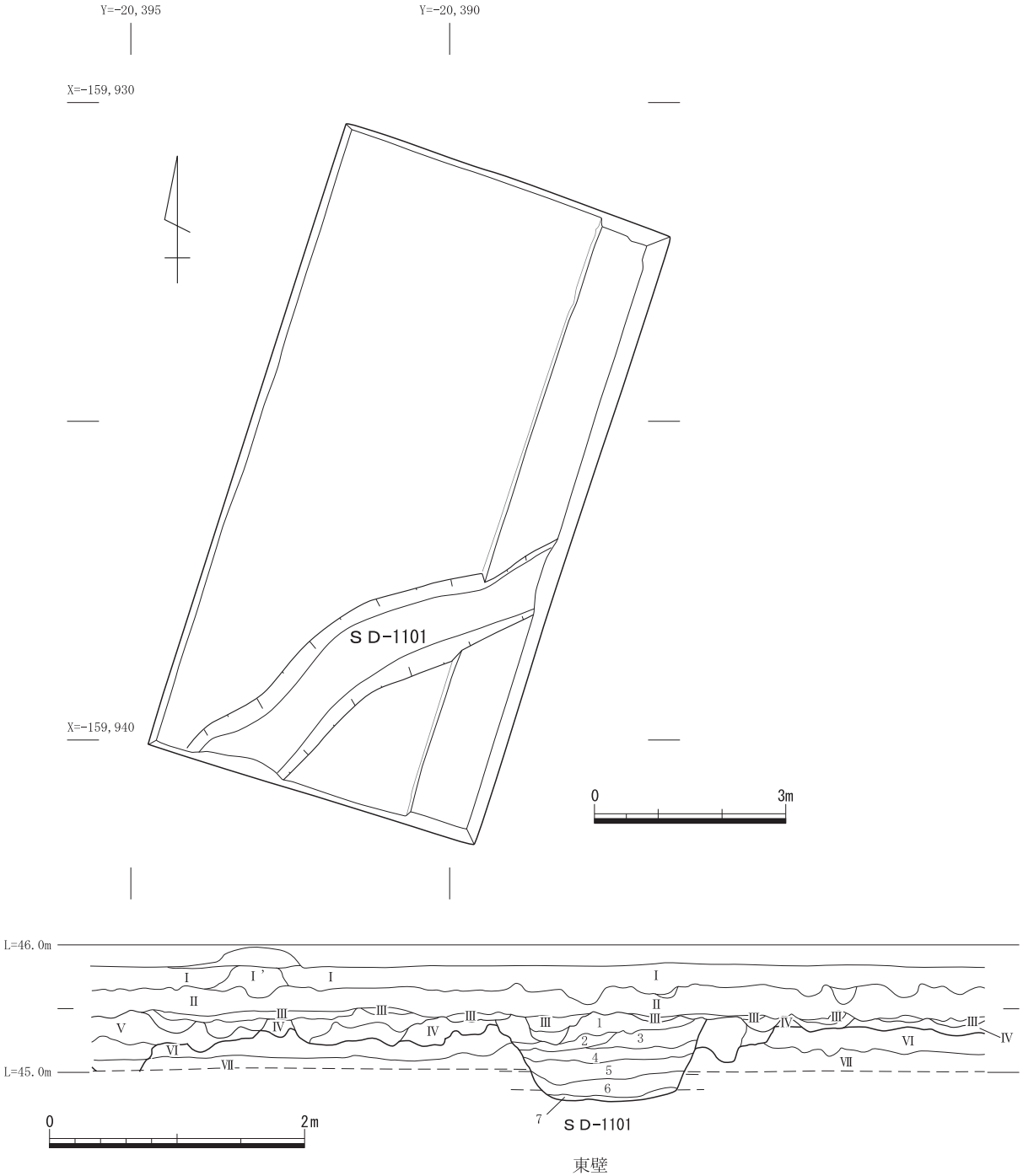
**弥生時代末～古墳時代前期末（第16図）**

**ＳＤ－3156**　調査区南西部で検出した西北西－東南東方向の溝である。幅0.6～0.8m、深さ0.2m前後を測る。遺物が少ないため、詳細な時期は明らかでない。後述するＳＤ－3153などに切られることから、弥生時代後期～末頃の遺構と考えられる。なお、南側に隣接する３号住居跡と主軸が一致しているため、古墳時代前期の遺構となる可能性もある。

**ＳＤ－3155**　第３トレンチ南西端で検出した溝状遺構である。半完形の甕１点が出土した（第21

１．ＳＤ－1101完掘状況（南西から）

２．ＳＤ－3155出土状況（北東から）

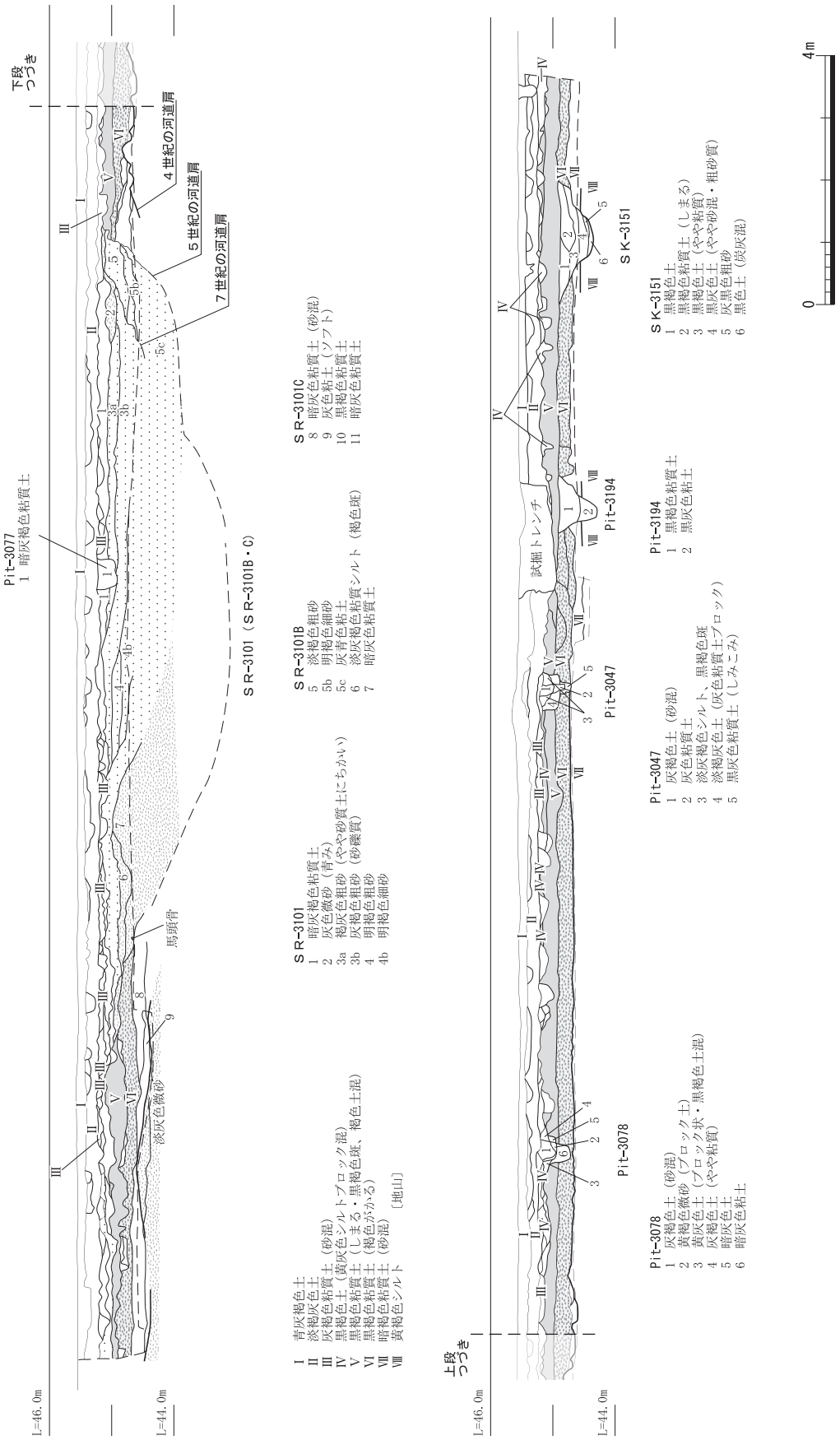



Ⅰ　暗青褐色土
Ⅰ’　暗青褐色土（褐斑多し）
Ⅱ　淡褐色土（砂混）
Ⅲ　灰褐色粘質土
Ⅳ　暗褐色土
Ⅴ　黒褐色土（灰褐斑）
Ⅵ　黒褐色土（ハード）
Ⅶ　淡黄灰色シルト

ＳＤ-1101
1　暗褐色粘質土
2　暗褐色土（砂多し）
3　暗褐色土（ブロック状）
4　黒褐色土（褐斑）
5　黒灰色粘質土（粗砂混）
6　黒灰色粘質土（粘砂質）
7　灰色粗砂

第15図　第１トレンチ遺構平面図および東壁断面図（上：Ｓ＝1/100、下：Ｓ＝1/50）

第16図　古墳時代前期の遺構（Ｓ＝1/300）




第17図　第３トレンチ南壁断面図（Ｓ＝1/100）

図１)。弥生系の甕であるが、胴部の球形化がすすんでおり、庄内併行期の遺構とみられる。遺構の性格は明らかでないが、平成25年度に西側隣接地で実施した第31次調査では同時期の方形周溝墓群を検出していることから、この遺構についても同様の性格のものである可能性が高い。

**ＳＤ－3153**　第３トレンチ南西部で検出した溝状遺構である。検出幅0.4m、深さ0.2mだがもっと深かった可能性がある。遺物は僅少だが、この上面部分で矢羽根タタキの庄内甕が出土している。本来この遺構に伴っていた遺物であろう。

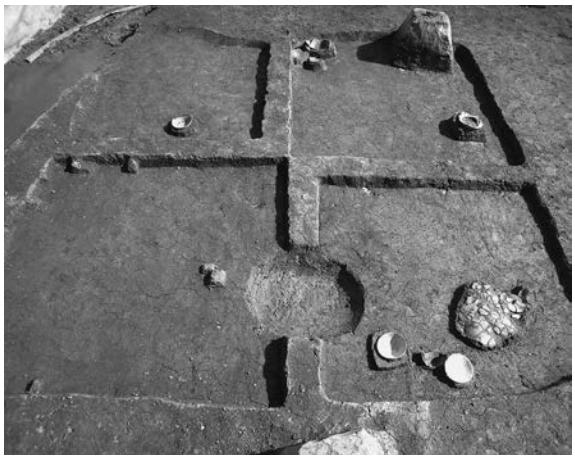
**１号住居跡（ＳＢ－3151）**　第３トレンチ北側で検出した方形の竪穴住居跡である（第18図)。１辺４ｍを測る。主軸はほぼ南北で、中央より北西に偏った位置に炉跡とみられる焼土面がみられる。床面から0.05mで検出したが、本来はさらに深かった可能性がある。北西部で甕・高坏が、南西部で壷が出土したほか（第21図２～５)、北東部を中心に滑石片および滑石製管玉・臼玉・臼玉未成品が出土した（第21図14～17・19・21・22)。また、グリーンタフ片もみられた。小規模な玉作りがおこなわれていた可能性がある[1)]。なお、柱穴は確認していない。布留３式頃の遺構とみられる。

**２号住居跡（ＳＢ－3152）**　第３トレンチ中央南で検出した方形の竪穴住居跡である（第19図)。１辺3.5mを測る。主軸は西北西－東南東である。柱穴は確認していない。床面付近に炭灰層がみられたが、炉跡となる焼土面は確認していない。試掘調査時の排水溝により削平した可能性がある。床面から小型丸底壷・高坏が出土した（第21図６・７)。遺物から、布留３式頃の遺構とみられる。

**３号住居跡（ＳＢ－3153）**　２号住居跡の南西に接して検出した方形の竪穴住居跡である（第20図)。１辺５ｍを測る。主軸は北北西－南南東である。西側に偏って甕や高坏等が置かれていた。第21図８～10は３号住居跡出土土師器の一部で、８の小型丸底壷には肩部に記号がみられる。なお、本住居内では複数の柱穴を確認しているが、南西の柱穴では抜き取り穴ＳＫ－3152から完形の小型丸底壷や布留形甕が出土した。布留３式頃の遺構とみられる。

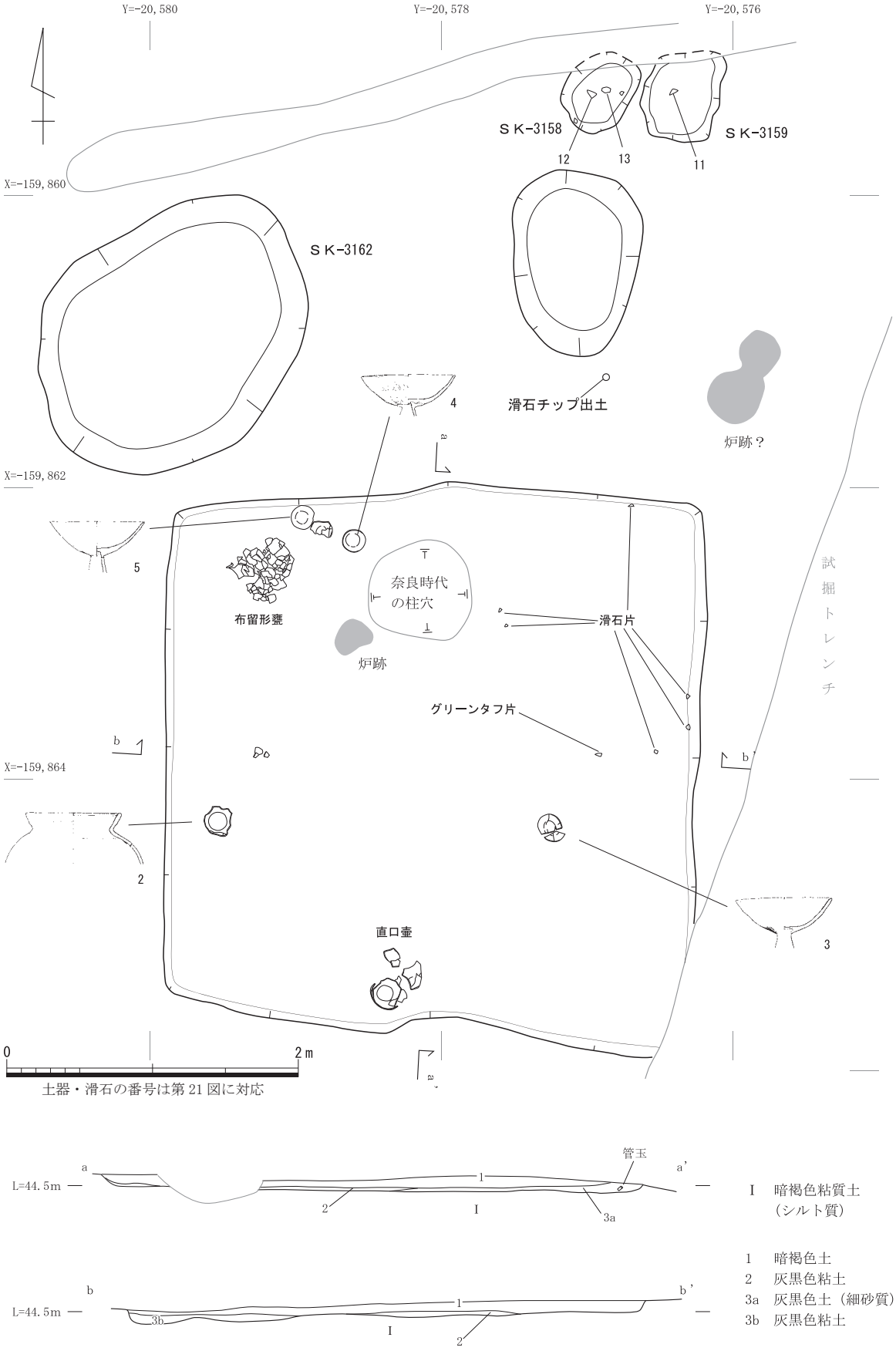
**４号住居跡（ＳＢ－3154）**　調査区中央南で検出した方形の竪穴住居とみられる遺構である。東半をＳＲ－3101C（古墳時代中期以降の河川堆積）に切られるため全体の規模は不明だが、１辺約５ｍと考えられる。布留３式頃の遺構とみられる。

**５号住居跡（ＳＢ－3155）**　３号住居跡の南東で検出した方形プランとみられる竪穴住居跡である。３号住居跡を切るが、ＳＤ－3102に切られるため正確な規模は明らかでない。布留３式頃の遺

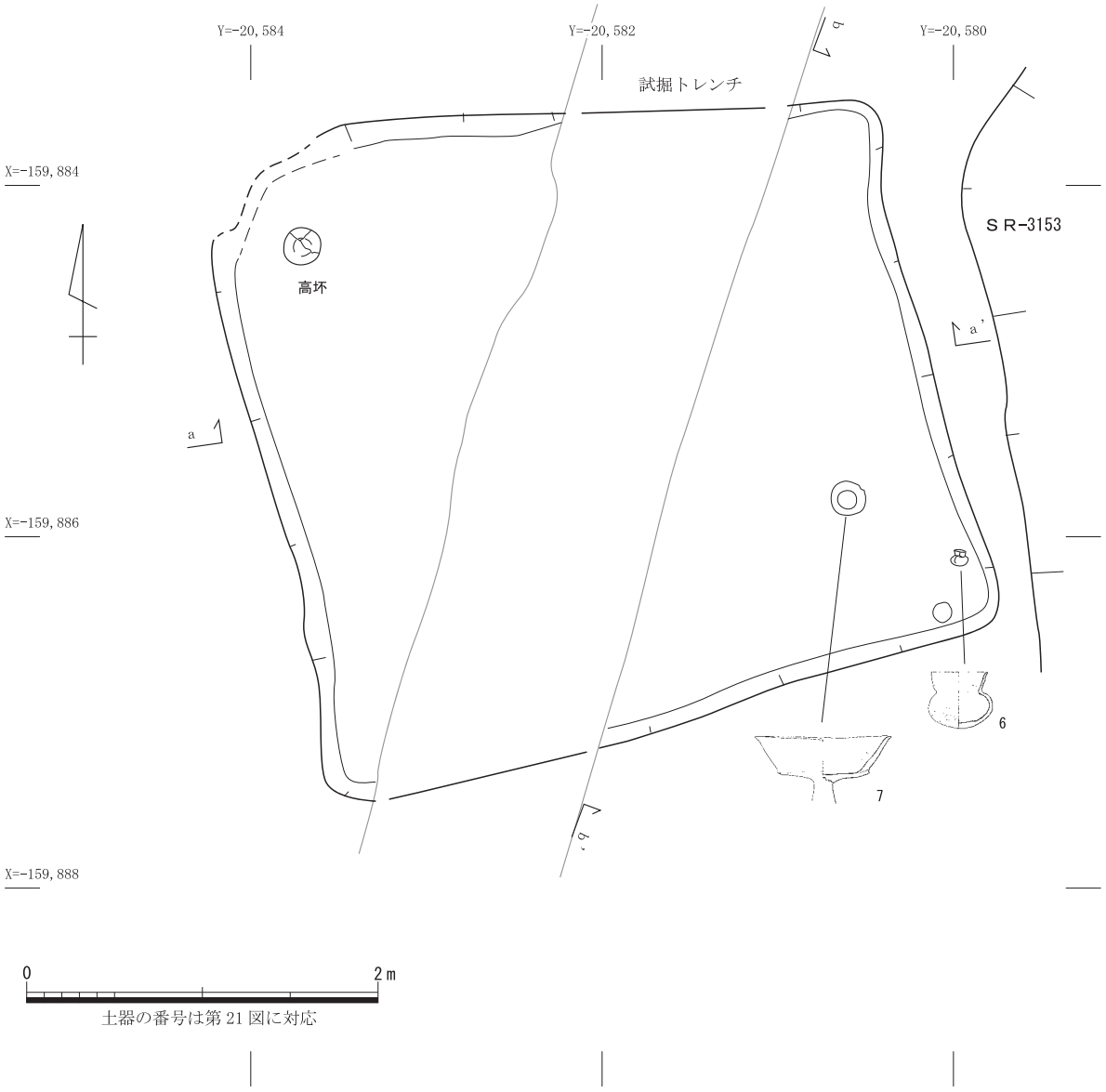


３．１号住居全景（北から）

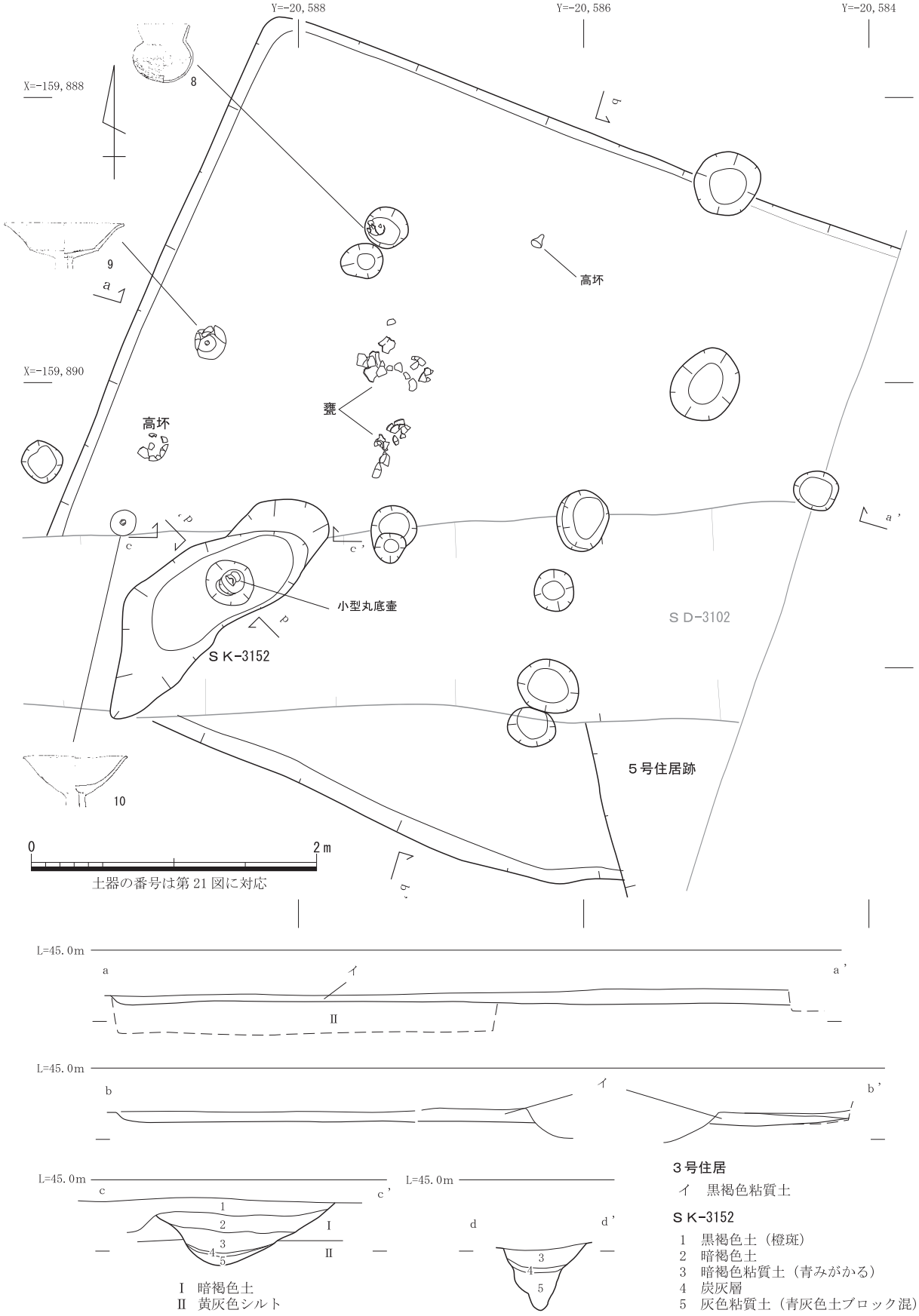
４．ＳＫ－3158滑石剝片出土状況（北から）




第18図　１号住居跡遺構平面図および東・北壁断面図（Ｓ＝1/40）




第19図　2号住居跡遺構平面図および北・東壁断面図（S＝1/40）




第20図　３号住居跡遺構平面図および北・東壁断面図（Ｓ＝1/40）

構とみられる。

**ＳＫ－3154**　第３トレンチ中央西で検出した井戸である（第22図）。直径1.5m、深さ1.4m前後を測る。第１～３層から完形品を含む土器が出土した。

出土した土師器の一部を図示する（第23図）。１は第１層出土の布留形甕、２は第２層出土の布留形甕、３・４は第２層下位出土の布留形甕である。１・２は肩部に記号をもつ。３はネズミの爪跡が残り、当時の土器製作の状況を考える上で注目される。６・７は小型丸底壷、５・８は壷、９～11は高坏である。７の小型丸底壷には記号がみられる。布留新段階の遺構とみられる。

**ＳＫ－3160**　第３トレンチ中央付近で検出した長軸2.8m、短軸2.0m、深さ約0.4mの不整方形の土坑である（第24図）。多数の土師器が出土した。特に南肩付近に遺物が集中しており、南側から土器の廃棄がおこなわれた可能性がある。

出土した土師器の一部を図示する（第25図）。１は布留形甕で肩部にハケ原体による刺突５点から成る記号をもつ。２・３は山陰系の口縁部をもつ甕である。２は肩部にヘラ状工具による刺突３点から成る記号をもつ。４～６は小型丸底壷、７～10は高坏である。

**ＳＫ－3162**　第３トレンチ北半、先述の１号住居の北西で検出した土坑である。長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.4mを測る。完形品を含む土器が多数出土した。布留３式頃の遺構とみられる。

**ＳＫ－3158**　１号住居の北側で検出した小規模な土坑である。滑石の素材剥片等が出土した（第21図12・13・18）。

**ＳＫ－3159**　ＳＫ－3158の東側に隣接して検出した小規模な土坑である。ＳＫ－3158と同様、比較的大きい滑石剝片が出土した（第21図11）。

**ＳＸ－3154**　調査区北端で検出した炉跡状の遺構である。竪穴住居に伴う遺構であった可能性があるが、住居本体を面的に確認することはできなかった。

**ＳＸ－3156**　１号住居の南東で検出した炉跡状の遺構である。竪穴住居に伴う遺構であった可能性があるが、住居本体を面的に確認することはできなかった。

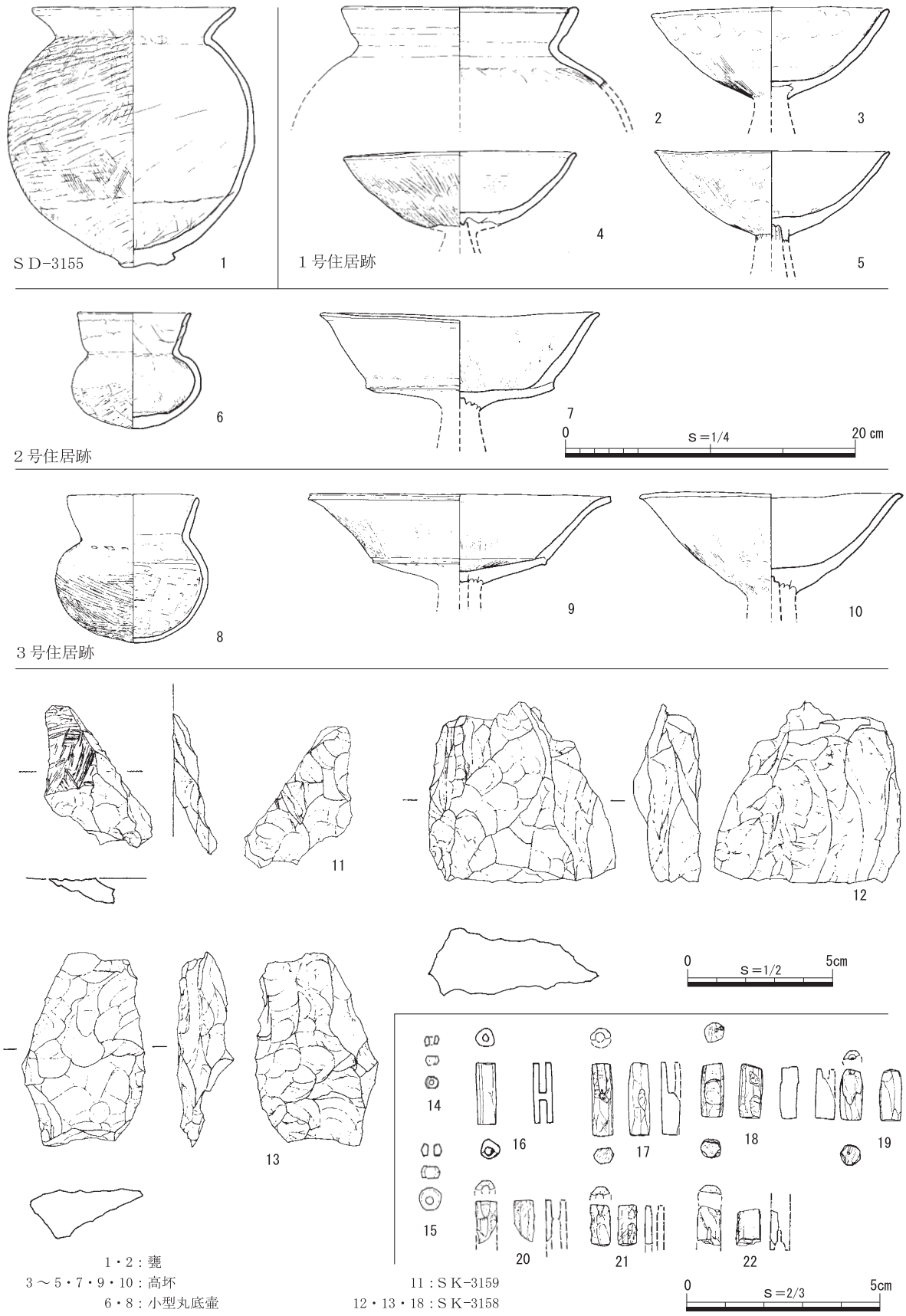
**ＳＸ－3164**　調査区南西部の西壁で確認した炉跡状の遺構である。竪穴住居に伴う遺構となる可能性が高いが、住居本体を面的に検出することはできなかった。

**ＳＲ－3152**　第３トレンチの北半で検出した、北西－南東方向の河跡である。ＳＲ－3153や布留３式段階の集落遺構に先行する遺構とみられる。北東肩がＳＲ－3153との関係で不明瞭となっていることから幅等の規模は明確でない。

**ＳＲ－3153**　後述する飛鳥時代の河跡ＳＲ－3101の前身となる河川跡である。堆積土は黒褐色粘質土を中心とする。幅20m以上、深さ0.5m以上。河底までは確認していない。調査区北東部の西肩付近で布留３式頃の一括遺物が出土した。この時期の集落遺構はこの河跡を東限として展開したものと考えられる。なお、第３トレンチ以東の広い範囲にこの遺構と一連の微低地が拡がるとみられ、第３トレンチ南端およびその南側に設定した第８トレンチでは古墳時代中・後期の堆積層も確認している。特に第８トレンチではこの遺構と一連の堆積層上面から完形の須恵器甕１点が出土している。

**古墳時代中・後期（第26図）**

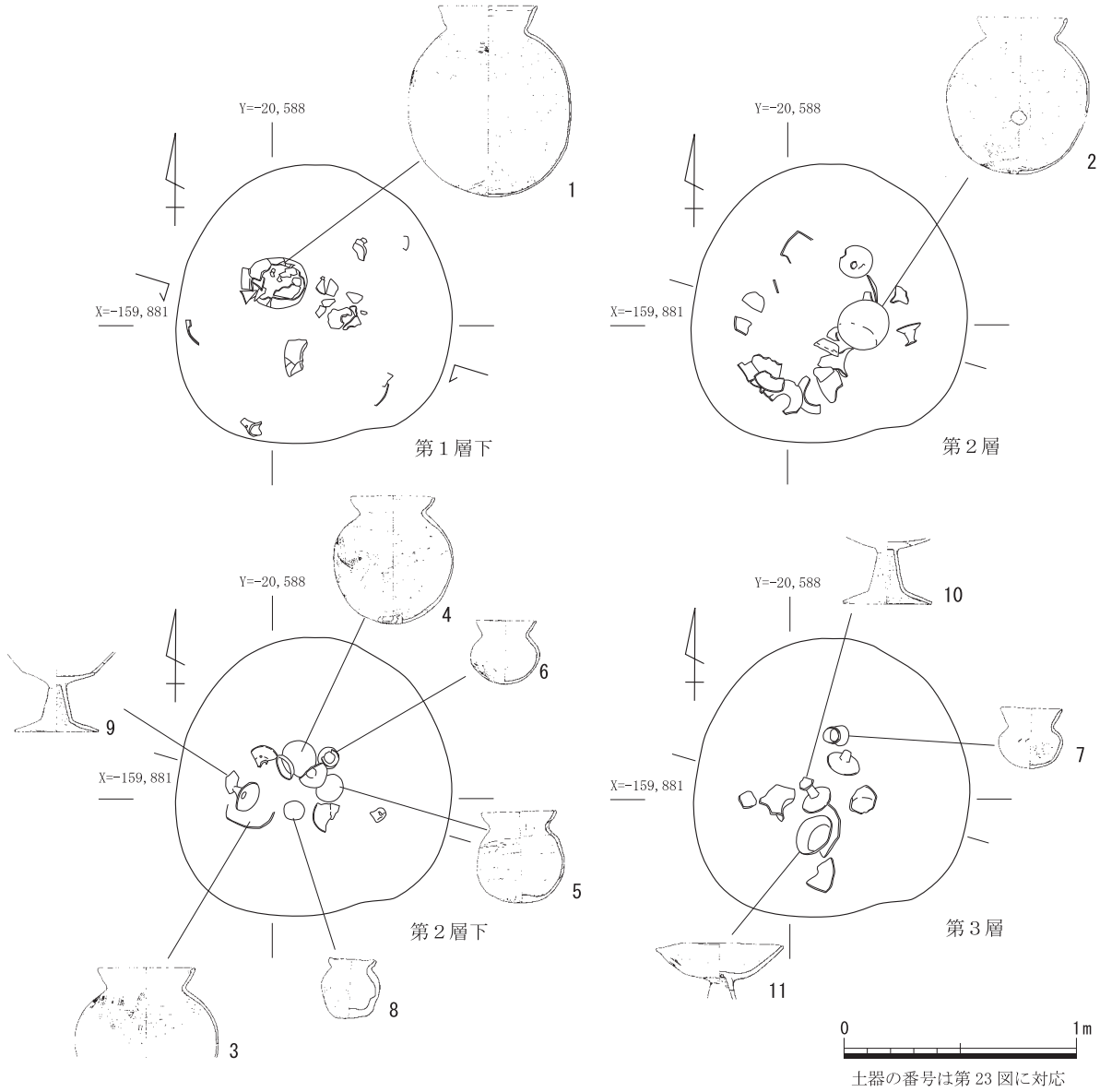
**ＳＫ－3101**　第２遺構面の調査区南西部で検出した土坑である。調査区外に拡がるため正確な規

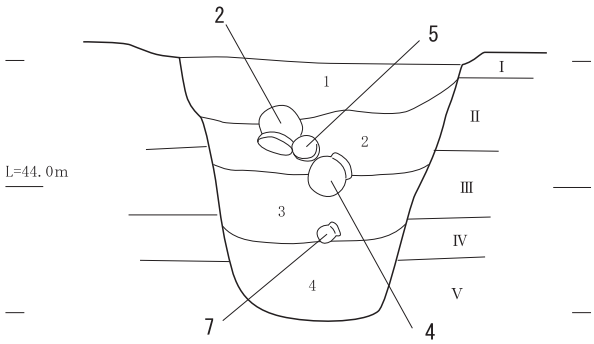



1・2：甕
3～5・7・9・10：高坏
6・8：小型丸底壷
11～13：滑石剝片
14～22：玉類及び未成品

11：ＳＫ-3159
12・13・18：ＳＫ-3158
14～17・19・21・22：１号住居跡
20：黒褐色土

第21図　住居跡等出土遺物（土器：Ｓ＝1/4、滑石剝片：Ｓ＝1/2、玉類および未成品：Ｓ＝2/3）

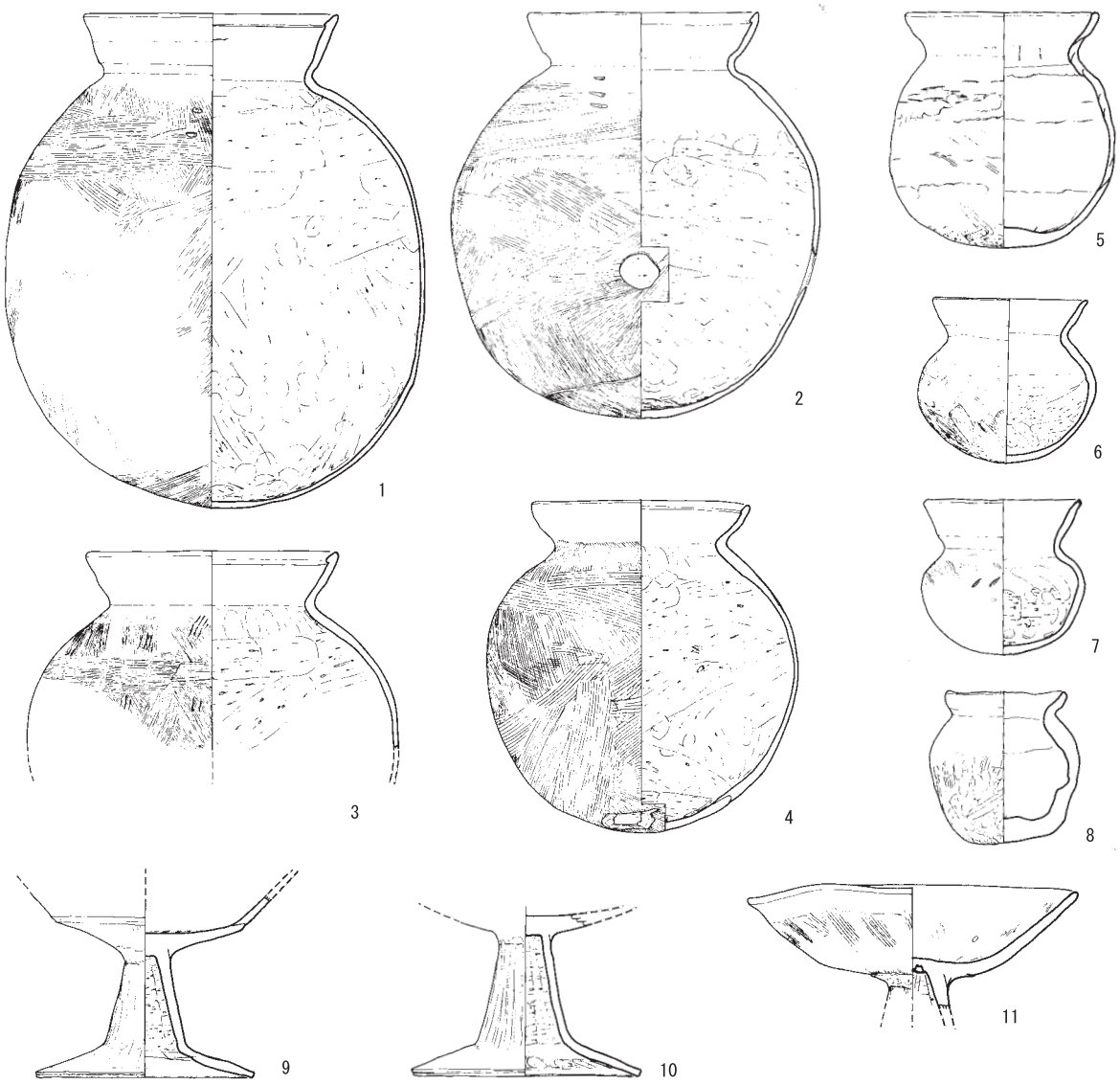



Ⅰ　暗褐色土（黄褐色土ブロック）
Ⅱ　黄灰色粘土
Ⅲ　淡黄褐色微砂
Ⅳ　灰青色粘土（シルト質）
Ⅴ　暗黄褐色細砂

1　黒褐色粘質土（砂混）
2　暗灰色粘土（砂混）
3　黒色粘土
4　黒褐色土（植物混）

第22図　ＳＫ－3154遺構平面図および南壁断面図（Ｓ＝1/30）



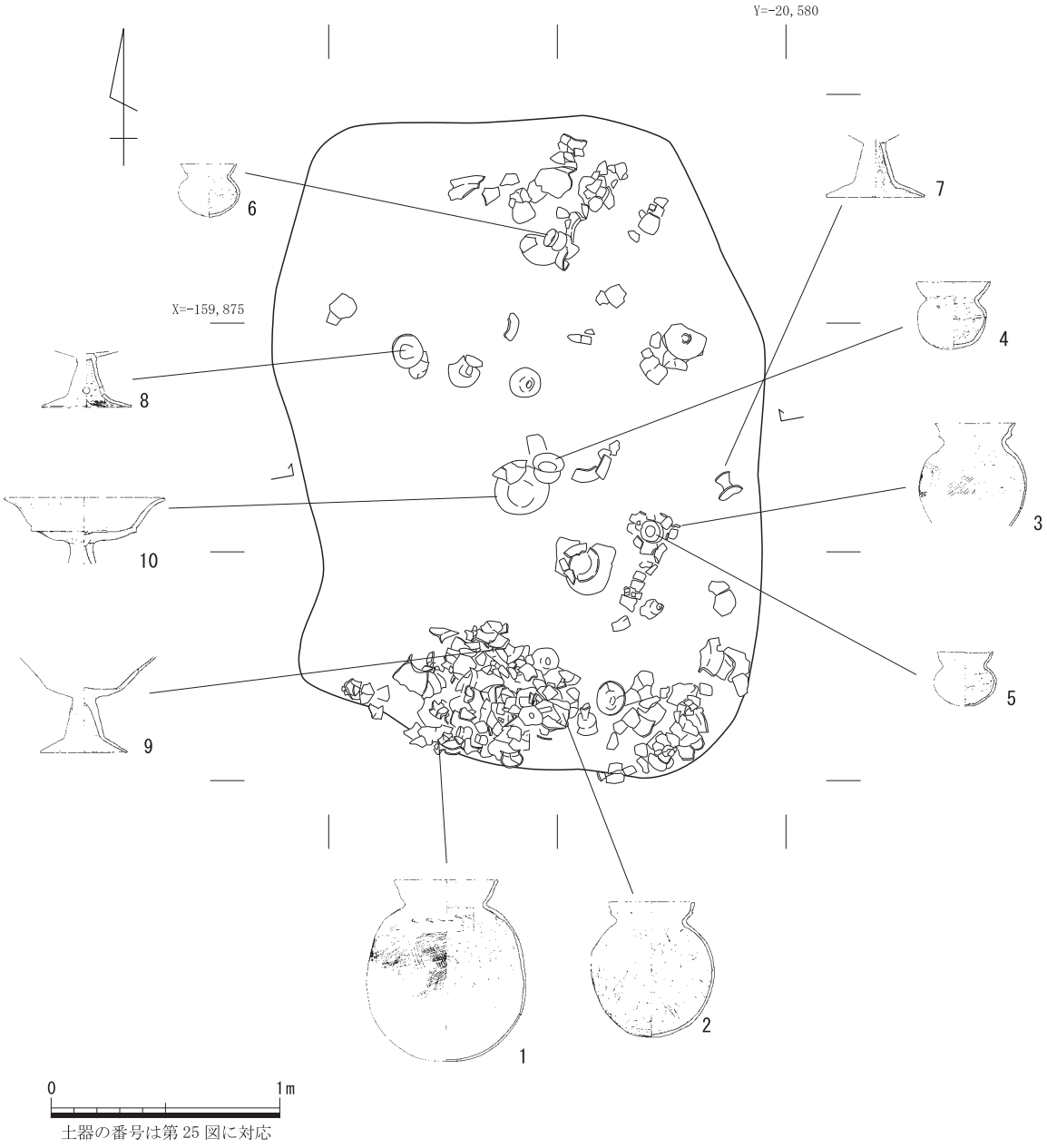

1～4：布留形甕　　5・8：壷
6・7：小型丸底壷　　9～11：高坏

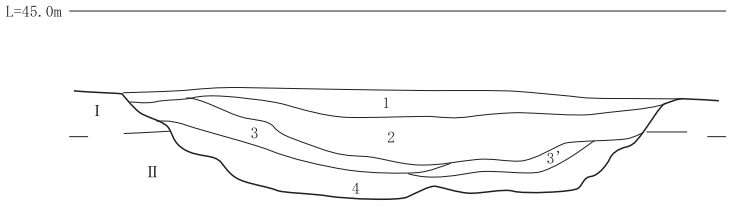
0　S＝1/4　20 cm

第23図　ＳＫ－3154出土土器

5．ＳＫ－3154出土状況（南から）

6．ＳＫ－3154出土遺物

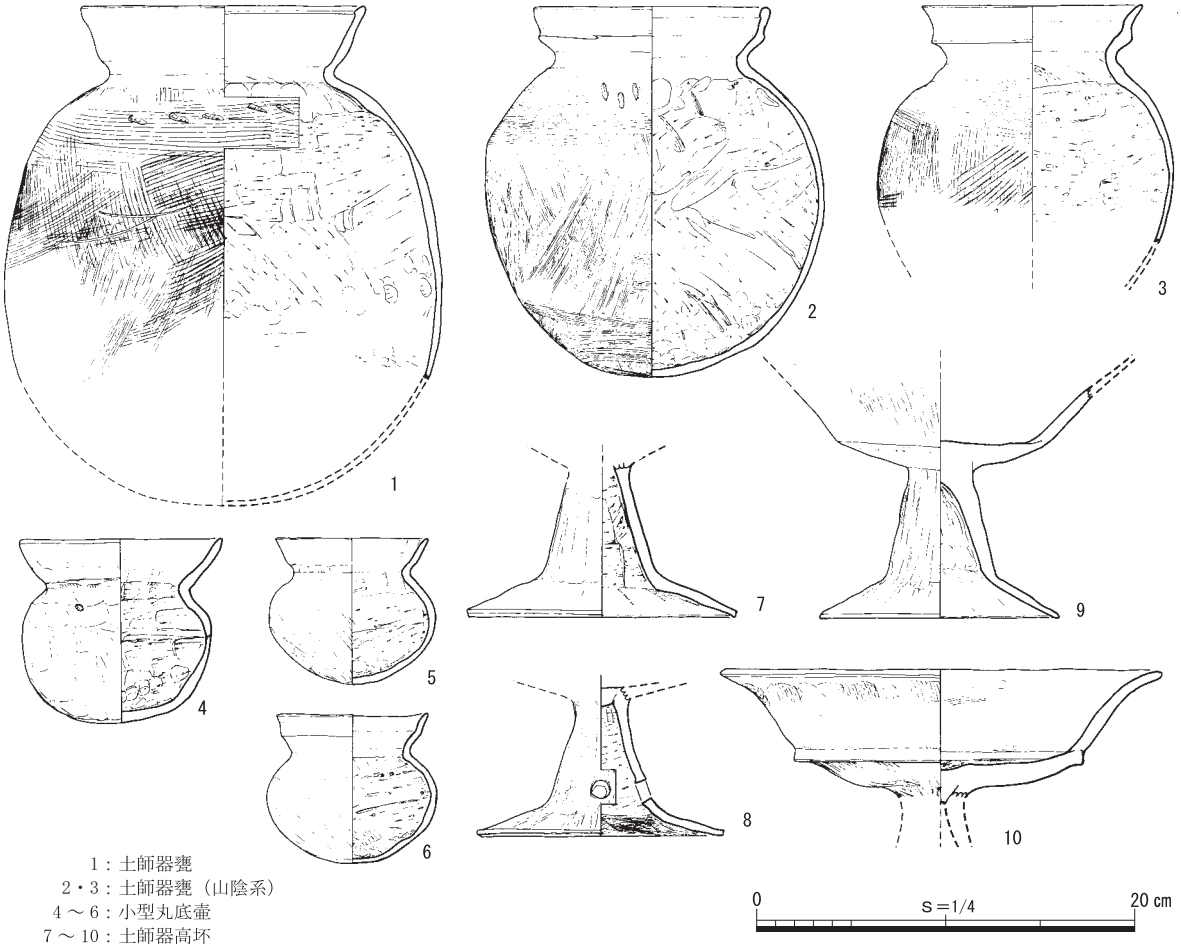



Ⅰ 暗褐色土
Ⅱ 淡黄褐色シルト

1 黒褐色土
2 黒灰色粘質土
3 暗黄褐色土（シルトブロック）
3' 灰褐色土
4 暗灰色粘土

第24図　ＳＫ－3160遺構平面図および北壁断面図（Ｓ＝1/30）

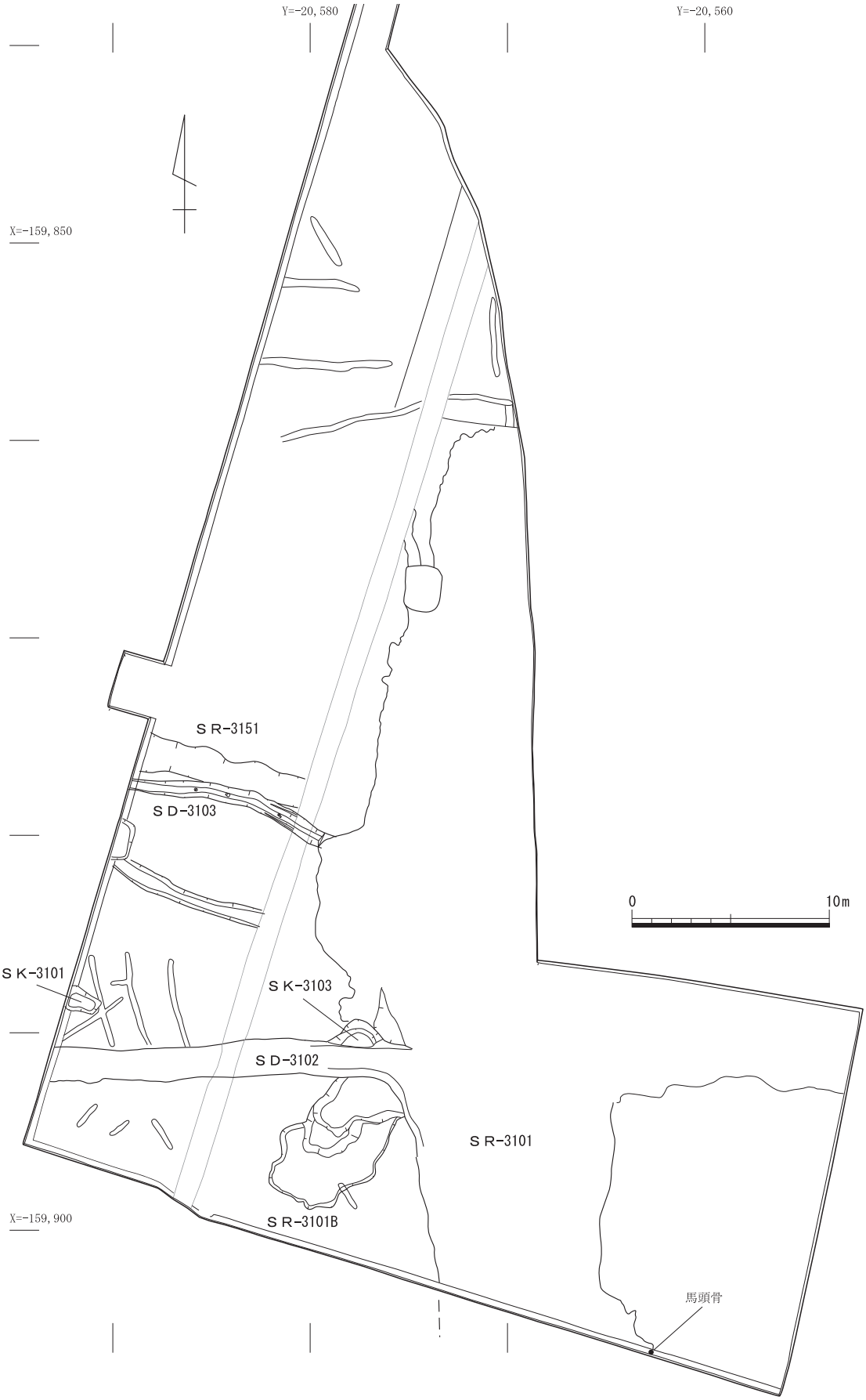



1：土師器甕
2・3：土師器甕（山陰系）
4～6：小型丸底壷
7～10：土師器高坏

第25図　ＳＫ－3160出土土器

7．ＳＫ－3160出土状況（西から）

8．ＳＫ－3160出土遺物




第26図　古墳時代後期の遺構（S＝1/300）

模は不明。土坑西端付近となる調査区西壁で馬歯が出土している。馬を供献した祭祀遺構である可能性も否定できないが、馬の遺体以外の出土遺物はほとんどみられないため、埋葬を目的とした土壙墓である可能性が高い。古墳時代中期頃の遺構とみられる。

**ＳＫ－3103**　ＳＲ－3101とＳＤ－3102の交差する部分の北西肩で検出した土坑である。古墳時代中期頃の甕等が出土した（第34図１）。

**ＳＲ－3101B**　後述するＳＲ－3101の前身となる河川跡である。本格的な掘削をおこなっていないこともあり、この段階の詳細な時期は不明だが、この河跡のSec第６層に相当する東肩南壁際で馬頭骨が出土した。明確な掘り肩を確認できなかったことから、馬の遺体を河辺に遺棄したものである可能性が考えられる。古墳時代後期頃の遺構とみられる。

**ＳＲ－3151**　後述するＳＤ－3103の北側で検出した、東西方向の河跡状遺構である。幅約３ｍ、深さ0.3ｍ前後。古墳時代後期頃の土師器長胴甕等が出土した。ＳＲ－3101またはその前身のＳＲ－3153へと流れる自然河道と考えられるが、不整形な溝である可能性も考えられる。

**ＳＤ－3103**　第１遺構面で確認した、東西方向の溝である。幅0.5ｍ前後。西側は深さ0.6ｍ程度であるが、後述する河跡ＳＲ－3101にとりつく付近では深さ１ｍ以上となる。完形の土師器甕・須恵器壷・土師器長頸壷等が上層から出土した（第34図２～５）。遺物から、古墳時代後期末の遺構とみられる。

**飛鳥時代（第28図）**

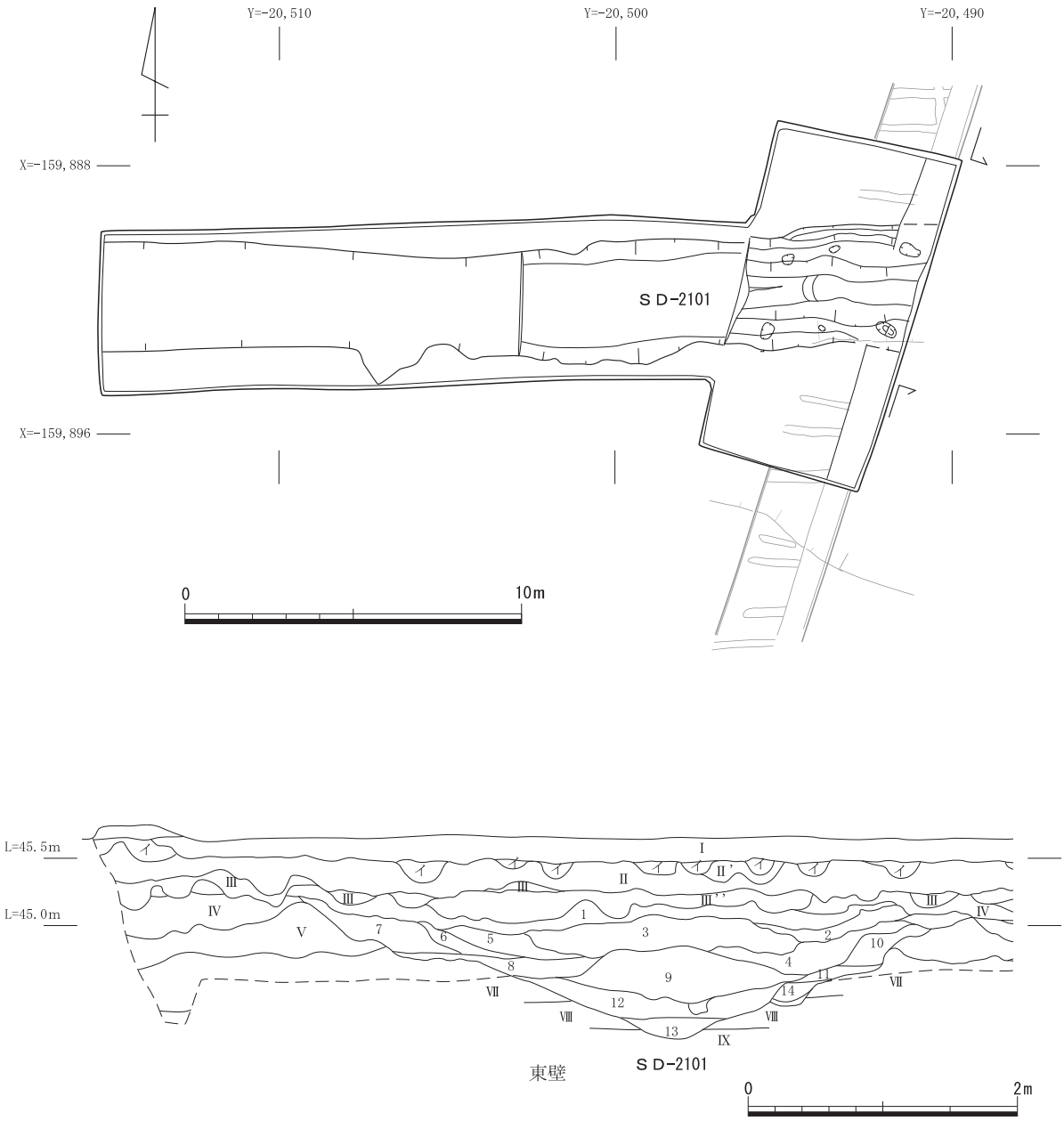
**ＳＲ－3101**　試掘調査でも確認していた南北方向の河跡である。堆積土は褐色粗砂を中心とする。幅20ｍ前後、深さ２ｍ以上。最上層（第１～３層）からは飛鳥時代頃の遺物が出土している（第34図７・10）。この河の上面にも奈良時代の建物跡が拡がることから、奈良時代までに埋没した河跡とみられる。なお、この河跡は古墳時代前期の段階で既に落ち込み状の地形となっていたとみられるが、下層（第５層）が古墳時代後期、中層（第４層）が古墳時代後期末の堆積とみられる。また、第４層に打ち込む形でＳＤ－4102との合流点付近に杭列があり、しがらみ状の遺構を構成していた可能性がある。第34図６～11は出土土器の一部である。６は第５層、10・11は第４層下位、７～９は第２・３層から出土した。

**ＳＤ－3102**　調査区南西部で検出した東西方向の大溝である。ＳＲ－3101とは基本的に同時併存していたが、最終埋没はＳＲ－3101の方が後となるようである。後述するＳＤ－3101の時期には埋没していた可能性がある。

**ＳＤ－4101**　ＳＲ－3101第３層形成後の東岸にとりつく、飛鳥時代頃の溝跡である。ＳＤ－4102の西端を切る。

**ＳＤ－4102**　ＳＲ－3101第４層形成後の東岸にとりつく、飛鳥時代頃の溝跡である。当初はまっすぐＳＲ－3101へと注いでいたとみられるが、第４トレンチ東端から２ｍ付近で灰褐色粘質土のブロック土により堰き止められていた。北側に並行するＳＤ－4101へと東側から流れてくる水を注ぐようにしたものであろう。このような改変をおこなった目的は不明である。

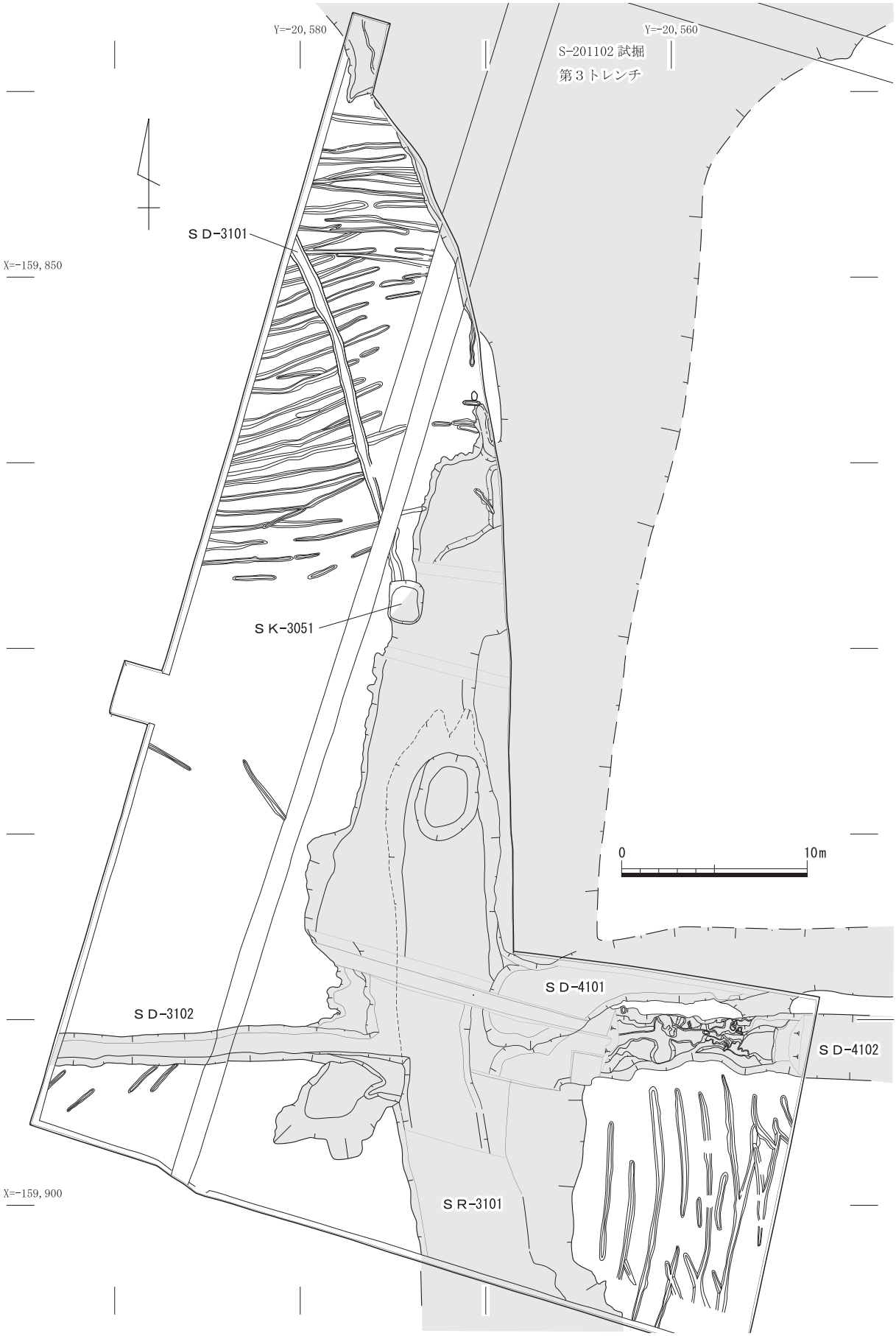
**ＳＤ－2101**　ＳＤ－4102の延長に相当する溝跡である（第27図）。本調査区付近では、溝肩に柱跡がみられた。橋のような構造物があった可能性がある。下層から飛鳥時代頃の土器類と斎串（第34図18・19）が出土した。




SD-2101

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 黄褐色砂質土（細砂質） | イ | 暗青灰色土 | Ⅰ | 青灰褐色粘質土 |
| 2 | 暗灰褐色砂質土 | | | Ⅱ | 淡褐色土 |
| 3 | 暗褐色砂礫土 | | | Ⅱ’ | 淡褐色土（青みがかる） |
| 4 | 灰褐色粘質土 | | | Ⅲ | 灰色粘質土　〔中世遺構〕 |
| 5 | 暗灰褐色土（粘砂質） | | | Ⅲ’’ | 灰色粘質土（やや暗い） |
| 6 | 淡灰褐色砂質土 | | | Ⅳ | 暗褐色土 |
| 7 | 暗褐色土 | | | Ⅴ | 黒褐色土 |
| 8 | 灰褐色粘土（砂混） | | | Ⅵ | 暗黄褐色微砂　〔地山〕 |
| 9 | 淡灰褐色砂礫土 | | | Ⅶ | 黄褐色土（シルト質）〔 〃 〕 |
| 10 | 暗灰褐色土 | | | Ⅷ | 灰黒色粘土　〔 〃 〕 |
| 11 | 暗灰褐色土（粘質） | | | Ⅸ | 淡青灰色シルト　〔 〃 〕 |
| 12 | 青灰色粘質土（砂混） | | | | |
| 13 | 暗灰色粗砂 | | | | |
| 14 | 灰褐色粘質土 | | | | |

第27図　第２トレンチ遺構平面図および東壁断面図（上：Ｓ＝1/200、下：Ｓ＝1/50）




第28図　飛鳥時代の遺構（Ｓ＝1/300）

**ＳＫ－3051**　ＳＲ－3101がある程度埋没した後に掘削された長方形の土坑である。この土坑からの湧水を利用してＳＤ－3101へと水を供給していた可能性がある。遺物が出土していないため、詳細な時期は明らかでないが、ＳＤ－3101と同時併存する可能性が高いことから、飛鳥時代後半頃の遺構と考えられる。

**ＳＤ－3101**　ＳＫ－3051を起点として北北西方向に延びる小溝である。なお、この溝に直交する形で、耕作に伴うとみられる小溝群（ＳＤ－3051～）が掘削されている。耕作に伴う給水を目的とした遺構であろう。ただし、埋土が異なるため、両者は同時併存ではない可能性もある。基本的にＳＤ－3101がＳＤ－3051他を切る。

**素掘小溝群**　ＳＤ－3101の両岸で、東北東－西南西方向の小溝群を検出した。遺物が少ないため詳細な時期は不明であるが、これに伴うとみられる水路ＳＤ－3101が飛鳥時代頃とみられるため、この小溝群も飛鳥時代前後の遺構となる可能性がある。また、第４トレンチではＳＤ－4101の南肩で南北方向を主軸として若干弧を描くプランの小溝群を検出した。埋土がＳＤ－3101周辺の溝群と共通であることから、これも飛鳥時代頃の遺構とみられる。なお、この溝群は後述する奈良時代の建物群に切られる。

9．ＳＤ－3101全景（北から）

10．ＳＤ－2101全景（東から）

11．ＳＤ－3103出土状況（西から）

12．ＳＤ－3103出土土器

**奈良時代（第29図）**

**建物跡１**　第３トレンチ北西で検出した１間×１間の建物跡である（第30図）。南北2.3m、東西1.9m。主軸は南北にちかいが北より９°東へ傾く。柱穴はＳＤ－3101を切る。４基の柱穴とも、上層の堆積土が淡褐色粘質土で、１辺0.8m前後の方形にちかい掘り肩をもつ。いずれも深さ0.6m前後であるが、南東の１基のみ深さ0.3m前後であった。なお、南西の柱穴から、南河内からの搬入とみられる完形の土師器甕１点が出土した（第34図13）[2]。遺物から、奈良時代の遺構と考えられる。

**建物跡２**　建物跡１の南西で検出した、２間×２間の建物跡である。長軸3.5m、短軸3.1m。主軸は東西にちかいが西より22°南へ傾く。柱穴はいずれも小規模で、長軸0.4m前後を測る。深さ0.3m前後。奈良時代頃の遺構と考えられる。

**建物跡３**　建物跡２の南で検出した、２間×１間の建物跡である（第31図）。東西５m、南北3.9m。主軸はほぼ東西に一致する。

**建物跡４**　建物跡３の南で検出した３間×２間または３間×１間に庇の付く建物跡である。東西4.5m、南北3.4m。主軸はほぼ東西に一致する。なお、この建物跡の西側に南北3.3m、東西1.4m以上の建物状の遺構があり、建物跡４が西側に拡がる可能性も考えられる。また、調査区内で完結している場合、東側柱列は規模が大きく、西側柱列は規模が小さいことから、建物以外の何らかの構造物である可能性も考えられる。

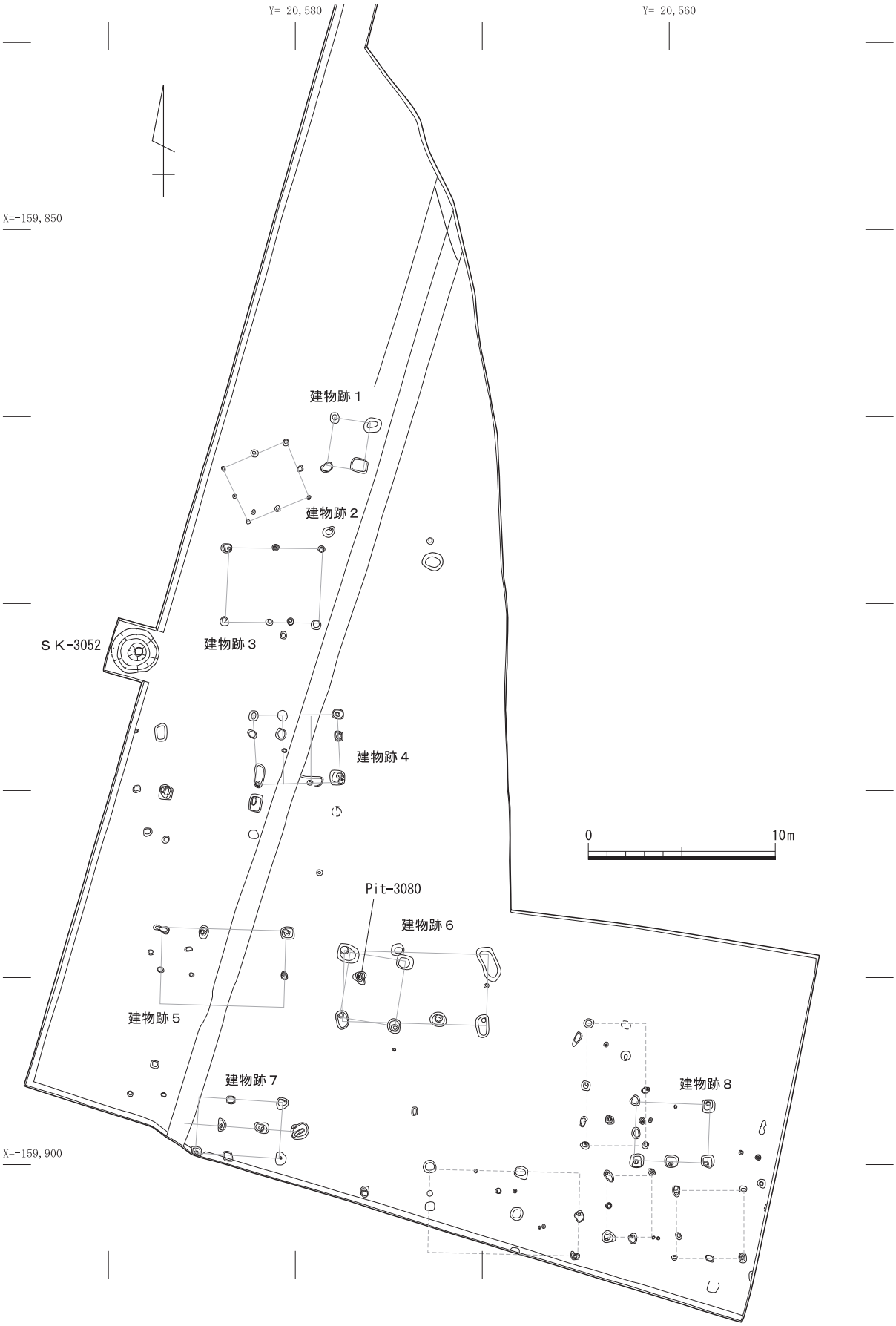
**建物跡５**　建物跡４の南側で検出した建物跡である。中央が試掘調査区により状況不明であり、飛鳥時代の溝ＳＤ－3102と重複する部分は検出できていなかったため、正確な構造は明らかにすることができない。東西6.5m、南北４m前後の３間×２間となる可能性が高い。主軸はほぼ東西方向である。

**建物跡６**　建物跡５の東側で検出した建物跡である。建て替えにより２段階あったとみられる。当初の建物跡６Ａは東西7.6m、南北3.6mの３間×１間で、主軸はほぼ東西方向である。そして一部の柱穴を共有しながら建て替えられた建物跡６Ｂは、東西3.1m、南北3.5mの１間×１間で、主軸は北から９°東に傾く。なお、建物跡６に重複する位置で検出したPit－3080から、軒丸瓦１点が出土した（第34図16）。平瓦とともに柱穴底に敷かれて礎石のように利用されていた。この軒丸瓦は平城宮東院で出土している緑釉瓦に同笵のものがあり、基本的には東院の所用瓦のような位置づけが考えられる笵型である[3]。この瓦がどのような経緯で本遺跡にもたらされたのかは不明である。

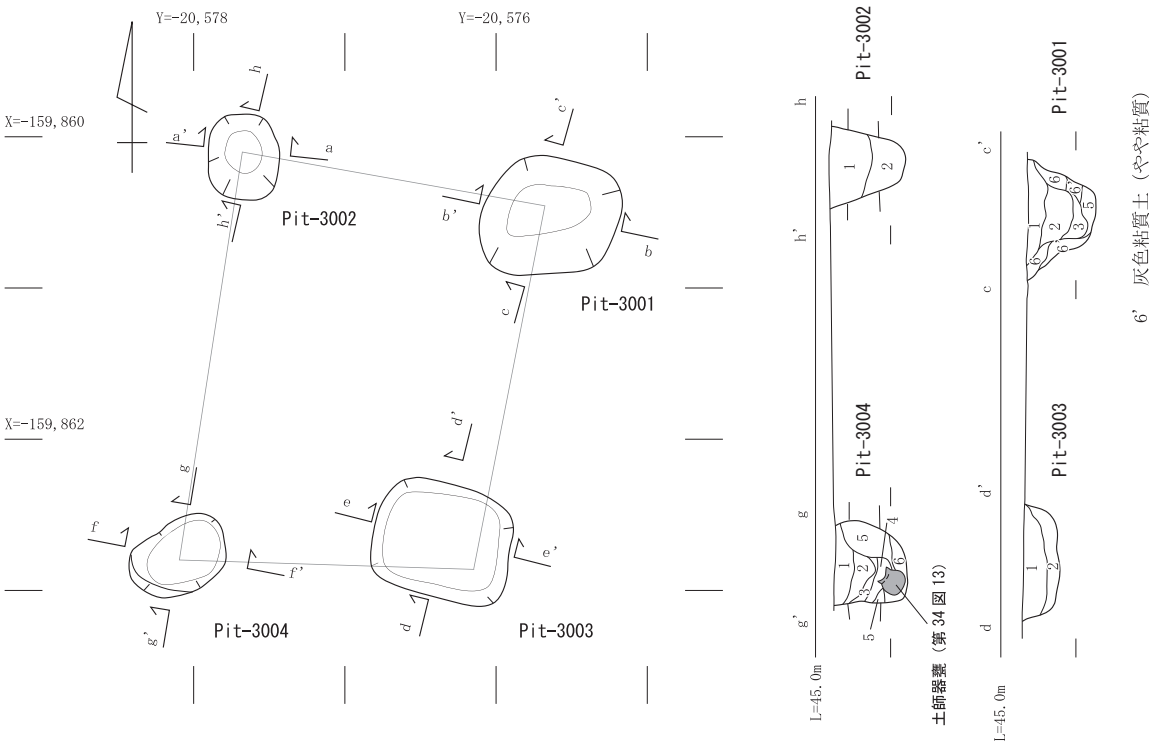
**建物跡７**　建物跡５の南側、調査区南端で検出した、東西4.6m、南北3.1mの建物跡である（第32図）。２間×３間であるが、中央柱列が１m東に張り出す独立棟持柱の形式をとる建物である可能性が考えられる。主軸はほぼ東西であるが、西から北へ５°傾く。なお、Pit－3046はPit－3080同様に平瓦が柱穴底に敷かれていた。遺物の時期から、奈良時代の建物跡と考えられる。

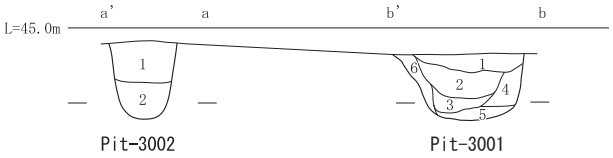
**建物跡８**　第３トレンチ東拡（第４トレンチ）中央で検出した、東西3.9m、南北2.9mの建物跡である。２間×１間で、主軸はほぼ東西方向である。柱穴は１mちかい方形の掘り肩をもち、埋土はいずれも砂質土であった。奈良時代頃の遺構であろう。

このほか、４棟程度が第３トレンチ南東部に存在するとみられるが、調査区外に拡がることもあり正確な規模等は明らかにできていない。



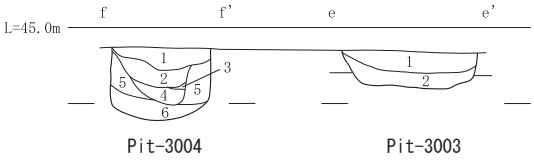

第29図　奈良～平安時代の遺構（Ｓ＝1/300）




1　淡褐色土（シルト質）
2　暗灰色粘質土（シルト質）

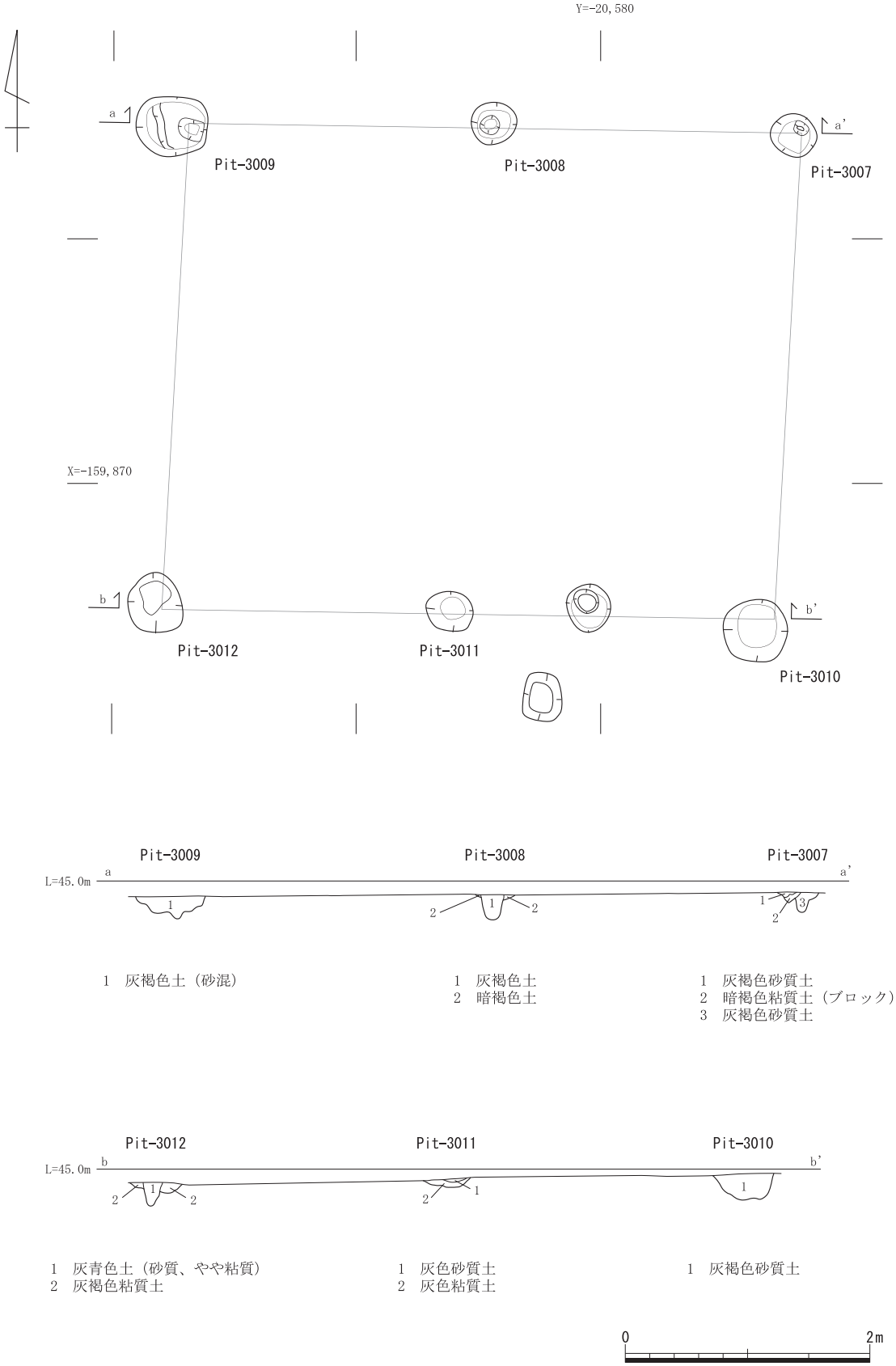
1　淡褐色微砂（やや粘質）
2　淡褐色粘質土（微砂質）
3　灰色粘質土（微砂流れ込み混）
4　灰色粘質土
5　淡灰色シルト（やや粘質）
6　灰色粘質土



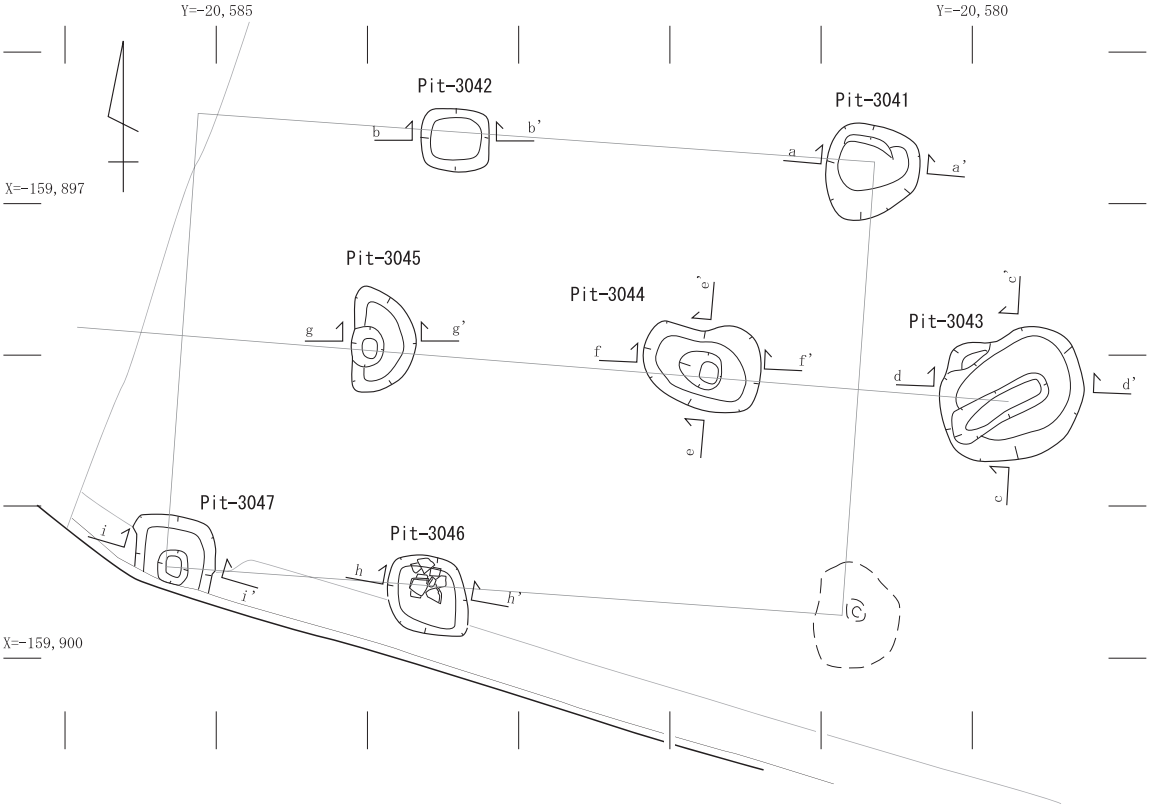

1　淡褐色微砂（やや粘質）
2　淡褐色土（やや粘質、微砂混）
3　灰色粘質土（微砂流れ込み混）
4　灰色粘質土
5　淡灰色シルト（やや粘質）
6　灰色粘質土

1　淡褐色土
（シルト質、黒褐色土ブロック混）
2　暗褐色土
（シルト質、黒褐色土ブロック混）

第30図　建物跡１遺構平面図および北・西壁断面図（Ｓ＝1/50）

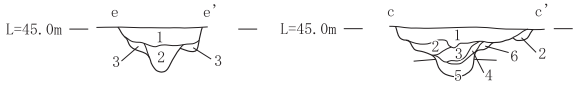


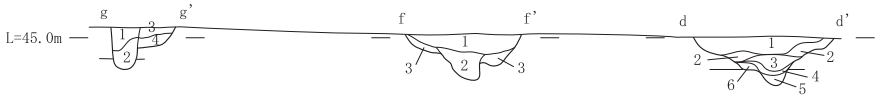

第31図　建物跡３遺構平面図および北壁断面図（Ｓ＝1/50）



Pit-3042
1　暗褐色土
2　淡褐灰色砂質土（やや青み）

Pit-3041
1　灰褐色土（砂質）
2　淡褐灰色砂質土

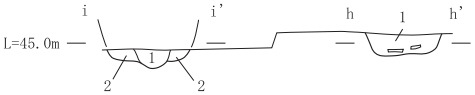



Pit-3045
1　灰褐色土
2　灰色砂質土
3　淡灰褐色砂質土
4　灰色砂質土

Pit-3044
1　淡灰褐色砂質土
2　灰褐色砂質土（やや粘質）
3　灰褐色砂質土（砂多し）

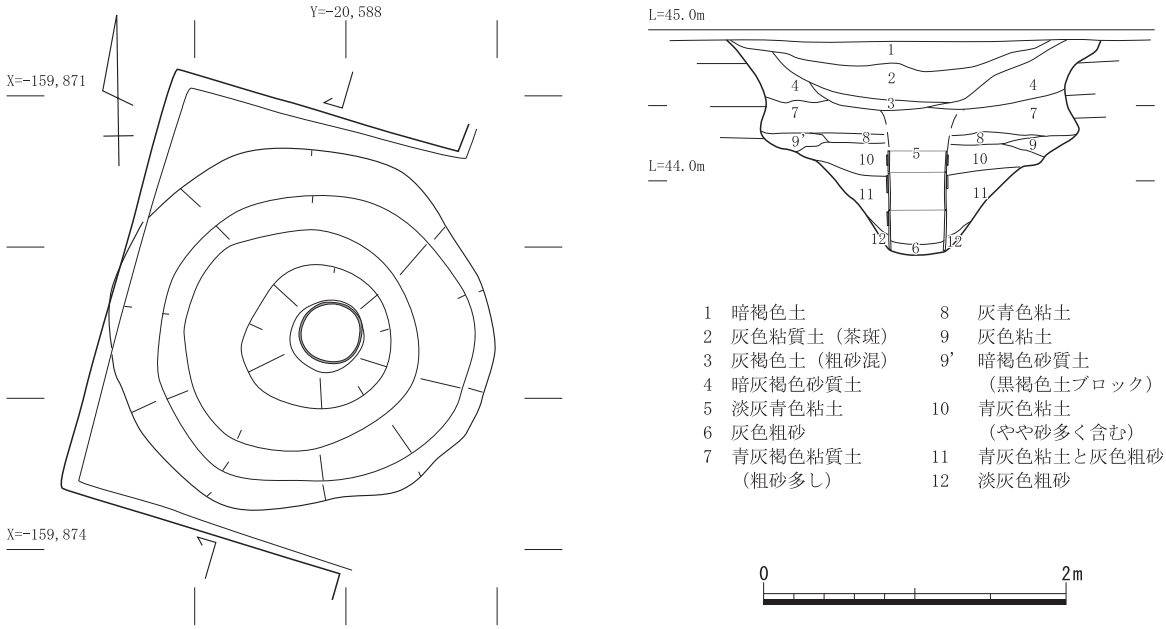
Pit-3043
1　淡褐灰色砂質土
2　暗褐色土
3　暗灰色粘土
4　灰色粗砂
5　暗灰色粘土
6　暗褐色土（砂混）



Pit-3047
1　淡褐灰色砂質土（やや粘質）
2　淡褐灰色砂質土

Pit-3046
1　淡褐灰色土（砂混）

第32図　建物跡７遺構平面図および北・西壁断面図（Ｓ＝1/50）




第33図　ＳＫ－3052遺構平面図および西壁断面図（Ｓ＝1/50）

**平安時代（第33図）**

**ＳＫ－3052**　調査区西端で検出した井戸である。直径2.4m、深さ1.4mを測る。曲物転用井戸枠をもつ。黒色土器椀等が出土した（第34図14・15）。10世紀頃の遺構とみられる。

**中・近世**

**素掘小溝群**　調査区全体で中世の素掘小溝を検出した。基本的に南北軸に一致するものが多い。ただし、近世頃の小溝に北側の土地区画に直交する斜方位のものがみられた。

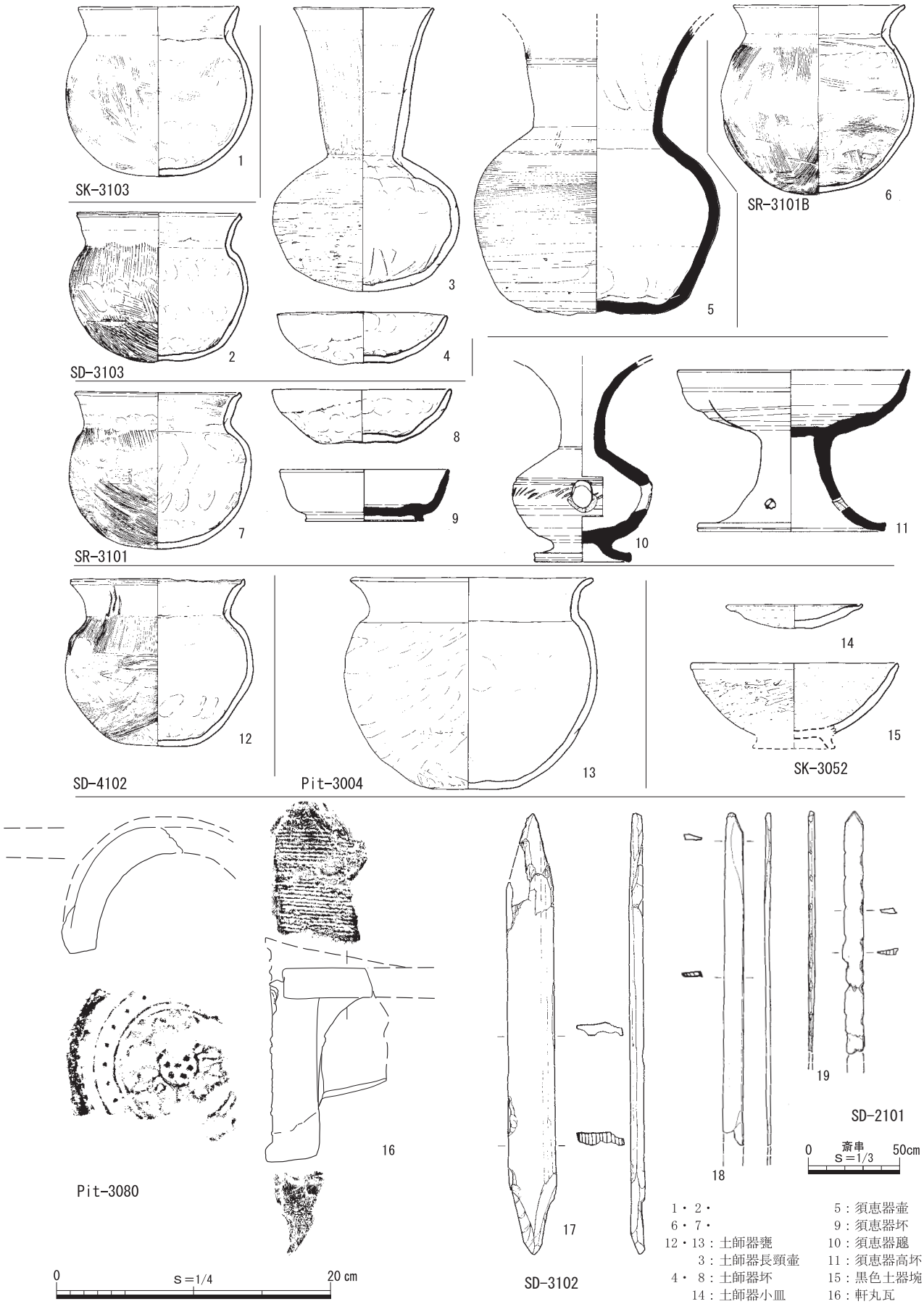
## 3. まとめ

今回の調査では、古墳時代前期から平安時代にかけての調査地の変遷を辿ることができた。また、古墳時代以前の状況についても若干の情報を得ることができた。

弥生時代の本地は、東端で灌漑用とみられる溝１条を検出したことから、耕地開発が進んでいたと考えられる。ただし、弥生時代の水田遺構は後世の削平により遺存していないようである。なお、試掘調査時に敷地北東部で縄文時代後期の包含層を確認しているが、今回の調査でも縄文土器片が数点出土した。縄文時代の集落遺構が付近に存在する可能性がある。

古墳時代前期末には、調査地西端で小規模な竪穴住居からなる集落が形成されていたことが明らかとなった。特に、北端で検出した１号住居跡からは滑石製管玉・臼玉の製作に関わる遺物が出土しており、小規模な玉作りをおこなっていたことが判明した。奈良県では、古墳時代中期以降の玉作り遺跡は多数確認されているが、前期末の竪穴住居での玉作りの類例は僅少であり、重要な成果の一つとすることができよう。

古墳時代中期以降の調査地の状況はやや判然としないが、飛鳥時代まで継続するＳＲ－3101の西岸で耕地開発の痕跡が認められるほか、馬の遺体を埋めた土坑を確認した。また、ＳＲ－3101東岸でも馬の遺体を確認したが、こちらは河の岸付近に投棄された可能性が考えられる。




第34図　古墳時代後期～古代の出土遺物

飛鳥時代の調査地では、東西方向の直線的な大溝ＳＤ－3101、ＳＤ－2101およびＳＤ－4102を条里区画に伴う遺構として確認している。この遺構は、飛鳥時代に東西軸を意識した条里制地割りがこの地区に置かれたことを示し、奈良盆地の土地開発史を考える上で重要な遺構となるだろう。ただし、この溝の北側と南側で検出した耕作に伴うとみられる小溝群は地形に規制されて屈曲したものとなっており、東西溝を掘削した計画的な地割りとは別に地形に規制された土地利用も残存したことを示すと考えられる。

奈良時代の建物を８棟以上（12棟前後）確認した。主軸は南北方向に合致するものと、真北から９°東に傾くものに大別できそうである。建物跡６の切り合い関係から、南北軸に合致するものが古く、北から９°東に傾くものが新しいとみられる。この約９°振れる主軸は、調査地北側に想定される保津・阪手道の影響を強く受けたものとみられる。本調査地で古代の遺構が検出されるならば当然この主軸をもつものが主体となると予想していたが、実際には飛鳥時代に東西方向の大溝が掘削されており、東西軸の建物の方が先行して建てられることになった可能性がある。ただし、大半の建物は所属時期を厳密に決めることが困難であり、平安時代前期の井戸１基を検出していることから考えると一部の建物は平安時代まで降ることも考慮する必要がありそうである。

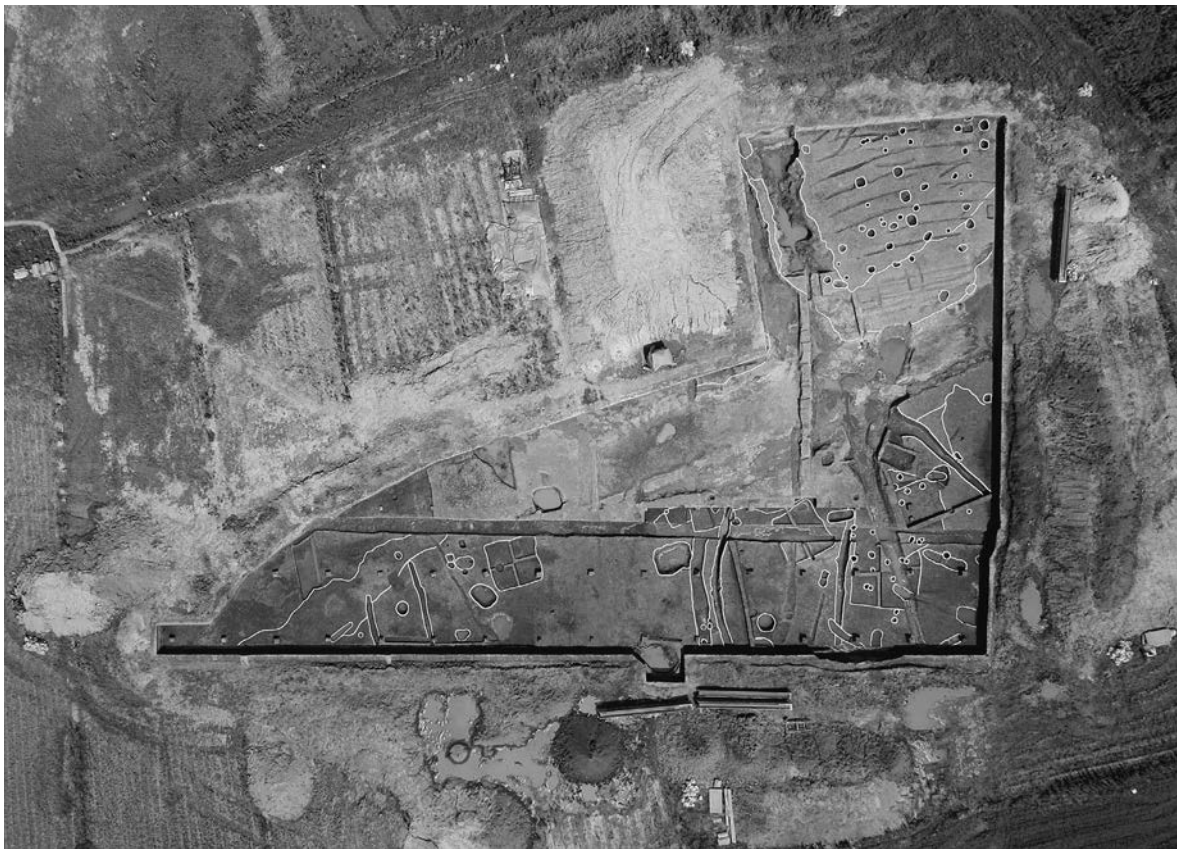
鎌倉時代以降は調査地全体が再び耕地となった。全面で素掘小溝群を検出したが、主軸は基本的に条里方向で、近世のものは現状の地割に一致して条里方向から若干傾いたものとなっていた。

**註**

１）古墳時代の玉製作については広瀬時習氏（大阪府文化財センター）にご教示を賜った。

２）三好美穂氏（奈良市教育委員会）のご教示による。

３）青木敬・石田由紀子（奈良文化財研究所）、池田裕英・池田富貴子・宮﨑正裕・三好美穂（奈良市教育委員会）の各氏のご教示による。



13．古墳時代遺構完掘状況（写真上が東）

14．飛鳥・奈良時代遺構完掘状況（写真上が東）

## 5．多遺跡　第25次調査

### 1. 遺跡・既調査の概要

多遺跡は、標高52m前後の沖積地に位置する。遺跡中央を飛鳥川が北流するが、これは過去の河川付け替えによるものである。この遺跡では、弥生時代前期～後期、古墳時代前期～後期の遺構・遺物が発掘調査で確認されている。また、遺跡中央に鎮座する多坐弥志理都比古神社（通称多神社）は式内大社として古くから地域の信仰を集めており、祀られる四柱の祭神は神武天皇およびその長子で古代氏族「多氏」の祖「神八井耳命」らであり、多の地を本拠地とする多氏の鎮守社として知られている。

今回の調査は、遺跡北西端での下水道工事に伴って実施した。調査地となった県道の建設工事時には第２・３次調査を奈良県立橿原考古学研究所が実施しており、多くの遺構を検出している。また、南側隣接地の県立リハビリセンター建設に伴う第10次調査では、弥生時代前期～古墳時代中期の遺構を多数確認している。このことから、本調査地においても弥生時代～古墳時代の遺構が濃密に分布することが予想された。

### 2. 調査の成果

（１）層序

調査地の現状は道路である。東側の第１トレンチ、西側の第２トレンチで若干層序が異なるが、ここでは第２トレンチの層序を示す。

０－１～０－３：アスファルトおよび造成土〔検出標高52.6m、以下数値のみ記す〕、０－４～０－６：アスファルトおよび造成土〔52.0m〕、Ⅰ：青褐色粘土〔51.5m〕Ⅱ：淡灰色粘質土〔51.1m〕、Ⅲ：淡灰褐色粘質土〔50.9m〕、Ⅳ：灰褐色砂〔50.7m〕、Ⅴ：暗灰色粘質土〔50.6m〕、Ⅵ：黒褐色土〔50.5m〕、Ⅶ：暗灰色粘土〔50.1m〕

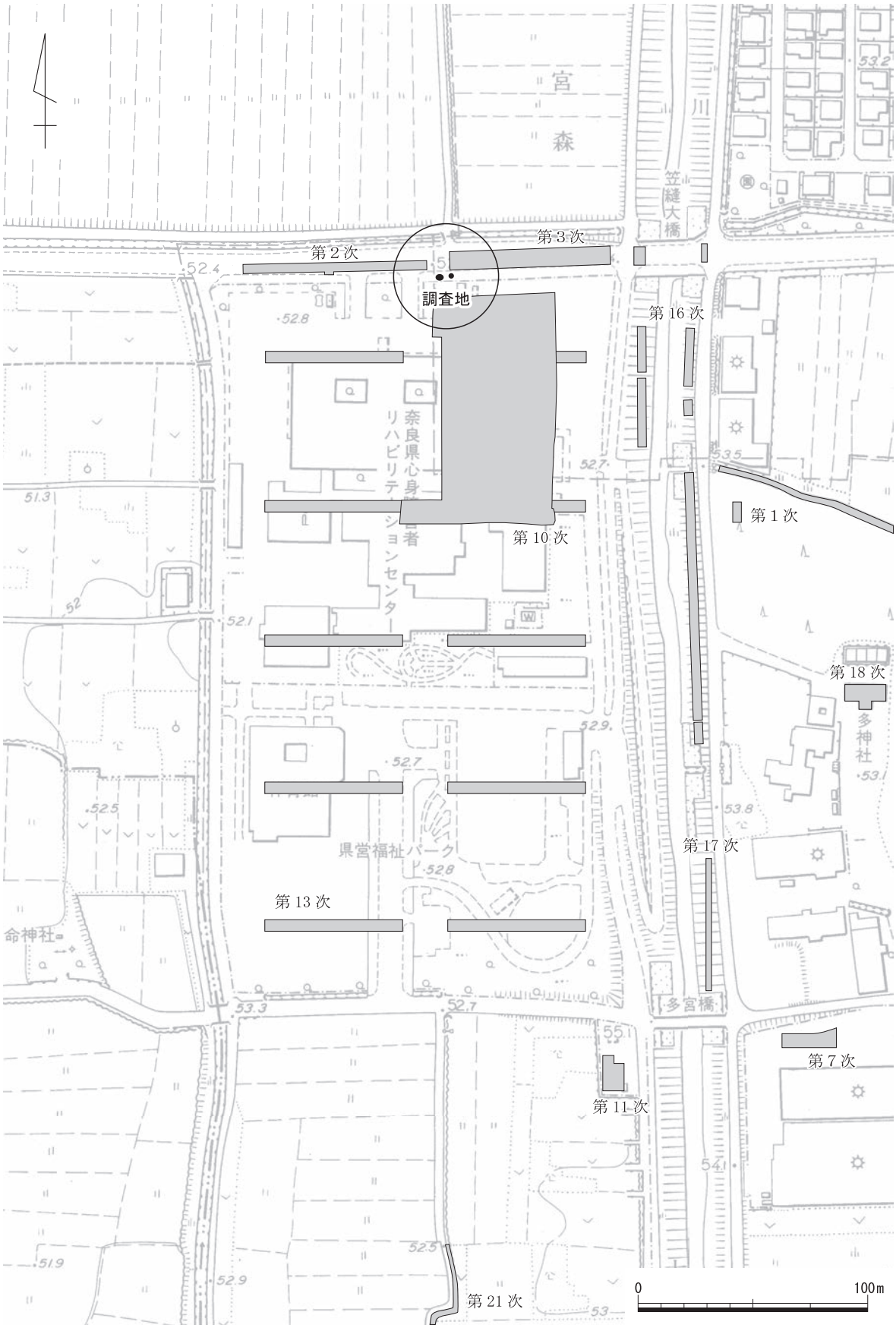
新旧２段階の舗装面があり、旧舗装面は現地表から0.6m下で検出される。旧水田耕土（第Ⅰ層）までは約1.0mである。第Ⅲ層が中世包含層、第Ⅳ層が古代頃の洪水層？、第Ⅴ層が古墳時代包含層、第Ⅵ層以下が地山である。遺構は第Ⅵ層上面で検出した。

（２）遺構と遺物

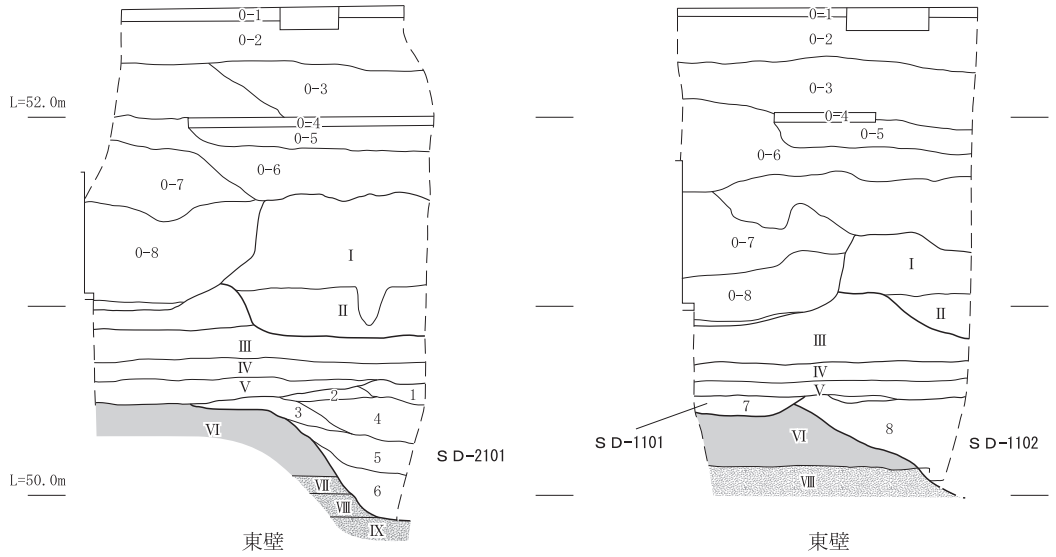
**ＳＤ－1101**　第１トレンチで検出した東北東－西南西方向の溝である。幅0.4m、深さ0.15m。遺物は僅少で、須恵器・土師器片が15点出土している。古墳時代頃の遺構とみられる。

**ＳＤ－1102**　ＳＤ－1101に切られる東北東－西南西方向の溝である。北肩のみの検出であり、溝幅は明らかでない。また、深さ0.5mまで確認したが、さらに深くなるとみられる。大和第Ⅴ様式の半完形の高坏が１点出土した。弥生時代後期初頭の遺構とみられる。

**ＳＤ－2101**　第２トレンチで検出した東南東－西北西方向の溝である。北肩のみ検出した。深さ0.75m、調査区外に拡がるため溝幅は不明。第37図はこの遺構から出土した遺物の一部である。１～３は土師器高坏、４は土師器甑、５は須恵器把手付鉢、６・７は須恵器無蓋高坏である。５世紀中頃の遺物とみられる[1)]。




第35図　調査地位置図（S＝1/2,500）



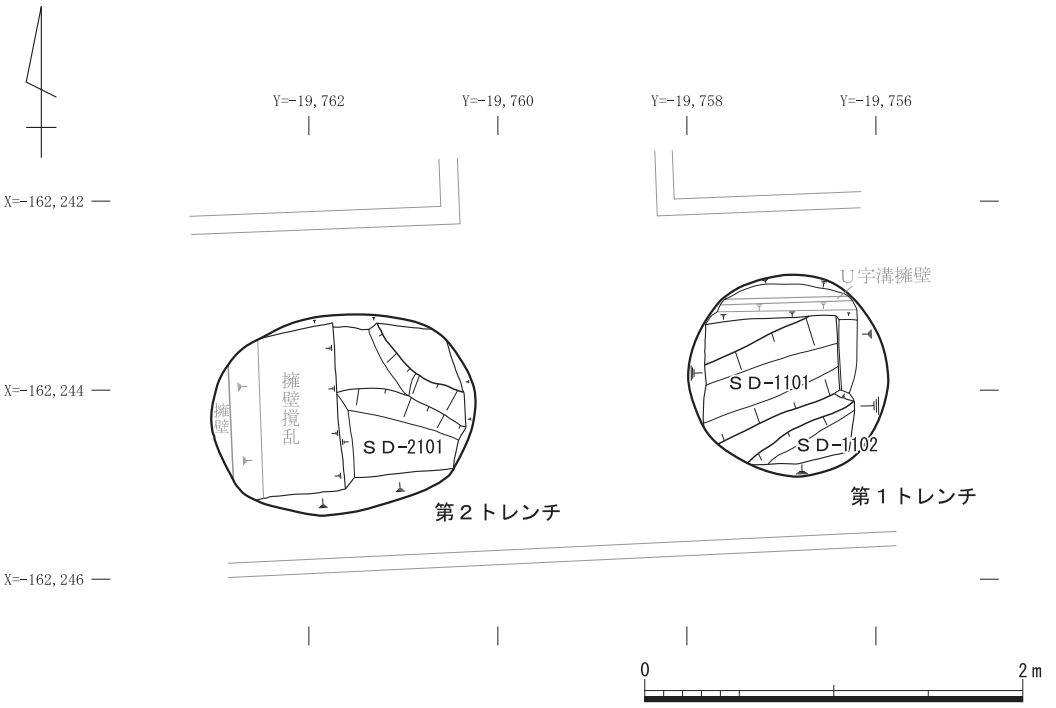

0-1　アスファルト
0-2　クラッシャー
0-3　青褐色土
0-4　コンクリート舗装道
0-5　コンクリートガラ
0-7　茶灰色土
0-8　灰褐色土

Ⅰ　青褐色粘土　〔旧水田耕土〕
Ⅱ　淡灰色粘質土〔　〃　床土〕
Ⅲ　淡灰褐色粘質土
Ⅳ　灰褐色砂
Ⅴ　暗灰色粘質土
Ⅵ　黒褐色土　〔地山〕
Ⅶ　暗灰色粘土　〔　〃　〕
Ⅷ　灰黄色シルト（粘土質）〔　〃　〕
Ⅸ　灰色粘土　〔　〃　〕

**ＳＤ-2101**
1　褐色砂
2　暗灰色砂
3　暗褐色粘質土
4　黒褐色粘質土
5　黒灰褐色粘質土（褐斑）
6　暗灰色粘土（スミ混）

**ＳＤ-1101**
7　暗灰色粘質土

**ＳＤ-1102**
8　黒褐色粘質土（ハード）



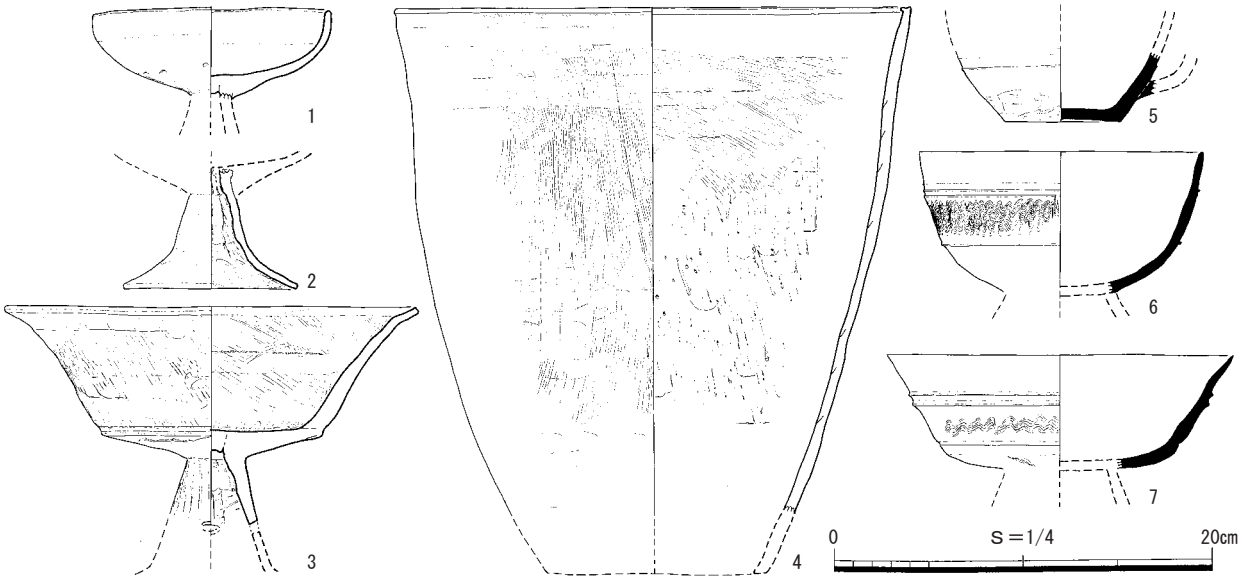

第36図　調査区平面図および東壁断面図（Ｓ＝1/40）

### 3. まとめ

多遺跡は南北500m、東西450mの広大な面積を占有しているが、弥生時代前期の遺構は北西部を中心に分布し、弥生時代中期の遺構は散漫ながら全体で検出される状況である。また、比較的希薄とみられていた弥生時代後期の遺構は遺跡北東部の第19・22次調査でまとまって検出されている。今回の調査では、多遺跡北西端で古墳時代中期の遺構を確認した。出土した遺物には古相を呈する須恵器類が含まれ、古墳時代の多集落の規模と性格を考える上で重要な成果が得られた。古墳時代の遺構は、第２・３・10次調査地のある遺跡北西部を中心に濃密な分布状況が読み取れ、本調査地もその一部であろう。今後、遺跡北東に隣接する古墳時代集落の秦庄遺跡および秦楽寺遺跡との関連も注意していく必要があるだろう。

**註**

１）坂靖氏（奈良県立橿原考古学研究所）のご教示による。




第37図　ＳＤ－2101出土土器

１．第１トレンチ全景（北から）

２．第２トレンチ全景（北から）

## 6．保津・宮古遺跡　第40・41次調査

### 1. 遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は、田原本町西部の大字保津・宮古にまたがる遺跡である。遺跡内を古代道路跡である筋違道（太子道）、保津・阪手道が通り、中世環濠集落の保津環濠遺跡、中世寺院跡の常楽寺推定地等が重複する、複合遺跡である。

今回の調査地は遺跡の西端にあたる。周辺では第29次調査を実施し、東西２つのトレンチのうち、東側トレンチでは弥生時代後期の集落遺構、西側トレンチでは古墳の周濠の可能性がある大溝を検出した。この成果から、東側トレンチまでを保津・宮古遺跡の西端とし、西側トレンチは宮古北遺跡として認識し、遺跡範囲の異動をおこなっている。

### 2. 調査の成果

本調査は下水道工事に伴う事前調査で、人孔設置６ヶ所について事前調査を実施した。工期から西側５ヶ所を第40次調査とし、東側１ヶ所を第41次調査とする。第40次調査は、東から第１～５トレンチとし、遺構名は各トレンチ番号を千番台に付し表記した。

（１）層序

最も西側にあたる第40次調査第５トレンチから最も東の第41次調査まで約280m離れており、各トレンチで層序も一定ではない。ここでは基本的な層序を示す。

Ⅰ：アスファルト〔検出標高46.0m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：クラッシャーラン等〔45.9m〕、Ⅲ：茶褐色土〔45.5m〕、Ⅳ：茶灰色土〔45.3m〕、Ⅴ：灰褐色粘質土〔45.1m〕、Ⅵ：黄灰色土〔45.0m〕、Ⅶ：灰色シルト〔44.7m〕

本地の現況は道路である。第Ⅰ・Ⅱ層は現代造成層、第Ⅲ～Ⅴ層は近世頃の道路造成土層である。第Ⅵ層より下は地山層で、その上面が遺構検出面である。なお、第41次調査地では第Ⅵ層上に遺物包含層の黒褐色土が堆積し、その上面が中世の遺構検出面、その下第Ⅵ層上面が弥生時代～古代頃の遺構検出面である。黒褐色土には弥生時代後期の土器片が含まれており、その頃の遺物包含層とみられる。

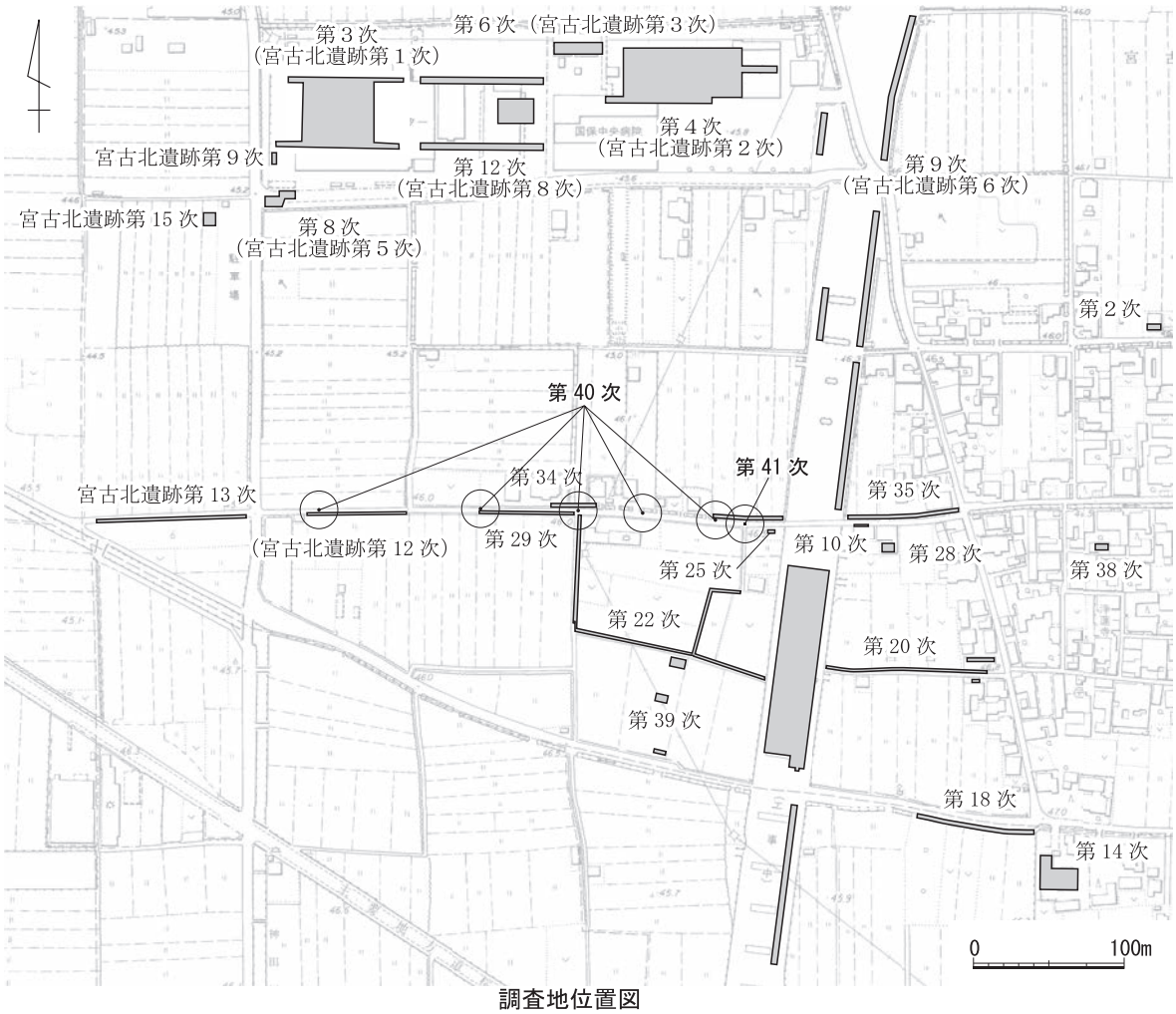
（２）遺構と遺物

**弥生時代～古代**

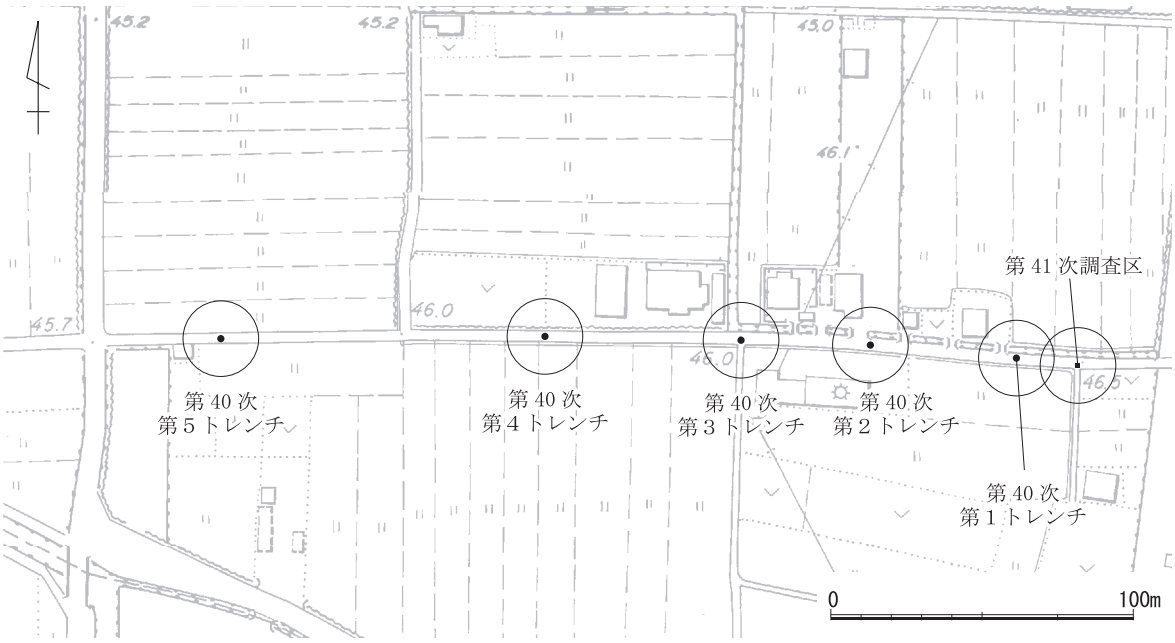
**ＳＤ－101**　第41次調査で検出した、南北方向の小溝である。第Ⅵ層上面で検出した。調査区東端にあたり、その西肩を検出したのみであるため、溝幅は確認していない。黒褐色粘質土を堆積土とし、深さは0.3mである。遺物が出土していないが、弥生時代後期の遺物包含層である黒褐色土の下面で検出していることから、それよりも古い遺構である。

**ＳＤ－1101**　第40次調査第１トレンチで検出した、東西方向の溝である。トレンチ外へ拡がりをみせ、その南肩部のみ検出した。堆積土は上層が暗褐色土、下層が灰黄色シルトで、厚さは約0.3mを測る。少量ながら、須恵器や黒色土器椀片が出土している。

**ＳＸ－4101**　第40次調査第４トレンチ全域で検出した、落ち込みとみられる堆積層である。中世遺物包含層とみられる灰色粘質土の下、厚さ約0.5mにわたり暗褐色粘質土や黒褐色粘質土が堆積し

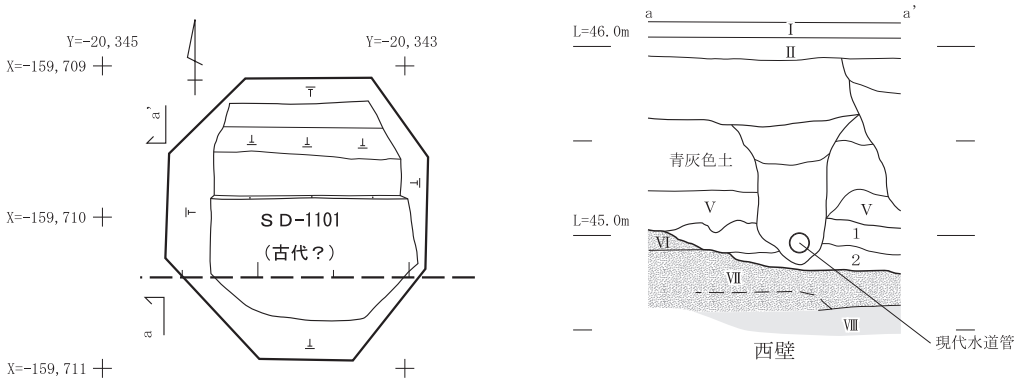



調査地位置図




調査区配置図

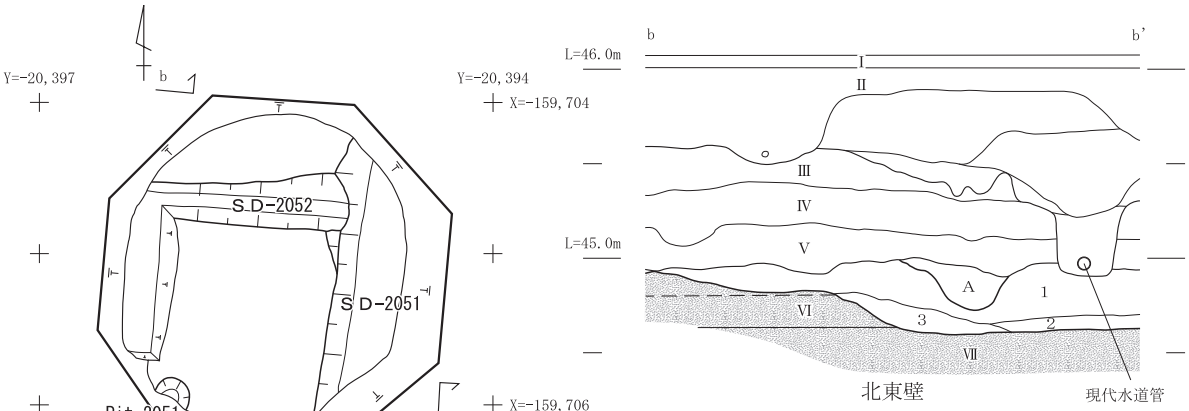
第38図　調査地位置図および調査区配置図（上：Ｓ＝1/5,000、下：Ｓ＝1/2,500）




Ⅰ　アスファルト
Ⅱ　クラッシャー等
Ⅲ　茶褐色土
Ⅳ　茶灰色土
Ⅴ　灰褐色粘質土
Ⅵ　黄灰色土　〔地山〕
Ⅶ　灰色シルト
（部分的に黄・褐色がかる）〔 〃 〕
Ⅷ　灰褐色砂質土　〔 〃 〕

SD-1101（古代？）
1　暗褐色土
2　灰黄色シルト

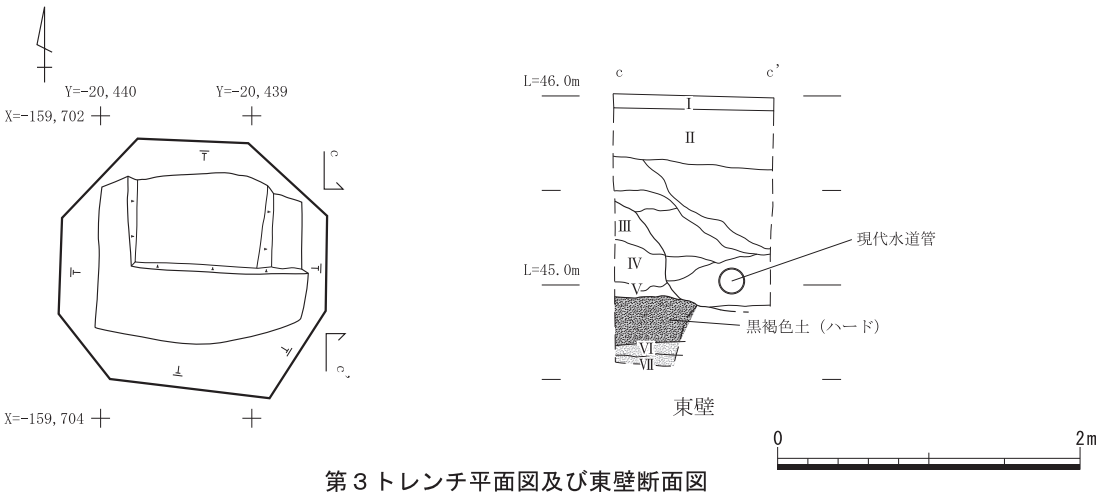
第１トレンチ西壁断面図及び平面図




SD-2052（中世）
A　暗灰色土

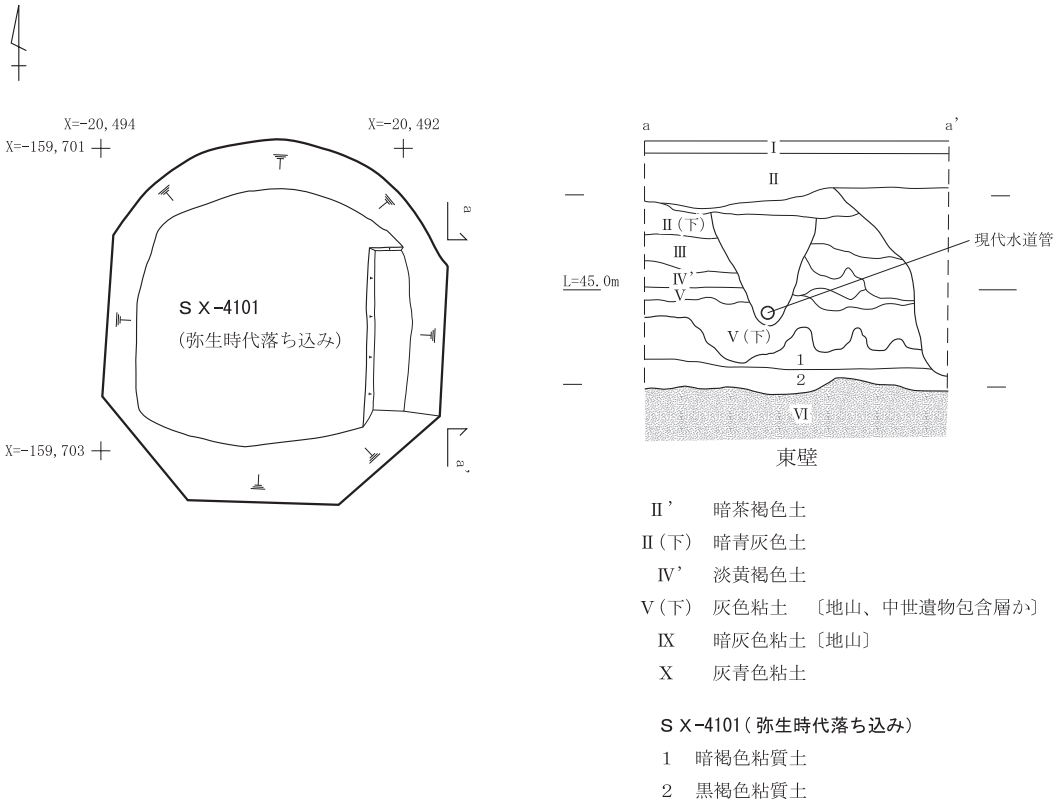
SD-2051（中世）
1　暗灰褐色粘質土
2　暗灰色粘土
3　暗黄灰色土

第２トレンチ平面図及び北東壁断面図

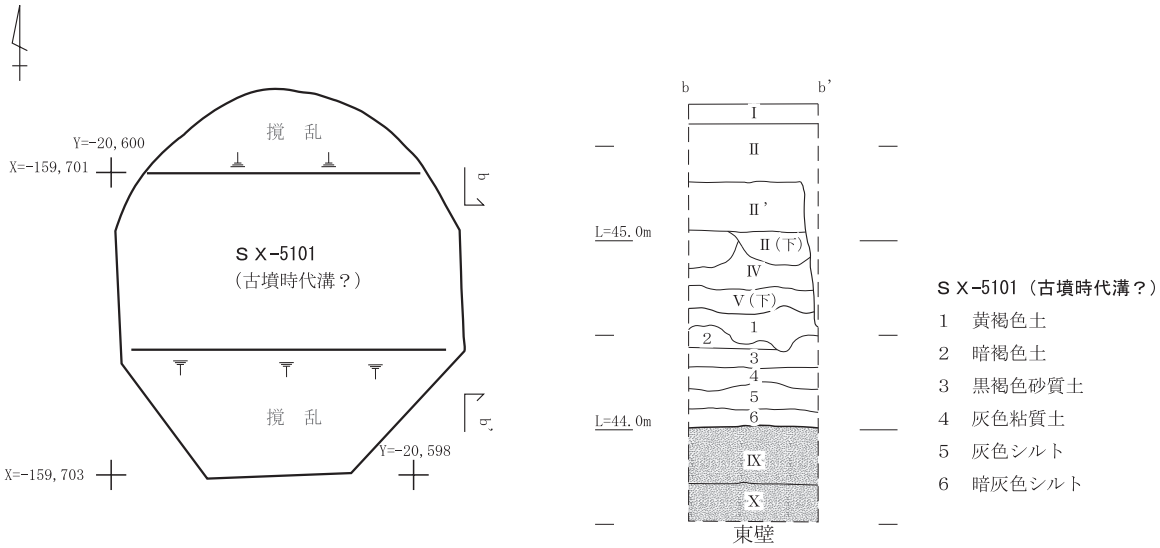



第３トレンチ平面図及び東壁断面図

第39図　第40次調査第１～３トレンチ平面図および西・北東・東壁断面図（S＝1/50）

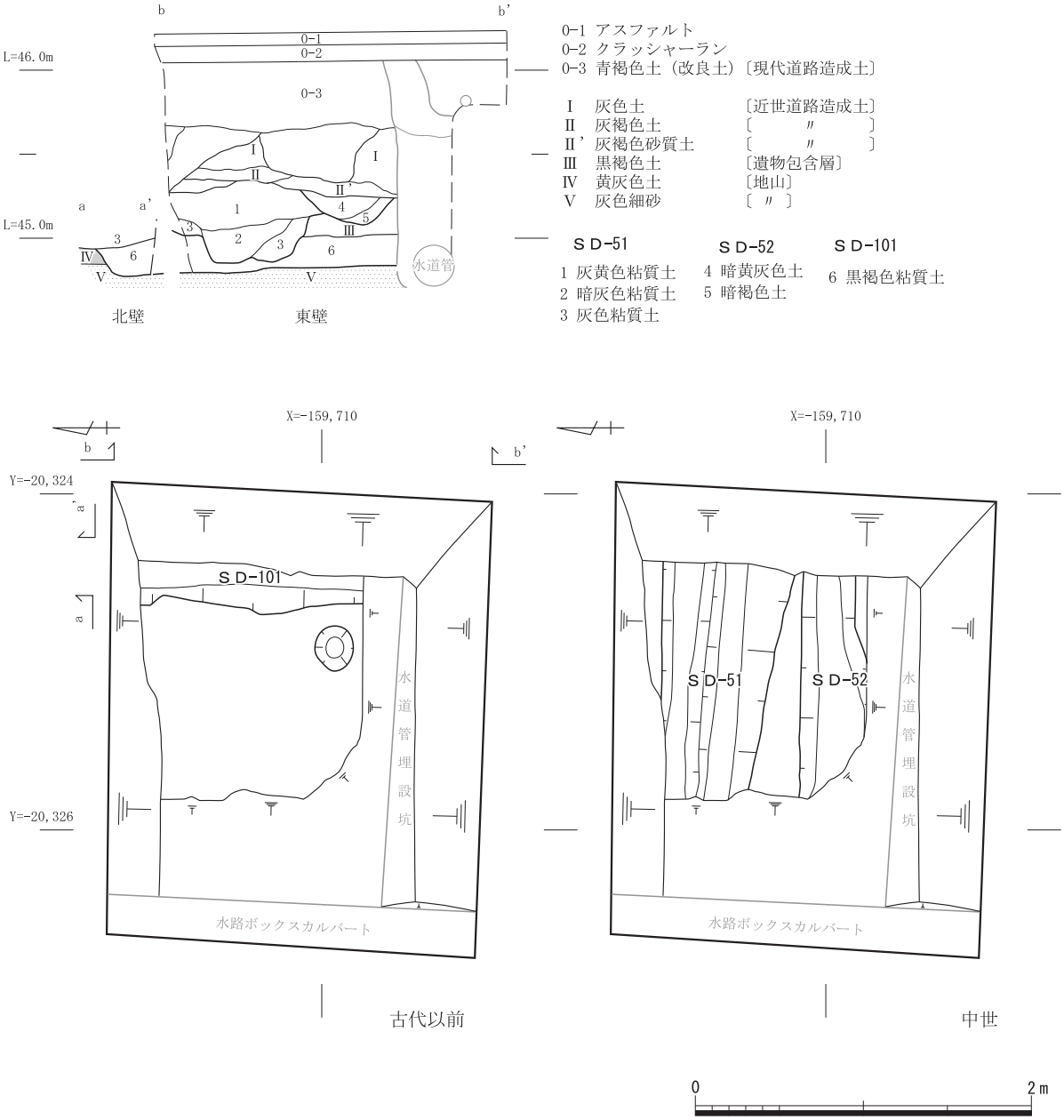



第４トレンチ平面図及び東壁断面図




第５トレンチ平面図及び東壁断面図

第40図　第40次調査第４・５トレンチ平面図および東壁断面図（Ｓ＝1/50）




第41図　第41次調査区平面図および北・東壁断面図（Ｓ＝1/40）

ていた。遺構の下面はほぼ平坦である。弥生土器片が出土しているが詳細な時期は不明。

**ＳＸ－5101**　第40次調査第５トレンチ全域で検出した、大溝とみられる堆積層である。厚さ約0.8ｍである。本トレンチは撹乱がはげしく、調査上での安全確保のため層序の確認のみにとどまったため、遺構の詳細は不明である。

本トレンチの南側に隣接して実施した第29次調査第２トレンチ（宮古北遺跡第12次調査）では、古墳の周濠である可能性がある中期の大溝を検出し、初期須恵器等が出土している。本遺構はこの大溝と一連のものであろう。

**中世**

**ＳＤ－51・－52**　第41次調査で検出した、東西方向の小溝群である。ＳＤ－51は溝幅0.6ｍを測る

が、断面から２本の小溝が切り合っていたとみられる。瓦器椀片を含んでおり、中世の耕作に伴う小溝と考えられる。

**ＳＤ－2051**　第40次調査第２トレンチで検出した、南南西－北北東方向の溝である。調査区東端にあたり、その西肩のみを検出したのみであるため溝幅は確認していない。暗灰褐色粘質土を堆積土とし、深さは0.3mである。

**ＳＤ－2052**　第40次調査第２トレンチで検出した、東西方向の小溝である。溝幅0.3mを測り、暗灰色土を堆積土とし深さは0.3mである。ＳＤ－2051を切るためこれより新しい遺構であるが、中世の範疇とみられる。

### 3. まとめ

今回の調査では、希薄ではあるが弥生時代～中世の遺構を検出したが、いずれの遺構も調査区の制限により詳細を確認できなかった。これらの遺構は、過去に実施した第29次調査で確認している遺構群に対応してくるものとみられ、保津・宮古遺跡の西端にあたる本地には弥生～古墳時代の遺構が広がっていることを追認できた調査となった。

１．第40次第１トレンチ全景（北から）

２．第40次第２トレンチ全景（南から）

３．第40次第４トレンチ全景（南から）

４．第41次調査区全景（南西から）

## 7．常楽寺推定地　第８次調査

### 1. 遺跡・既調査の概要

常楽寺推定地は田原本町西部位置する寺院遺跡である。現宮古集落の東半には、「寺垣内」や「大門」といった小字が残り、ここが中世『三箇院家抄』で「鏡作西辺也」とされる「常楽寺」と推定されている。現在は薬師堂が残り、堂内には平安時代（９世紀）作の木造薬師如来座像が安置されており、国重要文化財に指定されている。また、字「寺東」の塚からは泥塔が出土することが知られている。

今回の調査地は遺跡の北端にあたる。調査地の東側でおこなった第５次調査では、弥生時代中期と古墳時代前期の土坑や、東西方向の中世大溝と、それを再掘削して新たに南側へ屈曲させた近世大溝等を検出した。本調査区においても、この中・近世大溝の検出が予想された。

### 2. 調査の成果

本調査は下水道工事に伴う事前調査である。人孔を設置する東西２ヶ所について調査をおこなった。それぞれは約50m離れており、東側を第１トレンチ、西側を第２トレンチとする。

（１）層序

０：アスファルト〔検出標高46.8m、以下数値のみ記す〕、０－１：クラッシャーラン〔46.7m〕、０－３：黒色土〔46.6m〕、０－４：暗緑灰色土〔46.4m〕、０－５：淡茶灰色砂質土〔46.1m〕、Ⅰ：青灰色粘質土〔45.8m〕、Ⅱ：褐色粗砂〔45.6m〕、Ⅲ：黒灰色粘土〔45.0m〕、Ⅳ：緑灰色粘土〔44.8m〕

本地の現況は、平成18年に拡幅された道路で、第０層はその拡幅に伴う造成土である。第Ⅰ層は拡幅前の水田耕土層、第Ⅱ層は第１トレンチのみで確認した、弥生時代以前の河跡堆積層とみられる。第Ⅲ層以下は地山層である。なお、第１トレンチでは第Ⅲ層と第Ⅳ層の間で火山灰層の可能性があるシルト質の層を確認した。

（２）遺構と遺物

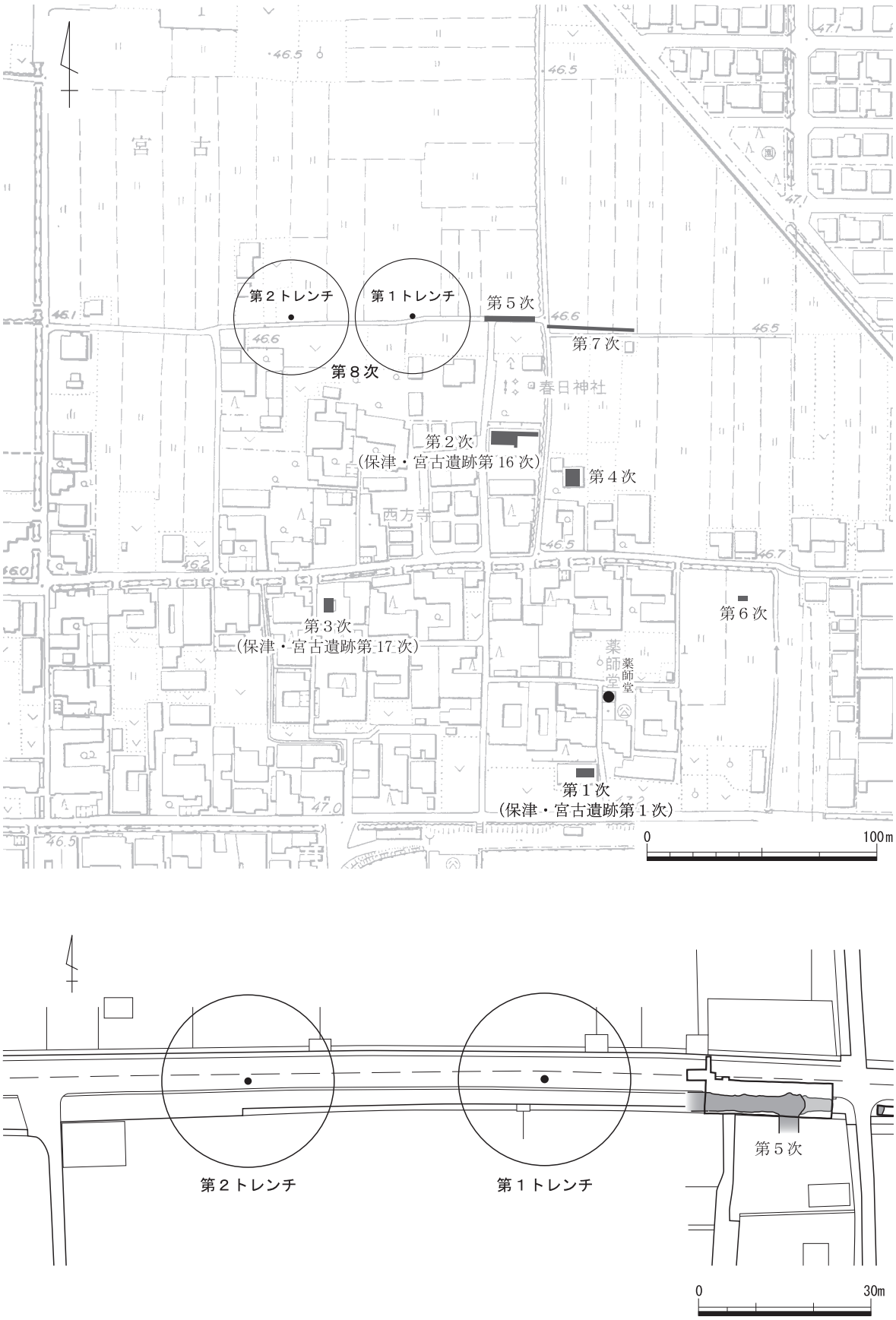
東側の第１トレンチでは、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

**ＳＤ－2001・－2051**　第２トレンチ全体が大溝の内部であった。ＳＤ－2001は南北方向にちかい軸をもっていたようで、その東肩付近を検出した。深さは約0.3mで、染付碗片が含まれていたことから近世後期とみられる。第44図は本遺構から出土した遺物である。１～５は瓦質土器、６～９は近世磁器、10・11は近世陶器、12～14は土師器の焙烙である。１の瓦質羽釜と２・３の瓦質擂鉢は後述するＳＤ－2051からの混入とみられ、基本的には18世紀末頃の遺物が中心となる。

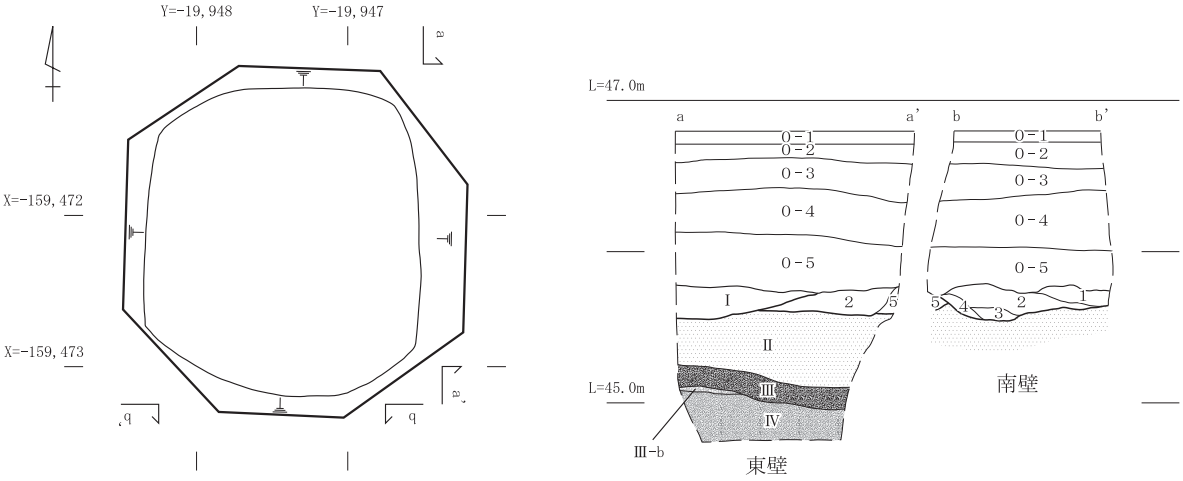
ＳＤ－2051は、ＳＤ－2001の下層にあたる大溝とみられる遺構である。深さは約0.6mを測り、室町時代頃とみられる遺物が出土した。軸方向は確認できなかったが、これらの位置関係と所属時期から、ＳＤ－2001はＳＤ－2051を再掘削した溝と考えられる。

### 3. まとめ

今回の調査では、第２トレンチで室町期の溝と近世の再掘削溝を検出した。これらの遺構規模等

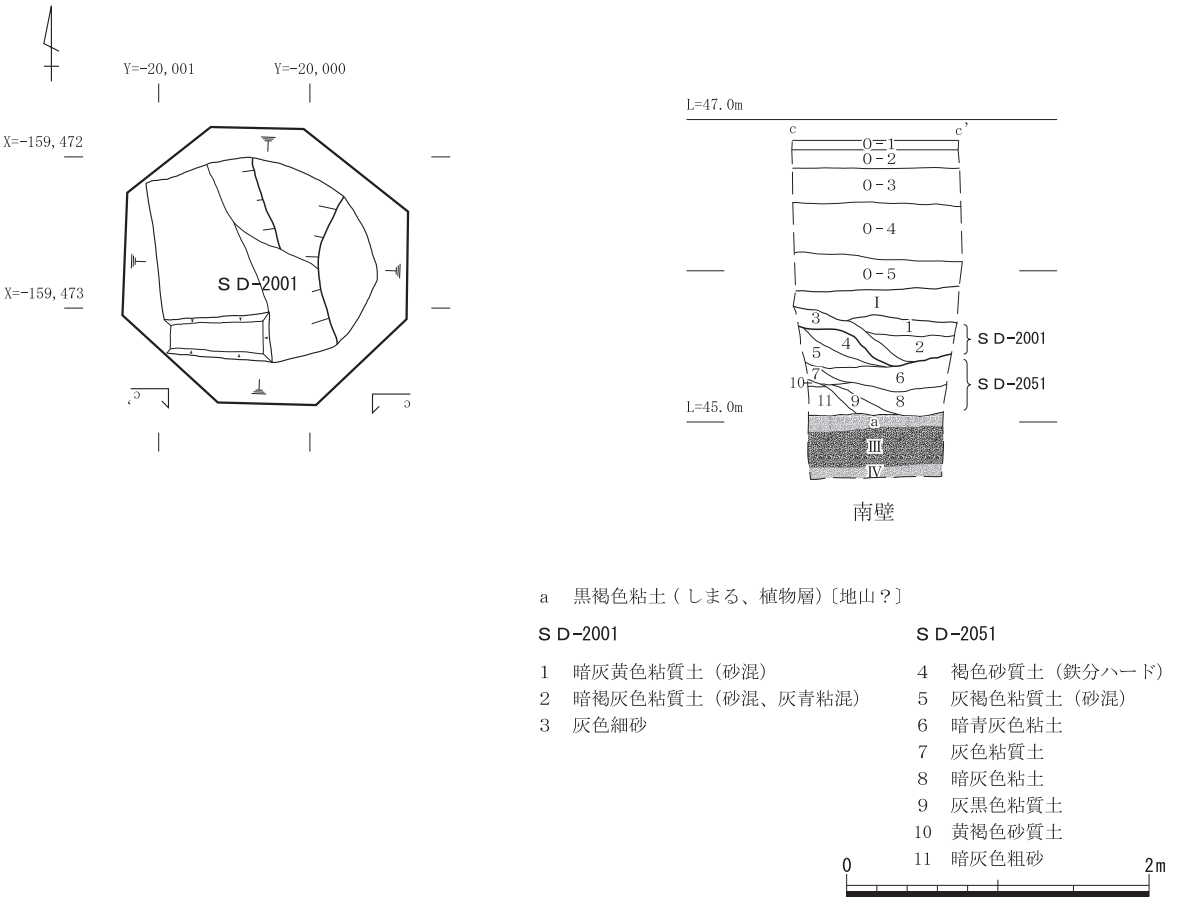



第42図　調査地位置図（上：Ｓ＝1/2,500、下：Ｓ＝1/100）




| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 0－1 | アスファルト | 1 | 黒褐色粘質土 | Ⅰ | 青灰色粘質土 〔旧耕土層〕 |
| 0－2 | クラッシャー | 2 | 灰色細砂 | Ⅱ | 褐色粗砂 〔地山〕 |
| 0－3 | 黒色土 | 3 | 淡灰褐色細砂 | Ⅲ | 黒灰色粘土 〔 〃 〕 |
| 0－4 | 暗緑灰色土 | 4 | 暗褐色粘質土 | Ⅲ－b | 灰色シルト（火山灰か）〔 〃 〕 |
| 0－5 | 淡茶灰色砂質土（黒色土混） | 5 | 暗灰褐色細砂 | Ⅳ | 緑灰色粘土 〔 〃 〕 |

**第１トレンチ平面図及び東壁・南壁断面図**




a　黒褐色粘土（しまる、植物層）〔地山？〕

**ＳＤ－2001**

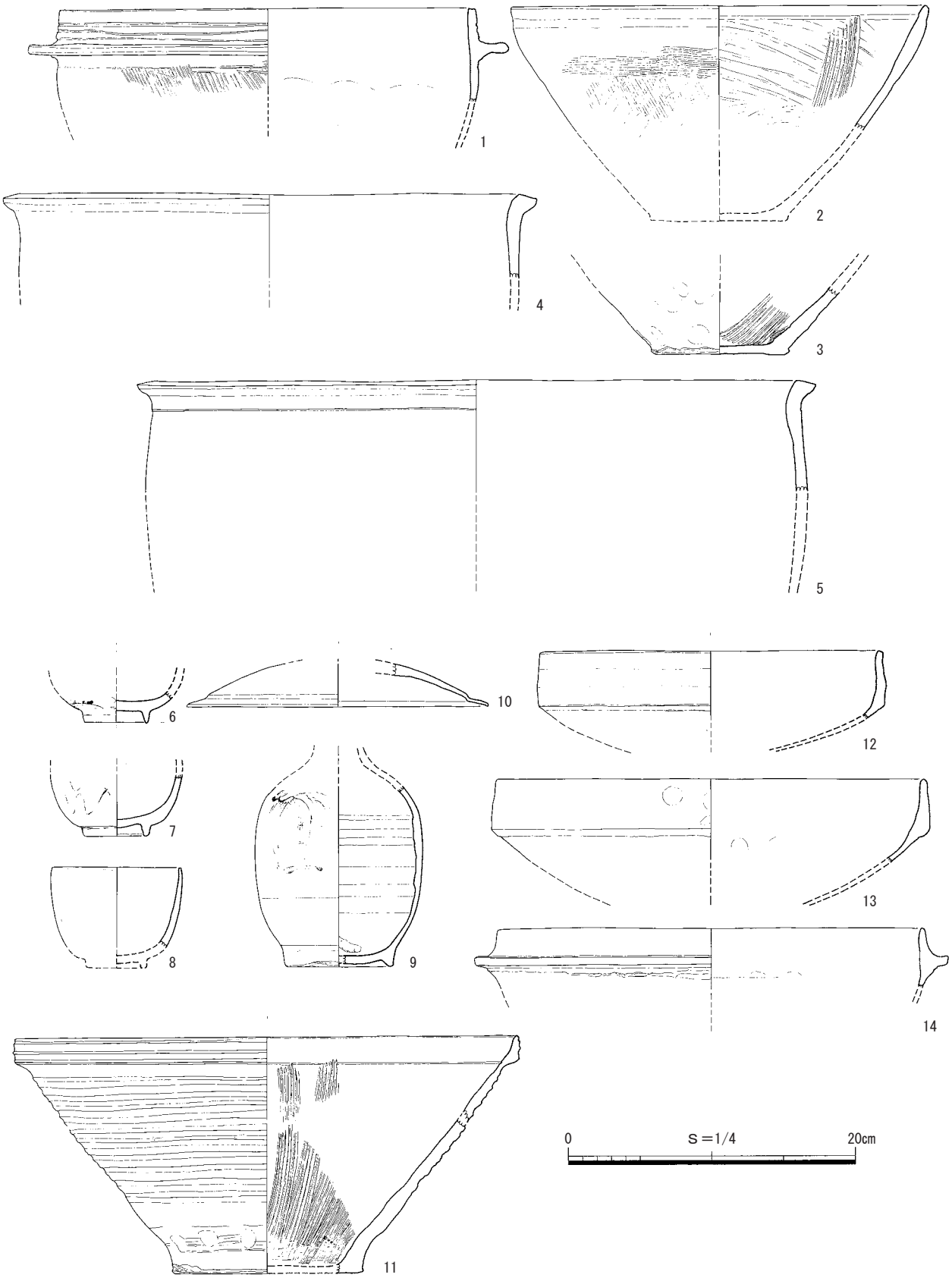
1　暗灰黄色粘質土（砂混）
2　暗褐灰色粘質土（砂混、灰青粘混）
3　灰色細砂

**ＳＤ－2051**

4　褐色砂質土（鉄分ハード）
5　灰褐色粘質土（砂混）
6　暗青灰色粘土
7　灰色粘質土
8　暗灰色粘土
9　灰黒色粘質土
10　黄褐色砂質土
11　暗灰色粗砂

**第２トレンチ平面図及び南壁断面図**

第43図　第１・２トレンチ平面図および東・南壁断面図（Ｓ＝1/50）




第44図　ＳＤ－2001出土土器

詳細は明らかにしえなかったが、所属時期等より、第５次調査で検出した東西大溝と一連の遺構である可能性がある。第２トレンチがほぼ遺跡の北西端付近にあたり、また道路拡幅に伴う工事立会の結果からも、この第５次調査の東西大溝は中近世常楽寺とその周辺に拡がった集落の北辺を囲っていたもので、第２トレンチ付近で南北大溝と接続していたとも想定される。本調査では調査区が極小であったため、遺跡北西隅の様相については今後の調査結果を待ちたい。

１．第２トレンチ全景（西から）

２．第２トレンチ南壁土層堆積状況（北から）

## 8．黒田遺跡　第３次調査

### 1. 遺跡・既調査の概要

黒田遺跡（法楽寺跡）は田原本町北西部にあたり、標高約44m前後の沖積地に立地する。遺跡内には田原本町で最大の墳丘を残す県指定史跡の黒田大塚古墳がある。

法楽寺は聖徳太子の開基とされ、13世紀に伽藍等は焼け落ちるが再建をはたし、足利尊氏から寄進を受ける等隆盛した。長禄三年（1459）に描かれたと考えられている板絵には、25宇の堂宇と黒田大塚古墳が確認される。古墳は寺域に取り込まれることで墳丘を今に残すこととなったと考えられる。天正元年（1573）には戦火により再び焼け落ちたと伝わる。

第３次となる今回の調査地は遺跡の北側にあたる。これまでの調査や工事立会では、室町期を中心とする中世遺構の他、弥生時代末の集落遺構も確認している。

### 2. 調査の成果

本調査は個人住宅の建築に伴う事前調査である。建築予定地外において、東西0.9m、南北3.8mの調査区を設定した。

なお、調査地の北側隣接地は高さ約0.8mの高まりとなっており、現在は畑地と宅地として利用されている。

（１）層序

Ⅰ：暗茶褐色土〔検出標高43.9m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：青灰色粘質土〔43.8m〕、Ⅲ：黄灰色シルト〔43.7m〕、Ⅳ：灰褐色細砂〔43.5m〕

本地の現況は水田で、第Ⅰ・Ⅱ層は水田の耕土・床土層である。第Ⅲ層以下は地山で、その上面が全時期の遺構検出面である。地表面から地山上面の遺構検出面までが約20㎝と非常に浅い。

（２）遺構と遺物

**中世**

**ＳＤ－51**　調査区南端で検出した、東西方向の溝である。調査区外へ拡がり、その北肩のみ検出したため、溝幅約１m以上となる。断面形は浅い逆台形となるとみられ、深さは約0.3mを測る。遺物は土師器・瓦器の小片のみで時期を確定できなかったが、中世の範疇とみられる。

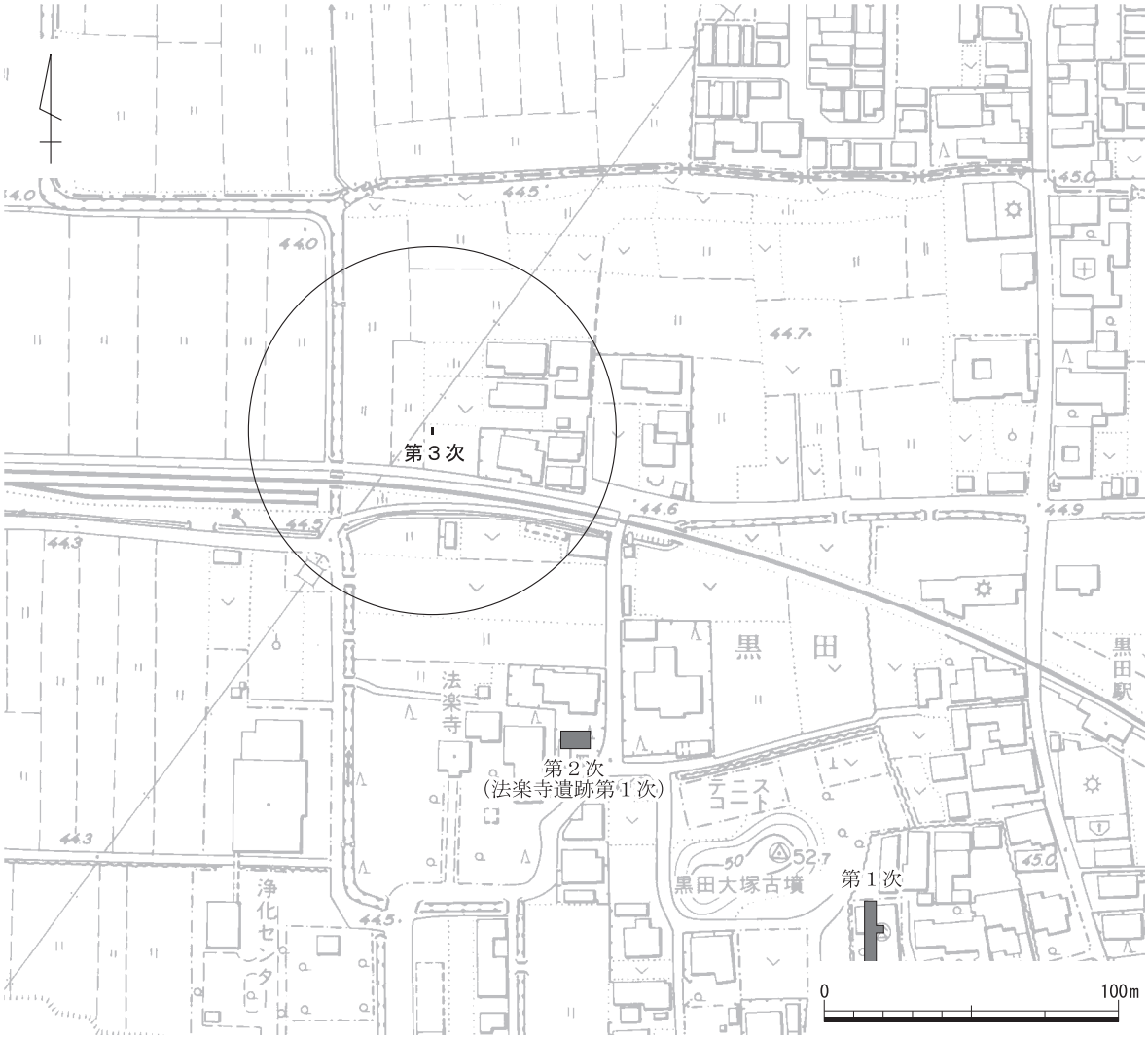
**ＳＤ－52**　ＳＤ－51の北側で、２本の小溝を検出した。東西方向もしくは西南西－東北東方向の小溝で、幅0.3～0.4m、深さは0.1mを測る。遺物は土師器皿他小片９点である。耕作に伴う遺構であろう。

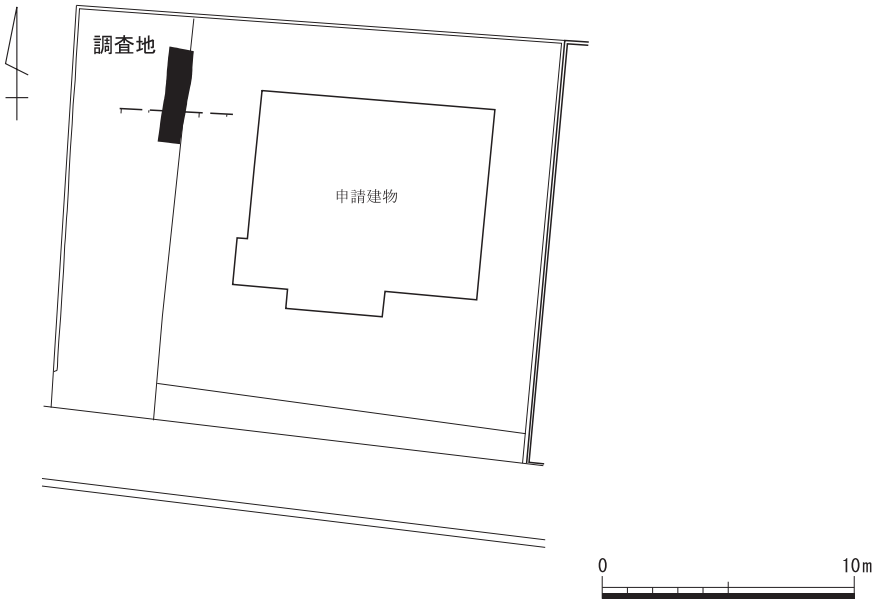
**近代？**

**素掘小溝**　３本の小溝を検出した。それぞれ西北西－東南東方向の小溝で、幅0.3m、深さは0.1mを測る。これも耕作に伴う遺構であろう。詳細な時期は不明。

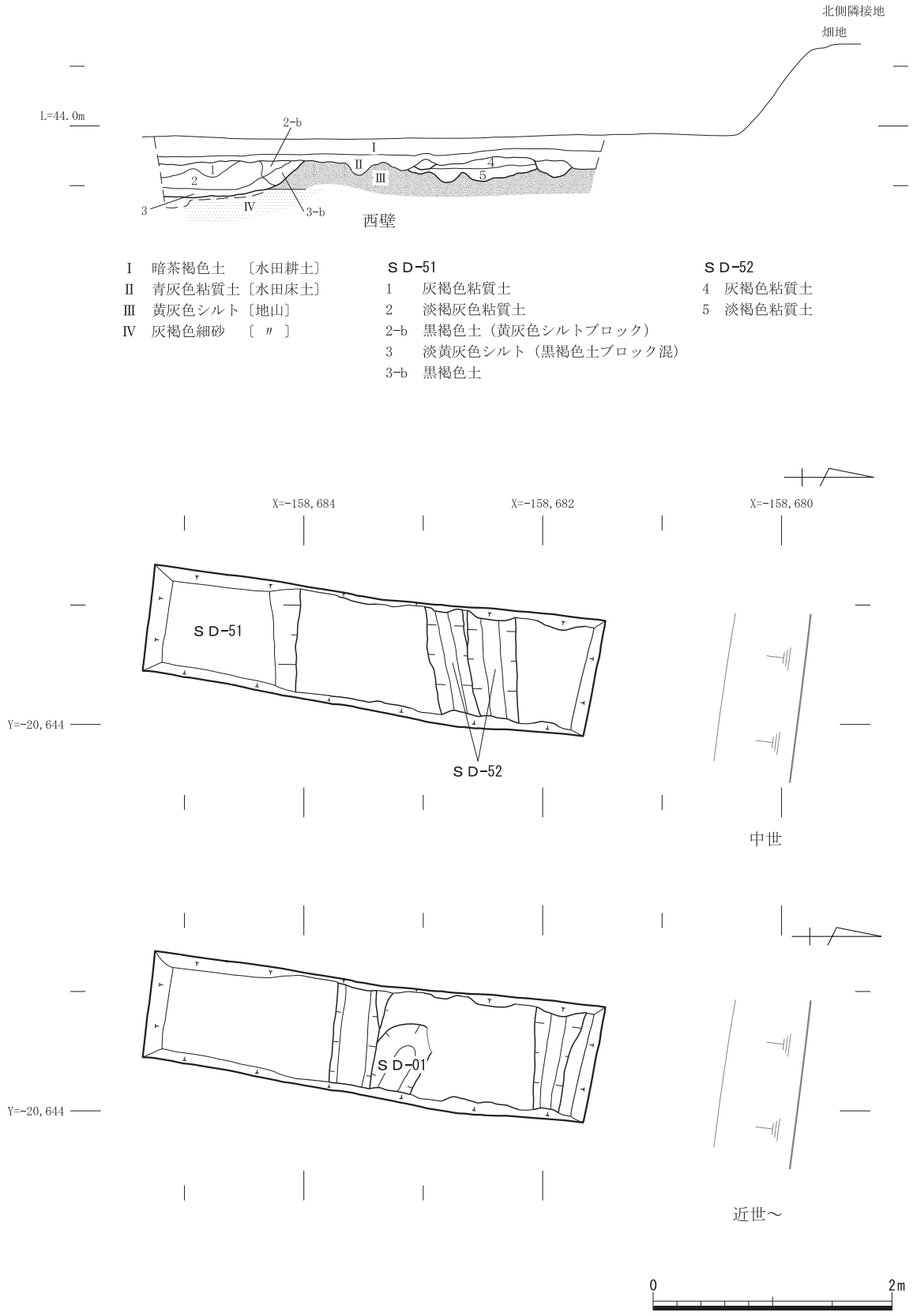
### 3. まとめ

今回の調査では中世の遺構・遺物も少なく、法楽寺の寺域としても北側縁辺部とみられる。ただし、調査区南端で検出したＳＤ－51は、遺物は少ないものの中世寺院に関連する遺構である可能性




第45図　調査区位置図（上：Ｓ＝1/2,500、下：Ｓ＝1/300）




第46図　調査区平面図および西壁断面図（Ｓ＝1/50）

がある。現存する板絵にも本堂の北側には建物や塔頭が確認でき、調査地北側の一段高い畑地も中世寺院との関連がうかがわれることから、中世寺院の伽藍を考える上でも本地周辺の調査の蓄積が必要である。

なお、新旧２時期の素掘小溝を検出したが、やや軸方向が異なっている。中世の溝・小溝は東西方向にちかく、新しい小溝は現在の地割にちかい。現在の地割は大和鉄道（現近鉄田原本線）の敷設に伴うものなのか、もっと遡るものなのかは判断できなかったが、中世段階ではほぼ正方位に則した地割がなされていたようである。

１．調査区全景（南から）

２．ＳＤ－51完掘状況（北東から）

## 9．保津・阪手道　第１次調査

### 1. 遺跡・既調査の概要

保津・阪手道は、奈良盆地のほぼ中央、現在の田原本町中央を横断する古代の道路跡である。筋違道と交差して西北西－東南東方向に延びる。東は中ツ道と村屋神社付近で交差し、田原本町大字阪手付近で下ツ道と交差する。そして十市郡と式下郡の郡境でもある大字宮古と大字保津の境界に沿って西側に延び、筋違道と交差したのち大字富本付近まで痕跡を追うことができる。

これまでの調査では、保津・宮古遺跡第18次調査で奈良時代の溝を検出し、これが保津・阪手道の南側側溝である可能性が考えられている。また、羽子田遺跡第16次調査等でも奈良時代の側溝とみられる関連遺構を検出している。

今回の調査は、保津・阪手道の痕跡と推定される道路上での下水道工事に伴うものである。保津・宮古遺跡と十六面・薬王寺遺跡に挟まれた地点であり、保津・阪手道単独を対象とした調査は今回が初めてとなる。南側隣接地では本書で報告した十六面・薬王寺遺跡第30次調査を実施しており、調査区北端では飛鳥時代の河跡が拡がることを確認している。

### 2. 調査の成果

（１）層序

調査地の現状は道路である。平成８～９年度に町道拡幅工事がおこなわれる以前は狭小な里道であったが、現在は広い２車線道路となっている。なお、当時は遺跡外であったため拡幅工事に伴う調査は実施していない。調査は東西約150m分の下水管埋設工事に伴うもので、うち人坑４ヶ所について発掘調査で対応し、東から順に、第１トレンチ～第４トレンチとした。ここでは、第２トレンチの層序を示す。

Ⅰ：アスファルト〔検出標高46.0m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：クラッシャー〔45.9m〕、Ⅲ：アスファルト〔45.7m〕、Ⅳ：現代道路造成土（山砂？）〔45.5m〕、Ⅴ：暗緑灰色土〔45.2m〕、Ⅵ：灰色細砂〔44.8m〕、Ⅶ：暗灰色粘土〔44.5m〕、Ⅷ：黒灰色粘土〔44.3m〕

第Ⅰ～Ⅳ層は現代道路工事に伴う造成層、第Ⅴ層は旧水田耕土？、第Ⅵ層は飛鳥時代頃の洪水堆積？、第Ⅶ層以下は地山とみられる。

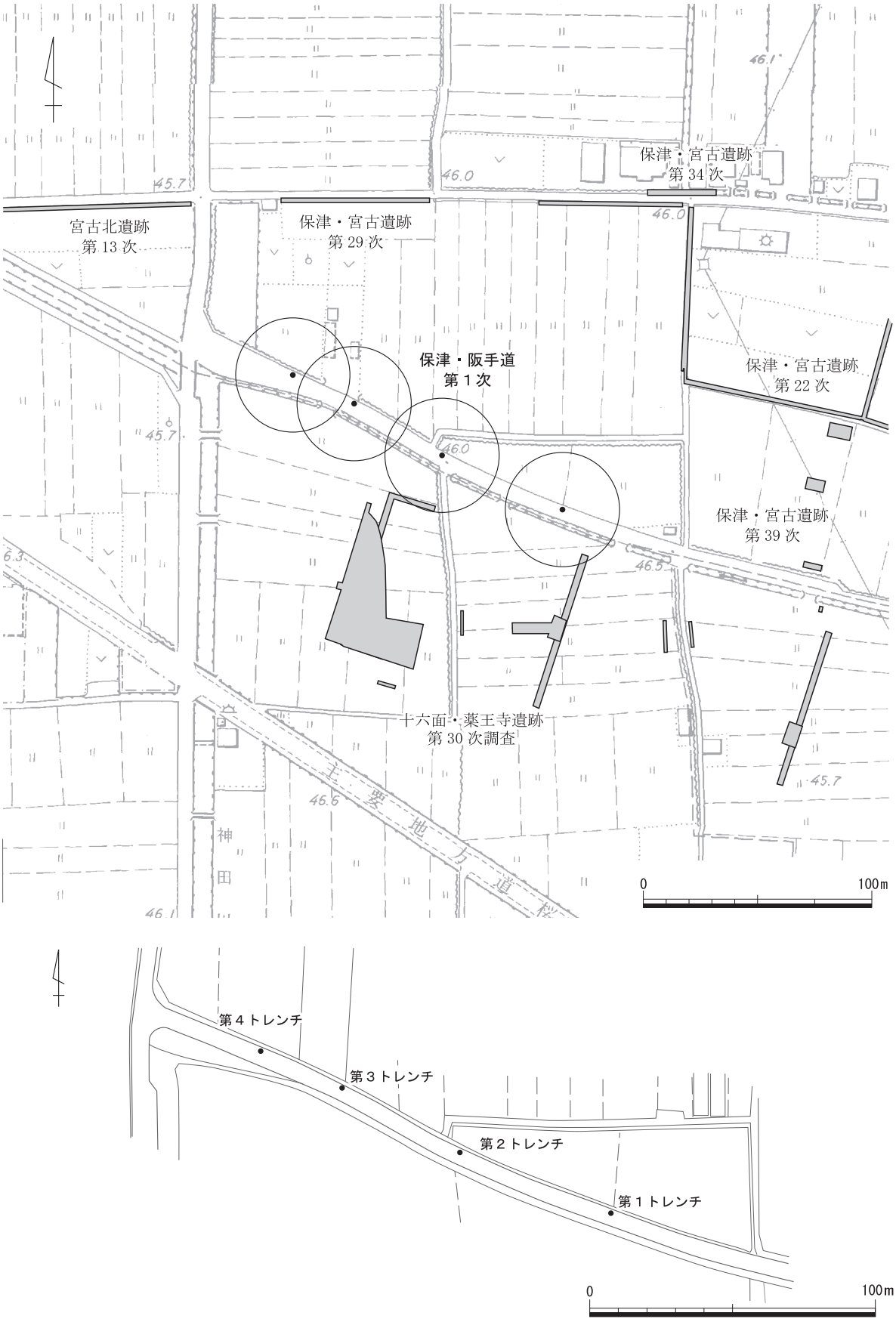
（２）遺構と遺物

**ＳＤ－1101**　第１トレンチで検出した、西北西－東南東方向の溝である。幅0.7m、深さ0.1m。溝の方向が保津・阪手道と一致することから、この道の地割りに影響を受けた小溝とみられる。後述するＳＲ－1101を切るが、遺物が出土していないため詳細な時期は不明。

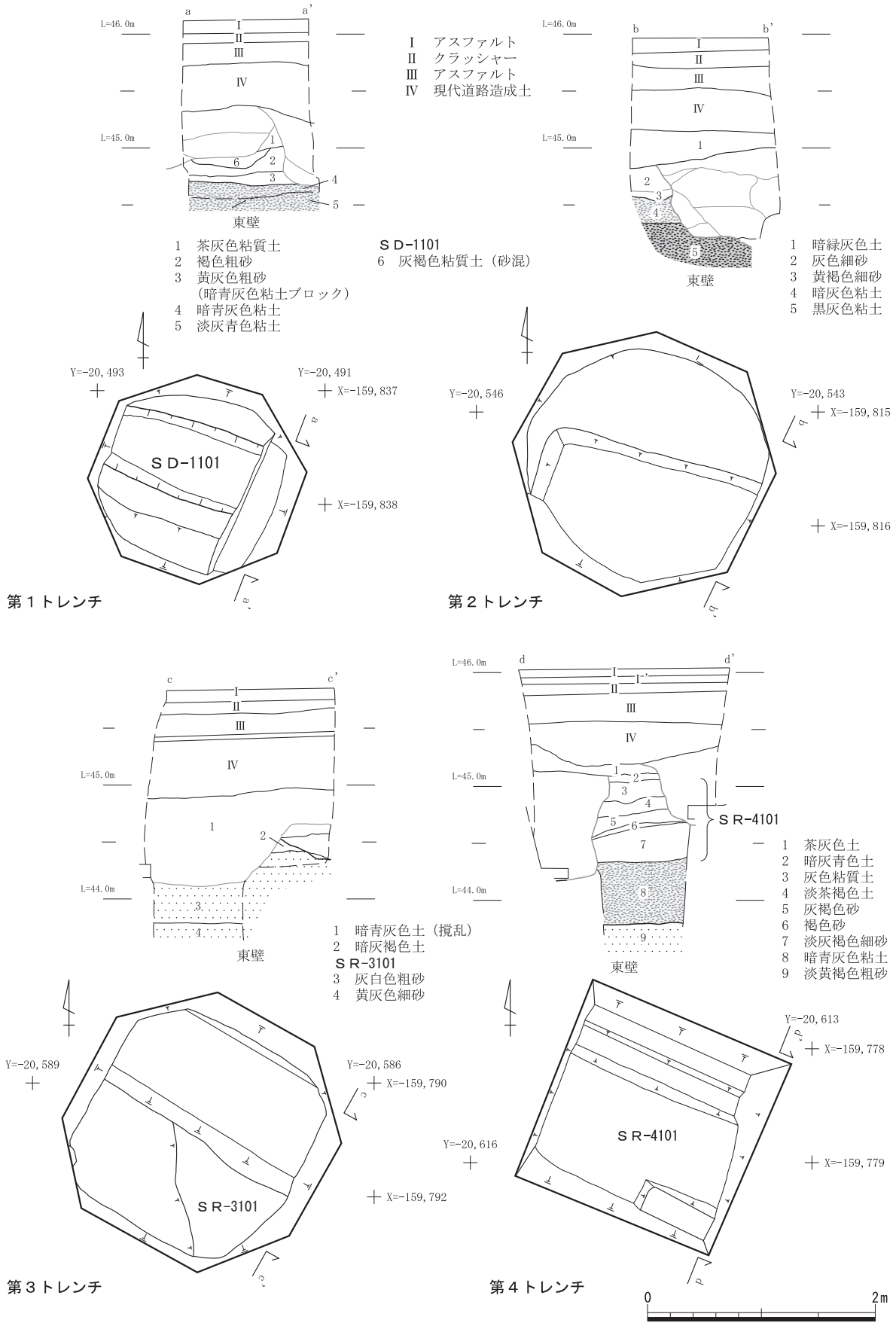
**ＳＲ－1101**　第１トレンチでは深さ0.3mの粗砂堆積を確認した。飛鳥時代頃の洪水堆積層の可能性がある。

**ＳＲ－2101**　第２トレンチでは深さ0.3m程度の粗砂堆積を確認した。第１トレンチと同様、飛鳥時代の河跡の東肩付近に形成された洪水堆積層とみられる。遺物は出土していない。

**ＳＲ－3101**　第３トレンチでは深さ１m以上の粗砂堆積を確認したものの、湧水が激しく底まで確認することができなかった。出土遺物はなく、第30次調査で検出した飛鳥時代の河跡の本体部分




第47図　調査区位置図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/2,000）




第48図　第１～４トレンチ遺構平面図および東壁断面図（Ｓ＝1/50）

に相当するとみられる。

**ＳＲ－4101**　第４トレンチで検出した、深さ0.7ｍの粗砂堆積である。土師器小片が５点出土した。飛鳥時代の河跡の西肩付近とみられる。

### 3. まとめ

調査の結果、４ヶ所すべてのトレンチで飛鳥時代頃とみられる粗砂堆積を確認した。南側隣接地では十六面・薬王寺遺跡第30次調査を実施しており、南北方向に流れる幅20ｍ以上の飛鳥時代の河跡を確認している。この河跡は、第30次調査地の北側で東方向に拡がることも判明しており、今回検出した第１・第２トレンチの粗砂堆積がこれに相当する可能性が高い。また、第３トレンチは河跡本体の推定ライン上に位置しており、第３トレンチ付近が河跡の本体となるようである。第４トレンチでは再び川底が確認できるようになるため、河道内の西肩付近となる可能性が考えられる。

なお、第１トレンチでは保津・阪手道の主軸に合致する溝を検出したが、道路側溝としては小規模であり、この地割りに影響された溝の一つである可能性を考えたい。

１．第１トレンチ全景（西から）

２．第２トレンチ全景（北西から）

３．第３トレンチ全景（北西から）

４．第４トレンチ全景（西から）

## 10. 寺内町遺跡　第13次調査

### 1. 遺跡・既調査の概要

寺内町遺跡は田原本町中央、南北に流れる寺川の西岸にあたる。室町時代には、南側に楽田寺門前町、北側に字奥城屋敷を中心とした田原本氏居館、北西側に字小室を中心とした本郷と呼ばれる環濠集落の、３ヶ所に集落が存在していたとされる。近世に平野氏が田原本に封入されると、初代長泰は教行寺に寺内町の建設と経営を委ね、先の３集落を取り込むように寺内町が形成された。

今回の調査地は遺跡の南側、楽田寺の南側にあたる。

### 2. 調査の成果

本調査は個人住宅の建築に伴う事前調査である。建築予定地外において、東西５ｍ、南北２ｍの調査区を設定した。

（１）層序

Ⅰ：暗褐色土〔検出標高50.7m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗灰褐色土〔50.5m〕、Ⅲ：褐色粘質土〔50.2m〕、Ⅳ：灰色粘質土〔49.8m〕

本地の現況は宅地である。第Ⅰ・Ⅱ層は近現代の宅地に伴う造成土である。第Ⅲ層上面で近世の遺構群を検出した。第Ⅲ層は微量の中世瓦器片を含んでいたが、時期を特定できない。第Ⅳ層では遺物を確認できず、固く締まっていないことから河跡堆積層である可能性もある。

（２）遺構と遺物

**近世**

**ＳＫ－01**　調査区南西で検出した土坑である。深さは約0.6mまで確認したが、遺構が調査区外に拡がりをみせるため遺構規模等の全容は明らかでない。近世陶磁器、瓦小片が出土している。

**ＳＫ－02**　調査区南東で検出した土坑である。深さは約0.8mまで確認したが、これも調査区外に拡がるため全容は明らかでない。近世陶磁器、瓦小片が出土している。

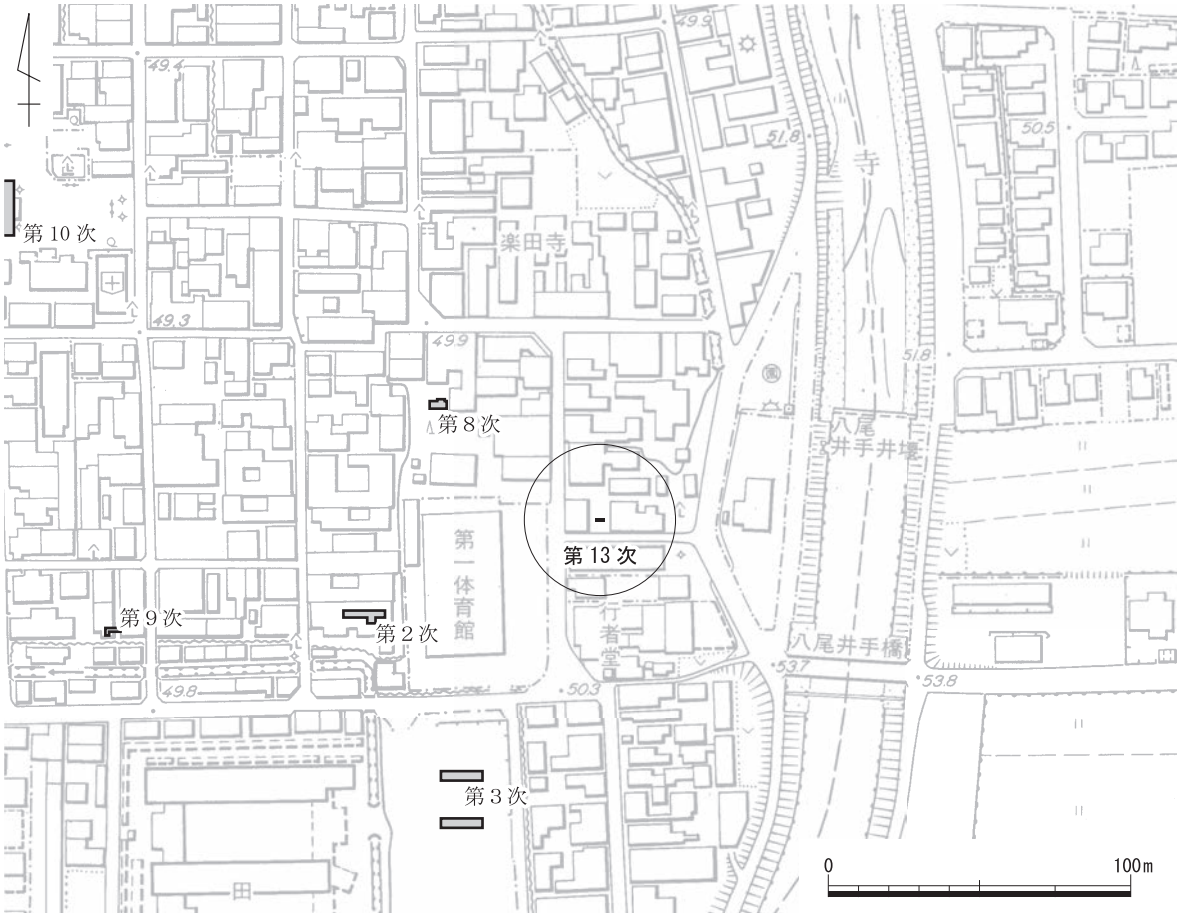
**ＳＤ－01**　調査区西端で検出した南北方向の小溝である。その東肩のみ検出しており、西肩は調査区外のため溝幅は明らかでない。深さは約0.2mである。灯明皿に使用された完形の土師器小皿他、近世陶磁器、瓦小片が出土している。

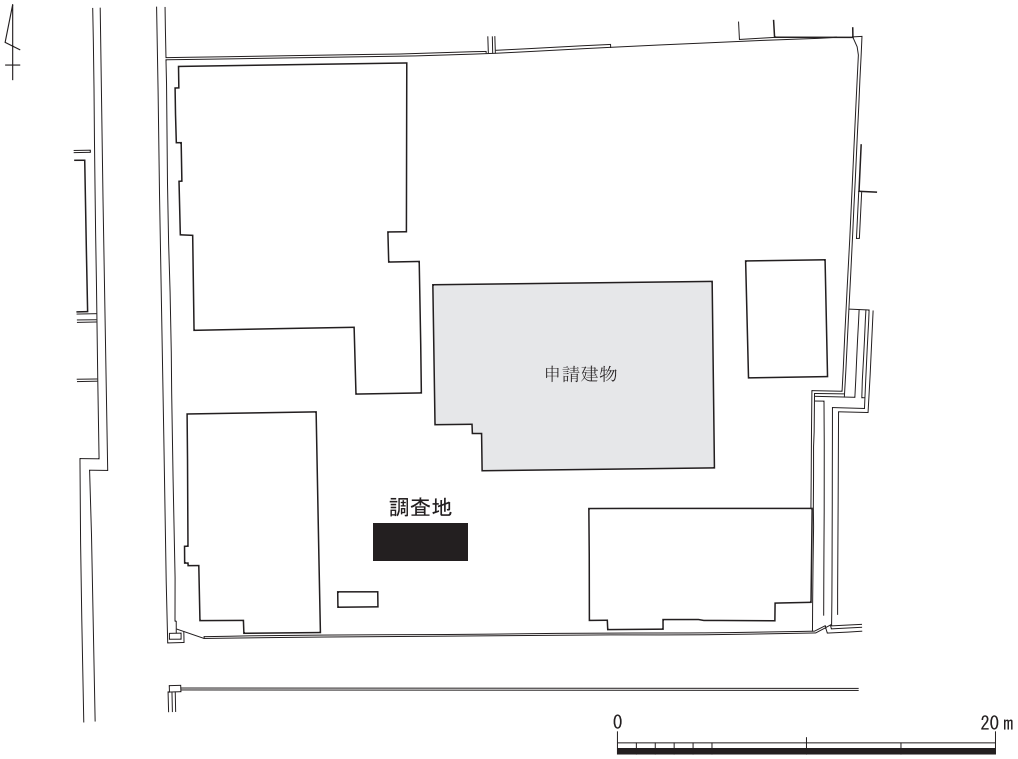
**ＳＤ－02**　調査区北半で検出した東西方向の小溝である。溝幅は0.3m、深さは約0.1mである。遺物は土師器小皿１点のみであった。

**ＳＤ－03**　調査区西半で検出した東西方向の小溝である。溝幅は0.2m、深さは約0.1mである。土師器小皿２点と瓦器片１点が出土した。

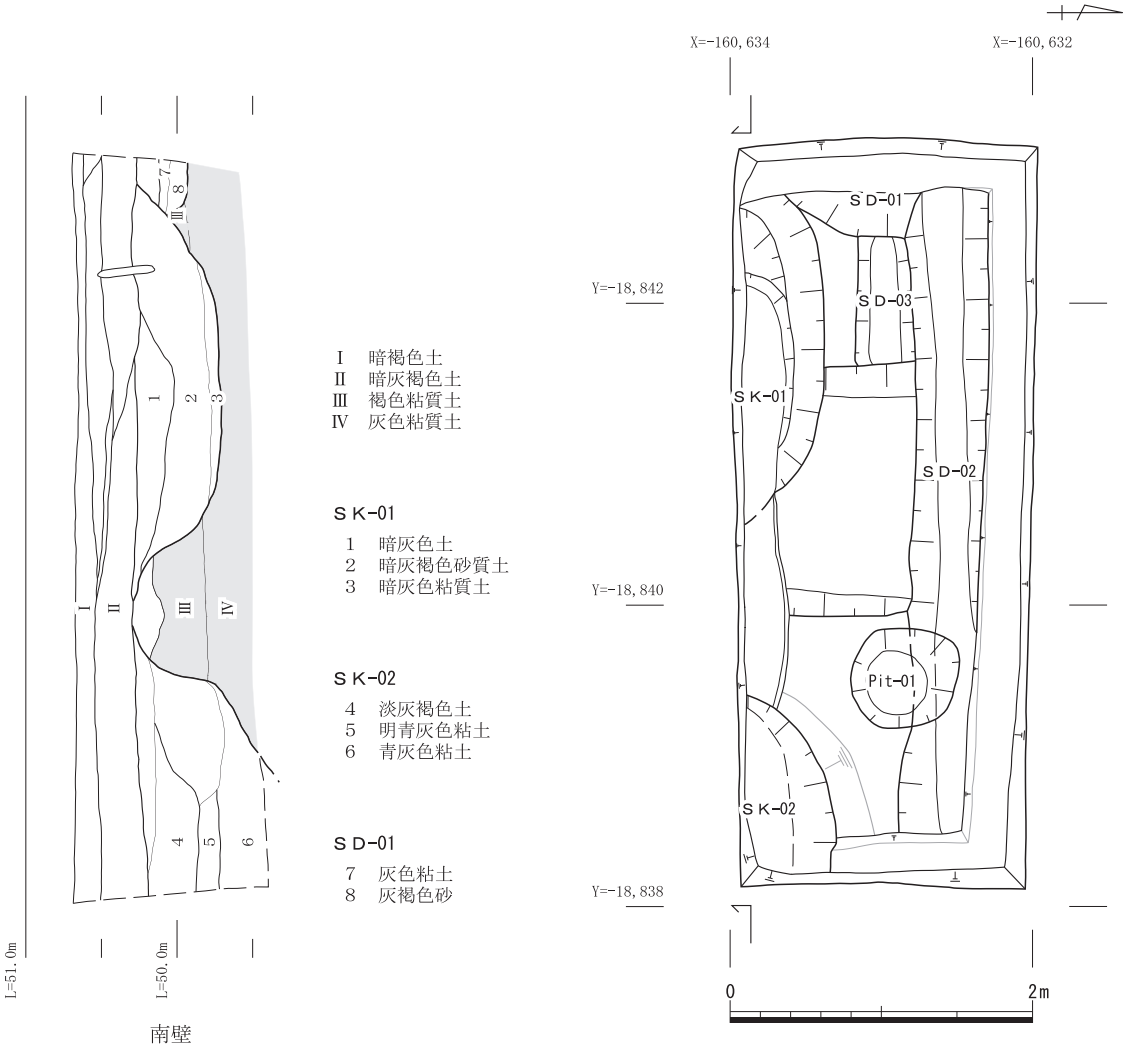
### 3. まとめ

今回の調査では近世後期頃の住居に伴う遺構群を検出したのみで、近世初頭の教行寺による寺内町建設の際も、本地まで及ばなかったと考えられる。また、中世の遺構は検出されず、遺物も微量で、中世楽田寺に関連する遺構遺物は確認されなかった。




第49図　調査地位置図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/400）




第50図　遺構平面図および南壁断面図（S＝1/50）

1．調査区全景（東から）

2．近世遺構検出状況（西から）

## 11. 平野氏陣屋跡　第14次調査

### 1. 遺跡・既調査の概要

平野氏陣屋跡は田原本町中央、南北に流れる寺川の西岸にあたる。中世には豪族・田原本氏が字奥垣内・奥城屋敷にて武装化した居館を形成した。

近世になり、田原本に所領を得た平野長泰は、教行寺に寺内町の経営を任せる。長泰の子長勝の代になると、長勝は教行寺を退去させ、その一方で田原本氏の環濠集落跡に陣屋や家臣団の屋敷地を造営する。明治維新を迎えて後、田原本藩・田原本県・田原本村・田原本町となっても、この地に行政機関が据え置かれた。

今回の調査地は遺跡の南側にあたる。周辺での調査が比較的累積されている場所にあり、中世・近世の遺構群が検出されている。

### 2. 調査の成果

本調査は個人住宅の建築に伴う事前調査である。建築予定地内において、東西0.8m、南北４mの調査区を設定した。

（１）層序

Ⅰ：暗灰色土〔検出標高50.2m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：淡茶灰色土〔50.0m〕、Ⅲ：茶褐色土〔49.8m〕、Ⅳ：淡灰褐色粘質土〔49.6m〕、Ⅴ：褐灰色砂〔49.5m〕、Ⅵ：淡褐色粘質土〔49.4m〕、Ⅶ：淡褐色粘質土〔49.2m〕、Ⅷ：黄褐色粘質土〔48.8m〕

本地の現況は宅地である。第Ⅰ・Ⅱ層は近現代の宅地に伴う造成土である。第Ⅲ～Ⅴ層は近世の遺物包含層で、第Ⅲ層上面において溝１条を検出した。第Ⅵ・Ⅶ層には鎌倉期の土師器や瓦器片が出土し、この頃に形成された層と考えられる。第Ⅷ層以下は地山で、上面で素掘小溝とみられる遺構の肩部を確認している。調査区が狭小であったためその遺構の全容確認はできず、詳細は不明である。

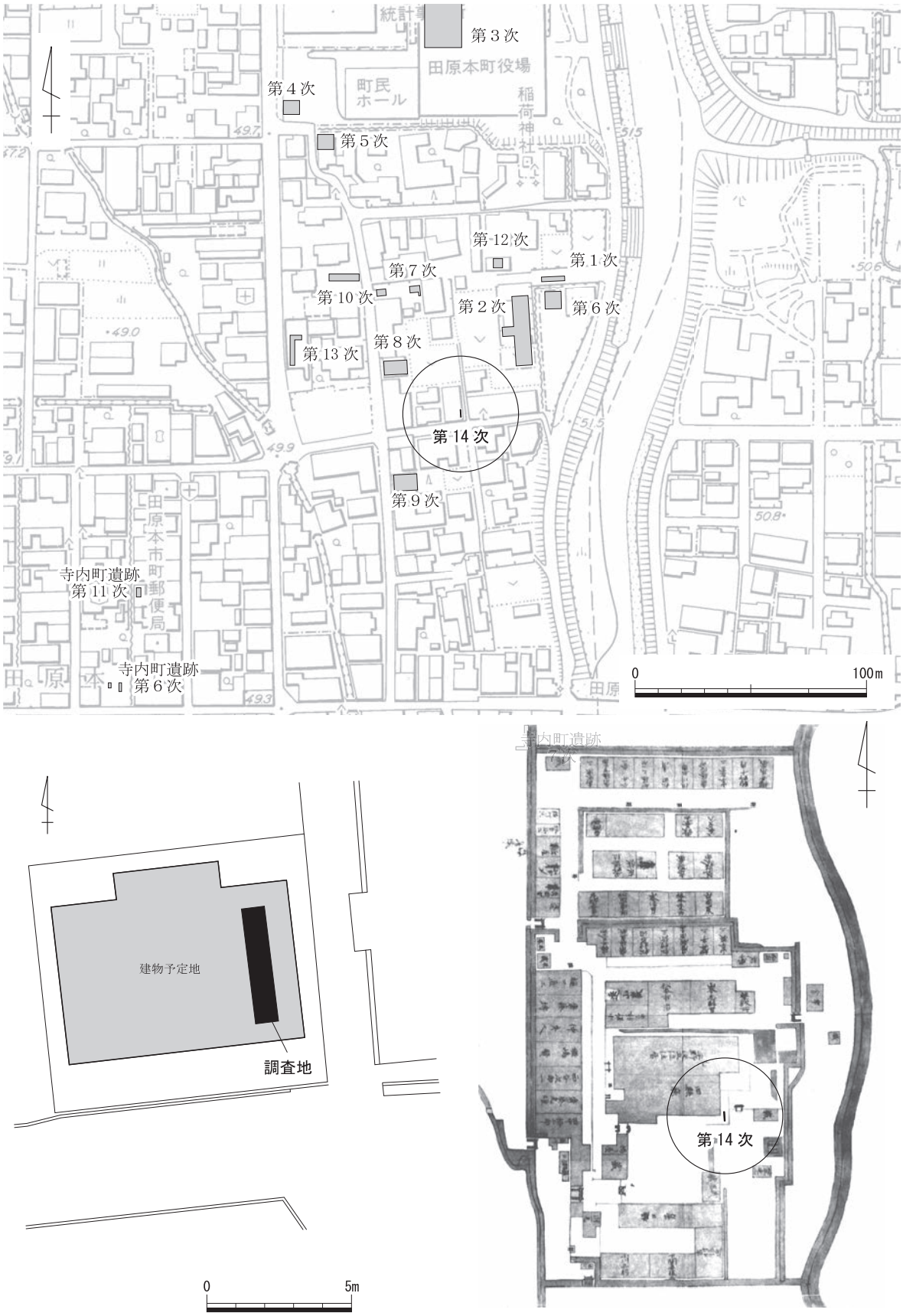
（２）遺構と遺物

**近世**

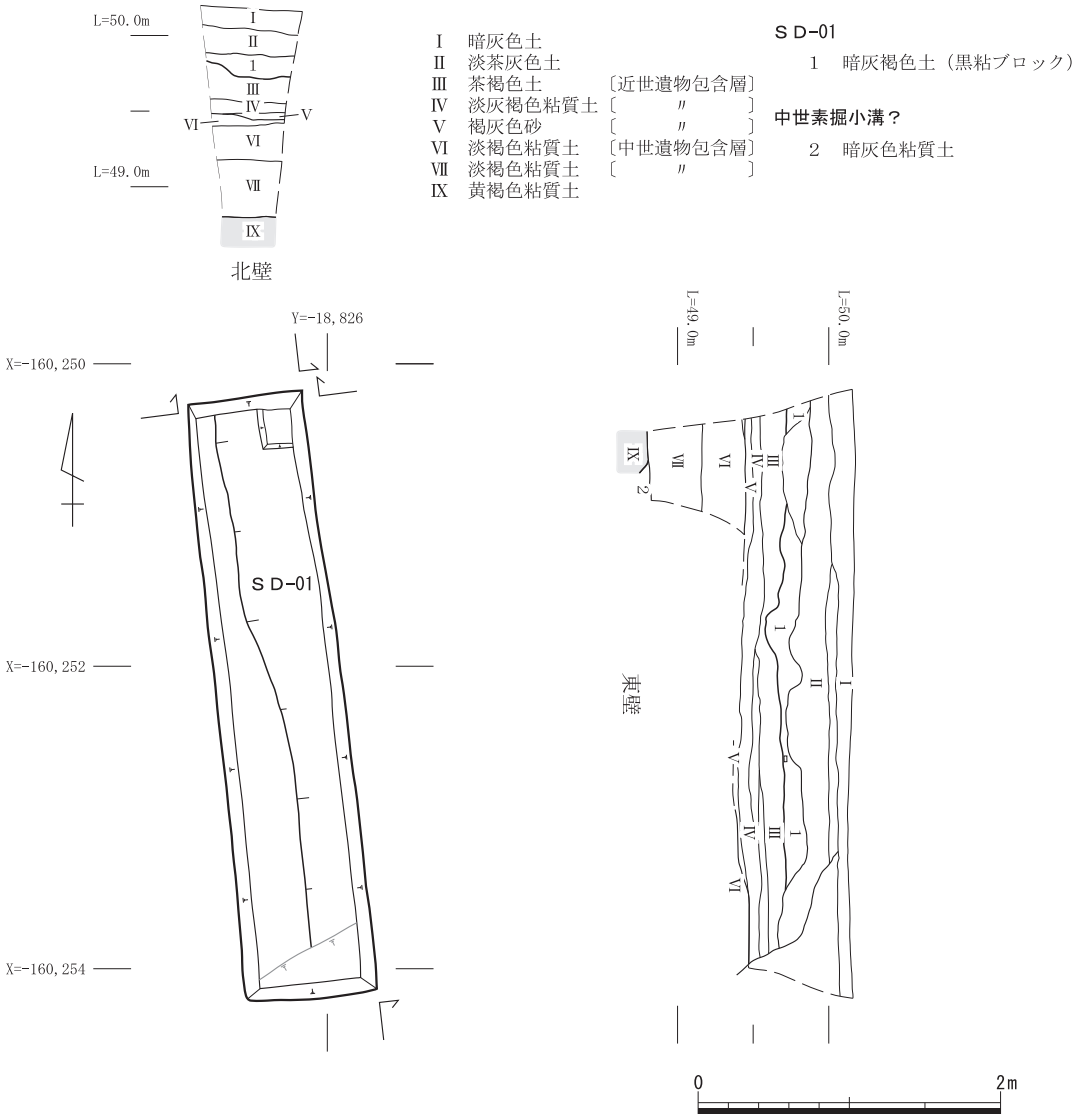
**ＳＤ－01**　調査区東端で検出した南北方向の小溝である。その西肩のみ確認した。深さは約0.1mである。近世陶磁器、土師器小皿、瓦小片等が出土した。

### 3. まとめ

今回の調査は狭小であったため、近世の小溝とみられる肩部を確認するのみであった。明治時代初期に描かれた絵図によれば、本調査地は平野氏住居と田原本県庁建物の南東隅の小さな空白地である可能性が高い。また、第Ⅵ・Ⅶ層からは中世鎌倉期の遺物が出土したことから、中世豪族・田原本氏の居館に伴う造成土の可能性も考えられる。




第51図　調査地位置図（上：Ｓ＝1/2,500、下：Ｓ＝1/200）および陣屋絵図（明治初期？）と調査区推定位置図




第52図　調査区平面図および北・東壁断面図（Ｓ＝1/50）

1．調査区全景（北から）

2．ＳＤ－01検出状況（北から）

## 12. 十六面・薬王寺遺跡　試掘調査（Ｓ－201201）

### 1. 遺跡の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高46m前後の沖積地に立地する、中世の居館跡・古代の水田・古墳時代の集落・弥生時代の集落等から成る複合遺跡である。1981年の国道24号線バイパス（京奈和自動車道）の建設に伴う第１次調査以降、現在まで30次にわたる調査を実施しており、遺跡の内容が徐々に明らかとなりつつある。

今回の試掘調査対象地は、十六面・薬王寺遺跡の北西端およびその隣接地である。周知の遺跡外にあたる部分を含めた開発面積が２万㎡を超えるため、敷地全体の踏査を平成23年度に実施した。その結果、遺物の散布が確認されたため、試掘調査により遺構分布を確認することとなった。

### 2. 調査の成果

調査地の現状は水田および休耕田である。東西約200m、南北約100mの開発予定地のうち、店舗建設予定部分（南北50m、東西150m）の遺構分布状況を確認するため、敷地東半については南北60m、幅2.5mの調査区を２ヶ所、敷地西半については東西80m、幅2.5mの調査区を１ヶ所設定し、調査をおこなった。なお、敷地東半はほぼ全体に遺構が分布することを確認したが、敷地西側では遺構・遺物とも希薄であったため、遺跡有無の範囲を確定するために補足調査区を設けた。

（１）層序、遺構と遺物

**ａ．第１トレンチ**

東側に設定した南北60mの試掘調査区を第１トレンチとする。基本となる層序は以下のとおりである。

Ⅰ：暗青灰色土〔検出標高45.15m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：青灰褐色粘質土〔45.0m〕、Ⅲ：淡黄褐色土〔44.95m〕、Ⅳ：黒褐色粘質土〔44.75m〕、Ⅴ：黒褐色粘質土〔44.6m〕、Ⅵ：淡灰褐色粗砂〔44.4m〕

第Ⅰ～Ⅲ層は現代水田耕土および床土、第Ⅳ層は古墳時代包含層、第Ⅴ層は弥生時代包含層、第Ⅵ層は地山である。調査では、重機により幅2.5mの調査区全体を第Ⅳ層上面まで掘削し、調査区東端の幅１mについては排水溝を兼ねてさらに第Ⅵ層上面まで掘削した。第Ⅳ層上面で弥生時代後期末～中世の遺構を、第Ⅴ層または第Ⅵ層上面で弥生時代中・後期の遺構を検出した。

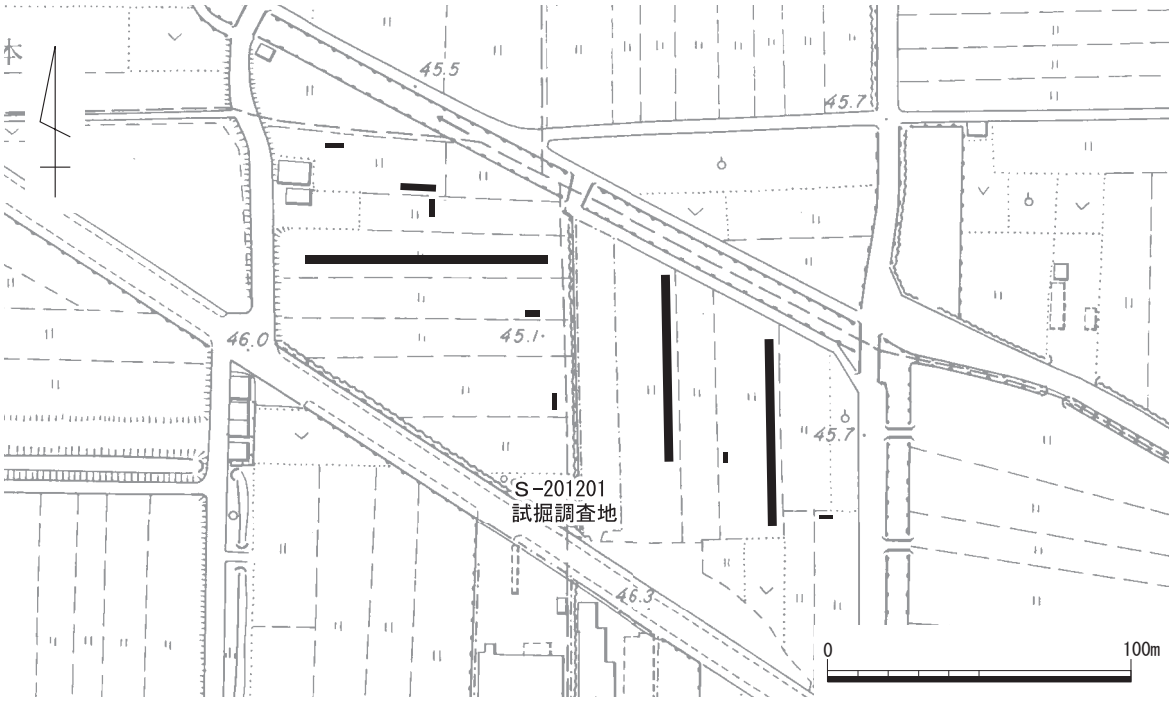
**弥生時代中期**

**ＳＤ－1101**　第１トレンチ北部で検出した北東－南西方向の溝である。幅約1.4m。第１遺構面では明確に把握することができなかった。遺物から弥生時代中期頃の遺構とみられる。

**弥生時代後期～古墳時代前期**

**ＳＸ－1101**　調査区北端で検出した落ち込み状の遺構である。幅７mにわたって検出したが、北肩が北西－南東方向、南肩が北東－南西方向であり、今回の調査範囲のみでは遺構の性格は不明である。弥生時代後期頃の遺物が出土した。なお、今回の調査は試掘であるため、遺構の掘削はおこなっていない。そのため、各遺構の深さは不明である。

**ＳＸ－1102**　調査区中央南で検出した落ち込み状の遺構である。弥生時代後期末頃の遺物が多数

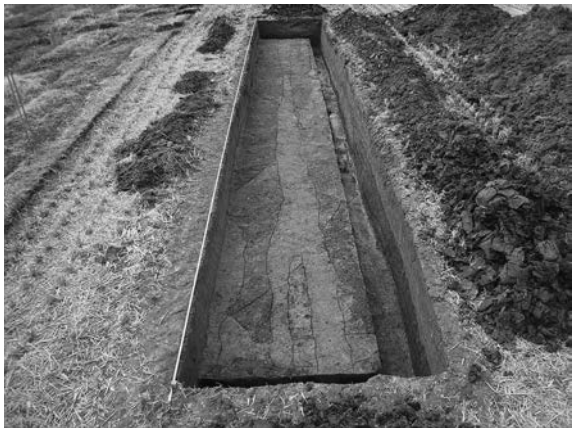



第53図　調査地位置図（S＝1/2,500）

1．第1トレンチ全景（南から）

2．第2トレンチ全景（北から）

3．第3トレンチ全景（東から）



4．第7トレンチ全景（東から）

出土したため、重機による層序確認を断念した。その結果、南肩は確認していない。北肩は溝北東－南西方向であり、幅５ｍ前後の溝となる可能性がある。

**ＳＫ－1101**　ＳＤ－1102の北側で検出した遺構である。布留３式頃の土器が出土した。幅約1.6ｍ。試掘調査時は土坑として認識していたが、平成25年度の本調査（第31次調査）時に溝であることを確認した。

このほか、調査区北半および南端の第２遺構面で柱穴の可能性があるピット・土坑等を検出している。

**古代**

**ＳＤ－1102**　調査区中央付近で検出した、北西－南東方向の溝である。幅約４ｍ。本調査区では顕著な遺物を確認していないが、第２トレンチで同一遺構とみられるＳＤ－2101から飛鳥時代頃の遺物が出土している。溝の延長は60ｍ以上になる可能性がある。

**ｂ．第２トレンチ**

建設予定地東端より60ｍの箇所に設定した南北60ｍの調査区を第２トレンチとする。基本となる層序は以下のとおりである。

Ⅰ：暗青灰色土〔検出標高45.1ｍ、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：青灰褐色粘質土〔44.95ｍ〕、Ⅲ：淡黄褐色土〔44.9ｍ〕、Ⅳ：淡灰褐色粘質土〔44.7ｍ〕、Ⅴ：黒褐色土〔44.6ｍ〕、Ⅵ：暗黄褐色シルト〔44.4ｍ〕

第Ⅰ～Ⅲ層は現代水田耕土および床土、第Ⅳ層は中世包含層、第Ⅴ層は弥生時代包含層、第Ⅵ層は地山である。調査では、重機により全体を第Ⅴ層上面まで掘削し、東端の幅１ｍについて第Ⅵ層上面まで掘削した。第Ⅴ層上面で弥生時代末～中世の遺構を検出し、第Ⅵ層上面で弥生時代中期頃の遺構を検出した。

**弥生時代前期～中期**

**ＳＤ－2103**　調査区北端で検出した、北西－南東方向の小溝である。溝幅0.4ｍ。遺構に伴う形で遺物を確認していないため、時期は明らかでない。弥生時代前期～中期となる可能性もある。

**弥生時代後期～古墳時代前期**

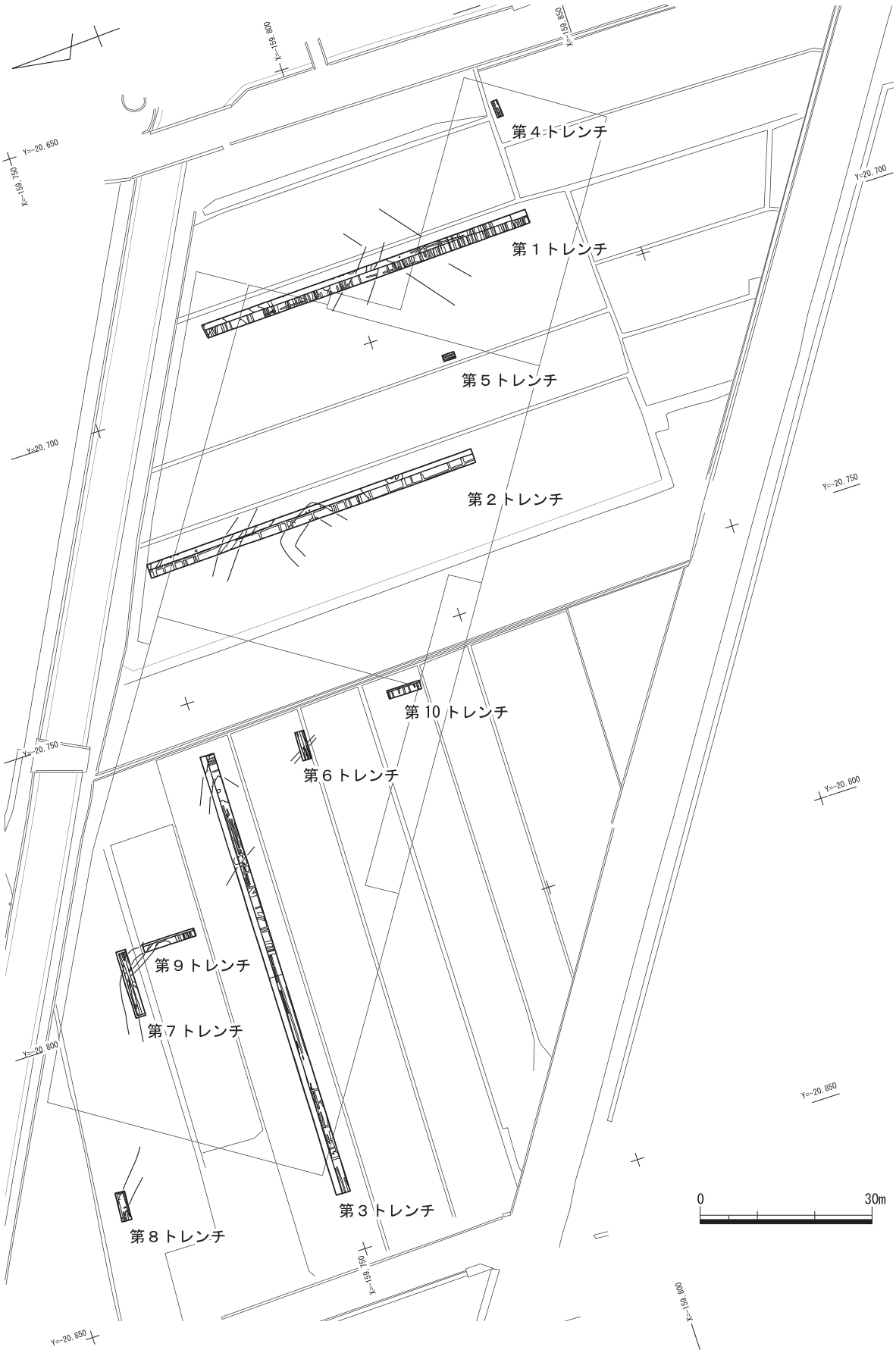
**ＳＸ－2101**　調査区北端で検出した遺構である。南肩のみの検出であり、規模と性格は明らかでない。弥生時代後期頃の遺構とみられる。

**ＳＤ－2102**　調査区中央の延長９ｍにわたって検出した遺構である。北肩は北西－南東方向、南肩は北東－南西方向で、直角に屈曲する溝であると考えられる。溝幅約２ｍ前後。庄内式新段階～布留式初頭頃の甕・小型丸底壷等の土師器が多数出土した。また、山陰系とみられる台付無頸壷も出土している。

**古墳時代後期～古代**

**ＳＤ－2101**　調査区北側で検出した、北西－南東方向の溝である。幅2.8ｍを測るが、掘削をおこなっていないため、深さは明らかでない。飛鳥時代頃の須恵器・土師器が出土した。第１トレンチのＳＤ－1102と同一の遺構となる可能性がある。

**ＳＤ－2104**　調査区南半で検出した、東北東－西南西方向の溝である。幅７ｍ前後を測る。遺物が少ないため、詳細な時期は明らかでない。なお、この遺構以南にも若干の遺構分布は認められる




第54図　調査区全体図（Ｓ＝1/1,000）

が、遺物の包含が希薄となっていくようである。

**ｃ．第３トレンチ**

建設予定地西半に設定した東西80mの調査区を第３トレンチとする。基本となる層序は以下のとおりである。

Ⅰ：暗青灰色土〔検出標高44.7m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：青灰褐色粘質土〔44.6m〕、Ⅲ：淡褐灰色粘質土〔44.55m〕、Ⅳ：淡灰褐色粘質土〔44.4m〕、Ⅴ：黒灰色粘質土〔44.2m〕、Ⅵ：淡灰色シルト〔44.1m〕

第Ⅰ～Ⅲ層は現代水田耕土および床土、第Ⅳ層は中世包含層、第Ⅴ層は縄文～弥生時代包含層、第Ⅵ層は地山である。本調査区の現況は、開発予定地の東半よりも0.4m前後低く、遺構検出面も0.4m前後低い。東半にみられた弥生時代頃の黒褐色土層（包含層）がみられず、遺物をほとんど含まない第Ⅴ層：黒灰色～黒褐色粘質土層が全体に拡がる。この第Ⅴ層上面が弥生時代～中世の遺構検出面となる。

**弥生時代**

**ＳＤ－3101**　調査区東端で検出した、西北西－東南東方向の溝である。幅約2.4mを測る。弥生時代中期初頭の壺片等が出土した。

**近・現代**

**ＳＫ－3001～3003**　調査区東半で検出した土坑である。電柱の設置に伴うものとみられる。

**ｄ．第４～10トレンチ**

主となる３本のトレンチ以外に、７ヶ所で補足のための調査区を設けた。

**第４トレンチ**

敷地東端に設定した調査区である。弥生時代頃の土器を含む溝状遺構を検出した。

**第５トレンチ**

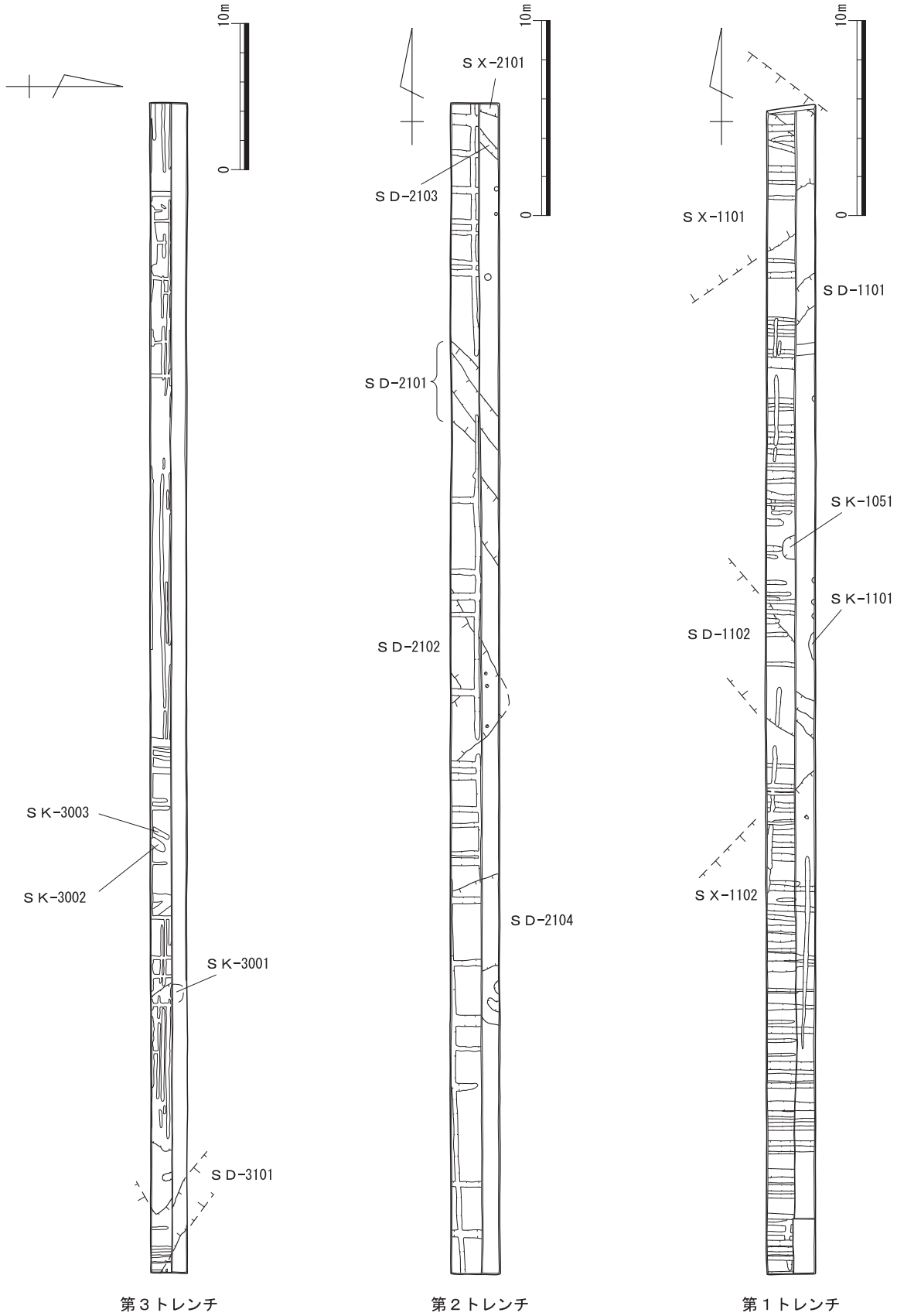
第２トレンチ南端の遺物出土量がやや少なかったことを受けてその東側に設定した調査区である。やや遺物量が少ないものの、層序では遺構の存在を示すとみられる起伏が確認された。

**第６トレンチ**

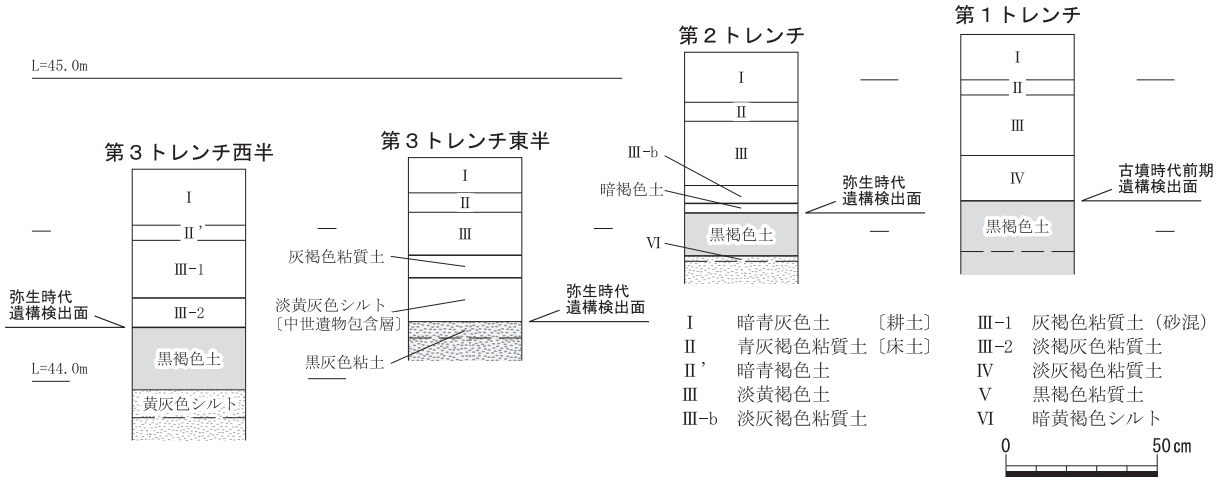
第３トレンチ東端の南側15mで設定した調査区である。時期不明の北西－南東方向の小溝を確認した以外は顕著な遺構・遺物を確認していない。小溝は古代頃の耕作に伴う水路となる可能性がある。幅0.6m、深さ0.15m。遺物は出土していない。

**第７・９トレンチ**

第３トレンチ東半の北側で設定した調査区である。第７トレンチの第１遺構面で弥生時代後期頃の溝状遺構を検出し、下層遺構として弥生時代前期末～中期前半の遺物を含む溝状遺構を確認した。遺物量も多く、第３トレンチとの関係から北側にむかって遺構が拡がると考えられるため、その南限を確認するために第９トレンチを設定して第７トレンチの遺構分布範囲を確認した。その結果、第９トレンチ南半では遺物が急激に少なくなることが判明し、第９トレンチ北半以北に弥生時代中期前後の遺構が分布することを確認した。なお、位置的に第６トレンチで検出した溝状遺構と一連となる可能性がある溝も検出している。




第55図　第１～３トレンチ遺構平面図（第１・２トレンチ：Ｓ＝1/300、第３トレンチ：Ｓ＝1/400）




第56図　第１～３トレンチ土層柱状図（Ｓ＝1/25）

**第８トレンチ**

開発地西北端付近で設定した調査区で、第７トレンチで検出した溝状遺構の延長部分を確認した。幅２ｍ前後、深さ0.3ｍ前後。弥生時代後期頃の土器を含むとみられるが時期不詳。

**第10トレンチ**

第６トレンチの南側15ｍ、建物予定範囲中央南で設定した調査区である。遺物は僅少で弥生時代中・後期の遺構分布はみられない。ただし、黒褐色粘質土層堆積下で縄文時代後期頃とみられる浅鉢底部１点が出土した。北東－南西方向の小溝状の遺構に伴うものである可能性がある。この調査区では基本的にこの個体以外の出土遺物はみられないが、縄文時代後期に遡る遺構であるとすれば本町でも希少な事例となる。

## 3. まとめ

今回の試掘調査により、店舗建設予定範囲の東半全体と北西部で濃密な遺構分布を確認した。一方、店舗の南西部については若干の遺構を確認しているものの、比較的遺構密度は低いと考えられた。

第２トレンチ中央付近で検出した溝状遺構は、古墳時代前期の方形周溝墓となる可能性がある。北側に隣接する宮古北遺跡では、同時期の方形区画をもつとみられる集落遺構を確認しており、関連が注目される。

第３トレンチ全体としては遺構密度が低いことを確認したが、東端で検出した溝状遺構は弥生時代中期初頭の方形周溝墓となる可能性がある。また、第７トレンチでは弥生時代中期初頭頃の土器が多く出土しており、宮古北遺跡第13次調査の成果とあわせると北側に拡がる微高地の存在が想定される。

以上の成果を総合すると、開発予定地東半全体で濃密な遺構分布を確認したことから全体が本調査の必要な範囲と考えられる。また、西半では北部で濃密な弥生時代中期の遺物分布が確認できることから、北側について本調査が必要と考えられる。ただし、第３トレンチの大半が遺跡外の様相を呈していたことから、建物予定地西半南については本調査の必要はないと考えられる。

## 13. 千代遺跡　試掘調査（Ｓ－201202）

### 1. 遺跡の概要

千代遺跡は、奈良盆地の中央、標高51m前後の沖積地に立地する。遺跡名の「千代（ちしろ）」は遺跡の所在する大字名である。近世の八条村および阿部田村の２村が合併し、古代から中世の庄園「千代庄」にちなんで「千代」という大字名となった。旧八条村は、十市郡東郷十八条一里・二里に相当する場所であることからついた地名である。集落の中心には本光明寺があるが、これは明治の廃仏毀釈で廃寺となった勝楽寺跡地に天理市櫟本町大字森本にあった本光明寺を誘致したものである。

今回の調査は、千代遺跡北端となる旧八条村の北側での宅地分譲に先だって実施した。

### 2. 調査の成果

（１）層序

今回調査をおこなった宅地分譲地では、南北延長約40mの道路を敷地中央に設け、道路中央に下水管を埋設する計画であった。敷地南端のみが遺跡に該当していたこと、南西側等でおこなった試掘調査の結果、旧八条集落の拡がりが及んでいない可能性が高かったことから、事業者負担による試掘調査で遺構の有無を確認する対応をとることとなった。

試掘調査では、下水管設置予定部分に幅１mの試掘坑３ヶ所を設定した。北端の第１トレンチおよび中央の第２トレンチは南北２m、南端の第３トレンチは南北５mである。ここでは、第２トレンチの層序を示す。

０：淡黄褐色砂礫土〔検出標高52.7m、以下数値のみ記す〕、Ⅰ（上）：暗褐色土（青みがかる）〔52.3m〕、Ⅰ：暗青灰色粘質土〔52.15m〕、Ⅱ：淡褐灰色粘質土〔52.0m〕、Ⅲ：黒色粘土〔51.9m〕、Ⅳ：淡灰色粘質シルト〔51.6m〕

第０層が現代造成土、第Ⅰ層が旧水田層、第Ⅱ層が近世包含層、第Ⅲ層以下が地山である。調査では、重機により第Ⅲ層上面まで掘削し、以下を人力で掘削した。

（２）遺構と遺物

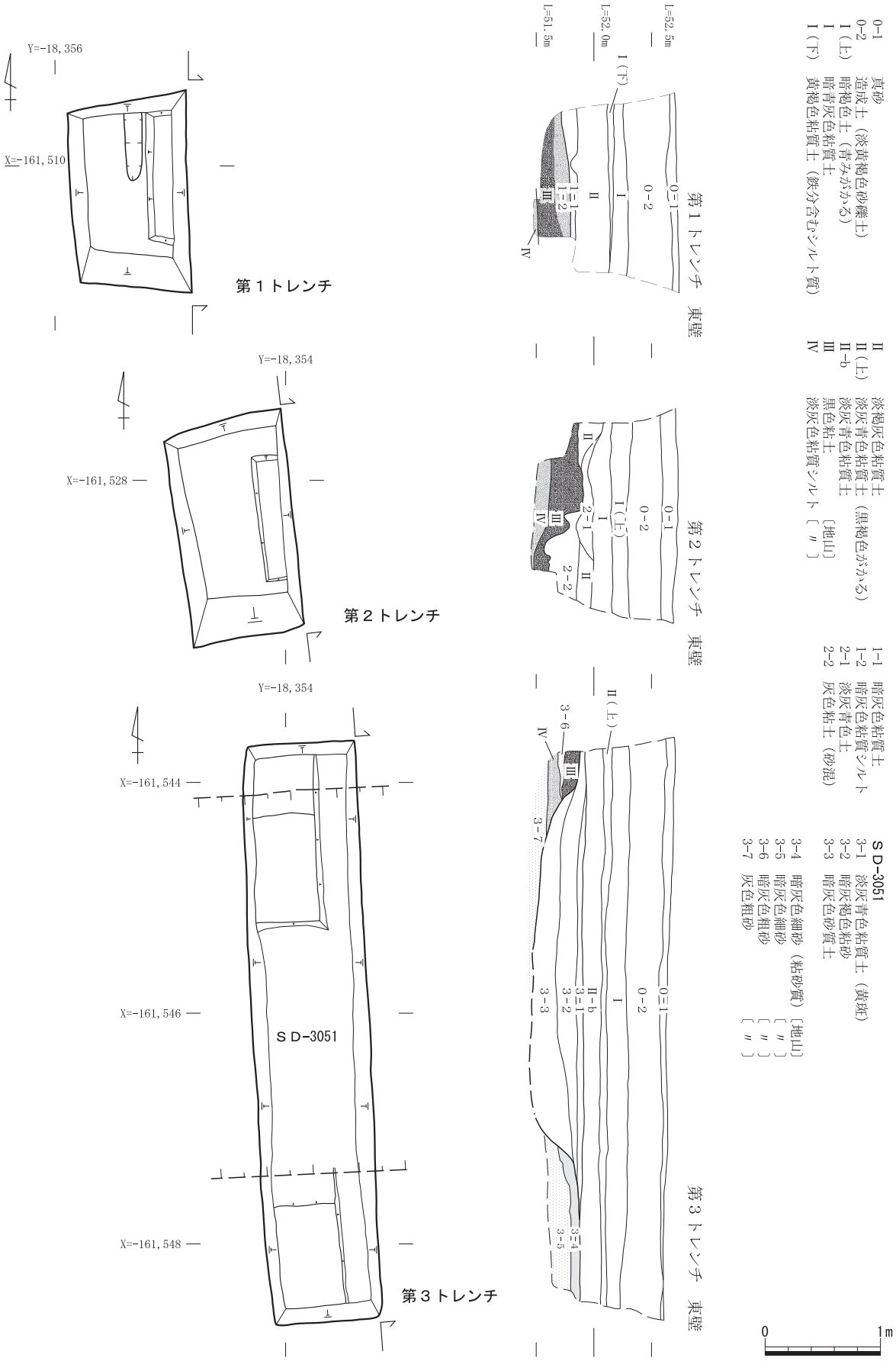
**ＳＤ－3051**　南調査区（第３トレンチ）で検出した東西方向の大溝である。幅3.3m、深さ0.4mを測る。湧水が激しく、地山層がシルト質であるため平面的な確認は十分できなかった。溝の南肩側から半完形の鎌倉時代後期頃の瓦器・土師器小皿が各１点出土したものの、遺物量は希薄である。過去の八条集落北部での試掘調査の結果から、溝の南側は基本的に遺構・遺物の散布が希薄であると考えられるため、集落を囲む溝というよりは用水路のような性格が考えられる。

**中世素掘小溝**　第１トレンチで南北方向の小溝１条を検出した。また、第２トレンチ南半で検出した灰色粘土層も東西方向の小溝群に関わる堆積と考えられる。

### 3. まとめ

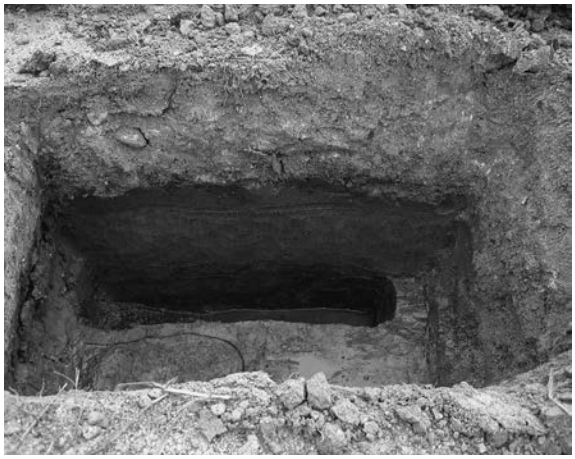
今回の試掘調査により、敷地南端に鎌倉時代後期頃の東西方向大溝が存在することが判明したが、他に顕著な遺構は確認できなかった。今回の試掘調査の南西、八条集落の北側で実施した2003年度の試掘調査でも顕著な遺構を検出していないため、本調査地が中・近世の八条環濠集落の範囲外で

第57図　調査地位置図（上：Ｓ＝1/5,000、下：Ｓ＝1/400）




第58図　遺構平面図および東壁断面図（S＝1/50）

あることは間違いない。今回検出した大溝の性格については今後の検討が必要であるが、現時点での可能性としては、坪境の大溝として鎌倉時代頃に機能していたものとも考えられる。



1．第1トレンチ東壁土層堆積状況（西から）

2．第2トレンチ全景（北西から）

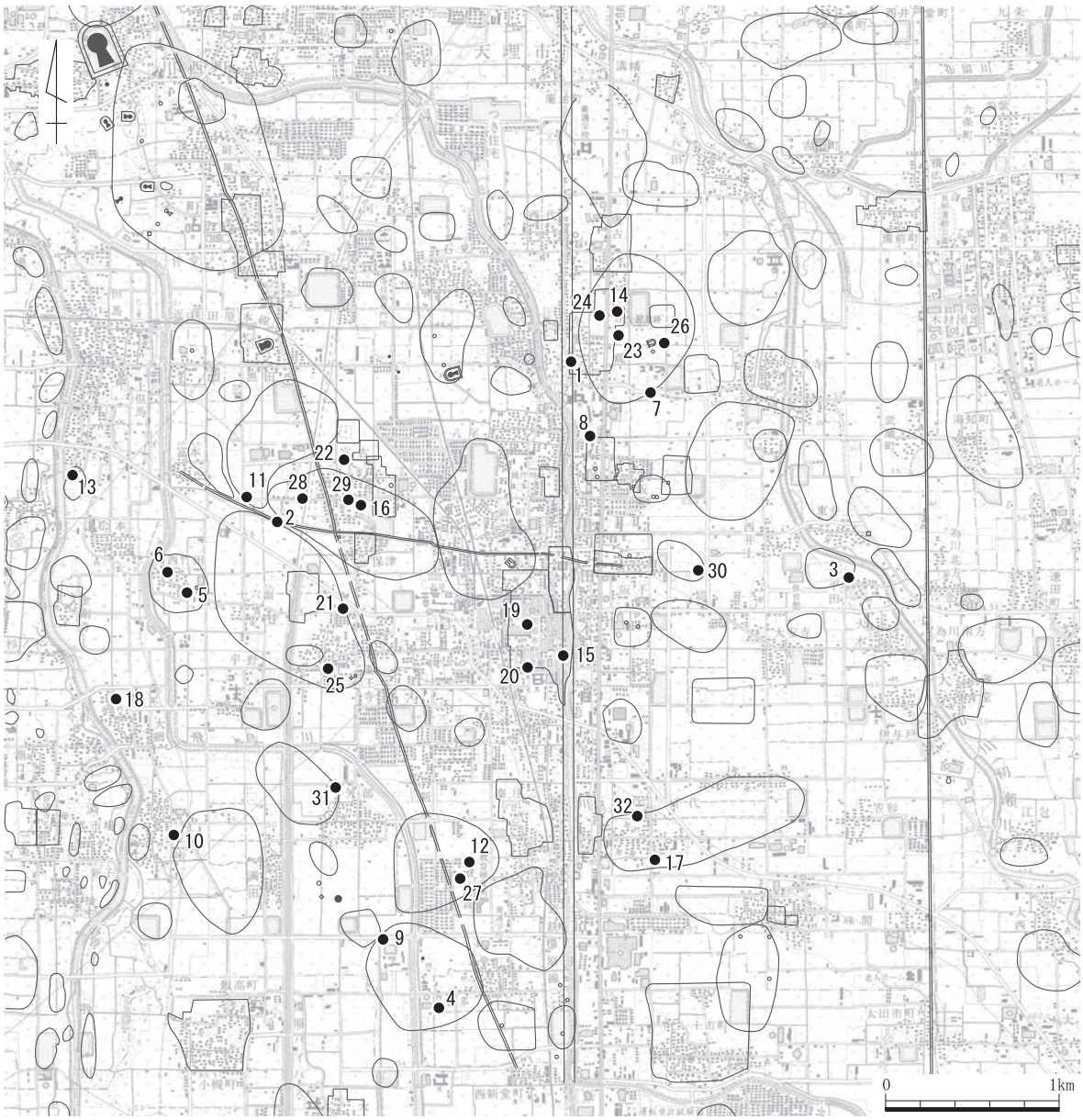
3．第3トレンチ全景（北から）

4．第3トレンチ東壁南半土層堆積状況（西から）

5．第3トレンチ東壁北半土層堆積状況（西から）

（２）工事立会の概要

2012年度に実施した工事立会は32件である（第８表）。史跡整備事業に伴う唐古・鍵遺跡の工事立会については弥生遺構や古墳等確認の成果があったため、後述する。公共下水道工事に伴う工事立会が９件、個人住宅建築に関わる工事立会が９件等である。特に個人住宅に伴う工事立会では、湿式柱状改良の工法をとることが多いため地下遺構についての情報を得られることは少なく、改良杭の本数と直径を確認することで届出内容どおりの工事がおこなわれているかどうかを確認する程度となっている。




第59図　田原本町の遺跡と工事立会地点（Ｓ＝1/40,000）

## 第８表　2012年度　工事立会一覧

| | 遺跡名 | 調査地 | 原因者 | 工事の目的 | 立会者 | 調査日 | 内　容 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 下ツ道<br>(R-201201) | 田原本町大字鍵 356 番 19 | 個人 | 店舗兼住宅の建築 | 清水 | 2012. 4. 4 | 柱状改良工事時に立会。客土１ｍ前後があるため層序等は不明。 |
| 2 | 保津・宮古<br>(R-201202) | 田原本町大字宮古１番地他南側道路 | 個人 | 集合住宅の建築 | 清水 | 2012. 4. 5 | 保津・宮古遺跡第 39 次調査後の建築に付随する電柱設置工事。既存擁壁の攪乱内にとどまる。 |
| 3 | 平田<br>(R-201203) | 田原本町大字平田 107 番，108 番 1-4 | 個人 | 個人住宅の建築 | 清水 | 2012. 4.12 | 柱状改良工事時に立会。遺構の有無は不明。近世陶磁器等が表土に散布する。 |
| 4 | 多<br>(R-201204) | 田原本町大字多 272 番地 | 個人 | 追悼碑の建造 | 奥谷 | 2012. 5.29 | 慎重工事対応であったが、工事状況を確認。掘削は 0.3m前後で造成土内にとどまる。 |
| 5 | 西竹田<br>(R-201205) | 田原本町大字西竹田 164 番 | 個人 | 個人住宅の建築 | 奥谷 | 2012. 5.30 | 個人住宅増築基礎工事。掘削は 0.2m前後で造成土内にとどまる。 |
| 6 | 西竹田<br>(R-201206) | 田原本町大字西竹田 128 番２他 | 個人 | 個人住宅の建築 | 清水 | 2012. 6.14 | 柱状改良工事時に立会。-1.5m以下に河川状の堆積。遺構・遺物不明。 |
| 7 | 唐古・鍵<br>(R-201207) | 田原本町大字鍵２番１南側道路他 | 田原本町長<br>（下水道課） | 下水道工事 | 奥谷 | 2012. 6.18 | 立孔試掘時に立会。-1.5m程度の掘削。-1.3m前後に遺構面。１ヶ所より地山上の素掘小溝。１ヶ所より時期不明河跡堆積層。 |
| 8 | 小阪里中<br>(R-201208) | 田原本町大字小阪 60 番５他 | 個人 | 個人住宅の建築 | 清水 | 2012. 6.26 | 柱状改良工事時に立会。湿式のため状況不明。遺構・遺物不明。 |
| 9 | 多<br>(R-201209) | 田原本町大字宮森 80 番１他北側道路 | 田原本町長<br>（下水道課） | 下水道工事 | 奥谷 | 2012. 6.27 | 多第 25 次発掘人孔の東側と西側の試掘時に立会。掘削は遺構面の -0.3m上面まで。現代の擁壁に伴う攪乱激しく遺物・遺構不明。 |
| 10 | 遺跡外<br>(R-201210) | 田原本町大字佐味 585 番他東側道路 | 田原本町長<br>（下水道課） | 公共下水道工事 | 清水 | 2012. 7. 7 | 人孔試掘時に立会。連絡があったため遺跡外だが立会。掘削 -1.8m程度。河川堆積とみられ、遺跡外であることを確認。 |
| 11 | 宮古北<br>(R-201211) | 田原本町大字宮古 169 番１西側道路 | 田原本町長<br>（下水道課） | 公共下水道工事<br>（特） | 清水 | 2012. 7.13<br>・7.14 | 人孔部試掘時に立会。-1.2mから暗褐色粘質土。0.1m弱の粗砂層が上を覆う。 |
| 12 | 宮森<br>(R-201212) | 田原本町大字新木 55 番８南側道路他 | 田原本町長<br>（下水道課） | 公共下水道工事<br>（都市水環境整備事業） | 清水 | 2012. 7.23 | 人孔部試掘時に立会。２ｍ以上の盛り土があり、掘削は 1.6mで造成土内におさまる。 |
| 13 | 遺物散布地<br>(R-201213) | 田原本町大字松本 229 番１北側道路 | 田原本町長<br>（下水道課） | 公共下水道工事<br>（都市水環境整備事業） | 清水 | 2012. 7.24 | 人孔掘削時に立会。掘削 -1.92m。最下面に褐色粘質土層。遺物はみられず。近世水田か？ |
| 14 | 唐古・鍵<br>(R-201214) | 田原本町大字唐古 99 番１他 | 田原本町長<br>（総合政策課） | コスモスの栽培 | 奥谷 | 2012. 7.26 | コスモス栽培地の耕起時に立会。掘削 -0.2mで旧水田耕土、表土内におさまる。 |
| 15 | 寺内町・下ツ道<br>(R-201215) | 田原本町 926 番２ | 田原本町長 | 倉庫の建築 | 藤田 | 2012. 8.10 | 樹木伐根地点を一部試掘。掘削２ｍで遺構・遺物なし。 |
| 16 | 保津・宮古<br>(R-201216) | 田原本町大字宮古 94 番の一部 | 個人 | 農業用倉庫 | 奥谷 | 2012. 8.24 | 業者が連絡を忘れて基礎まで作成。掘削は -0.2ｍで表土の範囲内。遺構・遺物不明。厳重注意。 |
| 17 | 千代<br>(R-201217) | 田原本町大字千代 266 番２ | 個人 | 造成工事（個人住宅） | 奥谷 | 2012. 9. 3 | 擁壁工事時に立会。-0.65mまで現代水田層。その下は地山。遺構・遺物なし。 |
| 18 | 大網<br>(R-201218) | 田原本町大網 85 番 | 個人 | 農業用倉庫 | 奥谷 | 2012. 9. 3 | 倉庫建築部北辺の掘削時に立会。-0.7mから粗砂層。下水工事立会成果より中世末か。遺構・遺物なし。 |
| 19 | 寺内町<br>(R-201219) | 田原本町 602 番３ | 個人 | 個人住宅の建設 | 奥谷 | 2012. 9.12 | 柱状改良時に立会。湿式のため状況不明。遺構・遺物不明。 |
| 20 | 寺内町<br>(R-201220) | 田原本町 107 番１ | 個人 | 石油タンクの撤去 | 奥谷 | 2012. 9.14 | タンク掘削時に立会。タンク設置に伴う攪乱しか確認できず。遺構・遺物なし。 |
| 21 | 十六面・薬王寺<br>(R-201221) | 田原本町大字保津 218 番５ | 個人 | 個人住宅の建築 | 奥谷 | 2012.10.22 | 建築部分表層改良時に立会。掘削は -0.8mで -0.64mより水田耕土層。遺構・遺物なし。 |
| 22 | 常楽寺推定地<br>（遺跡外）<br>(R-201222) | 田原本町大字宮古 295 番地北側道路 | 田原本町長<br>（下水道課） | 下水道工事 | 奥谷 | 2012.10.22 | 遺跡外にある人孔の掘削時に立会。遺跡内は常楽寺推定地第８次調査。-0.8mで地山。改良土による攪乱を受けている。遺構・遺物なし。 |
| 23 | 唐古・鍵<br>(R-201223) | 田原本町大字鍵 249 番地 302 番地の１先、他北側道路 | 田原本町長<br>（総合政策課） | 農業用水路の管布設 | 奥谷<br>豆谷 | 2012. 9.10 | 管布設部掘削時に立会。東西 100m。掘削は -0.65m で中近世包含層にとどまる。集水枡部のみ一部弥生包含層が露出。 |
| 24 | 唐古・鍵<br>(R-201224) | 田原本町大字唐古 58 番 | 個人 | 樹木の伐採<br>（造成） | 奥谷 | 2012.10.26 | 土地所有者自身により 1.8m程度の掘削。早急な届出を求める。 |
| 25 | 十六面・薬王寺<br>(R-201225) | 田原本町大字薬王寺 366 番３、366 番４ | 個人 | 個人住宅の建築 | 奥谷 | 2012.10.29 | 基礎工事時に立会。-0.3m程度の掘削。遺構・遺物なし。 |
| 26 | 唐古・鍵<br>(R-201226) | 田原本町大字鍵 222 番１外 | 田原本町長<br>（総合政策課） | 史跡公園整備に伴う農業用水路の移設工事 | 清水<br>奥谷<br>田中<br>奥本 | 2012. 7. 2<br>～<br>2013. 1. 7 | 別途報告あり。 |

| | 遺跡名 | 調査地 | 原因者 | 工事の目的 | 立会者 | 調査日 | 内　容 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 27 | 宮森<br>(R-201127) | 田原本町大字新木 55 番 30<br>東側道路 | 田原本町長<br>（下水道課） | 公共下水道工事 | 清水 | 2012. 11. 15<br>2013.　2. 11 | 管埋設の開削工事時に立会。掘削－２m強まで造成による砂礫土。湧水激しく遺構・遺物不明。 |
| 28 | 保津・宮古<br>(R-201128) | 田原本町大字宮古 136 番４<br>北側道路 | 田原本町長<br>（下水道課） | 下水道工事（立孔位置を決めるための確認試掘） | 奥谷 | 2012. 12. 13<br>2013.　1. 11 | 立孔予定地近くの試掘時に立会。-1. 38 ～ -1. 65 mまで中世包含層？その下に地山を切る砂質土層あり。溝か？時期不明。 |
| 29 | 保津・宮古<br>(R-201129) | 田原本町大字宮古 99 番６<br>他 | 個人 | 個人住宅の建築 | 清水 | 2012. 12. 20 | 布基礎掘削時に立会。掘削 -0. 4m程度。掘削床面で近世近代層に一部かかる程度。 |
| 30 | 阪手東<br>(R-201130) | 田原本町大字西井上 47 番<br>１他 | 田原本町長<br>（生涯教育課） | 駐車場の造成 | 清水 | 2012.　1.　7 | U字溝布掘り時に立会。掘削 -0. 2m程度。現代耕土層及び床土上面までにとどまる。 |
| 31 | 矢部<br>(R-201131) | 田原本町大字矢部 776 番１<br>西側道路他 | 田原本町長<br>（建設課） | 水路改修 | 清水 | 2012.　2. 11 | U字溝布掘り時に立会。掘削 -0. 65m程度。現代耕土層及び床土上面までにとどまる。遺物・遺構不明。 |
| 32 | 千代（勝楽寺跡）<br>(R-201132) | 田原本町大字千代 872 番 | 奈良シティ<br>建設（株） | 宅地造成 | 奥谷 | 2011.　3. 15 | 宅地造成に伴う下水道工事の試掘で中世溝を検出した第３トレンチ南北の試掘時に立会。－１m前後で細砂層の地山。 |

## １．唐古・鍵遺跡　工事立会（Ｒ－201226）

### 1. はじめに

唐古・鍵遺跡の史跡整備事業に伴い倉橋溜池の用水路の付け替え工事が実施され、工事時に立会をおこなった。この水路工事は、極力地下遺構に影響のない形で設計がおこなわれたが、一部で遺構面が露出する部分も生じたため、工事立会等によりその状況把握に努めた。ここでは、唐古・鍵４号墳周辺（Ⅲ区）、および南東部の弥生環濠（Ⅴ区）に関わる情報が得られた２地点を中心に成果を報告する。

### 2. 工事立会の成果

（１）Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区の概要

Ⅰ区は、現水田面より0.3m程の掘削であり、遺構面まで及ばないことを確認した。遺物は僅少である。

Ⅱ区は、唐古・鍵遺跡第59次調査により調査済みであったため工事立会対応としたが、未調査部分において、弥生時代包含層まで掘削が及ぶ箇所が発生した。Ⅱ区西半においては、古墳時代前期を中心とする遺物を多数採取した。また、近世・中世の大溝を確認した。

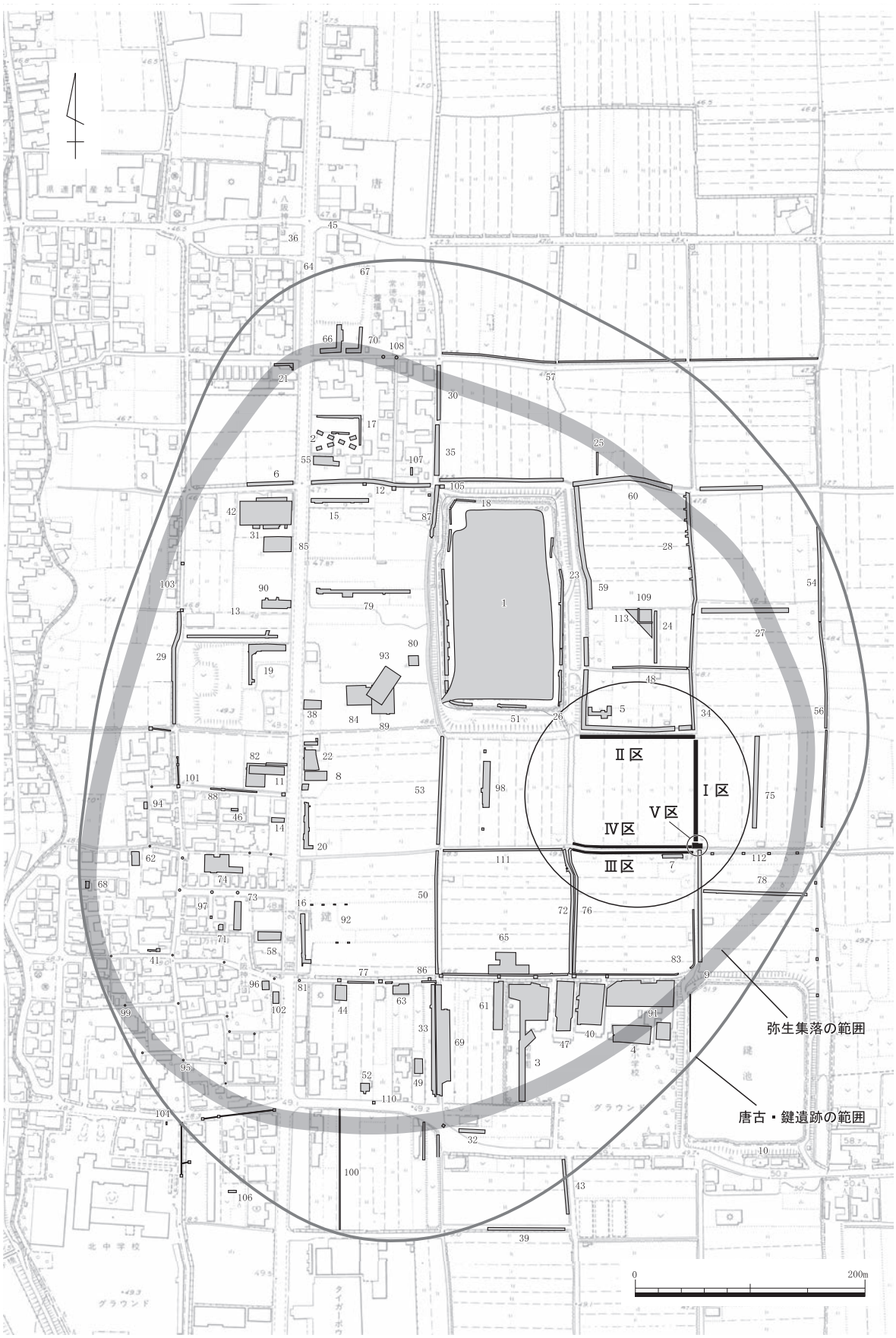
Ⅳ区は、Ⅲ区に並走する水路工事である。水田面より0.3m程の掘削で、Ⅲ区より掘削は浅かったものの、弥生土器等が出土している。

（２）Ⅲ区の概要

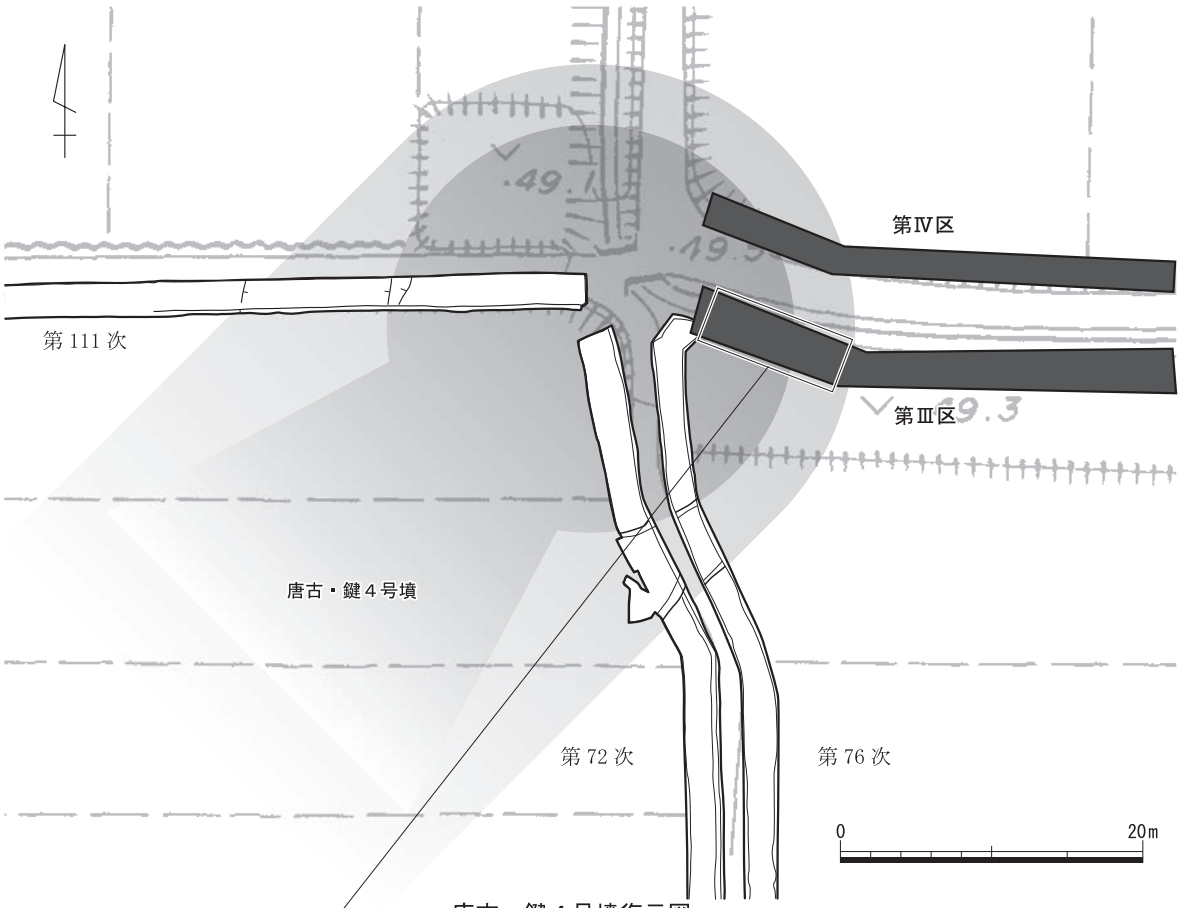
Ⅲ区は、史跡地南端東側を東西に流れる用水路の改修工事部分である。工区の大半は中世包含層までの掘削にとどまるが、西端では唐古・鍵４号墳の盛土が露出することとなった。盛土層は黒褐色土層（第Ⅳ層）・黒色粘質土層（第Ⅴ層）であった。工事立会の成果により、後円部の直径が30mであることがほぼ確実となった（第61図）。

（３）Ⅴ区の概要

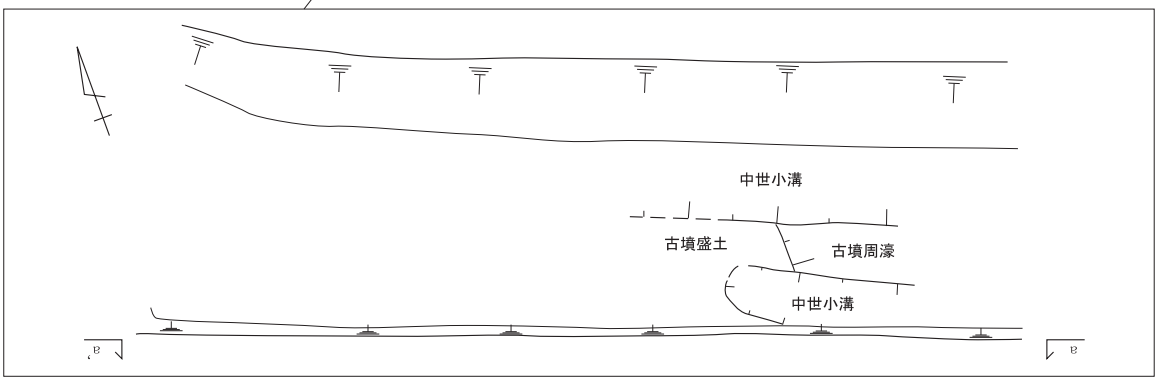
史跡地南西端での枡設置工事について、工事立会の予定であったが当初の想定より大規模な掘削となったため、発掘調査として対応した。第１遺構面では、弥生時代後期後半頃の小規模な土坑３

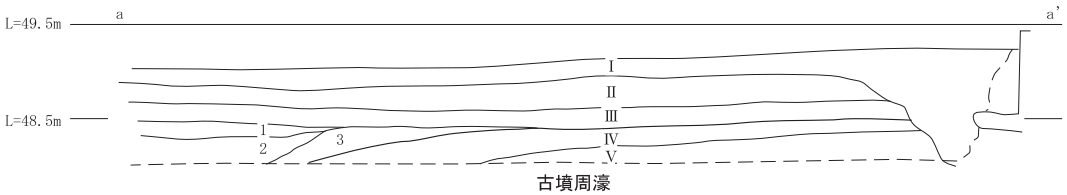



第60図　工事立会位置図（Ｓ＝1/5,000）




唐古・鍵４号墳復元図




古墳周濠

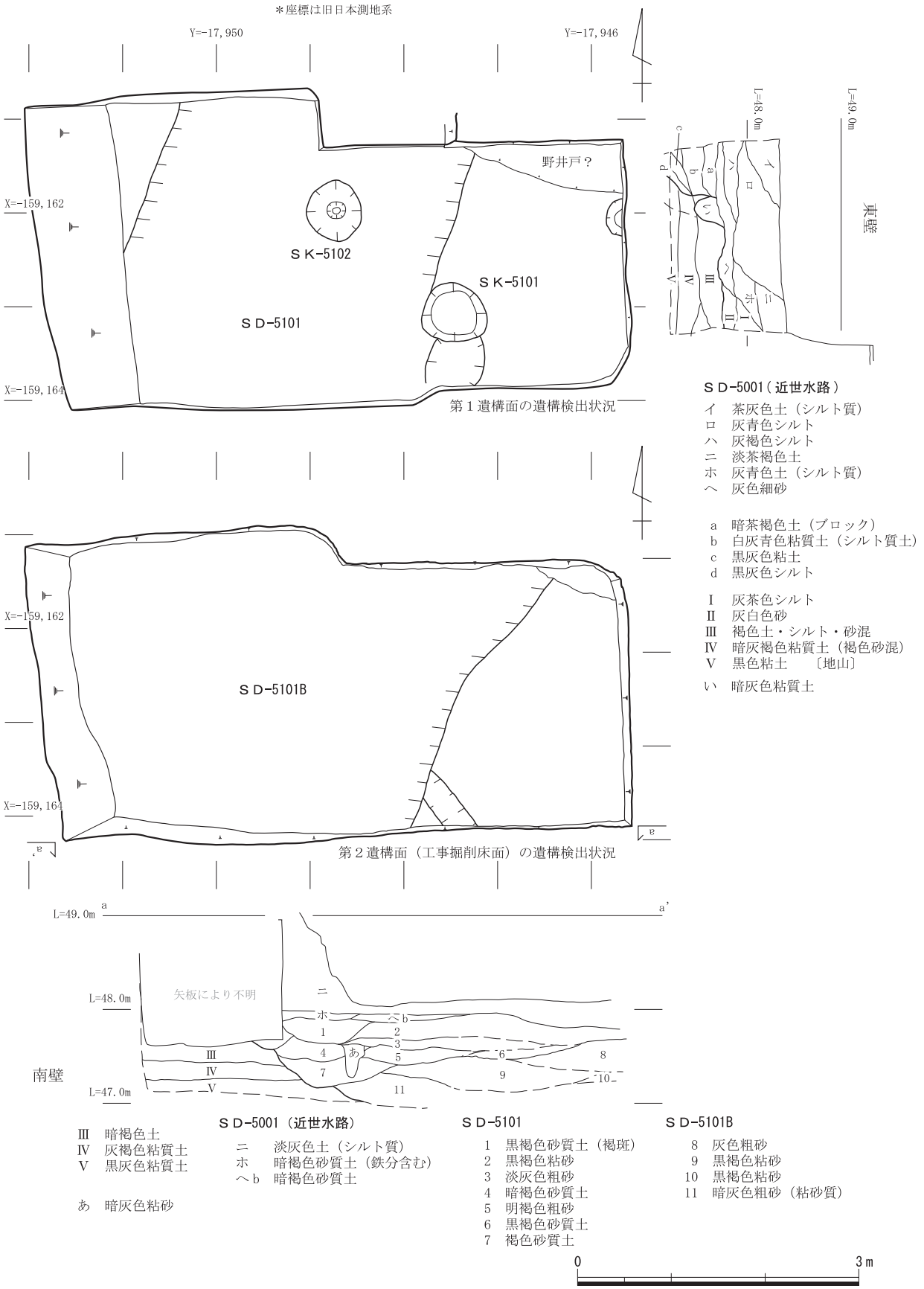
Ⅰ　暗褐色土　〔畑土〕
Ⅱ　淡褐灰色土
Ⅲ　暗褐灰色土
Ⅳ　黒褐色土（やや粘質）〔古墳盛土〕
Ⅴ　黒色粘質土　〔　〃　〕

1　暗褐灰色粘質土（シルト質）
2　暗灰褐色土（シルト質）
3　黒褐色土（黄褐色土ブロック混）

0　4 m

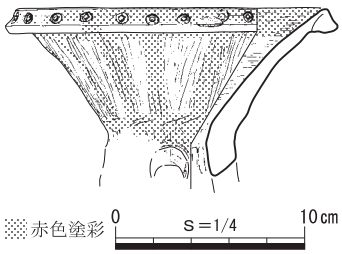
遺構平面図及び南壁断面図

第61図　唐古・鍵４号墳復元図および遺構平面図・南壁断面図（上：Ｓ＝1/500、下：Ｓ＝1/80）




第62図　Ⅴ区遺構平面図および東・南壁断面図（Ｓ＝1/60）

基、後述する大溝の再掘削とみられる北東－南西方向に走行する幅約３ｍの大溝（ＳＤ－5101）を検出した。また、第２遺構面では、弥生時代後期初頭の大溝（ＳＤ－5101B）を検出した。北東－南西方向で、幅４ｍ以上と考えられる。基本的には洪水によるとみられる粗砂堆積であり、遺物はそれほど多くない。朱彩の施された大和第Ｖ様式の器台等が出土した（第63図）。



第63図　ＳＤ－5101B出土土器

### 3. まとめ

今回の工事は、弥生時代の遺構への影響を極力回避して実施されたものの、結果的に遺構への影響が生じた工事箇所がみられたため遺構の状況把握に努めた。第Ｖ区で検出した大溝は、その位置関係から第７次調査のＳＤ－01の可能性がある。史跡整備事業である以上、極力遺構への影響を回避し、どうしても影響が避けられない工事部分についてはきちんとした対応がおこなわれるよう努める必要がある。

１．Ⅱ区全景（東から）

２．唐古・鍵４号墳土層堆積状況（北から）

３．Ｖ区弥生時代後期後半遺構検出状況（東から）

４．Ｖ区東壁土層堆積状況（西から）

# Ⅱ．資料の整理と活用・普及

# １．文化財資料の整理・保管

## （１）埋蔵文化財の整理・保管

平成24年度の発掘調査と試掘調査、工事立会に伴い保管した埋蔵文化財は、遺物コンテナ約134箱とナイロン袋他である。遺物量は前年度より約25箱多い。これは、十六面・薬王寺遺跡第30次調査が大規模調査であったため、コンテナ数が66箱に及んだこと、唐古・鍵遺跡第113次調査において40箱の遺物が出土したことによるものである。これ以外の調査では10箱までの少数で、大半は１～２箱程度である。多量に出土した上記２遺跡の遺物内容は、主に弥生土器と古式土師器である。また、土器以外で注目されるのは、十六面・薬王寺遺跡第30次調査出土の石製品である。この調査では、玉作り関係の遺物がまとまって出土した。その内訳は、滑石製の管玉２点、同未成品９点、臼玉21点、同未成品（失敗品を含む）48点と、滑石の素材・剝片302点、グリーンタフの剝片21点である。古墳時代前期から中期にかけての玉作り関係の遺物として注目されるものである。

さて、田原本町の埋蔵文化財の収蔵施設は、これまで４ヶ所６施設に分散しており、また、施設の老朽化が課題となっていた。これら収蔵遺物の一元化と活用を図る目的として、文化財保存課事

【埋蔵文化財保管数】

| 調査番号 | 遺跡名 | 調査次数 | 遺物明細 | 遺物量 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 現場後 | 洗浄後（土器・瓦） |
| H24-01 | 羽子田遺跡 | 第37次調査 | 弥生土器・土師器・須恵器・木製品等 | ３箱 | ４箱 |
| H24-02 | 十六面･薬王寺遺跡 | 第29次調査 | 弥生土器等 | １箱 | ナ小１ |
| H24-03 | 十六面･薬王寺遺跡 | 第30次調査 | 弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦・木製品等 | 66箱 | 52箱 |
| H24-04 | 唐古・鍵遺跡 | 第113次調査 | 弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・石器等 | 40箱 | 36箱 |
| H24-05 | 黒田遺跡 | 第３次調査 | 土師器・輸入磁器等 | １箱 | ナ小５ |
| H24-06 | 多遺跡 | 第25次調査 | 弥生土器・土師器・須恵器・瓦器等 | ２箱 | ２箱 |
| H24-07 | 保津・宮古遺跡 | 第40次調査 | 弥生土器・土師器等 | １箱 | ナ小８ |
| H24-08 | 常楽寺推定地 | 第８次調査 | 土師器・瓦質土器・近世陶磁器・瓦等 | １箱 | １箱 |
| H24-09 | 保津・阪手道 | 第１次調査 | 土師器等 | １箱 | ナ小５ |
| H24-10 | 寺内町遺跡 | 第13次調査 | 土師器・近世陶磁器・瓦等 | ２箱 | １箱 |
| H24-11 | 保津・宮古遺跡 | 第41次調査 | 土師器・須恵器・瓦器等 | １箱 | ナ小６ |
| H24-12 | 平野氏陣屋跡 | 第14次調査 | 土師器・瓦器・瓦質土器・近世陶磁器・瓦等 | １箱 | ナ中１・小６ |
| S-201201 | 十六面･薬王寺遺跡 | 試掘調査 | 縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器等 | 10箱 | ８箱 |
| S-201202 | 千代遺跡 | 試掘調査 | 土師器・瓦器等 | １箱 | ナ小４ |
| R-201226 | 唐古・鍵遺跡 | 工事立会 | 弥生土器・土師器・石器等 | ３箱 | ２箱 |
| R-201228 | 保津・宮古遺跡 | 工事立会 | 土師器・須恵器等 | ナ小２ | ナ小２ |
| 計 | | | | 134箱<br>ナ小２ | 106箱<br>ナ中１・小37 |

※　遺物量の表記の箱とは、長さ56㎝・幅36㎝・深さ15㎝の容量を標準として換算している。また、ナ小・中・大は、ナイロン袋の小・中・大の大きさを表している。

務所の移転に伴い、事務所の空き部屋を収蔵施設とするとともに隣接地に新しい収蔵棟を平成24年度に建築した。新設の収蔵棟は２階建ての軽量鉄骨造りで延べ床面積約390㎡の規模である。これら分散した遺物の集約を図るため、震災等緊急雇用創出事業を活用して遺物の再配置作業と未登載遺物の再整理作業を実施した。

その結果、３施設に唐古・鍵遺跡を初めとする町内遺跡の遺物約12,000箱を大きく５学校区別にし、さらに遺跡別・遺物種別に再配置するとともに、配置位置図も作成し遺物所在が明らかになる

【土器以外の保管遺物種と数量（該当調査のみ）】

| 調査番号 | 遺跡名 | 調査次数 | 土製品 | 焼土塊 | 木製品 | 石製品 | 骨製品 | 金属器 | 銭貨 | ガラス | 鉱滓 | 漆喰 | 木 | 石 | 獣骨・貝 | 種子 | 炭化米 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H24-01 | 羽子田遺跡 | 第37次調査 | － | 1 | 6 | 3 | － | － | － | － | － | － | 8 | 1 | － | 9 | － |
| H24-03 | 十六面・薬王寺遺跡 | 第30次調査 | 5 | 111 +① | 107 | 434 +⑮ | － | 3 | － | 1 | － | 1 | 33 | 26 | 13 +① | 14 | 13 |
| H24-04 | 唐古・鍵遺跡 | 第113次調査 | 洗浄済み・Pickup遺物未入力 | | | | | | | | | | | | | | |
| H24-06 | 多遺跡 | 第25次調査 | － | － | － | 9 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | 1 | － |
| H24-08 | 常楽寺推定地 | 第８次調査 | 1 | － | 1 | 1 | － | － | － | － | － | － | － | 5 | － | 1 | － |
| H24-10 | 寺内町遺跡 | 第13次調査 | － | － | 8 | 4 | － | 1 | － | － | － | － | － | 5 | － | － | － |
| H24-12 | 平野氏陣屋跡 | 第14次調査 | － | － | － | 1 | － | － | － | － | － | － | － | 1 | － | － | － |
| S-201201 | 十六面・薬王寺遺跡 | 試掘調査 | － | 4 | － | 41 | － | 4 | － | － | － | － | 1 | － | － | － | － |
| S-201202 | 千代遺跡 | 試掘調査 | － | 1 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － |
| R-201226 | 唐古・鍵遺跡 | 工事立会 | － | － | － | 48 +① | － | － | － | － | － | － | － | 1 | 2 | － | － |
| 計 | | | 6 | 117 +① | 122 | 541 +⑯ | 0 | 8 | 0 | 1 | 0 | 1 | 42 | 39 | 15 +① | 25 | 13 |

※　点数のアラビア数字＋①の①は、20点以上を１件としてカウントしたもの。

【Pickupした土器・形象埴輪・瓦の数量（該当調査のみ）】

| 調査番号 | 遺跡名 | 調査次数 | 編年土器 | 搬入土器 | 絵画土器 | 記号土器 | 文様土器 | 特殊土器 | 縄文土器 | 古墳時代土器 | 古代土器 | 中世土器 | 近世土器 | 形象埴輪 | 埴輪の記号 | 軒平・軒丸瓦 | 文様瓦 | 鬼瓦 | 被熱瓦 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H24-01 | 羽子田遺跡 | 第37次調査 | － | 1 | － | － | － | 1 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － |
| H24-03 | 十六面・薬王寺遺跡 | 第30次調査 | － | 10 | － | － | 9 | 19 | 6 | － | 2 | － | － | － | － | 1 | － | － | － |
| H24-04 | 唐古・鍵遺跡 | 第113次調査 | 洗浄済み・Pickup遺物未入力 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H24-06 | 多遺跡 | 第25次調査 | － | － | － | － | － | 1 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － |
| S-201201 | 十六面・薬王寺遺跡 | 試掘調査 | － | 5 | － | 1 | － | 1 | 1 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － |
| R-201226 | 唐古・鍵遺跡 | 工事立会 | － | － | － | － | 2 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － |
| 計 | | | 0 | 16 | 0 | 1 | 11 | 22 | 7 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |

【再整理事業に伴い分別した土器以外の遺物種と数量】

| 遺跡名 | 調査次数 | 土製品 | 焼土塊 | 木製品 | 石製品 | 骨製品 | 金属器 | 銭貨 | ガラス | 鉱滓 | 漆喰 | 木 | 石 | 獣骨・貝 | 種子 | 炭化米 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 黒田大塚古墳 | 第１次調査 | 4 | 10 | － | 17 | － | 2 | 2 | 2 | 3 | － | － | － | － | － | － |
| 黒田大塚古墳 | 第２次調査 | － | 11 | － | 1 | － | 2 | － | － | － | － | － | － | － | － | － |
| 黒田大塚古墳 | 第３次調査 | － | 2 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － |
| 黒田遺跡 | 第１次調査 | 22 | 38 | 1 | 24 | － | 15 | 6 | － | 12 | － | － | － | － | 2 | 1 |
| 計 | | 26 | 61 | 1 | 42 | 0 | 19 | 8 | 2 | 15 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 |

【再整理事業に伴いPickupした土器・形象埴輪・瓦の数量】

| 遺跡名 | 調査次数 | 編年土器 | 搬入土器 | 絵画土器 | 記号土器 | 文様土器 | 特殊土器 | 縄文土器 | 古墳時代土器 | 古代土器 | 中世土器 | 近世土器 | 形象埴輪 | 埴輪の記号 | 軒平・軒丸瓦 | 文様瓦 | 鬼瓦 | 被熱瓦 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 黒田大塚古墳 | 第１次調査 | － | 1 | － | 1 | － | 3 | － | － | － | － | － | 53 | － | 1 | 1 | － | － |
| 黒田大塚古墳 | 第２次調査 | － | 1 | － | － | 1 | － | － | － | － | － | － | 8 | 1 | － | － | － | － |
| 黒田大塚古墳 | 第３次調査 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | 1 | － | － | － | － | － |
| 黒田遺跡 | 第１次調査 | － | － | － | － | 1 | － | － | － | － | － | － | 1 | － | 22 | － | 2 | 1 |
| 計 | | 0 | 2 | 0 | 1 | 2 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 63 | 1 | 23 | 1 | 2 | 1 |

ようにした。

また、田原本町の初期の調査で遺物台帳が未整備であった黒田大塚古墳第１～３次調査や黒田遺跡第１次調査の台帳を作成するとともに再整理をおこない、重要遺物の取り出し・登載をおこなった。

（２）木製品の樹種同定と保存処理

平成24年度においては、唐古・鍵遺跡やその他町内遺跡の木製品の樹種同定35点を実施した。また、保存処理事業としては、12点を委託し高級アルコール法で処理した。町直営では、20点をラクチトール・トレハロース含浸法等で処理をおこなった。

【樹種同定一覧表】

| № | 遺跡名 | 次数 | 製品コード | 製品名 | 樹種 | 台帳№ | 遺構名 | 層位 | 取り上げ番号 | 同定機関 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 唐古・鍵遺跡 | 第19次調査 | KRK－019－00036W | 板A | ヒノキ科アスナロ属 | 1119 | SD-204 | 第９層 | | 吉田生物研究所 |
| 2 | 唐古・鍵遺跡 | 第19次調査 | KRK－019－00050W | 板A | コウヤマキ科コウヤマキ属<br>コウヤマキ | 722 | SD-204 | 第３(下)層 | W-352 | 吉田生物研究所 |
| 3 | 唐古・鍵遺跡 | 第59次調査 | KRK－059－00034W | 用途不明品 | ブナ科コナラ属<br>アカガシ亜属 | 911 | SK-3101 | 第４層 | | 吉田生物研究所 |
| 4 | 唐古・鍵遺跡 | 第59次調査 | KRK－059－00040W | 不明建築材 | ブナ科コナラ属<br>アカガシ亜属 | 1103 | SK-3135 | 第４層(下) | W-451 | 吉田生物研究所 |
| 5 | 唐古・鍵遺跡 | 第59次調査 | KRK－059－00051W | 用途不明品 | 不可 | 1118 | SK-3135 | 第４(下)層 | | 吉田生物研究所 |
| 6 | 唐古・鍵遺跡 | 第59次調査 | KRK－059－00053W | 用途不明品 | ブナ科コナラ属<br>アカガシ亜属 | 1118 | SK-3135 | 第４(下)層 | | 吉田生物研究所 |
| 7 | 唐古・鍵遺跡 | 第59次調査 | KRK－059－00062W | 用途不明品 | ツバキ科ツバキ属 | 433 | SD-1102 | 第４層 | W-403 | 吉田生物研究所 |
| 8 | 唐古・鍵遺跡 | 第59次調査 | KRK－059－00068W | 用途不明品 | イチイ科カヤ属カヤ | 914 | SD-3104B | 第４層 | | 吉田生物研究所 |
| 9 | 唐古・鍵遺跡 | 第59次調査 | KRK－059－00079W | 丸太杭 | ツバキ科サカキ属サカキ | 1096 | SD-4101 | 第６層 | | 吉田生物研究所 |
| 10 | 唐古・鍵遺跡 | 第61次調査 | KRK－061－00021W | 鉢 | クワ科クワ属 | 1486 | SD-151A | 第８層(下) | | 吉田生物研究所 |
| 11 | 唐古・鍵遺跡 | 第61次調査 | KRK－061－00064W | 不明建築材 | イチイ科カヤ属カヤ | 1521 | SD-151CN | 第９層 | | 吉田生物研究所 |
| 12 | 唐古・鍵遺跡 | 第61次調査 | KRK－061－00096W | 有頭棒 | クスノキ科シロダモ属 | 1555 | SD-151BN | 第８層(下) | W-874 | 吉田生物研究所 |
| 13 | 唐古・鍵遺跡 | 第61次調査 | KRK－061－00098W | 有頭棒 | 不可 | 1555 | SD-151BN | 第８層(下) | W-876 | 吉田生物研究所 |
| 14 | 唐古・鍵遺跡 | 第61次調査 | KRK－061－00107W | 用途不明品 | バラ科サクラ属 | 1137 | SK-118 | 第６層 | W-604 | 吉田生物研究所 |
| 15 | 唐古・鍵遺跡 | 第61次調査 | KRK－061－00108W | 用途不明品 | クワ科クワ属 | 1137 | SK-118 | 第６層 | W-607 | 吉田生物研究所 |
| 16 | 唐古・鍵遺跡 | 第61次調査 | KRK－061－00111W | 用途不明品 | マキ科マキ属イヌマキ | 1432 | SD-151 | 第５－ｂ層 | | 吉田生物研究所 |
| 17 | 唐古・鍵遺跡 | 第61次調査 | KRK－061－00118W | 用途不明品 | イブガヤ科イブガヤ属<br>イブガヤ | 1491 | SD-151BS | 第８’層 | | 吉田生物研究所 |
| 18 | 唐古・鍵遺跡 | 第61次調査 | KRK－061－00119W | 用途不明品 | ツバキ科サカキ属サカキ | 1543 | SD-151BS | 第８層 | | 吉田生物研究所 |
| 19 | 唐古・鍵遺跡 | 第65次調査 | KRK－065－00029W | 用途不明品 | スギ科スギ属スギ | 1132 | SK-202 | 第２層 | | 吉田生物研究所 |
| 20 | 唐古・鍵遺跡 | 第65次調査 | KRK－065－00041W | 用途不明品 | イチイ科カヤ属カヤ | 1126 | | | W-101 | 吉田生物研究所 |
| 21 | 唐古・鍵遺跡 | 第69次調査 | KRK－069－10007W | 原材 | ブナ科コナラ属<br>アカガシ亜属 | 2131 | SK-1137 | 第６(下)層 | W-653 | 吉田生物研究所 |
| 22 | 唐古・鍵遺跡 | 第73次調査 | KRK－073－00011W | 横杓子 | クワ科クワ属 | 116 | SD-103 | 第６層 | | 吉田生物研究所 |
| 23 | 唐古・鍵遺跡 | 第73次調査 | KRK－073－00015W | 用途不明品 | クワ科クワ属 | 82 | SD-103 | 第３(下)層 | | 吉田生物研究所 |
| 24 | 唐古・鍵遺跡 | 第74次調査 | KRK－074－00031W | 不明建築材 | ヒノキ科ヒノキ属 | 841 | Pit-105W | 第４層 | W-410 | 吉田生物研究所 |
| 25 | 唐古・鍵遺跡 | 第74次調査 | KRK－074－00032W | 有頭棒 | アカネ科ミサオノキ属<br>ミサオノキ？ | 743 | SR-201 | 第４層 | | 吉田生物研究所 |
| 26 | 唐古・鍵遺跡 | 第74次調査 | KRK－074－00033W | 有頭棒 | ツバキ科ツバキ属 | 841 | Pit-105W | 第４層 | W-412 | 吉田生物研究所 |
| 27 | 唐古・鍵遺跡 | 第74次調査 | KRK－074－00040W | 用途不明品 | クワ科クワ属 | 818 | SK-203 | Sec第３層 | | 吉田生物研究所 |
| 28 | 唐古・鍵遺跡 | 第79次調査 | KRK－079－00033W | 用途不明品 | ブナ科コナラ属<br>アカガシ亜属 | 402 | SD-101B | 第７(下)層 | | 吉田生物研究所 |
| 29 | 唐古・鍵遺跡 | 第98次調査 | KRK－098－00004W | 鋤の身 | ブナ科コナラ属<br>アカガシ亜属 | 320 | SD-101C | 第13層 | | 吉田生物研究所 |
| 30 | 唐古・鍵遺跡 | 第98次調査 | KRK－098－00011W | 不明容器 | クワ科クワ属 | 550 | SK-210 | 第２層 | | 吉田生物研究所 |
| 31 | 十六面・薬王寺遺跡 | 第30次調査 | JRY－030－00014W | 斎串 | スギ科スギ属スギ | 90 | SR-2101 | 第６層 | | 吉田生物研究所 |
| 32 | 十六面・薬王寺遺跡 | 第30次調査 | JRY－030－00015W | 斎串 | スギ科スギ属スギ | 90 | SR-2101 | 第６層 | | 吉田生物研究所 |
| 33 | 十六面・薬王寺遺跡 | 第30次調査 | JRY－030－00038W | 斎串？ | ヒノキ科アスナロ属 | 177 | SD-3102 | 第２層 | | 吉田生物研究所 |
| 34 | 唐古・鍵遺跡 | 第16次調査 | KRK－016－00035W | 用途不明品<br>未成品 | ツバキ科ツバキ属 | 224 | SX-102 | | W-22 | 吉田生物研究所 |
| 35 | 唐古・鍵遺跡 | 第37次調査 | KRK－037－00048W | 用途不明品 | イチイ科カヤ属カヤ | 999 | SK-2122 | 第20層 | | 吉田生物研究所 |

【保存処理一覧表】

| № | 遺跡名 | 次数 | 製品コード | 製品名 | 樹種 | 台帳№ | 遺構名 | 層位 | 取り上げ番号 | 保存処理機関 | 保存処理方法 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 唐古・鍵遺跡 | 第22次調査 | KRK－022－00010W | 用途不明品 | ヤマグワ | 368 | SK-103 | 第３層 | W-325 | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 2 | 唐古・鍵遺跡 | 第23次調査 | KRK－023－00012W | 不明建築材 | ヒノキ | 471 | SK-113 | 第６層 | W-603 | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 3 | 唐古・鍵遺跡 | 第37次調査 | KRK－037－00074W | 用途不明品 | ヒノキ | 1079 | SK-2139 | 西壁Sec 第５－ａ層 | | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 4 | 唐古・鍵遺跡 | 第37次調査 | KRK－037－00082W | 用途不明品 | コナラ属クヌギ節 | 824 | SD-2201 | 第４層 | | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 5 | 唐古・鍵遺跡 | 第37次調査 | KRK－037－00083W | 用途不明品 | モミ属 | 1034 | SK-2139 | 第４層 | | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 6 | 唐古・鍵遺跡 | 第37次調査 | KRK－037－00084W | 用途不明品 | イヌガヤ | 869 | SK-2204 | 第３層 | その１ | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 7 | 唐古・鍵遺跡 | 第37次調査 | KRK－037－00085W | 板Ａ | コナラ属アカガシ亜属 | 469 | SK-2114 | 第６（下）層 | W-1601 | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 8 | 唐古・鍵遺跡 | 第37次調査 | KRK－037－00089W | 用途不明品 | ヤブツバキ | 1095 | SK-2139 | 第６層 | | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 9 | 唐古・鍵遺跡 | 第38次調査 | KRK－038－00020W | 膝柄斧柄 | サカキ | 156 | SK-206 | 第２層 | W-205 | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 10 | 唐古・鍵遺跡 | 第40次調査 | KRK－040－00008W | 不明建築材 | クリ | 466 | SD-101 | 第６層 | W-643 | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 11 | 唐古・鍵遺跡 | 第59次調査 | KRK－059－00078W | 匙 | 針葉樹 | 235 | SK-1101 | 第７層 | | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 12 | 保津・宮古遺跡 | 第1次調査 | HTM－001－00004W | 横槌 | カナメモチ属 | 23 | SK-101 | 第５層 | W-501 | 吉田生物研究所 | 高級アルコール処理法 |
| 13 | 唐古・鍵遺跡 | 第20次調査 | KRK－020－00006WC | 籠編物 | | 329 | SX-101 | 第５（下）層 | | 町 | ナチュラルコート噴霧 |
| 14 | 唐古・鍵遺跡 | 第61次調査 | KRK－061－00013W | 平鍬 | コナラ属アカガシ亜属 | 1561 | SK-152 | 第１層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 15 | 唐古・鍵遺跡 | 第66次調査 | KRK－066－00001WC | 籠編物 | | 82 | SR-201 | 第６層 | | 町 | ナチュラルコート噴霧 |
| 16 | 唐古・鍵遺跡 | 第69次調査 | KRK－069－00004W | 膝柄横斧柄 | サカキ | 1988 | SK-1102 | 第６層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 17 | 唐古・鍵遺跡 | 第69次調査 | KRK－069－00005W | 膝柄横斧柄 | クスノキ科 | 1988 | SK-1102 | 第６層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 18 | 唐古・鍵遺跡 | 第74次調査 | KRK－074－00004W－1 | 泥除 | コナラ属アカガシ亜属 | 170 | SK-101 | 第５層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 19 | 唐古・鍵遺跡 | 第74次調査 | KRK－074－00004W－2 | 泥除 | コナラ属アカガシ亜属 | 157 | SK-101 | 第４層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 20 | 唐古・鍵遺跡 | 第79次調査 | KRK－079－00001W | 膝柄横斧柄未成品 | サカキ | 231 | SK-105 | 第４層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 21 | 唐古・鍵遺跡 | 第79次調査 | KRK－079－00025W | 穂摘具 | コナラ属アカガシ亜属 | 131 | SK-101 | 第５層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 22 | 法貴寺遺跡 | 第6次調査 | HKJ－006－00001W | 漆椀 | | 5 | SX-01 | 第１層 | | 町 | ナチュラルコート噴霧 |
| 23 | 羽子田遺跡 | 第31次調査 | HGT－031－00001W | 鍬・鋤の身 | コナラ属アカガシ亜属 | 253 | SK-2104 | 第１層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 24 | 羽子田遺跡 | 第31次調査 | HGT－031－00002W | 木錘 | コナラ属クヌギ節 | 279 | SK-2103 | 第６層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 25 | 羽子田遺跡 | 第31次調査 | HGT－031－00003W | 木錘 | ヒサカキ属 | 302 | SK-2103 | 第６層 | W-601 | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 26 | 羽子田遺跡 | 第31次調査 | HGT－031－00004W | 木錘 | コナラ属コナラ節 | 302 | SK-2103 | 第６層 | W-602 | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 27 | 羽子田遺跡 | 第31次調査 | HGT－031－00005W | 木錘 | コナラ属コナラ節 | 302 | SK-2103 | 第６層 | W-603 | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 28 | 羽子田遺跡 | 第31次調査 | HGT－031－00007W | 武器形木製品 | ヒノキ | 279 | SK-2103 | 第６層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 29 | 羽子田遺跡 | 第31次調査 | HGT－031－00024W | 用途不明品 | ヒノキ | 314 | SD-2107 | 第３層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 30 | 羽子田遺跡 | 第31次調査 | HGT－031－00025W | 用途不明品 | ヒノキ | 191 | SD-2107 | 第２層 | W-201 | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |
| 31 | 羽子田遺跡 | 第31次調査 | HGT－031－00001WC | 編物 | | 302 | SK-2103 | 第６層 | WC-601 | 町 | ナチュラルコート噴霧 |
| 32 | 羽子田遺跡 | 第32次調査 | HGT－032－00001W | 用途不明品 | ヒノキ | 126 | SK-103 | 第２層 | | 町 | ラクチトール・トレハロース含浸法 |

（3）図面・写真の保管と資料撮影、写真のデジタル化

発掘調査に伴う現場写真と図面については、下表のとおりである。また、写真のデジタル化は、唐古・鍵考古学ミュージアム展示品関係のカラーポジ４×５フィルム47枚をデジタル化するとともに既存のプロフォトCD30枚をTIFF変換した。

【図面・写真の保管数量】

| 調査番号 | 遺　跡　名 | 調査次数 | 図　面 | | 35㎜ | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | カラーポジ | | モノクロネガ | |
| | | | 現場 | 遺物 | シート数 | コマ数 | シート数 | コマ数 |
| H24-01 | 羽子田遺跡 | 第37次調査 | 8 | 0 | 5 | 99 | 3 | 98 |
| H24-02 | 十六面・薬王寺遺跡 | 第29次調査 | 3 | 0 | 1 | 10 | 1 | 10 |
| H24-03 | 十六面・薬王寺遺跡 | 第30次調査 | 100 | 0 | 33 | 660 | 20 | 670 |
| H24-04 | 唐古・鍵遺跡 | 第113次調査 | 20 | 0 | 6 | 104 | 3 | 100 |
| H24-05 | 黒田遺跡 | 第3次調査 | 3 | 0 | 2 | 26 | 1 | 26 |
| H24-06 | 多遺跡 | 第25次調査 | 4 | 0 | 2 | 37 | 1 | 37 |
| H24-07 | 保津・宮古遺跡 | 第40次調査 | 5 | 0 | 2 | 37 | 1 | 37 |
| H24-08 | 常楽寺推定地 | 第8次調査 | 4 | 0 | 2 | 31 | 1 | 30 |
| H24-09 | 保津・阪手道 | 第1次調査 | 6 | 0 | 3 | 49 | 2 | 49 |
| H24-10 | 寺内町遺跡 | 第13次調査 | 5 | 0 | 3 | 46 | 2 | 46 |
| H24-11 | 保津・宮古遺跡 | 第41次調査 | 3 | 0 | 1 | 15 | 1 | 16 |
| H24-12 | 平野氏陣屋跡 | 第14次調査 | 3 | 0 | 2 | 31 | 1 | 31 |
| S-201201 | 十六面・薬王寺遺跡 | 試掘調査 | 19 | 0 | 8 | 147 | 4 | 146 |
| S-201202 | 千代遺跡 | 試掘調査 | 4 | 0 | 2 | 35 | 1 | 35 |
| R-201226 | 唐古・鍵遺跡 | 工事立会 | 6 | 0 | 1 | 16 | 1 | 19 |
| 計 | | | 193 | 0 | 73 | 1,343 | 43 | 1,350 |

【写真撮影一覧】

| 種　類 | 資料名・内容 | フィルム（４×５） | カット数 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| 考古遺物 | 十六面・薬王寺遺跡土器ほか | カラーポジ | 17 | 春季企画展<br>「たわらもと2013発掘速報展」 |
| | 保津・宮古遺跡第1次調査土器・石器 | カラーポジ<br>モノクロネガ | 2<br>28 | 報告書用 |
| | 唐古・鍵遺跡ほか木製品 | カラーポジ<br>モノクロネガ | 4<br>60 | 保存処理用 |
| 計 | | カラーポジ<br>モノクロネガ | 23<br>88 | |

（４）図書の受領

平成24年度は、文化財保存課と唐古・鍵考古学ミュージアムに関係諸機関・個人（271機関等）から963冊の図書の寄贈を受けた。また、図書の購入は12冊である。

【受領図書】

| 分　類 | 報告書 | 概　報 | 現説資料 | 年　報 | 館　報 | 図　録 | パンフレット | 紀　要 | 会　報 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 冊　数 | 467（１） | 62 | 1 | 65 | 22 | 61 | 38 | 47 | 6 |

| 分　類 | 論文集 | たより | 発表資料 | 単行本 | 雑 誌 | 目　録 | その他 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 冊　数 | 5 | 62 | 4 | 11 | 6 | 3 | 40（２） | 900 |

※　上記冊数には、２部以上の寄贈63冊を含んでいない。　※　（　）の数字は、CD-ROM２枚、DVD１枚の枚数である。

## ２．遺跡・文化財の保護

（１）町指定文化財

平成24年度において、小林敏良氏所蔵の古文書類１件（1,132点）を田原本町文化財保護審議会に諮問した。当審議会の答申を受け、町の指定文化財として台帳に登録した。これで町指定文化財は、６件となった。

【田原本町文化財保護審議会　委員】

| 分　野 | 氏　名 | 備　考 |
|---|---|---|
| 歴　史 | 和田　萃 | 委員長 |
| 建　築 | 林 清三郎 | |

| 分　野 | 氏　名 | 備　考 |
|---|---|---|
| 考古学 | 石野 博信 | |
| 考古学 | 寺澤　薫 | |

| 分　野 | 氏　名 | 備　考 |
|---|---|---|
| 歴　史 | 谷山 正道 | |
| 彫　刻 | 鈴木 喜博 | |

【町指定文化財一覧】

| 台帳番号 | 種　別 | 名称及び員数 | 所有者 | 時　代 | 指　定年月日 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 有形文化財（考古資料） | 「楼閣」が描かれた土器片　３点<br>唐古・鍵遺跡第47・77次調査出土 | 田原本町 | 弥生時代（中期） | 平成20年３月24日 |
| 2 | 有形文化財（考古資料） | 翡翠製勾玉と鳴石容器（蓋付）　一式<br>唐古・鍵遺跡第80次調査出土<br>1．翡翠製勾玉　２点<br>1．鳴石容器　１点<br>1．容器蓋（土器甕片）１点 | 田原本町 | 弥生時代（中期） | |
| 3 | 有形文化財（彫刻） | 木造十一面観音立像　一躯 | 法貴寺自治会 | 室町時代（天文10年／1541年） | |
| 4 | 有形文化財（古文書） | 平野権平（長泰）宛豊臣秀吉感状<br>1．平野権平宛羽柴秀吉判物<br>（天正十一年六月五日）　折紙１通<br>2．平野権平宛豊臣秀吉朱印状<br>（文禄四年八月十七日）　折紙１通<br>附　収納箱 内箱･外箱　包紙（２は２枚有り） | 福岡洋介 | 1．安土桃山時代（天正11年／1583年）<br>2．安土桃山時代（文禄４年／1595年） | 平成20年12月17日 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 有形文化財<br>（古文書） | 寶陀山補巌禅寺納帳<br>1. 寶陀山補巌禅寺納帳 その１<br>2. 寶陀山補巌禅寺納帳 その２<br>3. 寶陀山補巌禅寺納帳 その３<br>4. 寶陀山補巌禅寺納帳 その４<br>附　補巌禅寺開山支派 | 補巌寺 | 1. 室町時代<br>（明応７年／1498年）<br>2. 室町時代<br>（大永末年頃）<br>3. 室町時代<br>（永禄末年頃）<br>4. 室町時代<br>（元亀３年／1572年）<br>附　江戸時代 | 平成22年<br>12月22日 |
| 6 | 有形文化財<br>（古文書） | 小林家文書　　1,132点<br>附 諸書物入木箱　　１点 | 小林敏良 | 桃山～昭和時代<br>附　江戸時代<br>（天保８年／1837年） | 平成24年<br>９月27日 |

小林家文書

種　　別　有形文化財（古文書）

名称及び員数　「小林家文書」1,132点

附　諸書物入木箱　１点

所　在　地　磯城郡田原本町大字小室326番

所　有　者　小林 敏良

所有者の住所　磯城郡田原本町大字小室326番

寸　　法　附　諸書物入木箱　　幅30㎝・奥行40㎝・高さ30㎝

目　録　等　全1,132点の目録は、『小林家文書目録』（平成24年６月）に代える。

時　　代　「小林家文書」　桃山～昭和時代

附　諸書物入木箱　江戸時代

説　　明　小林家が所在する「小室」は、田原本村の「本郷」にあたる集落であり、当家は、江戸時代から明治前期にかけて、同村の庄屋や年寄、戸長や副戸長をつとめた家柄であった。その関係で、当家には当該期の村方文書を中心に、多くの文書が伝存しており、総点数は若干の私文書も含めて1,132点を数える。

小林家文書のなかで最も古い年代の文書は、文禄四年（1595）の「大和国十市郡田原本御検地帳」（写）であり、これによれば、当時村内には「小室」と楽田寺の周辺と中世城館の周辺にそれぞれ集落が存在していたことが判明する。この年から当村は、「賤ヶ岳の七本槍」として有名な平野長泰の領地となったが、慶長七年（1602）に長泰が教行寺を誘致したことに伴い、寺内町が形成されるようになった。その後、村内の町場は二代長勝の入部と陣屋の建設（慶安元年〔1648〕に完成）、正保四年（1674）の教行寺の退去に伴って、旗本平野氏（交代寄合）の陣屋町に衣替えしながら、拡大・発展するようになっていった。

中街道が村内を南北に貫通し、今里浜にも近かった当村は、奈良盆地中央部における交通や流通の要衝にあたっており、17世紀半ば以降には、人々の往来や商取引の盛行に伴ってさらに活況を呈するようになった。地域経済圏の中心地として、また遠隔地取引や中継取引の拠点として、大きな役割を果たすことになった

のである。

小林家文書について、第一に注目されるのは、こうした特色を有する田原本村の、太閤検地時点での集落の存在形態やその後の町場の形成・発展過程、町方のあり方や村方との関係などがうかがえる貴重な文書が伝存していることである。文禄検地帳の写や、正徳四年（1714）の「町方覚日記」、明和五年（1768）・安永八年（1779）・文政四年（1821）の「惣町分并毛付畝付物成高・南新地大門町畝付取米帳」、寛政二年（1790）の出作百姓との出入一件「返答書」などが、その代表的なものである。

第二に注目されるのは、旗本平野氏（明治元年〔1868〕からは大名）の領地支配の拠点となっていた陣屋を描いた絵図や、廃藩置県後の郭内地の処分、秩禄処分に関する文書がみられることである。また、安永七年（1778）から寛政三年（1791）にかけての「御触書之写」がまとまって残っており、領主が「下情」にも耳を傾けようとしたことがうかがえる明治三年（1870）の「〔藩庁定書〕」も興味深い。

第三に注目されるのは、村方に関する文書が、江戸時代を中心に豊富に存在していることである。その内容は、土地・租税・村政・戸口・水利・産業・金融・民衆運動・習俗・寺社など、多くの分野にわたっており、田原本村の様相を明らかにするうえで、不可欠な文書群といえる。なかでも、安永六年（1777）から明治四年（1871）にかけての各年度の「田原本村割付」をはじめ、租税関係の文書が多く、土地関係では、寛永十二年（1635）・正保二年（1645）・延宝二年（1674）の「名寄帳」や、延宝七年（1679）の「小物成場検地帳」などが残っている。

第四に注目されるのは、廃藩置県後、明治十年代前半にかけての行政のあり方や当村の様子がうかがえる文書も、かなり存在していることである。明治五年（1872）から同十三年（1880）にかけての布達類や、「物産取調帳」をはじめとする調査報告書類、願書類がその中心であり、本県最初の新聞である「日新記聞」が、第４号を除いて全て残っていることも特筆される。

第五に注目されるのは、村の様子を視覚的に捉えることができる絵図類が多く存在していることである。そのほとんどは小字図であるが、元禄十七年（1704）と明治十五年（1882）のそれは全村図である。なかでも詳細な前者は貴重で、今後の活用が期待される。

このような諸特徴を有する小林家文書は、かねてより注目され、主として歴史地理学の研究者らによって活用されてきた。また、『田原本町史』の編纂に際しても調査・活用され、主要な文書計33点が、翻刻のうえ昭和61年（1986）と同63年（1988）に刊行された史料編に収載されている。

以上のように、小林家文書は、本町の中心地である田原本町の歴史を解き明かすうえで不可欠な文書群として高い価値を有しており、町指定文化財として一括指定することが適切である。

小林家文書　田原本村割付

附　諸書物入木箱

## 3．講座

成人向けの講座として、考古学実践講座の講演を３回開催した。また、小中学生向けの体験講座を夏に開催した。考古学実践講座では大和の弥生集落研究最前線と題し、県内の弥生時代に営まれた遺跡に関する最新情報や新知見について、各講師を招いて講演をおこなった。チャレンジ子ども弥生探検隊では、高麗石をサンドペーパーで加工する勾玉づくり体験を実施した。

【考古学実践講座】

| 実施日 | 内　容 | | 講　師 | 受講者数 |
|---|---|---|---|---|
| １月26日（土） | 大和の弥生集落研究最前線 | 平城京下層に眠る弥生集落 | 奈良市埋蔵文化財調査センター<br>秋山　成人 氏 | 33名 |
| ２月23日（土） | | 矢田丘陵周辺の弥生集落 | 大和郡山市教育委員会<br>十文字　健 氏 | 29名 |
| ３月16日（土） | | 曽我川流域の弥生集落 | 橿原市教育委員会<br>松井　一晃 氏 | 45名 |
| ３日間 | ３講演 | | | 107名 |

【チャレンジ子ども弥生探検隊】

| 実施日 | 内　容 | | 会　場 | 参加者数 |
|---|---|---|---|---|
| ８月22日（水） | 体験講座 | 勾玉をつくろう | 陶芸室・工作室 | 40名 |

十文字　健 氏　講演

松井　一晃 氏　講演

勾玉をつくろう①

勾玉をつくろう②

## ４．学校教育等への支援

（１）小学校出前授業・教材貸出

町内小学校から依頼を受け、総合的学習の時間及び社会科等の授業として、以下内容の出前授業をおこなった。これらの児童の作品や学習成果は、２月に開催した「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」にて公開し、314名が観覧した。

【出前授業】

| 実　施　日 | 学校・学年 | 児　童　数 | 内　　容 |
|---|---|---|---|
| ４月18日（水） | 北小学校　６年 | ２クラス（47名） | ミュージアム見学・勾玉づくり |
| ５月25日（金） | | | 火熾し・赤米炊飯・脱穀 |
| 10月12日（金） | | | 土器づくり |
| 11月30日（金） | | | 土器の野焼き |
| ７月４日（水） | 東小学校　６年 | １クラス（22名） | ミュージアム見学・勾玉づくり |
| 10月５日（金） | | | 土器づくり |
| 12月11日（火） | | | 火熾し・赤米炊飯・土器の野焼き |
| ６月１日（金） | 南小学校　６年 | ２クラス（59名） | 勾玉づくり |
| 10月11日（木） | | | 土器づくり |
| 11月16日（金） | | | 火熾し・土器野焼き |
| ６月25日（月） | 平野小学校　６年 | ２クラス（51名） | 土器づくり |
| 11月９日（金） | | | 火熾し・土器の野焼き・赤米炊飯 |
| ４月20日（金） | 田原本小学校　６年 | ５クラス（133名） | ミュージアム見学 |
| ５月30日（水） | | | 火熾し・赤米炊飯 |
| ６月８日（金） | | | 勾玉づくり |
| ６月15・22日（金） | | | 土器づくり |
| 17日間 | 12クラス（延べ1,566名） | | メニュー延べ26 |

小学校出前授業（東小学校）

小学校出前授業（南小学校）

（２）中学校職場体験学習

中学生の職場体験学習として、田原本中学校・北中学校の生徒を受け入れ、文化財保存課と唐古・鍵考古学ミュージアムで体験学習を実施した。

【体験学習】

| 期　　間 | 学　校　名 | 内　　容 | 人　数 |
|---|---|---|---|
| 11月６・８・９日 | 田原本中学校 | 土器洗浄・遺物選別・石器の整理・土器拓本・ミュージアム受付 | ２名 |
| 11月13・14・15日 | 北中学校 | | ２名 |
| ６日間 | ２学校 | 延べ10メニュー | 延べ12名 |

（３）大学の学外授業

奈良大学の通信教育の課外授業として、４回受け入れ、下記内容の授業をおこなった。

【学外授業】

| 実　施　日 | 内　　容 | 人　　数 |
|---|---|---|
| ７月15日（日） | 奈良大学　通信教育課程「文化財学講読Ⅱ」<br>唐古・鍵遺跡の現地説明<br>唐古・鍵考古学ミュージアムの概要説明・展示品解説 | 120名 |
| ８月25日（土） | | 70名 |
| ２月９日（土） | | 50名 |
| ３月９日（土） | | 50名 |
| ４日間 | | 計290名 |

中学校職場体験学習（田原本中学校）

奈良大学通信教育

（４）講師の派遣

前記以外に、教育委員会等の事業として下記のとおり職員を派遣した。

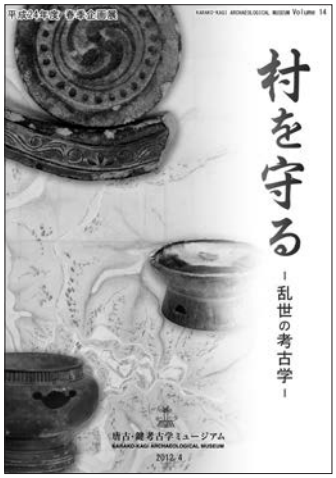
| 実施日 | 講座名等 | 演　題 | 講　師 |
|---|---|---|---|
| ５月12日（土） | 奈良市埋蔵文化財センター<br>市民考古サポーター | 弥生土器の見方 | 藤田 |
| ６月25日（月） | 同志社大学 文化情報学部「歴史文化情報入門」 | 弥生土器の見方 | 藤田 |
| ７月13日（金） | 田原本町教育委員会事務局生涯教育課<br>郷土の歴史教室 | 田原本町の最近の発掘成果 | 奥谷 |
| 10月28日（日） | 田原本町教育委員会事務局生涯教育課<br>弥生の里文化講座 | 羽子田遺跡の変遷を考える | 清水 |
| 11月11日（日） | 天理市櫟本校区生徒学習推進委員会 | 唐古・鍵遺跡について | 藤田 |
| 11月22日（木） | 同志社女子大学 現代社会学部「考古学Ⅱ」 | 弥生時代の環濠集落 | 藤田 |
| ３月２日（土） | ＪＲ東海 奈良学文化講座　ウォーク | 大和川畔から“国中”の歴史を歩く | 藤田 |

## ５．刊行物一覧

本年度は、下記３点の書物を印刷した。

【刊行物名】

| 書　　籍　　名 | 発行日 | 部　数 | 内　　容 |
|---|---|---|---|
| 唐古・鍵考古学ミュージアム春季企画展図録<br>『村を守る』 | 2012年4月 | 2,500部 | 弥生から戦国時代の、環濠をめぐらせた村々や城郭についての展示 |
| 『田原本町文化財調査年報21　2011年度』 | 2013年3月 | 700部 | 平成23年度の文化財事業の報告 |
| 田原本町文化財発掘調査報告書　第６集<br>『保津・宮古遺跡　第１次発掘調査報告』 | 2013年3月 | 500部 | 昭和63年度におこなった保津・宮古遺跡第１次発掘調査の報告書 |



# 6．資料の活用

## （1）資料の貸出

平成24年度は、３機関に延べ６遺跡221点の遺物等を貸出した。貸出内容は、唐古・鍵遺跡の出土品が大半である。

【資料貸出一覧】

| 貸出先／展覧会名／期間 | 遺　跡　名 | 資　　料　　名 | 点数 |
|---|---|---|---|
| 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／『大和を掘る30』<br>平成24年７月14日～９月２日 | 唐古・鍵遺跡 | 石鏃７・石錐２・石剣１・大型石庖丁１・環状石斧１・碧玉製管玉１・ガラス製小玉１・銅鏃２・用途不明銅製品２ | 27点 |
| | 十六面･薬王寺遺跡 | 弥生土器４・土師器３・ミニチュア土器１・円筒埴輪１ | |
| 神戸市立博物館／『国宝　桜ケ丘銅鐸の謎に迫る』<br>平成24年７月14日～９月２日 | 唐古・鍵遺跡 | 絵画土器５・高坏形土製品１・送風管４・土製銅鐸鋳型外枠２・銅鐸形土製品１・石製銅鐸鋳型２ | 22点 |
| | 清水風遺跡 | 絵画土器７ | |
| 岡山県立博物館／『邪馬台国の時代―吉野ヶ里から唐古・鍵、纒向まで―』<br>平成24年10月19日～11月25日 | 唐古・鍵遺跡 | 弥生土器７・絵画土器５・高坏形土製品１・真土・鉱滓３・送風管１・土製銅鐸鋳型外枠２・銅鐸形土製品２・石鏃５・石庖丁未成品４・石庖丁１・磨製石剣１・石製銅鐸鋳型２・木製盾１・卜骨２・骨鏃１・銅鐸片１・翡翠製勾玉（複製）２・褐鉄鉱容器（複製）１・褐鉄鉱容器蓋（複製）１・鞘入り石剣（複製）１・鞘（複製）１・石製銅鐸鋳型（復元）１・土製武器鋳型（復元）１・真土（復元）１ | 55点 |
| | 清水風遺跡 | 絵画土器７ | |
| 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／『弥生時代の石器－リサイクルの先駆け―』<br>平成25年２月２日～３月24日 | 唐古・鍵遺跡 | 打製石鏃９・サヌカイト原石５・サヌカイトチップ（一式）10・スクレイパー１・スリキリナイフ２・サヌカイトハンマー１・鞘入り石剣１・石鍬１・石匙１・石錐３・石戈１・尖頭器１・打製石剣３・不定形石器２・石庖丁未成品８・石庖丁12・流紋岩原石１・石斧27・敲石５・石皿１・転用石錐１・石製紡錘車１・石槌１・石製投弾２・磨製石剣８・磨製石戈１・磨製石鏃３・磨石１・紅簾片岩原石１・石鋸１・鞘１・鹿角ハンマー１ | 117点 |
| ３機関／延べ会期期間日数191日 | 延べ６遺跡 | | 221点 |

【種別による貸出点数】

| 土器 | 埴輪 | 土製品<br>焼土 | 石器 | 木器 | 金属器 | 骨角器 | ガラス | 骨・貝 | 種・穀物 | レプリカ<br>模型 | 総点数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 36点 | １点 | 17点 | 143点 | ２点 | ５点 | ４点 | １点 | ０点 | ０点 | 12点 | 221点 |

【資料の継続貸出】

| 貸出先／展示名／期間 | 遺　跡　名 | 資　料　名 | 点数 |
|---|---|---|---|
| 香芝市二上山博物館　常設展示<br>【貸出期間】平成24年４月１日～平成25年３月31日 | 唐古・鍵遺跡 | 弥生土器壷・甕・高坏・槍先形石器 | ５点 |
| 大阪府立弥生文化博物館　常設展示<br>【貸出期間】平成24年４月１日～平成25年３月31日 | 唐古・鍵遺跡 | 土弾 | ２点 |
| 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　常設展示<br>【貸出期間】平成24年４月１日～平成25年３月31日 | 唐古・鍵遺跡 | 石製銅鐸鋳型・土製銅鐸鋳型外枠・土製武器鋳型外枠・土製不明鋳型外枠・高坏形土製品・送風管 | 13点 |
| ３件 | 延べ３遺跡 | | 20点 |

（２）写真掲載・撮影

写真の貸出及び掲載（転載含む）は51件261点であった。写真掲載の内容は、唐古・鍵遺跡の出土遺物や笹鉾山２号墳出土の埴輪、唐古・鍵考古学ミュージアム展示風景の利用度が高い。

【写真掲載・撮影一覧】

| 貸　出　先 | 掲　載　書　籍　等 | 名称（遺跡名） | 資　料　名 | 点数 |
|---|---|---|---|---|
| ㈲アート・エフ | 『2013センター過去問題集　日本史Ｂ』 | 笹鉾山２号墳 | 馬形埴輪 | １点<br>（転載） |
| ㈱アド近鉄 | 『大和を歩こう　2013年度版』 | 唐古・鍵遺跡 | 復元楼閣 | １点 |
| 尼崎市教育委員会 | 図録『弥生の鉄―石器から鉄器へ―』 | 唐古・鍵遺跡 | 復元鉄斧と削りくず | １点 |
| 糸魚川市教育委員会 | 『ヒスイってなんだろう』 | 唐古・鍵遺跡 | 褐鉄鉱容器と翡翠製勾玉 | １点 |
| 内倉武久 | 『熊襲は列島を席巻した』 | 笹鉾山２号墳 | 馬形埴輪と馬曳き人物埴輪 | １点 |
| ㈱エヌ・ティーエス | 『鳥の骨探』電子版 | 唐古・鍵遺跡 | 鳥骨 | １点<br>（転載） |
| ㈱大月書店 | 『シリーズ　明日の授業に使える中学校社会科』（全３巻） | 唐古・鍵遺跡 | 籾圧痕のある土器・農作業の一年イラスト・木製農具・穂束・絵画土器・土器絵画の画題イラスト・鳥装のシャーマン想像イラスト・石器・環濠・唐古・鍵ムラ俯瞰イラスト・環濠の掘削風景イラスト | 11点 |
| 海青社 | 『木の考古学―出土木製品用材データベース―（CD付）』 | 唐古・鍵遺跡 | 木製容器集合・竪杵出土状況 | ２点 |
| 岡山県立博物館 | 特別展「邪馬台国の時代―吉野ヶ里から唐古・鍵、纒向まで―」関連印刷物 | 唐古・鍵遺跡 | 楼閣が描かれた土器片・航空写真・環濠（２）・絵画土器（５）・大型建物遺構（２）・大型建物模型・炉跡状遺構・送風管と高坏状土製品・銅鐸片・石製銅鐸鋳型・復元石製銅鐸鋳型・土製銅鐸鋳型外枠（３）・真土・復元土製武器鋳型・銅鐸形土製品（２）・吉備から運ばれた大壷・卜骨・褐鉄鉱容器と翡翠製勾玉・石鏃集合・鞘入り石剣・盾・盾と戈を持つ人物模型 | 31点 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 香芝市二上山博物館 | 『邪馬台国時代の東海と近畿』 | 唐古・鍵遺跡 | 褐鉄鉱容器と翡翠製勾玉 | 1点<br>(転載) |
| 葛城市歴史博物館 | 図録『竹内街道の成立―大道を置く―』 | 藤原京<br>右京五条四坊 | 下ツ道側溝出土遺物（橿原市教育委員会蔵） | 1点 |
| ㈶元興寺文化財研究所 | 図録『文化財保存・修復の半世紀』 | 羽子田遺跡 | 牛形埴輪 | 1点 |
| 笹田織物㈱ | 会社案内 | 唐古・鍵遺跡 | 復元楼閣 | 1点 |
| ㈳磯城郡シルバー人材センター | 『磯城郡シルバーだより　新春号』 | 唐古・鍵遺跡 | 復元楼閣 | 1点 |
| ㈱学生社 | 『国指定　史跡事典』 | 唐古・鍵遺跡 | 楼閣が描かれた土器片 | 1点<br>(転載) |
| ㈱学研教育出版 | 『学びのイノベーション事業（情報通信技術活用実証研究）中学校デジタル教材』 | 唐古・鍵遺跡 | 絵画土器・弥生土器（2） | 3点<br>(転載2) |
| 学校法人　河合塾 | 『2012年度　第2回センタートレーニングテスト<日本史>（高卒生対象）』 | 唐古・鍵遺跡 | 復元楼閣・楼閣を描いた土器片 | 2点 |
| クラブツーリズム㈱ | 『おとなの寺旅　1月10日号』 | 千萬院 | 木造不動明王立像 | 1点 |
| 神戸市立博物館 | 図録『国宝　桜ケ丘銅鐸の謎に迫る』 | 唐古・鍵遺跡 | 石製銅鐸鋳型（2）・土製銅鐸鋳型外枠（2）・高坏形土製品・送風管（4）・銅鐸形土製品・絵画土器（11） | 21点 |
| 小松市埋蔵文化財センター | 夏期特別展「重要文化財矢田野エジリ古墳出土埴輪の世界」展示パネル | 笹鉾山2号墳 | 馬形埴輪と馬曳き人物埴輪 | 1点 |
| ㈱新泉社 | シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊04『古墳時代ガイドブック』 | 笹鉾山2号墳 | 馬形埴輪と馬曳き人物埴輪集合 | 1点 |
| 光本順 | 『シンポジウム記録9』 | 清水風遺跡 | 絵画土器 | 1点 |
| 杉村好章 | 『魏志倭人伝をそのまま読む』（Webページ） | 唐古・鍵遺跡 | 縫針・卜骨 | 2点 |
| 田中陽子 | 『ミネラ20号』 | 唐古・鍵遺跡 | 褐鉄鉱容器と翡翠製勾玉（2）・翡翠製勾玉（2） | 4点 |
| | 『たまふり開運の法則　日本古来のパワーストーン勾玉の使い方』 | 唐古・鍵遺跡 | 褐鉄鉱容器と翡翠製勾玉（2）・翡翠製勾玉（2） | 4点 |
| 田原本町健康福祉課 | 『更正保護　まほろば　奈良県』 | 唐古・鍵遺跡 | 復元楼閣 | 1点 |
| 田原本町古事記1300年紀事業実行委員会 | 『古事記1300年紀プロモーションビデオ（仮）』 | 唐古・鍵遺跡 | 唐古・鍵遺跡環濠集落復元イラスト・復元楼閣 | 2点 |
| 実業印刷㈱ | 『古事記子ども本（仮）』 | 唐古・鍵遺跡 | 楼閣が描かれた土器片 | 5点 |
| | | 唐古・鍵考古学ミュージアム | 唐古・鍵考古学ミュージアム第2室展示風景・マツリの風景模型（3） | |
| 天理市教育委員会 | 『ひみこの里　磯城・山の辺の古墳・遺跡をたずねて』 | 唐古・鍵遺跡 | 楼閣が描かれた土器片・復元楼閣 | 3点 |
| | | 唐古・鍵考古学ミュージアム | 唐古・鍵考古学ミュージアムエントランス | |
| ㈱童心社 | 『遺跡から調べよう！弥生時代』 | 唐古・鍵遺跡 | 木製農耕具（2）・木製臼・竪杵・絵画土器（3）・土製銅鐸鋳型外枠・炭化籾・炭化米・楼閣が描かれた土器片（2）・唐古・鍵遺跡航空写真（2） | 14点 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ㈱童心社 | 『遺跡から調べよう！②　弥生時代』 | 唐古・鍵遺跡 | 復元楼閣・土器絵画実測図 | 2点 |
| 中西秀和 | 町内看板 | － | 寺内町遺跡第10次調査終了報告書 | 1点 |
| 奈良県立橿原考古学研究所 | 『奈良県立橿原考古学研究所要覧』（中国語版・韓国語版）（仮） | 唐古・鍵遺跡 | 鶏頭形土製品・土製銅鐸鋳型外枠 | 2点（転載1） |
| 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 | 速報展「大和を掘る30」展示パネル | 十六面･薬王寺遺跡 | 第27次調査区全景・第28次調査溝・第28調査次方形周溝墓 | 5点 |
| | | 唐古・鍵考古学ミュージアム | 唐古・鍵考古学ミュージアムエントランス・展示風景 | |
| | 図録『弥生時代の石器―リサイクルの先駆け―』 | 唐古・鍵遺跡 | 石器（14） | 15点 |
| | | 唐古・鍵考古学ミュージアム | 実験考古学VTR（木器） | |
| | 図録『5世紀のヤマト』 | 秦楽寺遺跡 | 玉類集合・玉砥石・ガラス玉・滑石製玉類 | 4点 |
| 日新航空サービス㈱ | 『ツアーパンフレット』 | 唐古・鍵遺跡 | 絵画土器・復元銅鐸・復元楼閣 | 4点 |
| | | 羽子田遺跡 | 牛形埴輪 | |
| ㈱ネクサス | テレビ東京「なんでも鑑定団」 | 唐古・鍵遺跡 | 絵画土器（4） | 4点 |
| ㈲美笑企画 | 『「古事記」がよくわかる事典』 | 笹鉾山2号墳 | 馬形埴輪と馬曳き人形埴輪集合 | 1点 |
| ㈱フクト | 『夏の生活　社会　歴史Ⅰ』平成24年度出版 | 唐古・鍵遺跡 | 絵画土器 | 1点（転載） |
| | 『冬の生活　課題テスト　1年社会』 | 唐古・鍵遺跡 | 絵画土器 | 1点（転載） |
| | 『夏の生活　社会　歴史Ⅰ』平成25年度出版 | 唐古・鍵遺跡 | 絵画土器 | 1点（転載） |
| ㈱プランディット | 『2013日本史Ｂ総合問題演習進研模試　3年生6月過去問題』 | 唐古・鍵遺跡 | 復元楼閣 | 1点（転載） |
| 文化庁文化財部記念物課 | 『発掘調査のてびき　各種遺跡発掘編』 | 唐古・鍵遺跡 | 高坏形土製品と送風管 | 1点 |
| ㈱ベストセラーズ | 月刊『歴史人』6月号 | 唐古・鍵遺跡 | 楼閣が描かれた土器片・機織具・竪櫛 | 3点 |
| ㈱メルプランニング | 『学研まんが　NEW日本の歴史』シリーズ第1巻　国の成り立ち（仮）（旧石器～古墳時代） | 唐古・鍵遺跡 | 弥生土器集合 | 1点 |
| 柳田康雄 | 『東日本の弥生時代青銅器祭祀の研究』雄山閣 | 唐古・鍵遺跡 | 銅矛片 | 2点 |
| | | 清水風遺跡 | 銅鏡片 | |
| ㈱悠工房 | 『社会科　資料集　6年』 | 唐古・鍵遺跡 | 弥生土器（2） | 2点 |
| ㈱読売奈良ライフ | 『Yomiっこ2月号』 | 唐古・鍵考古学ミュージアム | 唐古・鍵考古学ミュージアムエントランス | 1点 |
| 龍谷大学龍谷ミュージアム | 図録『“絵解き”ってなぁに？～語り継がれる仏教絵画～』 | 安楽寺 | 絹本著色融通念仏縁起絵 | 1点 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ㈱同成社 | 日本の遺跡シリーズ45『唐古・鍵遺跡』 | 唐古・鍵遺跡 | 楼閣が描かれた土器片（３）・復元楼閣・区画溝・環濠（２）・石製銅鐸鋳型と復元品・石製銅鐸鋳型・土製銅鐸鋳型外枠（２）・土製武器鋳型外枠・土製不明鋳型外枠・高坏形土製品・送風管・土製鋳型外枠分布図・銅鐸鋳造実験・褐鉄鉱容器と翡翠製勾玉・差し牙のあるイノシシ下顎骨・鶏頭形土製品・第１次調査風景・第３次調査風景・航空写真・末永雅雄氏記念講演・調査成果図・調査成果表・縄文晩期と弥生前期の土器・木器貯蔵穴（２）・大型建物跡（２）・大型建物跡の柱配置図（２）・大型建物跡の柱（２）・大型建物と区画溝・木棺墓・土器棺墓・方形周溝墓・復顔模型・橋脚・竪穴住居・ケヤキ原木・井戸枠（２）・井戸（２）・井戸供献土器・糞石・イノシシ下顎骨集積状況・青銅器鋳造工房跡・炉跡・環濠に投棄された土器群（２）・ネズミの爪跡が残る土器・絵画土器（３）・搬入土器（２）・井戸から出土した水差形土器と出土状況・サヌカイト原石集積状況・石器（７）・石戈柄・木製品・炭化布・編み具・青銅製品と鉱滓・玉類（３）・穂束と炭化米・動植物遺存体からみた唐古・鍵ムラの古環境・卜骨・河跡・唐古・鍵遺跡周辺の弥生遺跡の動向・唐古・鍵４号墳・中世豪族居館跡 | 87点 |
| | | 清水風遺跡 | 銅鏡片 | |
| | | 阪手東遺跡 | 方形周溝墓 | |
| | | 唐古・鍵考古学ミュージアム | 唐古・鍵考古学ミュージアム第２室展示風景 | |
| 51件 | | 延べ60遺跡等 | | 261点 |

（3）資料調査

本町所有・保管遺物について、下記の者による資料調査があった。

また、弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センターより大阪府立弥生文化博物館を通じて、唐古・鍵遺跡出土炭化米のDNA分析依頼があったため資料を提供し、分析を許可した。

【資料調査】

| 調　査　日 | 調　査　者 | 資　料　名 |
|---|---|---|
| 4月18日（水） | 黒沢浩 | 唐古・鍵遺跡　銅鐸形土製品 |
| 5月17日（木） | 東京大学大学院　設楽博己 | 唐古・鍵遺跡　人形土製品　羽子田遺跡　盾持人埴輪<br>笹鉾山2号墳　人物埴輪 |
| 6月22日（金） | 河野摩耶 | 唐古・鍵遺跡　朱付着土器　清水風遺跡　朱付着土器 |
| 9月10日（月）<br>～13日（木） | 東北大学植物園　鈴木三男　小林和貴<br>森林総合研究所　能城修一<br>㈱パレオ・ラボ　佐々木由香 | 唐古・鍵遺跡　編組製品・木製品 |
| 8月29日（水）<br>～30日（木） | 島根大学　鈴木圭 | 唐古・鍵遺跡　赤色物付着土器・赤色物付着石器<br>宮古北遺跡　朱精製鉢 |
| 8月17日（金）<br>～3月20日（水） | 奈良文化財研究所　丸山真史 | 唐古・鍵遺跡　動物遺存体 |
| 10月26日（金） | 香川県埋蔵文化財センター　乗松真也 | 唐古・鍵遺跡　丸玉 |
| 11月5日（月） | 日本学術振興会　東村純子 | 唐古・鍵遺跡　麻布 |
| 11月30日（金） | 立命館大学　金子岳 | 唐古・鍵遺跡　家形埴輪　羽子田遺跡　家形埴輪<br>保津岩田古墳　家形埴輪 |
| 1月17日（木） | 大韓文化財研究院 | 唐古・鍵遺跡　陶質土器・甑<br>保津・宮古遺跡　陶質土器 |
| 3月15日（金） | 徳島市立考古資料館　一山典 | 唐古・鍵遺跡　玉類 |

## 7．ボランティア組織

（1）ボランティア組織の概要

唐古・鍵遺跡を総合的に支援する任意ボランティア組織として、平成16年4月10日、「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」（愛称：唐古・鍵支援隊）が設立された。今年度の会員は、45名である。

主な活動は、唐古・鍵考古学ミュージアムの展示説明ガイドや小学校の総合的学習の支援や子ども会等を対象として考古学体験、ミュージアムへの勧誘活動、文化財保存課〈ミュージアム〉主催事業への支援等がある。活動については、4月の総会を経て、月例の運営委員会で検討され実施されている。また、「ものづくり教室」の部会を基本的に月2回おこない、新しい体験学習メニューの開発や体験学習教材の整備など、延べ26日249人が参加した。唐古・鍵遺跡においては団体向けに現地ガイドを実施し、4日間で延べ306人に対応した。

唐古・鍵遺跡現地においては、清掃活動にも取り組み、今年度は2回の清掃を実施した。

また、歴史・考古学の知識を活動に生かすため「弥生勉強会」を実施し、田原本町文化財保存課の藤田を講師に迎え、鴨都波遺跡や坪井・大福遺跡等の現地見学をおこなった。

【唐古・鍵支援隊の支援活動】

| 活　動　日 | 内　　容 | 主　　催 | 支援内容 | 活動人数 |
|---|---|---|---|---|
| 5月5日・3月21日　計2日間 | 春季企画展 報告会･講演会･ガイド研修会 | 文化財保存課 | 受付 | 4人 |
| 1月26日・2月23日・3月16日　計3日間 | 考古学実践講座 | | | 5人 |
| 8月22日 | チャレンジ子ども弥生探検隊　（勾玉をつくろう） | | 支援 | 8人 |
| 4月18日・4月20日・5月25日・5月30日・6月1日・6月8日・6月15日・6月22日・6月25日・7月4日・10月5日・10月11日・10月12日・11月9日・11月16日・11月30日・12月11日　計17日間 | 総合的学習（土器づくり・野焼き・火熾し・炊飯・脱穀・勾玉づくり） | 北小学校<br>平野小学校<br>田原本小学校<br>東小学校<br>南小学校 | 支援 | 148人 |
| 2月7日・2月8日・2月9日・2月10日・2月11日・2月12日　計6日間 | 田原本町内小学校の総合的な学習展示会 | 文化財保存課<br>支援隊<br>町内5小学校 | 受付<br>支援 | 30人 |
| 11月3日 | 文化祭（スタンプづくり） | 生涯教育課 | 支援 | 10人 |
| 7月28日・8月18日・9月15日・10月20日　計4日間 | 唐古・鍵遺跡コスモス栽培 | 総合政策課 | 支援 | 63人 |
| 延べ34日 | | 15団体 | | 268人 |

# Ⅲ．唐古・鍵考古学ミュージアム

# １．常設展示

（１）田原本ギャラリー　今回の逸品

田原本町内の遺跡から出土した埋蔵文化財や、古文書等の有形文化財を不定期に入れ替えながら展示公開している。また、解説パネルを併置し、展示品の特徴や意義などを説明している。

平成24年度は、６月まで第１回「龍を描いた弥生土器」を展示し、以降は第２回「渦巻文様のある聖なる壷」と題して連続渦文を付した短頸壷を展示した。

渦巻文様は世界各地にみられ、特に原始・古代においては神聖視されていることが多い文様である。アイルランドの墳丘墓（ニューグレンジ）の石、クレタ島クノッソス宮殿の壁画など地域・時代を超えて用いられる普遍的な文様のひとつで、日本においても縄文土器や土偶、弥生時代の祭器である銅鐸にも渦巻文様が描かれており、特別な文様として扱われている。

今回展示した渦巻文様のある短頸壷は口縁部を欠失しているが、この形態の土器は口縁部に注ぎ口が作られているものがあり、「水壷」的な用途が考えられる。また、短頸壷は弥生時代中期後半に多く見られると共に絵画も多く描かれるという特徴をもっている。

今回の短頸壷では絵画でなく、左右に渦が巻く「双頭渦文」が、胴部上半の全面にスタンプされている。このスタンプ文様は、タタキ板に文様を彫り込み、土器表面を何回も叩いた結果付けられたもので、重複しわかりにくくなっている。これは、渦巻文様を第三者に見せるためにスタンプしたのでなく、渦巻文様を短頸壷に封じ込める意図があったのではないかと思われる。水壷に邪気を祓う渦巻文様を施して封じ（叩き）込めることによって、「聖なる壷」としたのであろう。

【田原本ギャラリー展示品】

| 展示名 | | 展示品 | 展　示　期　間 |
|---|---|---|---|
| 第１回 | 龍を描いた弥生土器 | 弥生土器 広口壷（龍の絵画） | 平成23年11月～平成24年６月 |
| 第２回 | 渦巻文様のある聖なる壷 | 弥生土器 短頸壷（連続渦文） | 平成24年６月～ |

※　展示品の解説パネルは、唐古・鍵考古学ミュージアムのホームページでPDFファイルとして公開している。

「渦巻文様のある聖なる壷」

【第２回「渦巻文様のある聖なる壷」】

| 器　　種 | 短頸壷 |
|---|---|
| 登録番号 | MP－文様－0026 |
| 出土遺跡 | 唐古・鍵遺跡 |
| 調査次数 | 第48次調査 |
| 法　　量 | 残存高　31.0㎝ |
| | 胴部径　25.0㎝ |
| 時　　期 | 大和第Ⅳ－２様式 |

## ２．企画展・ミニ展示

（１）春季企画展「村を守る―乱世の考古学―」

内　容：近世以前の奈良盆地では、ほとんどの集落が周りを濠で囲んだ「環濠集落」の形態をとって自己防衛をしていたが、その大半は痕跡程度しか残っていない。今回の企画展では、遺跡や出土した遺物を通じて、環濠や環濠集落に注目しながら、村人たちがどのように自分たちの村を守って来たのかを探る展示をおこなった。

期　間：４月21日（土）～５月27日（日）

入館者：649名（企画展のみ）

【展示構成と主要展示品】（展示総数246点）

（Ⅰ）争乱の始まり（ケース③）

弥生土器、石鏃、勾玉（唐古・鍵遺跡ほか）

（Ⅱ）中世環濠集落と庄園（ケース①④）

土師器、黒色土器、瓦器、磁器、枡、青銅製品（若槻環濠、唐古・鍵遺跡、箸尾遺跡）

（Ⅲ）大和の在地武士（ケース②⑤～⑦）

土師器、瓦質土器、瓦器、陶磁器、土製品、瓦、石硯、鉄鏃、火蓋、鉄砲玉、銭貨（古市城跡ほか）

（Ⅳ）田原本町内の動向（ケース⑧～⑫）

土師器、黒色土器、瓦質土器、瓦器、陶磁器、香炉、瓦、鉄鏃、曲物容器（十六面･薬王寺遺跡ほか）

春季企画展チラシ

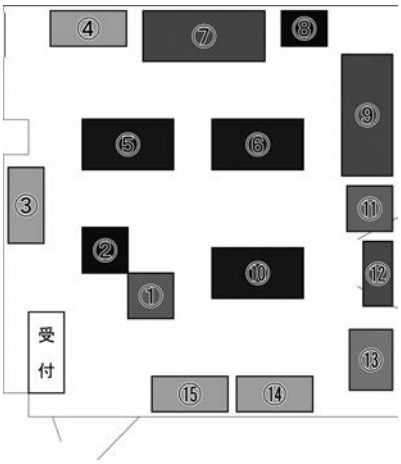
（Ⅴ）速報展（ケース⑬⑭）

弥生土器、土師器、籠目土器、黒色土器、石器、玉類、銅鏃（西竹田遺跡ほか）

（Ⅵ）再整理事業（ケース⑮）

絵画土器、記号土器、搬入土器、特殊土器、異形土器（唐古・鍵遺跡）

【展示ケースの配置】



展示風景

【借用遺物】

| 遺　　跡　　名（遺物名・点数） | 点　数 | 所　　蔵　　者 |
|---|---|---|
| 法貴寺遺跡（土師器皿２、瓦器埦１、白磁碗１、龍泉窯系輪花皿１、染付碗２、唐津鉄絵大皿１、唐津皿１）／十六面･薬王寺遺跡（土師器皿４、黒色土器１、瓦器埦２、青磁碗１、瓦質擂鉢１、瓦質火鉢１、瓦質茶釜１、瓦質香炉？１、天目茶碗１、香炉（瀬戸内系）１）／釜窪丈六堂遺跡（長頸壷１、高坏１、蓋１、勾玉２）／箸尾遺跡（黒色土器１、瓦器埦１） | 30点 | 奈良県立橿原考古学研究所 |
| 法貴寺遺跡（曲物容器１）／箸尾遺跡（銅印１） | ２点 | 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 |
| 古市城跡（土師器皿２、青磁碗１、青白磁蓋１、蔵骨器２、灯明具１、不明土製品１、石硯１、鬼瓦１、軒丸瓦１、軒平瓦１）／多聞城跡（軒丸瓦１、軒平瓦１、平瓦１） | 15点 | 奈良市教育委員会 |
| 若槻環濠（土師器皿１、瓦器埦２）／筒井城跡（土師器小形壷１、土師器皿４、土釜２、美濃小皿１、青磁碗１、鉄砲玉１） | 13点 | 大和郡山市教育委員会 |
| 龍王山城　南城（瓦質羽釜１、瓦器埦２、丸瓦２） | ５点 | 天理市教育委員会 |
| 十市城跡（土師器小皿３、青磁片２、白磁片１、瓦質火舎１） | ７点 | 橿原市教育委員会 |
| 桜井公園遺跡群（壷１、広口壷１、長頸壷１、小型無頸壷１、小型長頸壷１、ミニチュア無頸壷１、器台１） | ７点 | 桜井市教育委員会 |
| 越智遺跡（土師器皿２、瓦質羽釜１、瓦器埦１、湯呑茶碗型瓦器埦１、磚１） | ６点 | 高取町教育委員会 |
| 澤城跡（犬型土製品１、鉄鏃２、鉄砲玉１、火縄銃火蓋？１、銭貨４）／松山城跡（備前擂鉢１、塩焼壷１、景徳鎮碗１、唐津碗１、唐津碗？１、織部向付１、軒端飾瓦１） | 16点 | 宇陀市教育委員会 |
| 15遺跡等（77製品） | 101点 | ９機関等 |

【田原本町保管遺物１】

| 遺　跡　名 | 遺　　物　　名 | 点　数 |
|---|---|---|
| 唐古・鍵遺跡 | 土師器皿（１）、瓦器埦（１）、白磁碗（２）、瓦質風炉（１）、瓦質火鉢（１）、石鏃（５）、枡（１）、銅鋺（１）、銅鈴（１） | 14点 |
| 唐古東氏居館跡 | 雁又式鉄鏃（１） | 1点 |
| 唐古南氏居館跡 | 土師器皿（３）、瓦器埦（１）、瓦器坏（１） | 5点 |
| 法貴寺遺跡 | 土師器赤土器（37）、土師器白土器（17）、土師器灯明皿（１）、瓦質甕（１）、瓦質羽釜（１）、瓦質鍋（１）、瓦器埦（１）、灰釉天目茶碗（１）、鉄釉天目茶碗（１） | 61点 |
| 宮古前遺跡 | 瓦質仏花瓶（１） | 1点 |
| 保津・宮古遺跡 | 白磁碗（１） | 1点 |
| 金剛寺遺跡 | 土師器皿（９）、羽釜（１）、瓦質小壷（１）、瓦質羽釜（１）、瓦質擂鉢（１） | 13点 |
| 秦楽寺遺跡 | 青白磁唐子草花文梅瓶（１）、被熱瓦（１） | 2点 |
| ８遺跡 | 31製品 | 98点 |

【田原本町保管遺物２】

| 遺　　跡　　名 | | | 遺　　物　　名 | 点　数 |
|---|---|---|---|---|
| 速報展 | 唐古・鍵遺跡 | 第109次 | 土師器皿（1）、羽釜（1）、黒色土器（1） | 3点 |
| | 唐古・鍵遺跡 | 第111次 | 石剣（1）、石鏃（4）、環状石斧（1）、銅鏃（2）、銅鏃転用製品？（1）、不明青銅製品（1）、管玉（1）、ガラス製小玉（1） | 12点 |
| | 保津・宮古遺跡 | 第39次 | 壷（2）、甕（1）、高坏（1）、坏（1）、土師器皿（1）、瓦器椀（1） | 7点 |
| | 十六面･薬王寺遺跡 | 第27次 | 広口壷（1）、小型丸底壷（1） | 2点 |
| | 十六面･薬王寺遺跡 | 第28次 | 広口壷（2）、甕（1）、籠目土器（1）、ミニチュア土器（1）、円筒埴輪（1） | 6点 |
| | 西竹田遺跡 | 第4次 | 土師器皿（1）、黒色土器（1） | 2点 |
| 再整理 | 唐古・鍵遺跡 | 第22～33次 | 絵画土器（シカ3、櫂1、不明1）、記号土器1、搬入土器（伊賀1、伊勢湾岸1、近江1、瀬戸内2）、楕円形鉢（1）、朱？を入れた鉢（1）、鳥形土器（1）、飯蛸壷（1） | 15点 |
| | 5遺跡 | | 38製品 | 47点 |

【関連イベント】

| イベント名 | 内　　容 | 日時・場所 | 参加人数 |
|---|---|---|---|
| 報告会 | 奥谷　知日朗（田原本町教育委員会事務局文化財保存課 主事）「平成23年度の発掘調査成果について」 | 5月5日（土）午前10時～午後4時 研修室 | 42人 |
| 展示解説 | 清水　琢哉（田原本町教育委員会事務局文化財保存課 調査係長）「展示解説　田原本の中世について」 | | |
| 講演会 | 柳澤　一宏 氏（宇陀市教育委員会文化財保存課 課長補佐）「宇陀の城と城下―中世から近世への新たな展開―」 | | 44人 |
| | 福島　克彦 氏（京都府大山崎町歴史資料館 学芸員）「戦国期大和の地域権力と集落」 | | |

展示風景

展示ケース②

展示ケース⑦

展示ケース⑫

報告会（奥谷知日朗）

展示解説（清水琢哉）

講演会（柳澤一宏 氏）

講演会（福島克彦 氏）

（２）特別展示「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」

内　容：田原本町内の各小学校において、総合的な学習の時間を利用した土器づくりや赤米炊飯をはじめとする体験学習を実施している。今年度の学習成果である土器や勾玉をはじめ、児童らの感想文等を展示陳列した。

期　間：２月８日（金）～13日（水）

観覧者：314名（特別展示のみ）

【展示構成と内容】（展示期間：５日間／展示点数454点）

（Ⅰ）北小学校

土器、勾玉、感想文

（Ⅱ）平野小学校

土器、感想文

（Ⅲ）田原本小学校

土器、勾玉、感想文

（Ⅳ）南小学校

土器、勾玉、感想文

（Ⅴ）東小学校

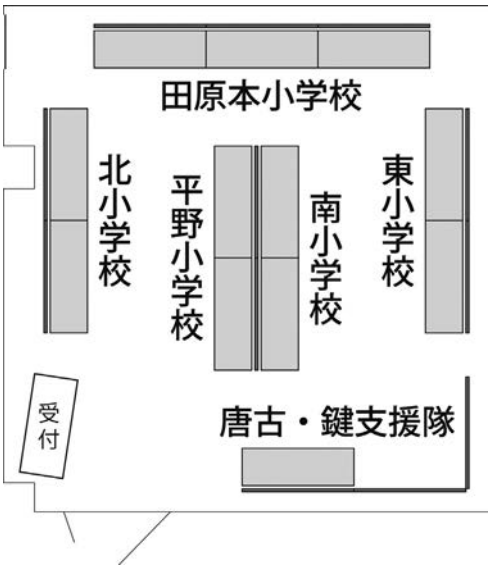
土器、勾玉、感想文、レポート

（Ⅵ）唐古・鍵支援隊

勾玉、炊飯用土器、五徳、火鑽臼、火鑽杵（舞錐･弓錐）、木製臼、竪杵、石庖丁、尖頭器、サヌカイト原石、緑泥片岩原石、敲き石、鳥形埴輪、鹿角、藍染布、判子、印影、写真、楼閣ペン画、感謝状

特別展示チラシ

【展示ケースの配置】



展示風景

## 3．入館者・ホームページ

### （1）入館者数

平成24年度の入館者数は、8,849人である。前年度に比べると約0.6%減少した。

本年度の総入館者数に対する団体の割合は、約18.3%でやや減少した。

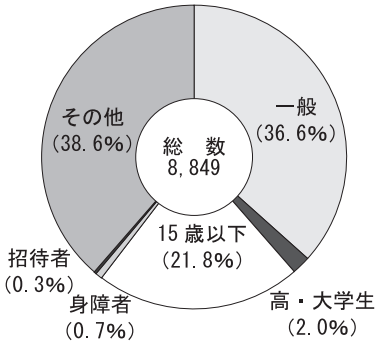
無料入館日の入館者は、５月５日（土・祝）のこどもの日（親子・保護者を対象）20名、関西文化の日の11月17日（土）52名・18日（日）120名、夏季節電対策無料期間2,613名の計2,805名である。

【月別入館者数】

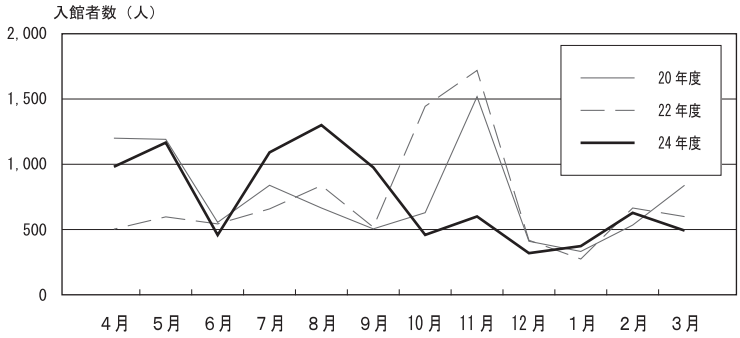
| 月 | 開館日数 | 有料入館者 | | 無料入館者 | | | | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 一　般 | 高・大学生 | 15歳以下 | 身障者 | 招待者 | その他 | |
| ４月 | 26 | 448 (176) | 16 (0) | 365 (180) | 8 | 5 | 148 | 981 (356) |
| ５月 | 26 | 605 (72) | 19 (0) | 272 (164) | 11 | 14 | 245 | 1,166 (236) |
| ６月 | 26 | 259 (57) | 23 (0) | 75 (0) | 3 | 0 | 98 | 458 (57) |
| ７月 | 26 | 0 (0) | 0 (0) | 296 (22) | 0 | 0 | 885 | 1,091 (22) |
| ８月 | 27 | 0 (0) | 0 (0) | 373 (0) | 0 | 0 | 927 | 1,300 (0) |
| ９月 | 26 | 574 (421) | 13 (0) | 74 (0) | 2 | 0 | 313 | 976 (421) |
| 10月 | 26 | 247 (92) | 7 (0) | 80 (61) | 4 | 0 | 121 | 459 (153) |
| 11月 | 26 | 246 (43) | 8 (0) | 94 (0) | 8 | 2 | 248 | 606 (43) |
| 12月 | 23 | 188 (22) | 2 (0) | 42 (0) | 6 | 0 | 81 | 319 (22) |
| １月 | 23 | 216 (73) | 9 (1) | 35 (0) | 8 | 0 | 105 | 373 (74) |
| ２月 | 24 | 247 (58) | 36 (26) | 232 (116) | 4 | 0 | 109 | 628 (200) |
| ３月 | 27 | 209 (0) | 41 (34) | 94 (0) | 10 | 2 | 136 | 492 (34) |
| 合　計 | 306 | 3,239 (1,014) | 174 (61) | 1,933 (543) | 64 | 23 | 3,416 | 8,849 (1,618) |

※１　（　）は団体入館者の人数（内数）。
※２　その他は、研修での利用（減免）・ボランティア研修等の来館者。
※３　７月１日～９月７日は夏季節電対策無料期間となるため、「15歳以下」以外は「その他」に含む。

【入館者の内訳】




【入館者の月別推移】



【企画展　入館者数】

| | | 開館日数 | 有料入館者 | | 無料入館者 | | | | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 一　般 | 高・大学生 | 15歳以下 | 身障者 | 招待者 | その他 | |
| 17年度 | 春季 | 32 | 733 (211) | 43 (0) | 222 (0) | 15 | 77 | 298 | 1,388 (211) |
| | 秋季 | 32 | 349 (25) | 31 (0) | 104 (0) | 5 | 42 | 449 | 980 (25) |
| 18年度 | 春季 | 32 | 340 (52) | 65 (41) | 205 (32) | 10 | 30 | 140 | 790 (125) |
| | 秋季 | 32 | 0 (0) | 0 (0) | 217 (0) | 0 | 0 | 1,628 | 1,845 (0) |
| 19年度 | 春季 | 32 | 332 (54) | 21 (0) | 331 (223) | 9 | 15 | 140 | 848 (277) |
| | 秋季 | 32 | 0 (0) | 0 (0) | 169 (0) | 0 | 47 | 2,373 | 2,589 (0) |
| 20年度 | 春季 | 32 | 303 (28) | 15 (0) | 163 (63) | 7 | 38 | 178 | 704 (91) |
| | 秋季 | 32 | 231 (0) | 44 (0) | 93 (0) | 5 | 33 | 265 | 671 (0) |
| 21年度 | 春季 | 32 | 442 (186) | 20 (0) | 142 (46) | 9 | 46 | 132 | 791 (232) |
| | 秋季 | 32 | 388 (147) | 16 (0) | 105 (0) | 21 | 21 | 430 | 981 (147) |
| 22年度 | 秋季 | 44 | 485 (86) | 164 (92) | 95 (0) | 11 | 10 | 542 | 1,307 (178) |
| 23年度 | 春季 | 32 | 478 (50) | 12 (0) | 150 (33) | 16 | 15 | 118 | 789 (83) |
| | 秋季 | 32 | 557 (276) | 7 (0) | 165 (45) | 8 | 10 | 391 | 1,138 (321) |
| 24年度 | 春季 | 32 | 420 (74) | 16 (0) | 93 (0) | 8 | 10 | 102 | 649 (74) |
| 合　計 | | 428 | 5,058 (1,189) | 454 (133) | 2,241 (442) | 124 | 394 | 7,186 | 15,457 (1,764) |

※1　(　) は団体入館者の数（内数）、18年度・19年度の秋季企画展は無料の為、団体人数はカウントしていない。

※2　本表「無料入館者　その他」は、「親子無料入館日」・「関西文化の日」の無料入館者を含む。また、18年度・19年度の秋季企画展は、文化庁の「埋蔵文化財保存活用整備事業」の為、無料とし、本項に含めた。

【年度別入館者推移】

| 年　度 | 開館日数 | 有料入館者 | | 無料入館者 | | | | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 一　般 | 高・大学生 | 15歳以下 | 身障者 | 招待者 | その他 | |
| 16年度 | 103 | 1,744 (209) | 131 (0) | 1,345 (65) | 42 | 251 | 1,083 | 4,596 (274) |
| 17年度 | 306 | 4,988 (1,423) | 401 (20) | 3,060 (229) | 174 | 357 | 3,040 | 12,020 (1,672) |
| 18年度 | 306 | 2,962 (785) | 911 (650) | 3,138 (333) | 105 | 233 | 3,879 | 11,228 (1,768) |
| 19年度 | 306 | 3,760 (932) | 483 (174) | 2,933 (531) | 102 | 186 | 4,963 | 12,427 (1,637) |
| 20年度 | 307 | 3,473 (1,148) | 567 (253) | 2,790 (359) | 92 | 216 | 2,079 | 9,217 (1,760) |
| 21年度 | 307 | 4,204 (1,599) | 585 (311) | 2,123 (258) | 111 | 264 | 2,347 | 9,634 (2,168) |
| 22年度 | 306 | 3,621 (1,151) | 744 (430) | 1,584 (213) | 74 | 71 | 2,681 | 8,775 (1,794) |
| 23年度 | 307 | 3,999 (1,245) | 400 (236) | 1,873 (300) | 87 | 53 | 2,487 | 8,899 (1,781) |
| 24年度 | 306 | 3,239 (1,014) | 174 (61) | 1,933 (543) | 64 | 23 | 3,416 | 8,849 (1,618) |
| 累　計 | 2,554 | 31,990 (9,506) | 4,396 (2,135) | 20,779 (2,831) | 851 | 1,654 | 25,975 | 85,645 (14,472) |

※　16年度は、11月24日から３月31日まで延べ103日間の入館者数。

（２）節電対策夏季無料入館

夏季の節電対策として、家庭での冷房を控え唐古・鍵考古学ミュージアムで文化財に親しみながら涼を得る事業を実施し、７月１日（日）～９月７日（金）の期間を入館無料とした。この期間の入館者数は2,613名であり、前年度の同期間と比較して約２倍の来館があった。

夏期無料入館チラシ

その内訳を地域別にみると、近畿地方からの来館者が全体の90.5%を占め、以下に、関東5.9%、中部1.4%と続く。また、近畿地方の内訳は、奈良県内在住者が88.3%であり、これは全国の内訳でも79.9%を占める数である。奈良県内を中心に広報活動をおこなったことが要因の一つであろう。

奈良県内の内訳では、田原本町在住者がおよそ半数を占める。夏休みに家族連れで来館するケースが多く、年代別の入館者数でも、30～40歳代が一定の割合みられる。

また、同時に実施していたアンケートでは、通りがかりに立ち寄った入館者が多く、見学したことで文化財に新たに興味を抱いたという意見も寄せられた。平時と異なる傾向がみられたことから、文化財に親しみながら涼を得るという事業目標については一定の成果があげられたといえよう。

【夏季節電対策無料期間　年代別入館者数】

| | 15歳以下 | 高・大学生 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代 | 80歳以上 | その他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ７月１～31日 | 206 | 140 | 3 | 32 | 90 | 100 | 123 | 204 | 74 | 13 | 106 | 1,091 |
| ８月１～31日 | 373 | 104 | 0 | 44 | 105 | 132 | 144 | 179 | 58 | 11 | 150 | 1,300 |
| ９月１～７日 | 34 | 9 | 0 | 18 | 21 | 33 | 30 | 37 | 17 | 8 | 15 | 222 |
| 合　計 | 613 | 253 | 3 | 94 | 216 | 265 | 297 | 420 | 149 | 32 | 271 | 2,613 |

※　10代は、15歳以下及び高・大学生以外で16～19歳の入館者数。
※　その他は、無回答等。

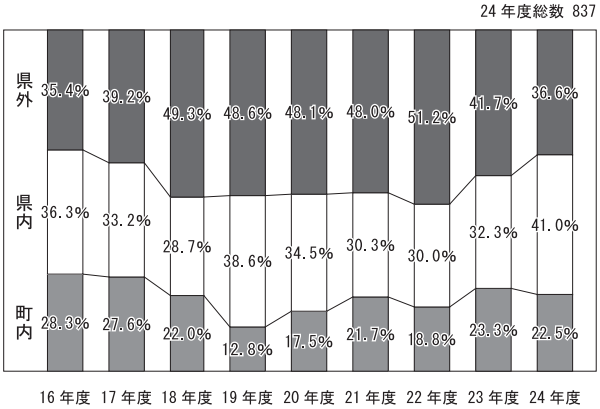
【夏季節電対策無料期間入館者　居住地内訳　奈良県】

| 田原本町 | 橿原市 | 天理市 | 奈良市 | 桜井市 | 大和郡山市 | 川西町 | 三宅町 | 生駒市 | 広陵町 | 大和高田市 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 47.4% | 9.8% | 8.6% | 6.5% | 4.7% | 3.2% | 2.3% | 1.9% | 1.7% | 1.7% | 1.6% |
| 香芝市 | 三郷町 | 宇陀市 | 斑鳩町 | 王寺町 | 河合町 | 上牧町 | 葛城市 | 平群町 | 御所市 | 安堵町 |
| 1.2% | 1.0% | 0.7% | 0.7% | 0.7% | 0.7% | 0.6% | 0.5% | 0.5% | 0.4% | 0.3% |
| 高取町 | 大淀町 | 五條市 | 曽爾村 | 明日香村 | 御杖村 | 吉野町 | 下市町 | 野迫川村 | 不　明 | |
| 0.3% | 0.2% | 0.2% | 0.2% | 0.2% | 0.1% | 0.1% | 0.1% | 0.1% | 2.0% | |

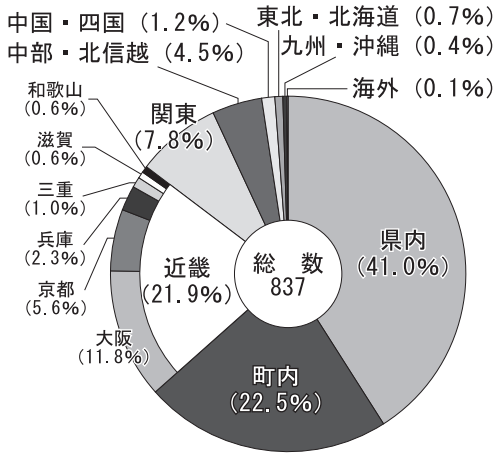
（3）入館者アンケート

入館者アンケート（常設展示）を実施した。回答総数831件、回答率約９％である。

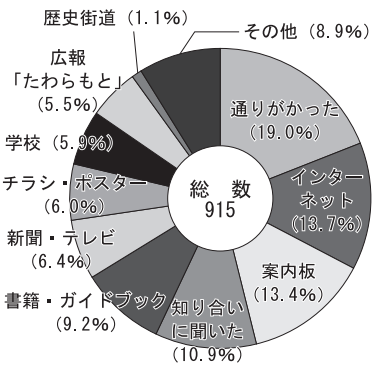
【入館者居住地別　年度推移】



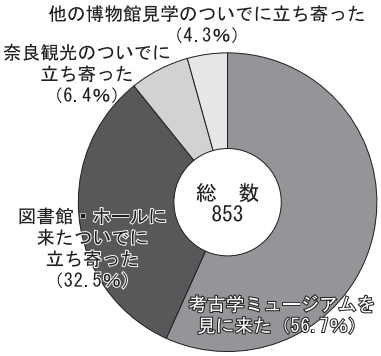

【入館者の居住地内訳】



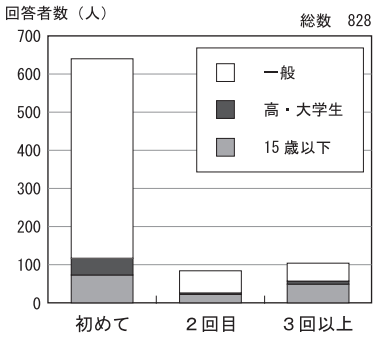

【ミュージアムを知った理由】




【来館目的】




【来館回数】




（4）視察・研修・学校等からの来館

平成24年度は、下記のとおり視察・研修３件69名、学校の利用13校786名、海外からの研究者４名の来館があった。

視察・研修　田原本町新規採用者研修（４月３日／16名）、田原本町教育委員会新任者研修（８月23日／11名）、行政相談員研修（８月29日／42名）

学校利用　田原本町立北小学校６年生（４月18日／47名）、田原本町立田原本小学校６年生（４月20日／133名）、生駒南第２小学校６年生（５月２日／48名）、奈良女子大学附属小学校５年生（５月９日／79名）、曽爾小学校（５月22日／７名）、田原本町立田原本小学校２年生（５月29日／37名）、天理大学（６月10日／14名）、奈良大学通信教育（７月15日・８月25日・２月９日・３月９日／290名）、田原本町立東小学校６年生（７月４日／22名）、奈良県立盲学校（７月26日／17名）、明治大学（８月１日／16名）、昭和女子大学（９月23日／９名）、名古屋市立宮前小学校（10月11日／67名）

海外研究者　韓国文化庁（７月14日／４名）

（5）ホームページ

田原本ギャラリーの展示情報ページを作成した。常設展示田原本ギャラリーにおいて現在展示中の資料及び過去に展示した資料について、解説パネルを掲載している。

また、奈良県遺跡資料リポジトリ（http://rar.nara.nii.ac.jp/）へ刊行物の登録をおこなった。それに伴い、絶版となった書籍のうち奈良県遺跡資料リポジトリに掲載されているものについては、PDFファイルダウンロードページへのリンクを追加した。

平成24年度のアクセス数は16,247件で、前年度より約13%増加した。

【ホームページのアクセス数】

| | 平成16年度 | 平成17年度 | 平成18年度 | 平成19年度 | 平成20年度 | 平成21年度 | 平成22年度 | 平成23年度 | 平成24年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アクセス数 | 2,518 | 8,324 | 8,183 | 10,291 | 9,391 | 11,303 | 12,665 | 14,385 | 16,247 |
| 累　計 | 2,518 | 10,842 | 19,025 | 29,316 | 38,707 | 50,010 | 62,675 | 77,060 | 93,307 |

【田原本ギャラリー　展示情報（平成25年 6 月20日現在）】

## ４．ボランティアガイド

（１）ボランティアガイドの実績

ミュージアムの展示品解説ボランティアは、開館以来実施している。ガイドは年度単位とし、継続更新は可としている。平成24年度のガイド登録は34名で、24年度の新規登録者は１名である。基本的に月２回の午前10時から午後４時（冬季の12月～２月は午前10時30分から午後３時30分）までとし、常駐２人体制で実施した。また、団体客等多数の来館の場合に備えて、応援ガイド体制を作りその時間帯のみ臨時に対応している。このような体制で、下表実績に示すとおり約４割の来館者に対応した。ガイドの研修は、12月２日に「唐古・鍵遺跡現地研修」を実施した。

また、平成25年度に向けて新規登録者を募集し、６名の応募があった。新規登録者向けのガイド研修を３月21日に実施し、６名全員が受講した。

【展示ボランティアガイド実績】

| 月 | 開館日数 | 稼動人数 | ガイド人数※１ | 入館者数（常設展のみ） |
|---|---|---|---|---|
| ４月 | 26 | 49人 | 471人 | 763人 |
| ５月 | 26 | 44人 | 372人 | 735人 |
| ６月 | 26 | 37人 | 227人 | 458人 |
| ７月 | 26 | 43人 | 363人 | 1,091人 |
| ８月 | 27 | 35人 | 296人 | 1,300人 |
| ９月 | 26 | 48人 | 639人 | 976人 |
| 10月 | 26 | 39人 | 235人 | 459人 |
| 11月 | 26 | 36人 | 201人 | 606人 |
| 12月 | 23 | 31人 | 137人 | 319人 |
| １月 | 23 | 33人 | 89人 | 373人 |
| ２月 | 24 | 39人 | 303人 | 628人 |
| ３月 | 27 | 35人 | 161人 | 492人 |
| 合　計 | 307 | 469人 | 3,494人（43%）※２ | 8,200人 |

※１　ガイド人数は概数

※２　ガイド人数／入館者の割合

# Ⅳ．資料の報告

# 唐古・鍵遺跡出土の魚類遺存体について

奈良文化財研究所　客員研究員
丸山　真史
田原本町教育委員会
藤田　三郎

## １．はじめに

唐古・鍵遺跡では、1937年の唐古池の工事に伴う発掘調査によって動物遺存体が出土しているのをはじめとして[1)]、低湿地部から数多くの動物遺存体が出土している。今回、同定した資料は、唐古・鍵遺跡第37次調査の井戸ＳＫ－2103、第51次調査井戸ＳＫ－104から出土した魚類遺存体である（第１表）。ＳＫ－2103から出土した魚類遺存体は、破片数にして393点を数え、種類や部位が同定できたものは215点にのぼる。また、ＳＫ－104から出土した魚類遺存体は、破片数にして146点を数え、種類や部位が同定できたものは86点にのぼる。

以下では、魚類遺存体が出土した遺構と魚類遺存体の概要を記載する。また、これまで唐古・鍵遺跡第37次調査ＳＫ－2130から出土した魚類遺存体を報告しており[2)]、時期や地点が異なる３基の遺構から出土した魚類遺存体を比較し、唐古・鍵遺跡から出土した弥生時代中期から後期の魚類遺存体の特徴を示す。

第１表　種名表

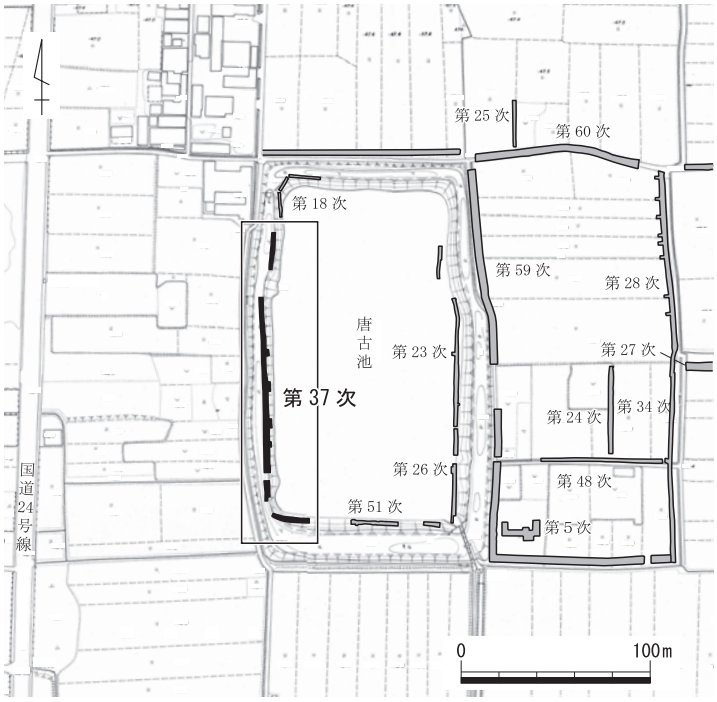
脊椎動物門　Vertebrata
軟骨魚綱　Chondrichthyes
　板鰓亜綱の一種（エイ・サメ類）
　　Elasmobranchii, order, fam., gen. et sp. indet.
硬骨魚綱　Osteichthyes
　ウナギ目　Anguilliformes
　　ウナギ科　Anguillidae
　　ウナギ　*Anguilla japonica*
　　ハモ科　Muraenesocidae
　　ハモ属の一種　*Muraenesox* sp.
　　ウツボ科　Muraenidae
　　ウツボ科の一種　*Gymnothrax* sp.
　ニシン目　Cluperiformes
　　ニシン科　Clupeidae
　　マイワシ　*Sardinops melanosticutus*
　　ニシン科の一種　Clupeidae gen. et sp. indet.
　コイ目　Cyprinida
　　コイ科　Cyprinidae
　　コイ　*Cyprininus carpio*
　　フナ属の一種　*Carussius* sp.
　　ウグイ属の一種　*Tribolodon* sp.
　　コイ科の一種　Cyprinidae gen. et sp. indet.
　　ドジョウ科　Cobitidae
　　ドジョウ科の一種　Cobitidae gen. et sp. indet.
　ナマズ目　Siluriformes
　　ナマズ科　Siluridae
　　ナマズ　*Silurus asotus*
　　ギギ科　Bagridae
　　ギギ科　*Pelteobagrus nudiceps*
　サケ目　Salmoniformes
　　アユ科　Plecoglossidae
　　アユ　*Plecoglossus altivelis*
　スズキ目　Percidae
　　スズキ科　Percichthyidae
　　スズキ　*Lateolabrax japonicus*
　　アジ科　Carangiae
　　アジ科の一種　Carangiae gen. et sp. indet.
　　タイ科　Sparidae
　　マダイ　*Pagrus major*
　　タイ科の一種　Sparidae gen. et sp. indet.
　　サバ科　Scombridae
　　サバ属の一種　*Scomber* sp.
　　サバ科の一種　Scombridae gen. et sp. indet.
　フグ目　Tetraodonitiformes
　　カワハギ科　Monacanthidae
　　カワハギ科の一種　Monacanthidaegen. et sp. indet.

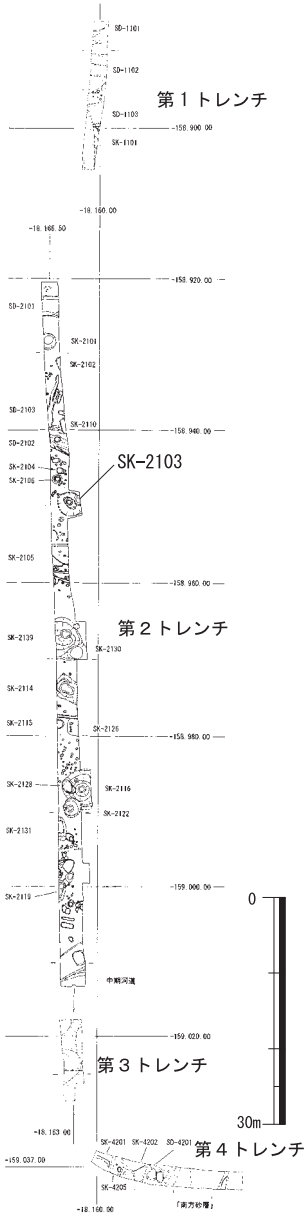
## ２．遺構の概要

（１）第37次調査ＳＫ－2103の概要

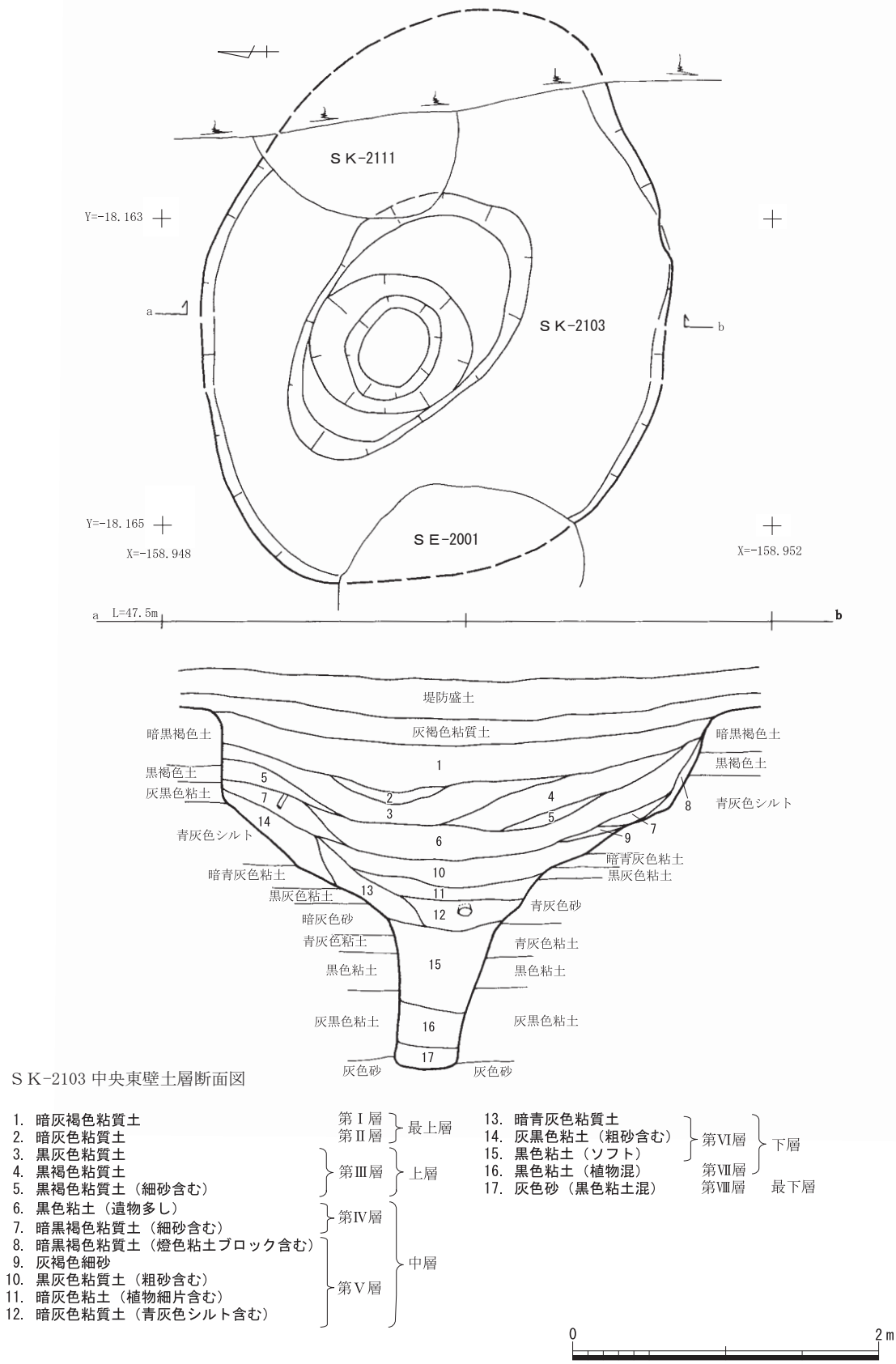
今回資料報告する遺構ＳＫ－2103の第37次調査の概要については、既に本年報20において同様の報告の中でその調査地とＳＫ－2130の遺構の概要について記述しているので、そちらを参照して頂きたい。今回報告するＳＫ－2103は、第37次調査地の第２トレンチの中央やや北寄り、ＳＫ－2130からは北へ20mの地点で検出した土坑で、その形状や遺物の状態から井戸と推定されるものである。この井戸は、唐古・鍵遺跡の井戸の中でも大形の部類に属するものである。井戸上部の東端は、唐古池内の採土による削平やＳＫ－2111に切られ、また、西側はＳＥ－2001に切られているが、ほぼ楕円形の平面形態で、上面での規模は推定長軸４ｍ・短軸3.1m、深さは2.3mを測る。井戸の断面形態は、下部が円筒状で上部が漏斗状に拡がる形態である。井戸の堆積層は17層に細分されるが、大きくみると５分割（最上・上・中・下・最下層）８分層（遺物取上層序に対応）される。井戸最下層・下層の堆積は井戸使用時の堆積、中層の堆積は井戸浚え後の堆積、上層・最上層は井戸機能喪失後の堆積と考えられる。これらの土層は主に粘土層や粘質土層で構成され、井戸機能喪失後は上部が開放され滞水状態で、徐々に埋没していったと考えられる。

出土遺物は、土器のほか木製品や石器、獣骨等多様なものがあり、各層からは自然流入遺物が含まれるが、中・上層は土器片、木製品等の不要品の廃棄遺物で構成されているが、第Ⅵ層の下位




第１図　調査地位置図及び第37次遺構平面図（左：Ｓ＝1/4,000、右：Ｓ＝1/1,000）




ＳＫ-2103 中央東壁土層断面図

1. 暗灰褐色粘質土 — 第Ⅰ層
2. 暗灰色粘質土 — 第Ⅱ層 — 最上層
3. 黒灰色粘質土
4. 黒褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土（細砂含む） — 第Ⅲ層 — 上層
6. 黒色粘土（遺物多し）
7. 暗黒褐色粘質土（細砂含む） — 第Ⅳ層
8. 暗黒褐色粘質土（燈色粘土ブロック含む）
9. 灰褐色細砂
10. 黒灰色粘質土（粗砂含む）
11. 暗灰色粘土（植物細片含む）
12. 暗灰色粘質土（青灰色シルト含む） — 第Ⅴ層 — 中層
13. 暗青灰色粘質土
14. 灰黒色粘土（粗砂含む） — 第Ⅵ層 — 下層
15. 黒色粘土（ソフト）
16. 黒色粘土（植物混） — 第Ⅶ層
17. 灰色砂（黒色粘土混） — 第Ⅷ層 — 最下層

0　2m

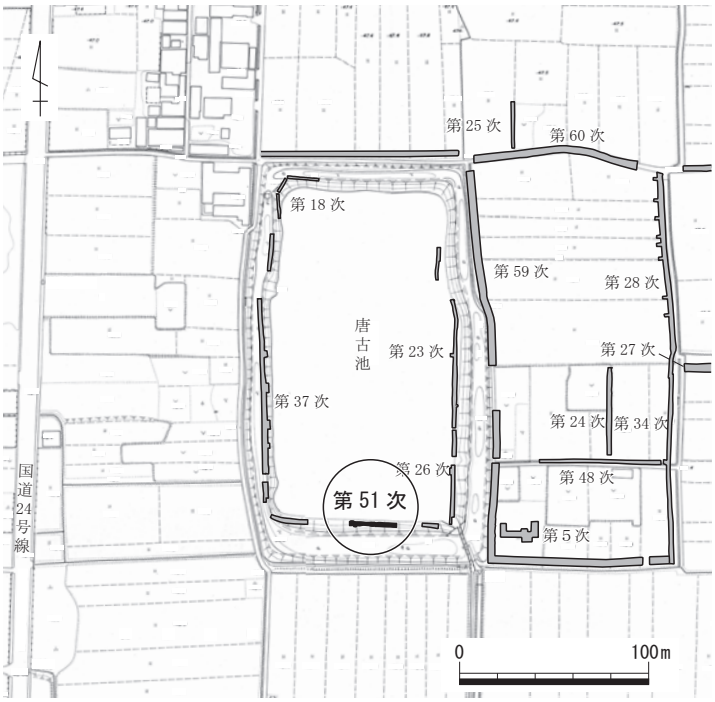
第２図　ＳＫ－2103遺構平面図及び断面図（Ｓ＝1/40）

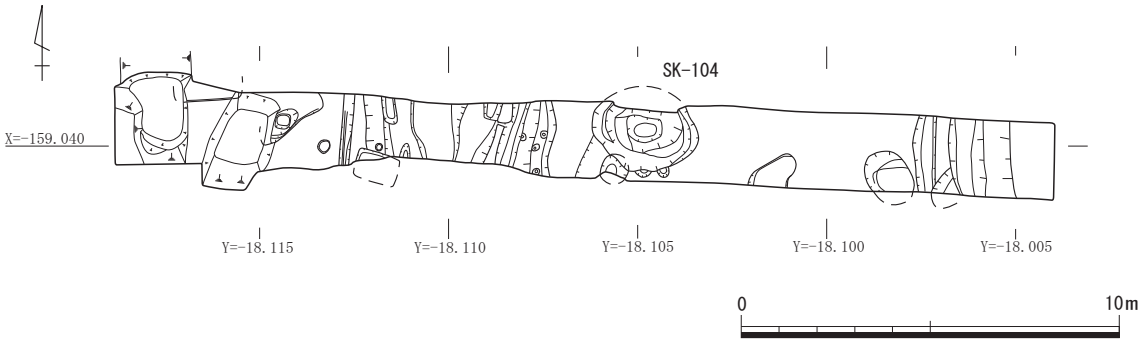
では、完存する一木鋤未成品１点が出土しており、井戸機能喪失後に木製品の貯木用の穴として転用され、その後廃棄穴へと変遷したと推定される。このような遺物とは異なり、井戸への供献遺物も出土している。第Ⅻ層では完形品の大小２点の短頸壷が出土しており、井戸浚え時の供献土器と推定される。井戸の時期は、出土土器から大和第Ｖ－１様式である。

さて、今回報告する魚骨は、おもに井戸の堆積土を遺物箱（W34㎝×D54㎝×H15㎝）で採取し、１㎜メッシュの篩で水洗し取り出した遺物である。堆積土の採取は、すべての土壌ではなく、第Ⅰ層（８箱）・Ⅲ～Ⅷ層を採取し、なかでも第Ⅵ～Ⅷ層（13箱）はすべて、第Ⅲ層（41箱）・第Ⅳ層（47箱）・第Ｖ層（７箱）は東半部分の土壌である。

（２）第51次調査ＳＫ－104の概要

今回資料報告する遺構ＳＫ－104の調査地は、前述第37次調査地と同様な場所にあり、唐古池内部の南側堤防中央部分あたる。調査区は東西25m・幅２mの小規模なものであるが、弥生時代前期以降の土坑や溝等を多数検出しており、北地区の居住区の様相をあらわしている。ＳＫ－104は調査区のほぼ中央で検出した土坑で、その形状や遺物の状態から井戸と推定されるものである。井戸としては中形で、井戸上部の北端は調査区外となるが、ほぼ全容のわかるものである。楕円形の平面形態で、上面での規模は長軸2.9m・短軸推定2.4m、深さは1.6mを測る。井戸の断面形態は、二段の逆台形を呈するが、下部は長軸0.9m、深さ0.3mほどの小さな凹みとなっており、上部が大きな円筒状になっている。これは、後述する堆積層の状態



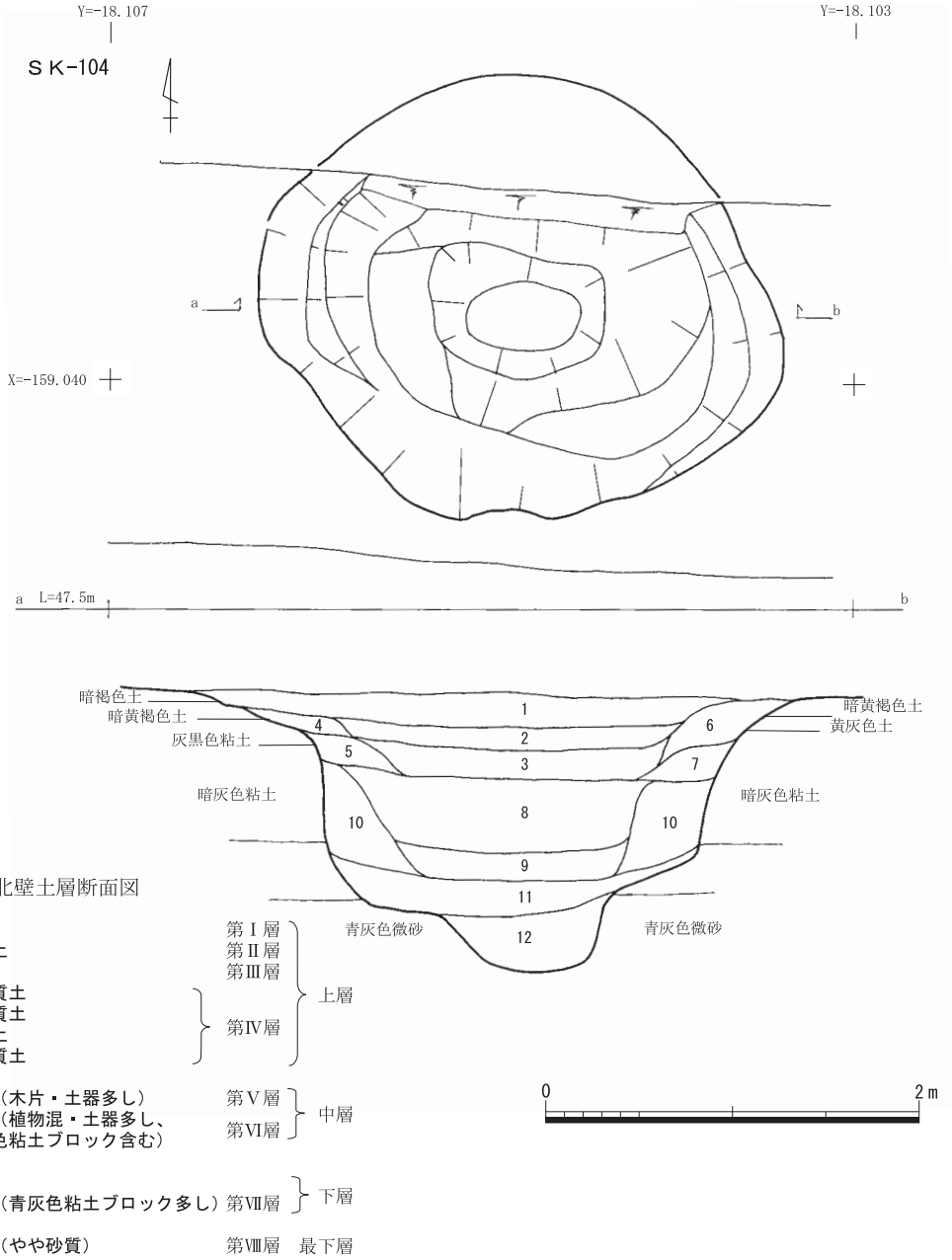




第３図　調査地位置図及び第51次遺構平面図（左：Ｓ＝1/4,000、右：Ｓ＝1/200）

からすると、井戸中位の壁面が崩落したためであろう。

井戸の堆積層は12層に細分されるが、大きくみると４分割（上・中・下・最下層）８分層（遺物取上層序に対応）される。井戸最下層の堆積は井戸使用時の堆積、下層の堆積は井戸壁面崩落による堆積、中層は井戸浚え後の堆積、上層は井戸機能喪失後の堆積と考えられる。これらの土層は粘土層や粘質土層、砂質土層、粘砂層の互層で形成されており、滞水と雨水の流入や壁面の崩壊等が繰り返された結果で、徐々に埋没していったと考えられる。

出土遺物は、土器のほか木製品や石器、獣骨等多様なものがあり、中～上層にかけて多量の遺物が投棄された。なかでも中層（第Ⅴ・Ⅵ層）では、甕や吉備の大形器台など多量の土器、木製盾、




ＳＫ-104 中央北壁土層断面図

1. 黒褐色土　第Ⅰ層
2. 黒褐色粘質土　第Ⅱ層
3. 灰黒色粘土　第Ⅲ層
4. 暗灰黄色砂質土
5. 暗茶灰色砂質土
6. 黒褐色粘質土
7. 暗茶灰色砂質土
第Ⅳ層
上層

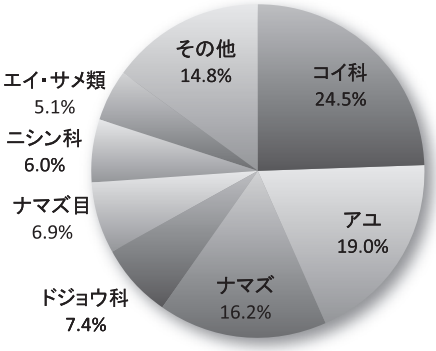
8. 黒褐色粘土（木片・土器多し）　第Ⅴ層
9. 灰黒色粘砂（植物混・土器多し、青灰色粘土ブロック含む）　第Ⅵ層
中層

10. 黒灰色粘砂
11. 黒灰色粘砂（青灰色粘土ブロック多し）　第Ⅶ層
下層

12. 暗灰色粘土（やや砂質）　第Ⅷ層　最下層

第４図　ＳＫ－104遺構平面図及び断面図（Ｓ＝1/40）

鍬、杓子未成品、ト骨、ヒョウタン等の祭祀遺物と推定されるものが一括廃棄された状態であった。上層においても多量の土器片が出土しているが、不要品の廃棄と推定され、廃棄土坑として機能したのであろう。このようなことから、本井戸は、井戸機能の喪失後、井戸浚えがおこなわれ、その後、祭祀遺物の一括投棄、そして廃棄土坑へと性格が変遷したと考えられ、その時期は大和第Ｖ－１様式である。



第５図　ＳＫ－2103の魚種組成

さて、今回報告する魚骨は、おもに井戸の堆積土を遺物箱（W34㎝×D54㎝×H15㎝）で採取し、１㎜メッシュの篩で水洗し取り出した遺物である。堆積土の採取は、すべての土壌ではなく、上記祭祀遺物を多く含んでいた土層を中心に、任意的に第Ⅲ層（２箱）・第Ⅳ層（３箱）・第Ｖ層（４箱）・第Ⅵ層（１箱）の土壌を採取したものである。

## 3. 魚類遺存体の特徴

（１）第37次調査ＳＫ－2103出土の魚類遺存体

ＳＫ－2103から394点の魚類遺存体が出土し、層位別の出土量は、第Ⅳ層から207点、第Ⅲ層から56点、第Ｖ層から50点等と続く（第２表）。このような魚類遺存体の層位別の出土量の相違は、篩を用いて水洗選別をおこなった土量と関係しており、土量が多い層では含まれる魚類遺存体が多いという結果を示している。

魚類遺存体のうち種類を同定できたものは、淡水魚が176点、海水魚が40点を数える（第３表）。淡水魚はコイ科が最多で53点出土しており、魚類全体の24.5%を占める（第５図）。これに続いてアユ41点、ナマズ35点、ドジョウ科16点、ナマズ／ギギ15点、ウナギ６点、ギギが５点、コイ３点、フナ属、ウグイ属が１点ずつ出土している。海水魚は、ニシン科13点、エイ・サメ類11点、サバ属６点、マイワシ３点、タイ科２点、ハモ属、スズキ、アジ科、マダイ、カワハギ科が１点ずつ出土している。

第２表　第37次ＳＫ－2103層位別出土量

| 種類 | | 第Ⅲ層 | 第Ⅳ層 | 第Ⅴ層 | 第Ⅵ層 | 第Ⅶ層 | 第Ⅷ層 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 淡水魚 | ウナギ | | 6 | | | | | 6 |
| | アユ | 6 | 28 | 2 | 3 | 2 | | 41 |
| | コイ | | 3 | | | | | 3 |
| | フナ属 | | | | 1 | | | 1 |
| | ウグイ属 | | 1 | | | | | 1 |
| | コイ科 | 3 | 31 | 3 | 13 | 3 | | 53 |
| | ナマズ | 6 | 11 | 7 | 7 | 4 | | 35 |
| | ギギ | | 2 | 1 | 1 | 1 | | 5 |
| | ナマズ／ギギ | 3 | 8 | 3 | | 1 | | 15 |
| | ドジョウ科 | 2 | 6 | 3 | 1 | 4 | | 16 |
| | 小計 | 20 | 96 | 19 | 26 | 15 | | 176 |
| 海水魚 | エイ・サメ類 | 2 | 7 | 1 | | 1 | | 11 |
| | ハモ属 | | 1 | | | | | 1 |
| | マイワシ | | | | 1 | 2 | | 3 |
| | ニシン科 | 1 | 9 | 1 | | 2 | | 13 |
| | スズキ属 | | | | 1 | | | 1 |
| | アジ科 | | | 1 | | | | 1 |
| | マダイ | | | 1 | | | | 1 |
| | タイ科 | | 1 | | | 1 | | 2 |
| | サバ属 | 2 | 2 | 1 | 1 | | | 6 |
| | カワハギ科 | 1 | | | | | | 1 |
| | 小計 | 6 | 20 | 5 | 3 | 6 | | 40 |
| 不明 | | 30 | 91 | 26 | 18 | 11 | 2 | 178 |
| 総計 | | 56 | 207 | 50 | 47 | 32 | 2 | 394 |

淡水魚のコイ科は大部分が椎骨であり、鰭棘（棘条部）、前鰓蓋骨、咽頭骨の破片も含まれる。いずれも体長20㎝以下の小形個体であり、被熱して白色を呈するものが１点含まれる。コイ科に属するコイは咽頭歯と咽頭骨が出土しており、体長20㎝以下の小形個体が含まれるが、その他は20㎝以上である。同じくコイ科に属するフナ属は前鰓蓋骨が、ウグイ属は咽頭骨が出土しており、いずれも体長

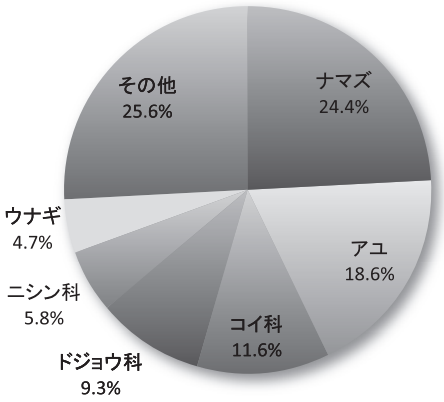
20cm以上である。アユはすべて椎骨であり、体長20cm以下で、被熱して白色や青灰色を呈するものが３点含まれる。ナマズは椎骨や胸鰭棘が出土しており、大部分が体長20～30cmであり、10～20cmの小形個体、30cm以上の大形個体も含まれる。また、被熱して白色を呈するものが２点含まれる。ギギは椎骨と鰭棘が出土しており、体長20cm以下と20～30cmの個体が含まれるが、ナマズにみられるような体長30cm以上の個体は含まれない。ナマズ／ギギは胸鰭棘が出土しており、体長20cm以下の小形個体が含まれているが、大部分の大きさは明らかでない。被熱して白色を呈するものが４点含まれる。ドジョウ科は椎骨と主鰓蓋骨が出土しており、体長10cmよりやや小さな個体、ウナギは椎骨が出土しており、体長50cm以下の個体ばかりである。海水魚のニシン科はすべて椎骨で、マイ

第３表　第37次調査ＳＫ－2103出土の魚類集計表

| 層位 | 生息 | 小分類 | 部位 | 左 | 右 | － | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第Ⅲ層 | 淡 | アユ | 椎骨 | | | 6 | 6 |
| | | コイ科 | 角骨 | 1 | | | 1 |
| | | | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | | 鰭棘 | | | 1 | 1 |
| | | ナマズ | 胸鰭棘 | 1 | 2 | | 3 |
| | | | 椎骨 | | | 3 | 3 |
| | | ナマズ／ギギ | 胸鰭棘 | | | 3 | 3 |
| | | ドジョウ科 | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | 海 | エイ・サメ類 | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | ニシン科 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | サバ属 | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | カワハギ科 | 背鰭棘 | | | 1 | 1 |
| | 計 | | | | | 26 | |
| 第Ⅳ層 | 淡 | ウナギ | 椎骨 | | | 6 | 6 |
| | | アユ | 椎骨 | | | 28 | 28 |
| | | コイ | 咽頭歯 | | 1 | | 1 |
| | | | 下咽頭骨 | 1 | 1 | | 2 |
| | | ウグイ属 | 下咽頭骨 | 1 | | | 1 |
| | | コイ科 | 咽頭骨 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | 咽頭歯 | | | 1 | 1 |
| | | | 下咽頭骨 | | 1 | | 1 |
| | | | 歯骨 | | 1 | | 1 |
| | | | 椎骨 | | | 21 | 21 |
| | | | 鰭棘 | | | 5 | 5 |
| | | ナマズ | 擬鎖骨 | | 1 | | 1 |
| | | | 胸鰭棘 | 2 | 2 | | 4 |
| | | | 椎骨 | | | 5 | 5 |
| | | | 方骨 | 1 | | | 1 |
| | | ギギ | 胸鰭棘 | | | 2 | 2 |
| | | ナマズ／ギギ | 胸鰭棘 | | | 6 | 6 |
| | | | 鰭棘 | | | 2 | 2 |
| | | ドジョウ科 | 椎骨 | | | 6 | 6 |
| | 海 | エイ・サメ類 | 椎骨 | | | 7 | 7 |
| | | ニシン科 | 椎骨 | | | 9 | 9 |
| | | ハモ属 | 遊離歯 | | | 1 | 1 |
| | | タイ科 | 遊離歯 | | | 1 | 1 |
| | | サバ属 | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | 計 | | | | | 116 | |
| 第Ⅴ層 | 淡 | アユ | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | コイ科 | 椎骨 | | | 3 | 3 |
| | | ナマズ | 角舌骨 | | 1 | | 1 |
| | | | 擬鎖骨 | | 1 | | 1 |

| 層位 | 生息 | 小分類 | 部位 | 左 | 右 | － | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第Ⅴ層つづき | 淡 | ナマズ | 胸鰭棘 | 1 | | | 1 |
| | | | 歯骨 | | 1 | | 1 |
| | | | 椎骨 | | | 3 | 3 |
| | | ギギ | 胸鰭棘 | | | 1 | 1 |
| | | ナマズ／ギギ | 胸鰭棘 | | | 2 | 2 |
| | | | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | ドジョウ科 | 椎骨 | | | 3 | 3 |
| | 海 | エイ・サメ類 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | ニシン科 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | アジ科 | 歯骨 | | 1 | | 1 |
| | | マダイ | 方骨 | 1 | | | 1 |
| | | サバ属 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | 計 | | | | 24 | | |
| 第Ⅵ層 | 淡 | アユ | 椎骨 | | | 3 | 3 |
| | | フナ属 | 前鰓蓋骨 | 1 | | | 1 |
| | | コイ科 | 前鰓蓋骨 | | 1 | | 1 |
| | | | 椎骨 | | | 8 | 8 |
| | | | 鰭棘 | | | 4 | 4 |
| | | ナマズ | 基後頭骨 | | | 1 | 1 |
| | | | 歯骨 | | 1 | | 1 |
| | | | 椎骨 | | | 5 | 5 |
| | | ギギ科 | 背鰭棘 | | | 1 | 1 |
| | | ドジョウ科 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | 海 | マイワシ | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | スズキ属 | 主鰓蓋骨 | | 1 | | 1 |
| | | サバ属 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | 計 | | | | 29 | | |
| 第Ⅶ層 | 淡 | アユ | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | コイ科 | 椎骨 | | | 3 | 3 |
| | | ナマズ | 歯骨 | 1 | | | 1 |
| | | | 前上顎骨 | | 1 | | 1 |
| | | | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | ギギ | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | ナマズ／ギギ | 胸鰭棘 | | | 1 | 1 |
| | | ドジョウ科 | 主鰓蓋骨 | 1 | 1 | | 2 |
| | | | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | 海 | エイ・サメ類 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | ニシン科 | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | マイワシ | 角骨 | | 1 | | 1 |
| | | | 主鰓蓋骨 | 1 | | | 1 |
| | | タイ科 | 肩甲骨 | | 1 | | 1 |
| | 計 | | | | 21 | | |

ワシは主鰓蓋骨、角骨、椎骨が出土しており、いずれも体長20cm以下の個体である。エイ・サメ類は椎骨が出土しており、いずれも椎体径10mm以下の小形のものである。サバ属は椎骨が出土しており、体長20～30cmである。タイ科は肩甲骨と歯が出土しており、肩甲骨は体長60cm以上の大形個体である。マダイは方骨が出土しており、体長30～40cmで、被熱して白色を呈する。スズキは主鰓蓋骨が、カワハギ科は第１背鰭棘が出土しており、両方とも体長20～30cmである。アジ科は歯骨が出土しており、体長20cm以下の小形個体である。ハモ属は歯が出土しているが、大きさは明らかでない。



第６図　ＳＫ－104の魚種組成

（２）第51次調査ＳＫ－104出土の魚類遺存体

ＳＫ－104から146点の魚類遺存体が出土し、層位別の出土量は、第Ⅴ層から74点、第Ⅵ層から43点、第Ⅳ層から13点と続く（第４表）。魚類遺存体の層位別の出土量の相違は、第Ⅵ層で水洗選別した土量が少ないにも関わらず、比較的多くの魚骨が出土していることが特徴的である。

魚類遺存体のうち種類を同定できたものは、淡水魚65点、海水魚20点を数える（第５表）。淡水魚はナマズが最多で21点が出土しており、魚類全体の24.7%を占める（第６図）。これに続いてアユ16点、コイ科10点、ドジョウ科８点、ウナギ４点、ギギ３点、コイ２点、ウグイ属１点、計65点が出土している。海水魚はニシン科５点、マイワシとタイ科が３点ずつ、エイ・サメ類、ウツボ、サバ属が２点ずつ、サメ類、ハモ属、アジ科、サバ科が１点ずつ、計21点が出土している。

淡水魚のナマズは椎骨、胸鰭棘、基後頭骨が出土している。体長20cm以下の小形個体が半数以上を占めるが、体長20～30cmの個体もあり、被熱して白色を呈するものが３点含まれる。ギギは胸鰭棘が出土しており、すべて体長10～20cmの小形個体であり、被熱して白色を呈するものが１点含まれる。アユは椎骨が出土しており、すべて体長20cm以下で、被熱して白色を呈するものが２点含まれる。コイ科は椎骨、咽頭歯、主鰓蓋骨、鰭棘が出土しており、体長20cm以下のものが大部分を占め、10cm程度の小形個体も含まれる。被熱して白色を呈するものが１点含まれる。コイは椎骨が出土しており、体長40～50cmの大形個体と10～20cmの小形個体が含まれる。ウグイ属は椎骨が出土しており、体長10～20cmである。ドジョウ科は椎骨が出土しており、体長10cm前後で

第４表　第51次ＳＫ－104層位別出土量

| 種類 | | 第Ⅲ層 | 第Ⅳ層 | 第Ⅳ（下）層 | 第Ⅴ層 | 第Ⅵ層 | 第Ⅶ層 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 淡水魚 | ウナギ | | | | 2 | 2 | | 4 |
| | アユ | 2 | 2 | | 7 | 5 | | 16 |
| | コイ | | | | 2 | | | 2 |
| | ウグイ属 | | | | 1 | | | 1 |
| | コイ科 | | 1 | 3 | 3 | 3 | | 10 |
| | ナマズ | | 1 | | 9 | 11 | | 21 |
| | ギギ | 1 | | | 1 | 1 | | 3 |
| | ドジョウ科 | | | | 3 | 5 | | 8 |
| | 小計 | 3 | 4 | 3 | 28 | 27 | | 65 |
| 海水魚 | サメ類 | | | 1 | | | | 1 |
| | エイ・サメ類 | | | 1 | 1 | | | 2 |
| | ハモ属 | | | | | | 1 | 1 |
| | ウツボ | | | | 2 | | | 2 |
| | アジ科 | | | | | 1 | | 1 |
| | タイ科 | 2 | | 1 | | | | 3 |
| | ニシン科 | | | | 4 | 1 | | 5 |
| | マイワシ | | | | 2 | 1 | | 3 |
| | サバ属 | | | | 1 | 1 | | 2 |
| | サバ科 | | | | | 1 | | 1 |
| | 小計 | 2 | | 3 | 10 | 5 | 1 | 21 |
| 不明 | | 3 | 9 | 1 | 36 | 11 | | 60 |
| 計 | | 8 | 13 | 7 | 74 | 43 | 1 | 146 |

第５表　第51次調査ＳＫ－104出土の魚類集計表

| 層位 | 生息 | 小分類 | 部位 | 左 | 右 | － | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第Ⅲ層 | 淡 | アユ | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | ギギ | 胸鰭棘 | | | 1 | 1 |
| | 海 | タイ科 | 遊離歯 | | | 2 | 2 |
| | 計 | | | | | 5 | |
| 第Ⅳ層 | 淡 | アユ | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | コイ科 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | ナマズ | 胸鰭棘 | 1 | | | 1 |
| 第Ⅳ（下）層 | 淡 | コイ科 | 咽頭歯 | | | 3 | 3 |
| | 海 | サメ類 | 遊離歯 | | | 1 | 1 |
| | | エイ・サメ類 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | タイ科 | 遊離歯 | | | 1 | 1 |
| | 計（第Ⅳ層・第Ⅳ（下）層） | | | | | 10 | |
| 第Ⅴ層 | 淡 | ウナギ | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | アユ | 椎骨 | | | 7 | 7 |
| | | コイ | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | ウグイ属 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | コイ科 | 下咽頭骨 | | 1 | | 1 |
| | | | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | | 鰭棘 | | | 1 | 1 |
| | | ナマズ | 基後頭骨 | | | 1 | 1 |
| | | | 胸鰭棘 | | 1 | 2 | 3 |
| | | | 椎骨 | | | 5 | 5 |
| | | ギギ科 | 胸鰭棘 | | | 1 | 1 |

| 層位 | 生息 | 小分類 | 部位 | 左 | 右 | － | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第Ⅴ層つづき | 淡 | ドジョウ科 | 椎骨 | | | 3 | 3 |
| | 海 | エイ・サメ類 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | ウツボ属 | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | マイワシ | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | ニシン科 | 椎骨 | | | 4 | 4 |
| | | サバ属 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | 計 | | | | | 38 | |
| 第Ⅵ層 | 淡 | アユ | 椎骨 | | | 5 | 5 |
| | | ウナギ | 椎骨 | | | 2 | 2 |
| | | ギギ | 胸鰭棘 | | | 1 | 1 |
| | | コイ科 | 主鰓蓋骨 | 1 | 1 | | 2 |
| | | | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | ナマズ | 胸鰭棘 | | | 1 | 1 |
| | | | 椎骨 | | | 10 | 10 |
| | | ドジョウ科 | 椎骨 | | | 5 | 5 |
| | 海 | マイワシ | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | ニシン科 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | アジ科 | 稜鱗 | | | 1 | 1 |
| | | サバ属 | 椎骨 | | | 1 | 1 |
| | | サバ科 | 鰭棘 | | | 1 | 1 |
| | 計 | | | | | 32 | |
| 第Ⅶ層 | 海 | ハモ属 | 歯骨 | | | 1 | 1 |
| | 計 | | | | | 1 | |

第７図　ハモ属　歯骨（実寸大）

ある。ウナギは椎骨が出土しており、体長50㎝程度かそれより小形個体である。

海水魚のニシン科とマイワシは椎骨が出土しており、体長20㎝以下の小形個体である。エイ・サメ類は椎骨が出土しており、椎体径10㎜以下の小形個体である。ハモ属は歯骨（右）が出土しており、体長100㎝以上の大形個体と推定される（第７図）。タイ科は歯が出土しており、被熱して白色および青灰色を呈するものが２点含まれる。大きさは明らかでない。ウツボは椎骨が出土しており、体長50㎝程度とそれよりやや大きい個体である。サバ属は椎骨が出土しており、体長20㎝程度であり、サバ科は鰭棘が出土している。アジ科は稜鱗が出土しており、大きさは明らかでない。

## 4．遺構別の特徴

上述の第37次調査ＳＫ－2103（弥生後期初頭）、第51次調査ＳＫ－104（弥生後期初頭）に加え、第37次調査ＳＫ－2130（弥生中期中葉後半）から出土した魚類遺存体を含めて、全体と遺構別の特徴を述べる。

淡水魚のウナギ、ナマズ、ギギ、アユ、コイ、コイ科、ドジョウ科、海水魚のエイ・サメ類、ニシン科（イワシ類）、タイ科、サバ属の11種類は、３基の遺構に共通して出土している。特に、淡水魚のナマズ、アユ、コイ科の出土量が多く、これらが唐古・鍵遺跡で消費された主要な魚種と言える（第６表）。また、海水魚のイワシ類、エイ・サメ類、タイ科、サバ属について、いずれの遺構でも一定量が出土している。

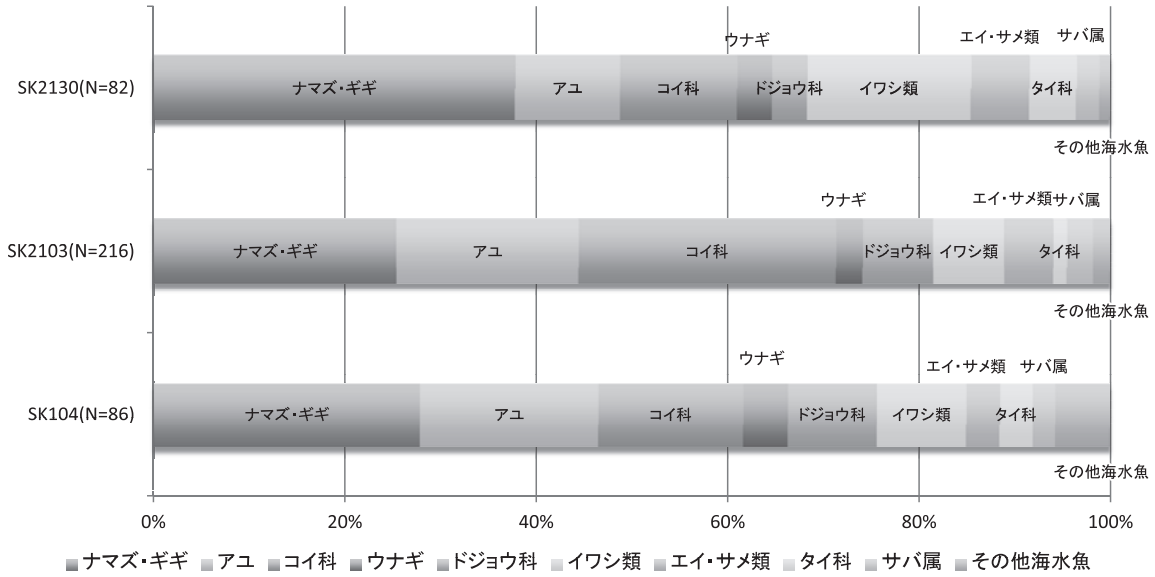
ＳＫ－2130ではナマズの比率が高く、アユ、コイ科と続くのに対して、ＳＫ－2103ではコイ科の比率が高く、アユ、ナマズと続く（第７図）。また、ＳＫ－2130では海水魚のマイワシを含むニシン科（イワシ類）の比率が高い。淡水魚ではフナ属やウグイ属が出土している遺構と、出土していない遺構があり、いずれの遺構でも出土量は少ない。海水魚の比率はＳＫ－2130でやや高く、ＳＫ－2103で低いという特徴も見られる。上述の３基の遺構から共通して出土している海水魚以外に、ハモ属、ウツボ、ボラ科、スズキ属、アジ科、マダイ、サバ科、カワハギ科が出土しており、ハモ属とアジ科はＳＫ－104とＳＫ－2103の２基の遺構から出土しているが、それ以外はＳＫ－2130、ＳＫ－104、ＳＫ－2103のいずれかでしか出土していない。いずれも出土量が少量に留まるが、中期のＳＫ－2130では５種類で26点、後期初頭のＳＫ－2103では海水魚が10種類で40点、ＳＫ－104が９種類で21点を数える。弥生中期に比べて後期では、海水魚の種類数が増加しており、後期初頭のＳＫ－2103に比べてＳＫ－104からは出土量が少ない。

第６表　各遺構の魚種別出土量

| 種類 | | SK2130 | SK2103 | SK104 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 淡水魚 | ウナギ | 3 | 6 | 4 | 13 |
| | コイ | 2 | 3 | 2 | 7 |
| | フナ属 | 1 | 1 | | 2 |
| | ウグイ | | 1 | 1 | 2 |
| | コイ科 | 7 | 53 | 10 | 70 |
| | ナマズ | 25 | 35 | 21 | 81 |
| | ギギ | 2 | 5 | 3 | 10 |
| | ナマズ／ギギ | 4 | 15 | | 19 |
| | アユ | 9 | 41 | 16 | 66 |
| | ドジョウ科 | 3 | 16 | 8 | 27 |
| | 小計 | 56 | 176 | 65 | 297 |
| 海水魚 | ハモ属 | | 1 | 1 | 2 |
| | ウツボ | | | 2 | 2 |
| | エイ・サメ類 | 5 | 11 | 3 | 19 |
| | ニシン科 | 14 | 13 | 5 | 32 |
| | マイワシ | | 3 | 3 | 6 |
| | ボラ科 | 1 | | | 1 |
| | スズキ属 | | 1 | | 1 |
| | アジ科 | | 1 | 1 | 2 |
| | マダイ | | 1 | | 1 |
| | タイ科 | 4 | 2 | 3 | 9 |
| | サバ属 | 2 | 6 | 2 | 10 |
| | サバ科 | | | 1 | 1 |
| | カワハギ科 | | 1 | | 1 |
| | 小計 | 26 | 40 | 21 | 87 |
| 計 | | 82 | 216 | 86 | 384 |

## 5. 唐古・鍵遺跡における魚類利用

唐古・鍵遺跡第37次調査ＳＫ－2130、ＳＫ－2103、第51次調査ＳＫ－104から出土した魚類遺存体から、弥生時代中期から後期にかけて、ナマズ、コイ科、アユを主体とする淡水魚が盛んに利用されたと考えられる（第８図）。これら３種類の魚種について、上述したように弥生時代中期から後期で比率に変化が見られるが、大きな魚類利用の変化とは言い難く、時期を通じて一定の淡水魚利用




第８図　魚類組成の比較

が継続されたと考えられる。コイ科は椎骨が半数以上を占め、その大きさから体長20㎝以下の個体が多く、小さな個体は体長10㎝程度と推定される。コイ科の魚類ではコイ、フナ属、ウグイ属を同定しており、これら３種類の幼魚である可能性と、小型種のカワムツやタナゴなどである可能性の両方が考えられる。このように小形のコイ科の椎骨が出土しているにも関わらず、同定しやすい大形のコイ・フナ類の歯骨、咽頭骨、主鰓蓋骨、椎骨などの出土量が少ないことは、それらの漁獲や利用頻度が低調であったことを示唆する。

ナマズ、コイ、フナ、ドジョウ科は河川、湖沼において、釣りなどで漁獲されるだけでなく、産卵期には水田やそれに伴う灌漑施設に進入する習性があり、水田稲作を営む弥生時代の人々にも馴染み深い魚種であったと思われる。出土量が多いナマズの大きさに注目すると、各遺構で体長30㎝を超えるような大形個体が少なく、体長20㎝程度かそれ以下と推定される小形個体が多い。ナマズは体長50㎝程度まで成長するため、食料として肉を得るならば、大形個体を捕獲するほうが効率的であるが、選択的な漁獲や消費を反映している可能性がある。アユは河川上・中流などに、ウナギは中・下流域などに生息しており、水田域には進入しないため、周辺の河川で積極的に漁獲していたと推測される。一方、アマゴやイワナなどの小形のサケ科魚類の出土は見られない。これらは、河川の上・中流に生息し、渓流釣りの代表的な魚種である。これら小形のサケ科が見られないことは、渓流などにおける漁獲は低調であったことを示唆する。このような淡水魚の生態を考慮すると、唐古・鍵遺跡では、集落周辺を流れる河川や水田などが、主な漁場となっていたと考えられる。

海水魚は、３基の遺構すべてから出土しており、当地に海産物が一定の頻度で持ち込まれ、消費されたことを示している。唐古・鍵遺跡から出土する土器には、遠隔地からもたらされたものが含まれており、瀬戸内地域や伊勢湾沿岸地域まで交易圏として想定される[3)]。魚類は、塩を施したり、干したりするなどの保存加工処理したものが遠隔地から持ち込まれたと考えられる。特に、出土頻度の高いサバ属は、腐敗の進行が早い魚種であり、保存加工は欠かせなかったであろう。いずれの海水魚も瀬戸内海、大阪湾、和歌山湾、伊勢湾などで漁獲でき、複数の供給地を想定することも可能であるが、ハモ属が出土していることに注目すれば、大阪湾沿岸地域を第一の供給地として指摘できる。大阪湾沿岸地域や河内平野の弥生遺跡で、ハモ属はしばしば出土しており[4)]、ハモを食用とする文化が根付いていた地域である。また、唐古・鍵遺跡から最も近い海岸部という立地からも、大阪湾沿岸地域が海水魚の第一の供給地である可能性は高いであろう。

## 6．おわりに

今回は、唐古・鍵遺跡第37次調査ＳＫ－2103及び第51次調査ＳＫ－104から出土した魚類遺存体について、種類や部位などを同定した。コイ科、アユ、ナマズ、ドジョウ科などの淡水魚が主体であり、海水魚も含まれている。従来、報告した第37次調査ＳＫ－2130から出土した弥生中期の魚類遺存体を含めて考えると、弥生中期から後期には淡水魚のナマズ、アユ、コイ科を中心に消費しており、海水魚のニシン科（イワシ類）、サバ属、タイ科が、一定の頻度で当地に持ち込まれていたと考えられる。淡水魚は、遺跡周辺の水域が中心的な漁場となっており、海水魚は大阪湾沿岸地域との交易を想定できる。また、弥生中期から後期には海水魚の魚種が増加していることが明らかになったが、魚類遺存体を分析した遺構は３基に留まっており、唐古・鍵遺跡における魚類利用の変遷を

示しているとは即断できない。今後、弥生前期の遺構を含めて、分析資料を増やす必要がある。

**註**

1）小林行雄・末永雅雄・藤岡謙二郎　1976『大和唐古彌生式遺跡の研究』 臨河書店

2）藤田三郎・丸山真史　2012「唐古・鍵遺跡第53次調査出土の魚類遺存体について」『田原本町文化財調査年報20』 田原本町教育委員会　pp.111-119

3）藤田三郎　2012『唐古・鍵遺跡』日本の遺跡45　同成社

4）大阪湾沿岸地域、河内平野でハモ属が出土している弥生遺跡は、弥生前期の神戸市楠・荒田遺跡[5]、弥生中期の大阪市桑津遺跡[6]、神戸市戎町遺跡[7]、弥生後期の池上・四ツ池遺跡[8]、八尾市亀井遺跡[9] 等がある。

5）渡辺誠　1980「自然遺物」『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』 神戸市交通局・神戸市教育委員会　pp.105-106

6）久保和士　1996「桑津弥生人の食を探る」『葦火』65号　大阪市文化財協会　pp.6-7

7）松井章　1989「戎町遺跡第１次調査出土の動物遺存体」『戎町遺跡第１次発掘調査概報』 神戸市教育委員会　pp.127-129

8）金子浩昌・牛沢百合子　1980「池上遺跡出土動物遺体」『池上・四ツ池遺跡』第６分冊　自然遺物編 ㈶大阪文化財センター　pp.9-32

9）樽野博幸・山西良平　1980「動物遺体」『亀井・城山』 ㈶大阪文化財センター　pp.397-404

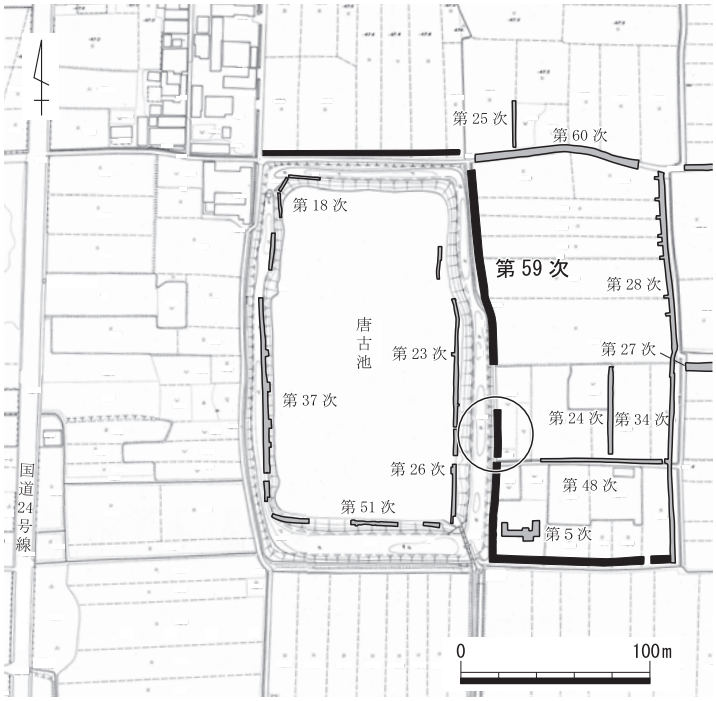
写真１　唐古・鍵遺跡第37次（ＳＫ－2103）・第51次（ＳＫ－104）出土魚骨

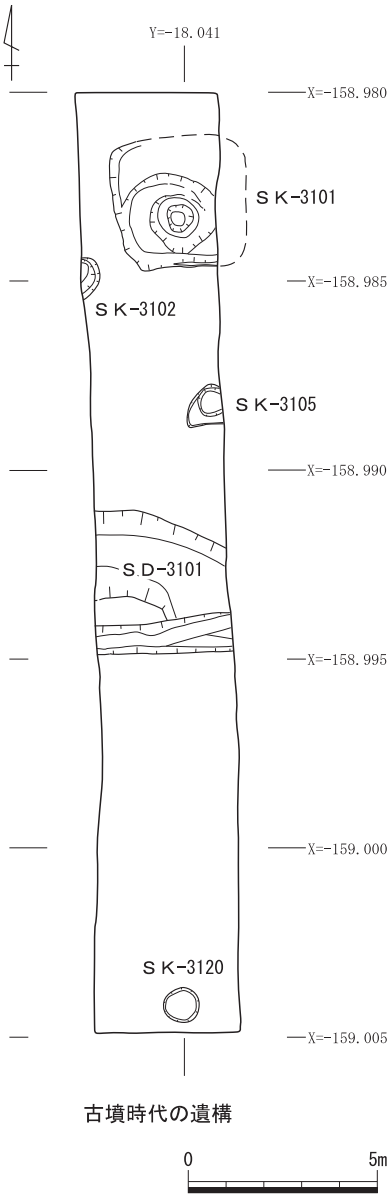
# 唐古・鍵遺跡出土の古墳時代中期の馬骨について

奈良文化財研究所　客員研究員
丸山　真史
田原本町教育委員会
藤田　三郎

## １．はじめに

３世紀末に編纂された『魏書東夷伝』倭人条に、倭国には牛・馬・鵲（かささぎ）・虎・豹（ひょう）がいなかったという記事がある。現在の考古学では、この記事の通りとして、弥生時代の日本にウマは存在せず、古墳時代になって大陸から渡来し、普及したと考えるのが一般的である。本州や九州で、ウマ遺存体がよく出土するのは、須恵器が普及する５世紀になってからである。今回、報告する唐古・鍵遺跡第59次調査ＳＫ－3101から出土したウマは５世紀第１四半世紀に位置づけられ、ウマが普及して間もない時期の注目すべき資料である。



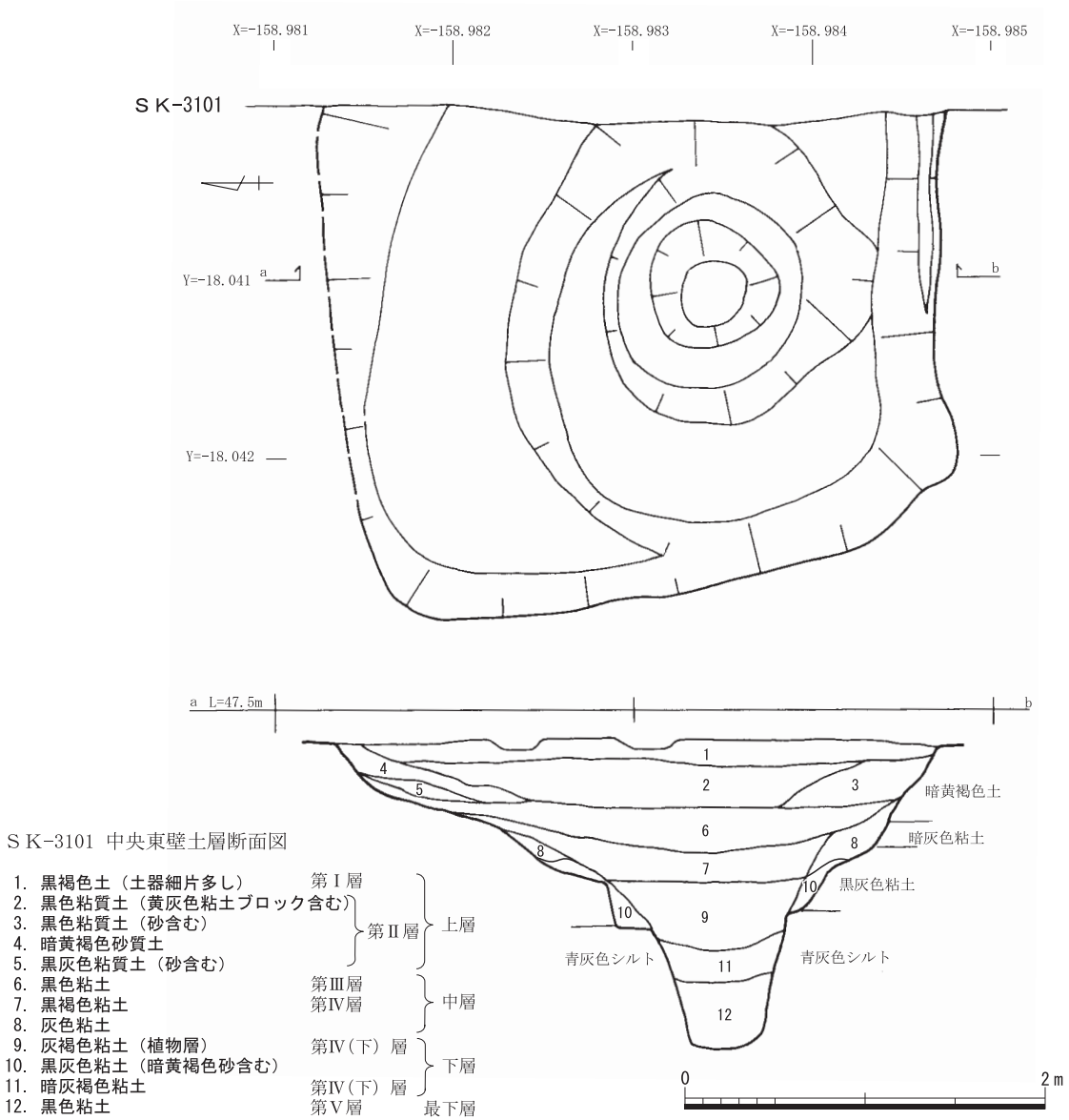




第１図　調査地位置図及び第59次調査第３トレンチ遺構平面図（左：Ｓ＝1/4,000、右：Ｓ＝1/200）

## ２．第59次調査ＳＫ－3101の概要と出土土器

### （１）ＳＫ－3101の概要

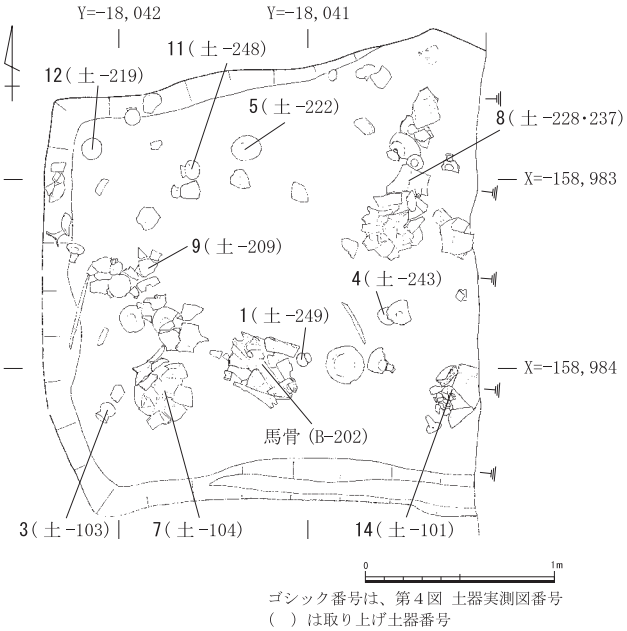
唐古・鍵遺跡は、弥生時代前期から古墳時代前期（布留１式）まで継続する大環濠集落遺跡として知られているが、その後の状況については不明な点が多い。この唐古・鍵弥生集落その後の状況に関し、唐古・鍵遺跡第114次までの調査のなかで古墳時代中期の遺構・遺物を点的ではあるが、検出しているのである。これら遺構・遺物が検出されるのは、唐古池の東部にあたる場所で第５・34・48・59・111・113次調査等である。特に唐古池東側堤防南半の東側50mほどの範囲に集中するようで、顕著な遺構としては第59次調査第３トレンチのＳＫ－3101がある。第59次調査は、唐古池の東側堤防の外側に沿って流れる用水路の整備工事に伴い調査したもので、延長400mに及ぶ。調査区は５区に分かれ、唐古池西南隅から東100m分が第１トレンチ、西南隅から北へ50m分が第２トレンチ、さらに50m分が第３トレンチ、100m分が第４トレンチ、唐古池北側堤防外側100m分が第５ト




第２図　ＳＫ－3101遺構平面図及び断面図（Ｓ＝1/40）

レンチであるが、調査期間の関係から各トレンチで部分的な調査しかおこなっていない。

ＳＫ－3101はこの第３トレンチの北端で検出した土坑で、その形状や遺物の状態から井戸と推定されるものである。この井戸は、唐古・鍵遺跡の井戸の中でも大形の部類に属するものである。井戸上部の東端は、調査区外に及んでいるが、ほぼ方形の平面形態を呈するようである。上面は一辺3.4mほどで深さは1.7mを測る。井戸の下部はやや開き気味の円筒状で、井戸中位で北側にテラス状の段を有する形態である。井戸の堆積層は12層に細分されるが、大きくみると４分割（上・




第３図　ＳＫ－3101出土状況（Ｓ＝1/40）

１．ＳＫ－3101上層遺物出土状況

２．ＳＫ－3101中層遺物出土状況

３．ＳＫ－3101馬骨出土状況

４．処理後の馬骨

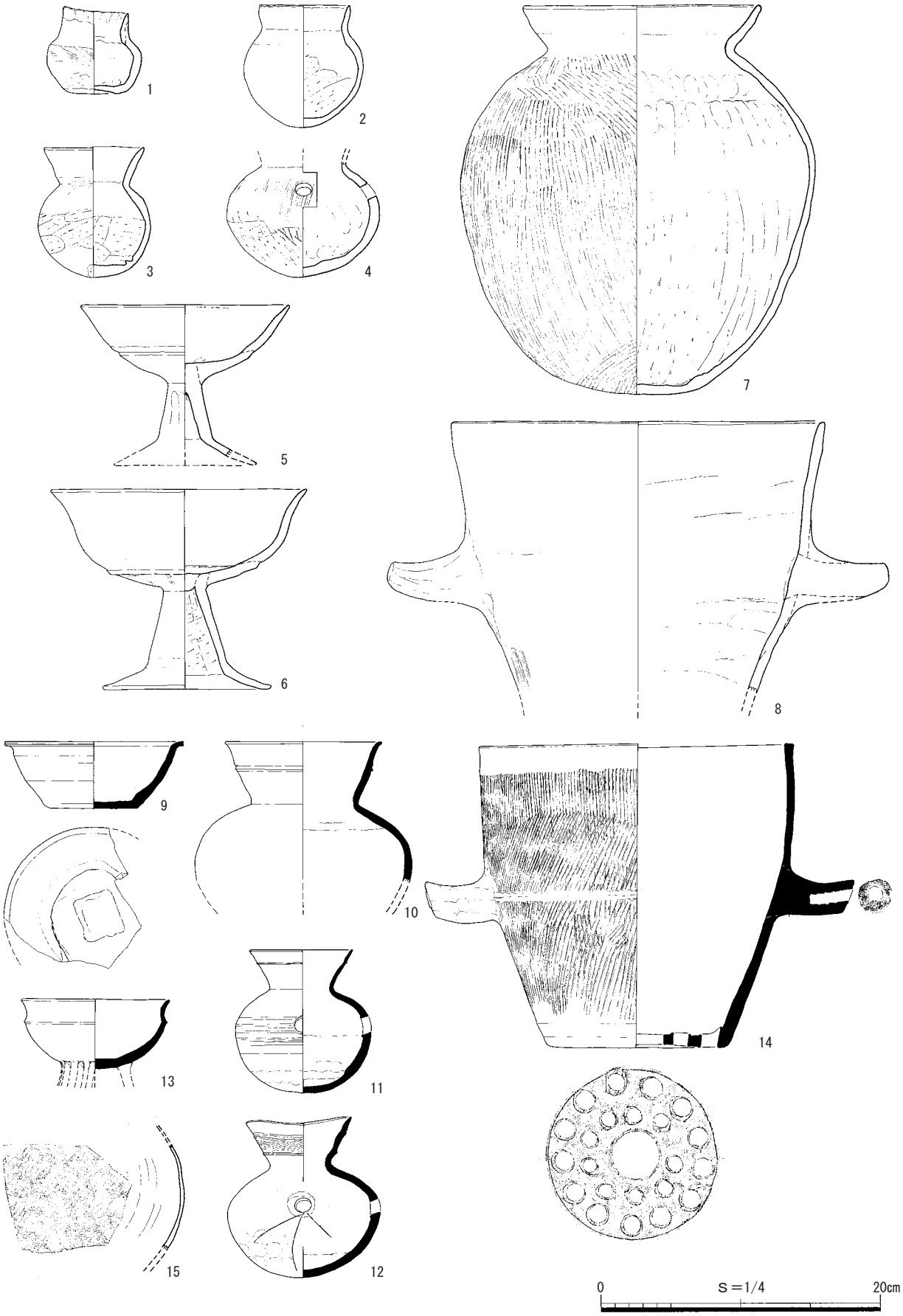
中・下・最下層）５分層（遺物取上層序に対応）される。井戸最下層と下層の堆積は井戸使用時の堆積、中層・上層は井戸機能喪失後の堆積と考えられる。これらの土層は主に粘土層や粘質土層で構成され、井戸機能喪失後は上部が開放され滞水状態で、徐々に埋没していったと考えられる。

出土遺物は、中層から上層にかけて土器のほか木製品等が多量に出土した。特に第Ⅵ層では、土師器の小形丸底壷や高坏、甕、木製品では田下駄、木錘12点、腰掛け、手網等が一括投棄された状態で出土した。その上部にあたる第Ⅱ層・第Ⅰ層では、土師器の壷や小形丸底壷、鍋、高坏、甕、須恵器の坏、鍋、甑が完形・半完形で多量に出土した。また、南辺近くでは集積された状態で馬骨と土師器の小形壷が出土した。その状態は、40cmほどの方形を呈していることから木箱のような容器に納められていた可能性が高い。これら中層・上層の遺物は、井戸機能喪失後の凹みに投棄された祭祀遺物の可能性が高い。

（２）出土遺物

第４図はＳＫ－3101の上層から出土した土器で、１～８は土師器、９～15は須恵器である。１は２次焼成を受けた手づくねの小形壷である。２・３は小形丸底壷である。２は口縁部が短く、端部はナデでやや粗雑である。内面はケズリが見られるが、内外面ともナデ調整で仕上げる。３は口縁部をヨコナデ、胴部の中央から底部はケズリをおこない、器形を整える。また、胴部下半の内面もケズリをおこなう。４は鍋で、胴部下半はケズリ後軽くナデ調整をおこなう。胴部上半に円孔を穿つ。５・６は高坏で、５の坏部はやや内湾、６の坏部は外反する。６の脚部内面はケズリをおこなう。７は甕で、やや縦長の球形の胴部にやや内湾する口縁部がつく。外面は全体をハケ調整で仕上げる。胴部下半の内面はケズリをおこない全体をナデ調整で仕上げる。８は甑で、内外面はナデ調整で仕上げる。

９は口縁部を短く外反させる坏である。底部がやや歪であることから、楕円形の坏の可能性がある。外面底部底にはわずかな痕跡であるが方形のゲタ痕がみられる。10は直口壷で、頸部には１条の鋭い凸帯がめぐる。11・12は鍋である。いずれもやや横長の球形の胴部に短く直線的に外反する口頸部がつく。11は頸部に１条の凸帯、12は２条の凸帯間に波状文を巡らせる。11・12ともに胴部の円孔を穿った後にその周囲を整える。12はその円孔の下側に浅い線刻で三叉形の記号を描く。11・12の底部内面は一段凹んでおり、底部を作った痕跡とみられる。13は無蓋高坏で、脚部には縦長の透孔を12あける。坏部には１条の鋭い凸帯を界に口縁部は短く外湾する。14は甑で、外面は細条の平行タタキ、内面は丁寧なナデ調整で仕上げる。胴部中央には２条の沈線を巡らせることによって一対の把手を配する。やや反り上がった丸棒状の把手の端面には、丸棒の刺突による孔がみられる。底部中央には大きな円孔を穿ち、外側に向かって大小の円孔を２列に配する。15は瓦質焼成になった壷の胴部片で、器壁は薄く２～４㎜である。内外面は丁寧なナデ仕上げであるが、外面にはわずかに平行タタキの痕跡がみられる。９・10・12・14は暗灰色、11・13は黒灰色を呈し、特に９・11・13の断面は暗紫色を呈し、堅緻な焼成である。11・12・14は完形品の優品である。これら須恵器は、奈良盆地中央部における初期須恵器の一群として良好な資料になろう[1)]。




第４図　ＳＫ－3101出土土器

## 3. ウマ遺存体の概要

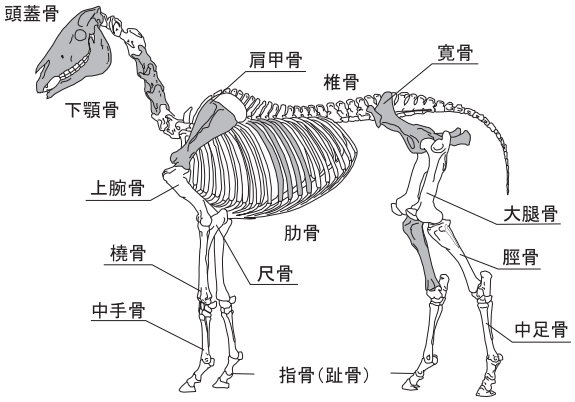
ＳＫ－3101第Ⅱ層から出土したウマ遺存体は、骨質が脆弱な状態であること、出土状況に意味があることから、周辺の土壌とともに切り取った状態で保管されている。ウマ遺存体は、一辺が約40㎝の方形の範囲に折り重なって出土しており、肉眼で確認できた部位は、頭蓋骨１点、下顎骨（左１右１）、椎骨（頸椎）３点、肋骨１点以上、肩甲骨（左１右？１）２点、寛骨（右）、脛骨（右）、中手骨あるいは中足骨（左右不明）１点である（第１表）。

頭蓋骨は方形の対角線上にあり、上顎骨から鼻骨まで確認でき、眼窩付近まで遺存している可能性がある。しかし、前頭部付近の上部に頸椎があるため、詳細な観察は困難である。上顎骨には切歯が植立した状態である。頭蓋骨の左側に、下顎骨が同方向で配置されており、右側が上、左側が下の横倒し状態である。下顎骨には、切歯と臼歯が植立している。右下顎骨は第２前臼歯と第３前臼歯の間で割られており、第３前臼歯から第３後臼歯までの下顎体が方形の一辺をなすように置かれている。下顎骨（左）の下には肩甲骨（左）がある。頭蓋骨の右側頭部の付近には寛骨があり、頭蓋骨と同方向に配置され、その寛骨のそばには中手骨あるいは中足骨がある。頭蓋骨の頭尾方向に約45度の角度、則ち方形の１辺をなす位置に脛骨があり、骨幹部から遠位端が遺存している。肋骨は、下顎骨の上部や脛骨付近など複数が散乱している。

下顎骨に植立する切歯の咬耗状況と、下顎第３前臼歯（右）の歯冠高が61.4㎜を測ることから（第２表）、生後４～５年の若齢馬と推定される[2)]。また、脛骨の遠位端最大幅（Bd）は71.4㎜を測り、体高135～140㎝と推定され[6)]、下顎後臼歯列長（右）が89.9㎜を測り、日本在来馬の木曽馬などの中型馬に相当する大きさである。

第１表　ウマの出土部位一覧

| 取上番号 | 部位 | 左右 | 備考 |
|---|---|---|---|
| B-202 | 頭蓋骨 | 左右 | |
| B-202 | 下顎骨 | 左右 | |
| B-202 | 頸椎 | － | ３点 |
| B-202 | 肋骨 | － | 複数点 |
| B-202 | 肩甲骨 | 左 | |
| B-202 | 肩甲骨 | 右？ | |
| B-202 | 寛骨 | 右 | |
| B-202 | 脛骨 | 右 | Bd71.4，Dd43.1 |
| B-202 | 中手骨/中足骨 | － | |




第５図　出土した骨格部位

第２表　ウマの臼歯計測値

| B-202 | 左 | | 右 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 歯種 | P3 | P2 | P2 | P3 | P4 | M1 | M2 | M3 |
| 歯冠長 | × | 34.4 | 33.2 | 30.8 | 28.9 | 26.6 | 27.7 | 32.7 |
| 歯冠幅 | × | 13.4 | 14.5 | 16.3 | 15.5 | 14.8 | 13.4 | 12.4 |
| 歯冠高 | × | × | × | 61.4 | × | × | × | × |
| 臼歯列長 | × | | × | | | 89.9 | | |

## 4．唐古・鍵遺跡から出土したウマの意義

古墳時代研究において、馬を埋葬した古墳や馬具の出土が多い河内、信濃、肥後、日向等の地域が、従来から注目されてきた。大和にも馬飼いがいたことは、文献史学から指摘されており、『日本書紀』の允恭天皇四十二年十一月に、「倭飼部（やまとのうまかいべ）」が登場し、古墳時代の奈良盆地にも馬飼い集団がいたと考えられる。また、９世紀に成立した『新撰姓氏録』に、允恭天皇の時代に馬一匹を献じ、その馬の額に町形の廻毛があったので、姓を額田部と賜ったという記録から、額田部氏と馬飼いとの関連が推定されている[7]。

奈良盆地では、天理市布留遺跡[8]、桜井市谷遺跡[9]、橿原市四条遺跡[10]、高取町勧覚寺遺跡[11]、御所市南郷大東遺跡[12] 等で、古墳時代中期から後期のウマ遺存体が出土している。奈良盆地の中南部に出土遺跡が点在しており、主に山地や丘陵の麓に立地している。布留遺跡と南郷大東遺跡では多数の馬歯が出土しており、それぞれ物部氏、葛城氏と関連する遺跡と考えられていることから、古墳時代の有力者が複数のウマを保有していたと考えられる。

唐古・鍵遺跡は、ウマ遺存体が出土した古墳時代の遺跡では、盆地中央部の低地に位置する数少ない遺跡であり、ウマを保有していた集落の分布状況を知る手がかりとなる。出土したウマは、生後４～５年の若齢個体で、体高135～140㎝と古墳時代では体格が良いものである。また、骨が積み重なった状態で、一辺約40㎝の方形の範囲に収まっていることから、腐食しやすい素材で作られた容器に収納されていた可能性がある。あるいは、植物質などの痕跡が見られないこと、最も大きな骨格部位である頭蓋骨を対角線上に置いていること、下顎骨を意図的に割っていることを考慮すると、容器には入れずに方形に配置した可能性もある。明瞭な解体痕は見られないが、容器に入れている場合でも、入れていない場合でもウマを解体して、肉や腱などの軟部組織が除去されている。唐古・鍵遺跡では、このような体格の良い若齢馬を入手し、屠殺、解体し、骨を容器に入れる、あるいは方形に組み配置することで、何かの祭祀・儀礼に用いられたと考えられる。

## 5．おわりに

唐古・鍵遺跡第59次調査井戸ＳＫ－3101の最上部で、ウマの頭蓋骨や下顎骨など、１個体分の骨格部位が出土しており、このウマは５世紀第１四半世紀に位置づけられ、奈良盆地でも早い段階にウマを保有した集団がいたことは注目される。一辺が約40㎝四方の方形の範囲に収められ、有機質の容器に入れたか、骨を組んで配置したと考えられる。このウマは古墳時代では体格が良く、若齢のうちに、解体して肉などを除去した後に、骨だけを祭祀・儀礼に供したと考えられる。現在、唐古・鍵遺跡から出土したウマ遺存体は、奈良盆地中央部の低地で出土した数少ない出土例であり、古墳時代中期のウマを保有していた集落の分布を知る上でも重要である。さらに、古墳時代中期の唐古・鍵遺跡の性格の一端を明らかにする手がかりとしても貴重な資料である。

**註**

１）これら遺物については、奈良県立橿原考古学研究所　木下亘・前田俊雄両氏から類例を含め多義にわたってご教示を賜った。記して感謝いたします。

２）切歯の咬耗状況による年齢推定はGoody[3]、歯冠高による年齢推定と体高推定は林田・山内[4]、西中川駿

編[5]に倣う。

3）Goody, Peter C. 1976 Horse Anatomy J. A. Allen & Company Limited, London.

4）林田重幸・山内忠平　1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告書』第6号 pp.146-156

5）西中川駿編　1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告

6）註2に同じ。

7）佐伯有清　1974「馬の伝承と馬飼の成立」『馬』 社会思想社　pp.119-1136

8）山内紀嗣編　2010『奈良県天理市布留遺跡杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区　発掘調査報告書遺構編』埋蔵文化財天理教調査団　pp.13-14

9）桜井市文化財協会　1991『桜井市埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書2』 桜井市文化財協会　p.12

10）パリノ・サーヴェイ　2010「四条遺跡出土骨の同定」『四条遺跡Ⅱ』 奈良県立橿原考古学研究所　pp.419-428

11）高取町教育委員会　2008『観覚寺遺跡Ⅳ』 高取町教育委員会　p.26

12）松井章　2003「南郷大東遺跡出土の動物遺存体」『南郷遺跡群Ⅲ』 奈良県立橿原考古学研究所　pp.303-308

# 唐古・鍵遺跡出土の両生類遺存体

琉球大学熱帯生物圏研究センター
中村　泰之

## １．はじめに

弥生時代の国内有数の遺跡である唐古・鍵遺跡（奈良県磯城郡田原本町）からは、これまでにかなりの量の脊椎動物遺存体が出土している。予備的な調査によれば、両生類は数においてその比較的大きな割合を占める可能性があるものの、これまで詳しい検討の対象にはされてこなかった。両生類は特定の環境への依存度が比較的高いと考えられる動物群であり、その出土遺存体を調べることにより、遺構やその周囲の環境に関する情報を得られることが予想される。ここではこれまでに調査することができた、20の遺構から出土した両生類遺存体の種組成の検討結果を報告する。

## 2．遺構

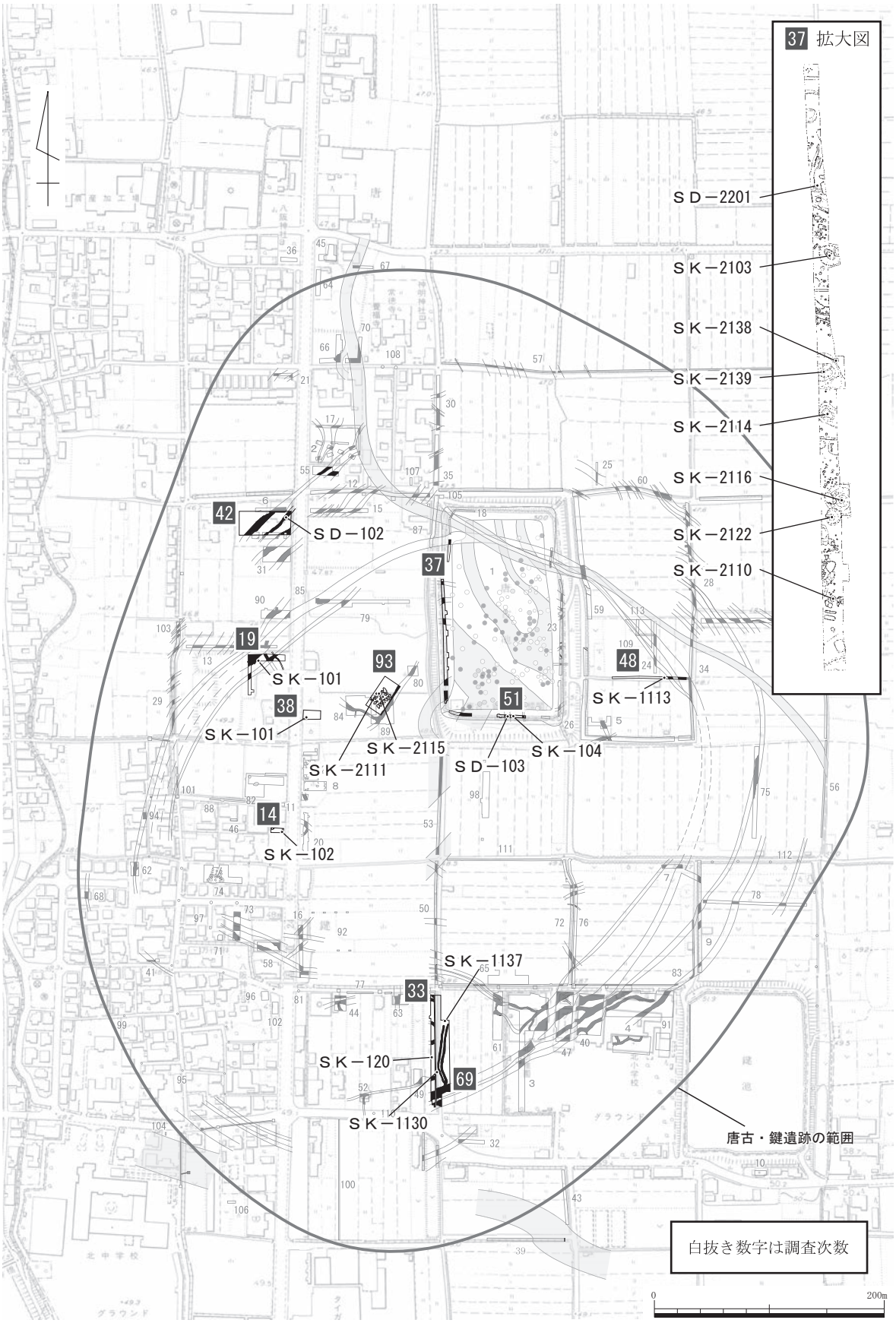
今回調査対象とした遺存体は、井戸遺構（16ヶ所）、集水施設遺構（１ヶ所）、溝遺構（２ヶ所）、そして環濠遺構（１ヶ所）の堆積土から出土したものである。これらの遺構の性質や年代等については、第１表に示した[1)]。これらのうち最も時代の古い遺構は弥生時代前期の溝で、その他は年代の古い順に、弥生時代中期のものが10、同後期のものが８、古墳時代前期のものが１である。

## 3．結果

両生類のものと同定された出土遺存体は、1,645点（うち有尾［サンショウウオ・イモリ］類63、無尾［カエル］類1,582）であった。出土個数が最も多かった遺構は第37次ＳＫ－2103（弥生後期初頭の井戸）で541点（有尾類４，無尾類537）を数え、次いで第93次ＳＫ－2115（弥生後期初頭の井戸）の343点（すべて無尾類）と第37次ＳＫ－2114（弥生中期中葉の井戸）の167点であった。なお、出土遺存体のカウントにあたり、単一の部位が破片化したと判断されたものについては、その破片を個々に数えなかった。

これらの遺存体からは、有尾類２種と無尾類６種が同定された。そのうちツチガエルが最も多い18遺構から同定され、推定されたその最小個体数は総計で81に達した。以下、各種の遺構別の出土数と、代表的な部位の同定根拠を示した。最小個体数は、各層準別の出土部位の数から求めたものである。

両生綱　Class Amphibia
有尾目　Order Caudata
サンショウウオ科　Family Hynobiidae
カスミサンショウウオ　*Hynobius nebulosus*




第１図　報告関連遺構位置図（Ｓ＝1/5,000）　　田原本町教育委員会作成

（1）出土遺構
第37次ＳＫ－2103（1点，最小個体数1），第37次ＳＫ－2122（3点，最小個体数1），第38次ＳＫ－101（1点，最小個体数1），第48次ＳＫ－1113（49点，最小個体数4）．

小型種である。その椎骨は、上下一対の担肋骨突起から成る横突起が側方に長く突出することから有尾両生類のものであり、また椎体から下方に伸びる突起をもたないことから胴椎と特定できる。そしてその両凹型（関節顆をもたない）の椎体と低い神経突起からサンショウウオ科ないしオオサンショウウオ科のものであると特定できる（ただしオオサンショウウオ［国内における唯一のオオサンショウウオ科］の可能性は、その大きさから除外できる）。さらに県内に生息するサンショウウオ科5種のうち唯一の低地性種であり（他の種は山地にのみ生息する）、奈良盆地に分布する[2)]本種のものと同定できる。上腕骨は腹側稜が短いこと、大腿骨は転子が遠位側に隆起を伴わないことで、次種のものと区別した。

イモリ科　Family Salamandridae
アカハライモリ　*Cynops pyrrhogaster*

（2）出土遺構
第19次ＳＫ－101（1点，最小個体数1），第37次ＳＫ－2103（3点，最小個体数2），第38次ＳＫ－101（5点，最小個体数1）．

小型種である。その胴椎（上記を参照）は、イモリ科の特徴である後凹型（関節顆が前方にある）の椎体と発達した高い神経突起をもつことにより、本種のものと同定できる（本種は日本本土に生息する唯一のイモリ科である）。大腿骨は、転子から遠位に伸びる顕著な隆起をもつことで、前種のものと区別した。

無尾目　Order Anura
ヒキガエル科　Family Bufonidae
ニホンヒキガエル　*Bufo japonicus japonicus*

（3）出土遺構
第14次ＳＫ－102（1点，最小個体数1），第37次ＳＫ－2103（5点，最小個体数2），第37次ＳＫ－2114（1点，最小個体数1），第37次ＳＫ－2120（1点，最小個体数1），第37次ＳＫ－2139（2点，最小個体数1），第38次ＳＫ－101（2点，最小個体数2），第48次ＳＫ－1113（2点，最小個体数1），第51次ＳＤ－103（3点，最小個体数2），第51次ＳＫ－104（2点，最小個体数2），第69次ＳＫ－1137（1点，最小個体数1），第93次ＳＫ－2111（1点，最小個体数1），第93次ＳＫ－2115（5点，最小個体数2）．

大型種である。本科特有の形態をもつ腸骨（腸骨稜を欠き、前関節領域が狭く、瘤状の上突起をもつ）に加え、他の部位についてもその大きさと骨の表面の細かい筋により、科レベルの同定は容易である。本科に属する種・亜種のうち、奈良盆地に分布するのはニホンヒキガエルのみであることから、こう同定した。

アマガエル科　Family Hylidae
ニホンアマガエル　*Hyla japonica*

（４）出土遺構
第48次ＳＫ－1113（５点，最小個体数１）.

小型種である。本科特有の形態を持つ上腕骨（遠位部が外側に折れ曲がる）と腸骨（腸骨稜を欠き、前関節領域が広い）は、本土産の他種のものから容易に区別ができる。

アカガエル科　Family Ranidae
ツチガエル　*Glandirana rugosa*

（５）出土遺構
第14次ＳＫ－102（１点，最小個体数１），第19次ＳＫ－101（11点，最小個体数５），第33次ＳＫ－120（２点，最小個体数１），第37次ＳＤ－2201（２点，最小個体数１），第37次ＳＫ－2103（41点，最小個体数14），第37次ＳＫ－2114（47点，最小個体数12），第37次ＳＫ－2116（４点，最小個体数３），第37次ＳＫ－2120（１点，最小個体数１），第37次ＳＫ－2122（６点，最小個体数３），第37次ＳＫ－2138（１点，最小個体数１），第37次ＳＫ－2139（４点，最小個体数１），第38次ＳＫ－101（11点，最小個体数５），第42次ＳＤ－102（１点，最小個体数１），第48次ＳＫ－1113（11点，最小個体数４），第51次ＳＤ－103（５点，最小個体数４），第51次ＳＫ－104（21点，最小個体数７），第69次ＳＫ－1137（４点，最小個体数３），第93次ＳＫ－2115（34点，最小個体数14）.

小型種である。本種の多くの部位はその形質により本土産の他種のものから区別できる。前頭頭頂骨は背面が平坦であり、体軸と平行な後頭骨溝をもつ。上腕骨は雌雄とも骨体が腹面に向かって強く湾曲し、また腹面観で肘関節部近位が強くくびれ、側面観で腹側稜の遠位部の縁が骨体とほぼ直線的に交わる。内側稜、外側稜ともに雌ではその発達がわずかだが明瞭で、雄では弧を描く外縁を伴ってよく発達する。腸骨は側面観でその上隆起の後端が関節窩縁の前端のレベルにあり、骨体が股関節部の前でくびれた形状になる。

ニホンアカガエル　*Rana japonica*

（６）出土遺構
第37次ＳＫ－2103（１点，最小個体数１），第38次ＳＫ－101（１点，最小個体数１），第51次ＳＫ－104（２点，最小個体数１），第93次ＳＫ－2115（４点，最小個体数１）．

小型種である。本種の上腕骨は、以下の特徴により本土産の他種のものから区別ができる。細身でその太さは腹面観でほぼ一様。側面観で骨体の反りがわずかであり、また腹側稜の遠位部の縁が骨体と中程度の角度を成す。雌では内側稜と外側稜を完全に欠く。腸骨は同属種のものと類似するが、側面観で上突起と腸骨本体との間の彫りが深いという特徴がある。

トノサマガエル　*Rana nigromaculata*

（７）出土遺構
第14次ＳＫ－102（３点，最小個体数２），第19次ＳＫ－101（３点，最小個体数２），第33次ＳＫ－120（１点，最小個体数１），第37次ＳＫ－2103（11点，最小個体数４），第38次ＳＫ－101（２点，最小個体数２），第51次ＳＤ－103（１点，最小個体数１），第51次ＳＫ－104（３点，最小個体数２），第69次ＳＫ－1137（２点，最小個体数２），第93次ＳＫ－2115（１点，最小個体数１）．

中型種である。多くの部位で骨形態が次種のものと似ている。上腕骨は次種同様、太短いことで本土産の他種のものと異なっている。そして雄の上腕骨の内側稜が内側上顆より外側には達しないこと、雌の上腕骨は内側稜が発達せず（明瞭な隆起を伴わない）、内側稜腹側の骨体のくぼみは不明瞭か、あってもその広がりが関節球の内側部に限られることにより、次種のものと区別ができる。

ナゴヤダルマガエル　*Rana porosa brevipoda*

（８）出土遺構
第14次ＳＫ－102（１点，最小個体数１），第33次ＳＫ－120（１点，最小個体数１），第37次ＳＫ－2103（６点，最小個体数５），第37次ＳＫ－2114（４点，最小個体数３），第37次ＳＫ－2122（１点，最小個体数１），第37次ＳＫ－2139（２点，最小個体数２），第48次ＳＫ－1113（２点，最小個体数２），第51次ＳＤ－103（１点，最小個体数１），第51次ＳＫ－104（１点，最小個体数１），第69次ＳＫ－1137（６点，最小個体数４），第93次ＳＫ－2115（７点，最小個体数６）．

中型種（ただし前種よりやや小型）である。本種の雌の上腕骨は、外側稜・内側稜ともに前種より発達する。内側稜は骨体背面の内側縁に沿って近位に伸びる鈍い隆起として認められ、内側観でその部分の骨体の腹側縁も角ばることから、両者の間には骨体のくぼみ（関節球のレベルより近位にまで伸びる）が常に認められる。雄の上腕骨の内側稜は、その外縁が通常、内側上顆より外側に達する。

## 4．考察

本遺跡出土の両生類は、水辺に生息する種、及び人家周辺の二次的環境にも生息できる種により構成されている。その種組成は、平地の止水・流水に富む環境に営まれた居住地という、本遺跡の立地をよく反映したものといえる。また、おもに開けた環境を好む種により構成されており、その生息に発達した森林環境を必要とする種が含まれていないことも、その特徴である。このことは当時、これらの遺構の周辺には、充分な面積を有する森林が存在しなかったことを示すものと考えられる。

興味深いことに、カスミサンショウウオやアカハライモリ、ニホンアマガエル、ニホンアカガエルの遺存体は、弥生後期以降の遺構のみで確認された。そして、おなじく弥生後期以降、遺構あたりの出土遺存体の数が、それまでと比べて増加する傾向がみられた（たとえば第37次や第51次調査の遺構からの結果を比較のこと）。実際に、出土遺存体の数で上位10位の遺構のうち、じつに８遺構が弥生後期以降のもので占められた。また遺構を２群（弥生後期以降とそれ以前）に分けた比較では、両者の間で出土遺存体数に差があることが統計学的にも確かめられた（マン・ホイットニーのＵ検定，Ｕ＝15，$P<0.01$）。ただし以上の出土遺存体数の比較は、当時、井戸替え（井戸さらえ）がおこなわれなかったことを前提とするものである（以下も参照）。

これら弥生後期以降にのみ出現する種は、総じてそれ以前の時期から確認される種と比べ、その生息により自然度の高い環境を要求すると思われるものから構成される。こうした両生類相の変化から、弥生後期以降、集落内のすくなくとも一部の地域において、それまでよりも自然度の高い環境（たとえば茂みや樹林等）があらたに展開したことが推定される。おそらくこの時期以降に出現した種は、もともと集落内の限られた場所に生息していたか、新たに周辺から侵入してきたものであろう。その他の種についても、その出土遺存体の数の増加が、こうした環境変化に伴っていた可能性がありそうである。このような変化をもたらした要因として、時期的な一致から、弥生中期末に全集落的に被害をもたらしたとされる洪水[3]の影響がまず考えられる。このイベントが、たとえばその後の集落内の土地の利用形態に、変化を生じさせたのかもしれない。

今回検討した両生類の遺存体はおおむね自然遺物と考えられ、人為利用の結果集積したものである可能性は低いと思われる。唯一その例外の可能性があるのは第51次ＳＤ－103出土の雌のニホンヒキガエルの上腕骨片で、全体が一様に灰白色を呈していることから、焼かれたものとみられる（写真１－４）。本種は体長（頭胴長）が10㎝を超える大型種なので筋肉を含む軟組織の量は多いものの、皮膚に毒腺を有することで知られており、人間の食用に適するかどうかは疑問である。仮に故意に焼かれたものとすれば、薬用等の利用の可能性を示すものかもしれない。

これらの遺存体の構成から、遺構の堆積環境についてもいくらかの考察が可能である。たとえばこれらの遺存体がおもに遺構に落ち込んで死んだ個体に由来するものと考えた場合、とくに井戸のような閉鎖環境では、一般に大型の種・個体ほど、その各骨要素が出土しやすいと予想される。ところが大型種であるニホンヒキガエルの遺存体は、その多くの部位が容易に同定可能であるにもかかわらず、すべての遺構（ほとんどが井戸）において、きわめて断片的にしか出土していない。その原因として考えられるのが、井戸遺構においては当時、井戸替えにより堆積物の除去がおこなわれていた可能性である。その一方で、これらの遺存体が遺構周辺に存在した死がいに由来しており、

その一部のみが降雨等に伴って遺構内部に流れ込んだという状況も考えられる。この見方は、多くの井戸が素掘りで、井戸枠を伴うものがまれであったこと[4]と矛盾しない。以上より、これらの遺存体の堆積環境の推定には、遺構の堆積物の層序と遺物の出土状況の検討が不可欠であるといえる。

本報告で８種もの両生類を同定できたのは、本遺跡において、微細な遺物まで取り上げる発掘がおこなわれてきたことによるところが大きいといえる。そのうちカスミサンショウウオとアカハライモリ、ニホンアカガエル、ナゴヤダルマガエルについては、本報告がおそらくその最古の記録となるものである。興味深いことに、今回同定されたのは、ニホンアマガエルとトノサマガエル以外、現在の奈良盆地の平地部ではごく限られた地域でのみみられる種[5]である。このことは、遺跡出土の動物遺存体が、遺構の性質や古環境のみならず、地域の環境史を再現するうえで有用な材料となりうることを示している。とくに動物遺存体が保存されやすい低湿地に位置する遺跡の発掘調査において、このような微小な試料の回収を可能にする取り組みが、積極的になされていくことが望まれる。

**註**

１）唐古・鍵遺跡では、現地表（水田面）から約50㎝下に弥生時代の遺構面が遺跡全面に拡がっており、弥生時代前期から古墳時代前期にかけて継続的に形成された地層が厚い所では約50～60㎝堆積している。これら堆積層の上部は黒褐色土層、下部は黒褐色粘質土や黒色粘土層等で構成され、各層が遺構面となって当時の遺構が掘削されている。遺構としては、環濠や区画溝、柱穴、井戸、木器貯蔵穴、遺物廃棄坑等があり、環濠や井戸等の遺構は当時の遺構面から２ｍほどの深さまで掘削されているものがある。これら深く掘削された遺構の堆積土は、滞水状態のものが多く水分を含んだ粘土層として形成されることが多い。このため、有機質遺物や各種遺存体は良好な状態で土層内に保存されている。このような井戸の埋没は、土器型式の変遷からみれば１型式内に収まるものが大半で、数年から十数年ほどで機能を停止し穴が密閉されるような状態になったと考えられ、そこから出土する遺物は一括性の高い良好な資料といえる。以上のような状況のもと、唐古・鍵遺跡の発掘調査では、密閉性（遺物の混在が少ない）が高く、豊富な遺物を含む井戸のような遺構の堆積土を重点的に持ち帰るようにしてきた。堆積土は、遺物箱（W34㎝×D54㎝×H15㎝）に採取し、その後１㎜メッシュの篩で水洗し、小動物骨や種子等各種遺物を選別する作業をおこなっている。今回の同定資料もこうした作業で選別された小動物骨の中から取り出された（本註は、藤田三郎氏［田原本町教育委員会］によるものである）。

２）井上龍一・佐藤孝則　2006「両生類の概要」奈良県レッドデータブック策定委員会編『大切にしたい奈良県の野生動植物～奈良県版レッドデータブック～脊椎動物編』 pp.104～106　奈良県　奈良

３）藤田三郎　2012『唐古・鍵遺跡』菊池徹夫・坂井秀弥監修　日本の遺跡45　同成社　東京

４）註３に同じ。

５）註２に同じ。

**唐古・鍵遺跡　調査報告書関係**

田原本町教育委員会　1983「第14次発掘調査の概要」『唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要１

田原本町教育委員会　1984「第19次調査発掘調査の概要」『唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報　黒田大塚古墳第１次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要２
田原本町教育委員会　1989「第33次発掘調査の概要」『唐古・鍵遺跡第32・33次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要11
田原本町教育委員会　1990「唐古・鍵遺跡第37次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報１　1988・1989年度』
田原本町教育委員会　1990「唐古・鍵遺跡第38次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報１　1988・1989年度』
田原本町教育委員会　1991「唐古・鍵遺跡第42次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報２　1990年度』
田原本町教育委員会　1992「唐古・鍵遺跡第48次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報３　平成３年度』
田原本町教育委員会　1994「唐古・鍵遺跡第51次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報４　1992・1993年度』
田原本町教育委員会　2009「第69次調査報告」『唐古・鍵遺跡Ⅰ―範囲確認調査―』田原本町埋蔵文化財調査報告書第５集
田原本町教育委員会　2009「第93次調査報告」『唐古・鍵遺跡Ⅰ―範囲確認調査―』田原本町埋蔵文化財調査報告書第５集

写真１　唐古・鍵遺跡出土の両生類遺存体（スケールバーは１㎜、次ページ）

1，カスミサンショウウオ胴椎（前面観［1a］，背面観［1b］，左側面観［1c］）

2，アカハライモリ胴椎（前面観［2a］，背面観［2b］，左側面観［2c］）

3，ニホンヒキガエル右腸骨（側面観）

4，被熱痕のあるニホンヒキガエル左上腕骨（腹面観）

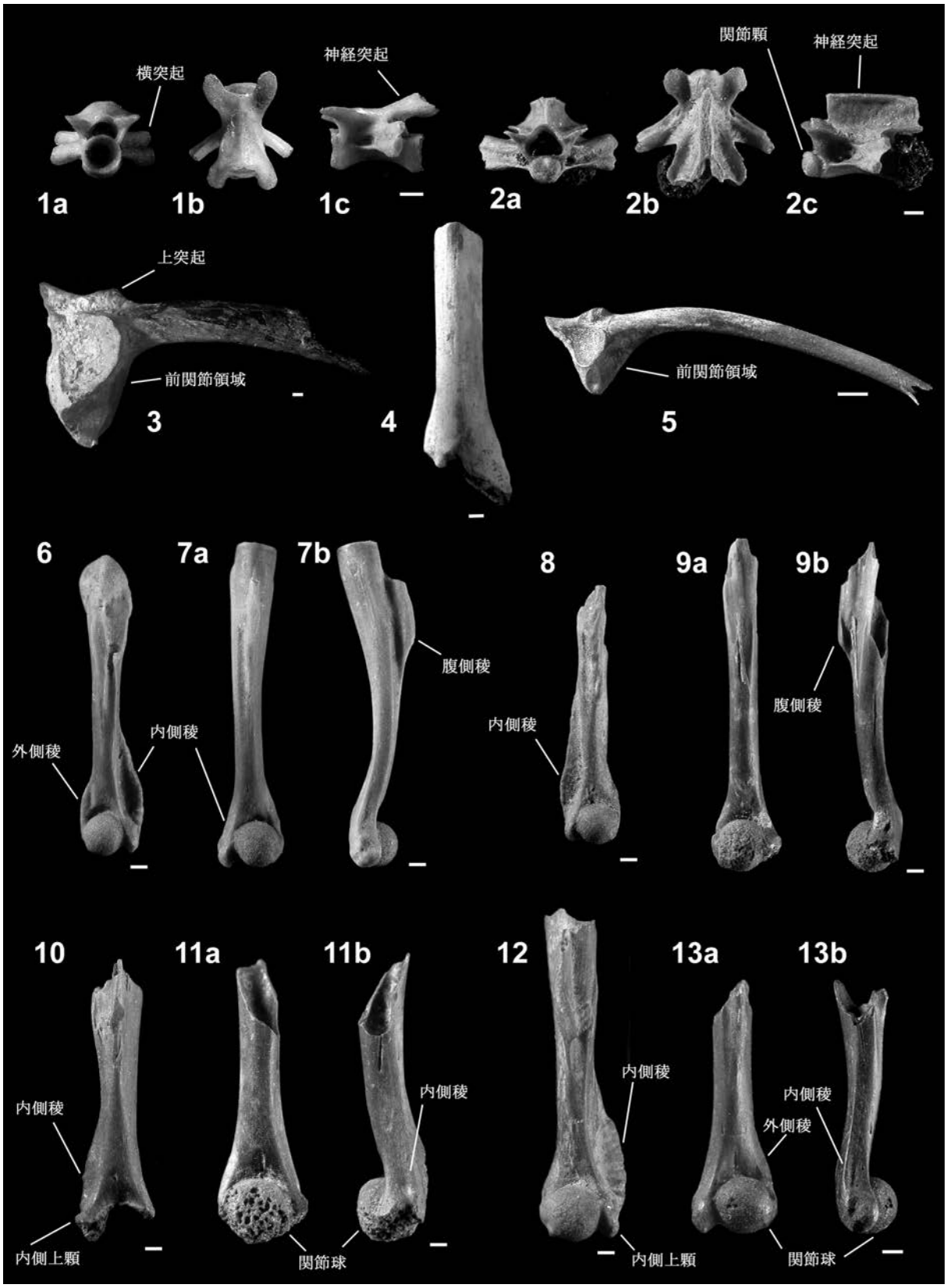
5，ニホンアマガエル右腸骨（側面観）

6－7，ツチガエル（6，雄の右上腕骨の腹面観；7，雌の左上腕骨の腹面観［7a］と内側観［7b］）

8－9，ニホンアカガエル（8，雄の左上腕骨の腹面観；9，雌の右上腕骨の腹面観［9a］と内側観［9b］）

10－11，トノサマガエル（10，雄の左上腕骨の腹面観；11，雌の右上腕骨の腹面観［11a］と内側観［11b］）

12－13，ナゴヤダルマガエル（12，雄の右上腕骨の腹面観；13，雌の左上腕骨の腹面観［13a］と内側観［13b］）


横突起
神経突起
関節顆
神経突起
1a
1b
1c
2a
2b
2c
上突起
前関節領域
3
4
前関節領域
5
6
7a
7b
8
9a
9b
外側稜
内側稜
腹側稜
内側稜
腹側稜
10
11a
11b
12
13a
13b
内側稜
内側稜
内側稜
外側稜
内側上顆
関節球
内側上顆
関節球

第１表　唐古・鍵遺跡出土の両生類遺存体の遺構・層準別一覧表
（遺構の性質、地区、年代は、藤田三郎氏の御教示による。Ｒは右、Ｌは左を表す）

| 調査・遺構 | 地区 | 性質 | 遺構の年代（大和土器編年） | 層準 | 分類群別出土点数とその内訳 |
|---|---|---|---|---|---|
| 14次 ＳＫ－102 | 西 | 井戸 | 大和第Ⅵ－３様式（弥生後期後半） | | 無尾類44 |
| | | | | 最下層 | ニホンヒキガエル（撓尺骨R1），ツチガエル（雄上腕骨R1），トノサマガエル（雌上腕骨R2，L1），ナゴヤダルマガエル（雌上腕骨L1），種不明38 |
| 19次 ＳＫ－101 | 西 | 井戸 | 大和第Ⅴ－１様式（弥生後期初頭） | | 有尾類１，無尾類64 |
| | | | | 第Ⅶ層 | 無尾類３：種不明 |
| | | | | 第Ⅶ・Ⅷ‘層 | 無尾類５：ツチガエル（雌上腕骨R1，腸骨L1），種不明３ |
| | | | | 第Ⅷ層 | 無尾類20：ツチガエル（雌上腕骨R3，L1，癒合頭骨１，前頭骨L1，腸骨L1），種不明13 |
| | | | | 第Ⅸ層 | 無尾類６：トノサマガエル（雄上腕骨R1），種不明5 |
| | | | | 第Ⅹ層 | 有尾類１，無尾類23：アカハライモリ（大腿骨L1），ツチガエル（雄上腕骨R1，腸骨R1），トノサマガエル（雌上腕骨R1，L1），無尾類種不明19 |
| | | | | 第Ⅺ層 | 無尾類６：種不明 |
| | | | | 第Ⅻ層 | 無尾類１：種不明の大腿骨 |
| 33次 ＳＫ－120 | 南 | 井戸 | 大和第Ⅳ－１様式（弥生中期後葉） | | 無尾類19 |
| | | | | 第Ⅳ層 | 13：ツチガエル（雄上腕骨R1，腸骨L1），トノサマガエル（雌上腕骨L1），種不明10 |
| | | | | 第Ⅴ層 | ４：種不明 |
| | | | | 第Ⅵ層 | ２：ナゴヤダルマガエル（雄上腕骨R1），種不明１ |
| 37次 ＳＤ－2201 | 西－北半 | 溝 | 大和第Ⅰ－２－ｂ様式（弥生前期後半） | | 無尾類３ |
| | | | | 第Ⅲ層 | ツチガエル（腸骨R1，L1），種不明椎骨１ |
| ＳＫ－2103 | 西－北半 | 井戸 | 大和第Ⅴ－１様式（弥生後期初頭） | | 有尾類４，無尾類537 |
| | | | | 第Ⅲ層 | 無尾類27：ニホンヒキガエル（雄上腕骨L1），種不明26 |
| | | | | 第Ⅳ層 | 有尾類２，無尾類364：アカハライモリ（椎骨２），ニホンヒキガエル（肩甲骨R1，腸骨R1，L1，大腿骨R1），ツチガエル（雄上腕骨R3，L1，雌上腕骨R7，L4，腸骨R4，L7，前頭骨R4，L2），ニホンアカガエル（雌上腕骨R1），トノサマガエル（雄上腕骨R2，L1，雌上腕骨R1，L1，前頭骨R1，L1、腸骨R1，脛腓骨L1，跗節骨１），ナゴヤダルマガエル（雄上腕骨R1，L2，雌上腕骨L3），無尾類種不明311 |
| | | | | 第Ⅴ層 | 無尾類48：ツチガエル（雌上腕骨L1），トノサマガエル（雌上腕骨R1），種不明46 |
| | | | | 第Ⅵ層 | 有尾類２，無尾類66：カスミサンショウウオ（上腕骨L1），アカハライモリ（椎骨１），ツチガエル（雄上腕骨R1、L1，雌上腕骨R2，腸骨R3，L1），無尾類種不明59 |
| | | | | 第Ⅶ層 | 無尾類31：種不明 |
| | | | | 最F層 | 無尾類１：種不明 |
| ＳＫ－2114 | 西－北半 | 井戸 | 大和第Ⅲ－２様式（弥生中期中葉） | | 無尾類167 |
| | | | | 第Ⅱ層 | ２：ニホンヒキガエル（椎骨１），種不明１ |
| | | | | SECⅤ層 | １：ツチガエル（雄上腕骨L1） |
| | | | | 第Ⅵ－ｂ層 | 28：ツチガエル（雌上腕骨R2，L2、癒合頭骨３，L1，前頭骨R2，L2，腸骨R2，L3，大腿骨R1，L1，脛腓骨R1，L1），ナゴヤダルマガエル（雌上腕骨R1，L1），種不明５ |
| | | | | 第Ⅵ(下)層 | 136：ツチガエル（雄上腕骨R2，L3，雌上腕骨R3，L1，前頭骨R1，L2,癒合頭骨２，腸骨R3，L6，左右癒合２），ナゴヤダルマガエル（雌上腕骨L2），種不明109 |
| ＳＫ－2116 | 西－北半 | 井戸 | 大和第Ⅲ－１様式（弥生中期中葉） | | 無尾類17 |
| | | | | 第Ⅲ層 | ２：ツチガエル（雌上腕骨R1），種不明椎骨１ |
| | | | | 第Ⅴ層 | 15：ツチガエル（雌上腕骨L2，前頭骨１），種不明12 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫ－2120 | 西－<br>北半 | 井戸 | 大和第Ⅳ－１様式<br>（弥生中期後葉） | | 無尾類６ |
| | | | | 第Ⅴ層 | ３：種不明 |
| | | | | 第Ⅵ層 | ２：ニホンヒキガエル（仙椎１），ツチガエル（腸骨L1） |
| | | | | 第Ⅶ層 | １：種不明椎骨 |
| ＳＫ－2122 | 西－<br>北半 | 井戸 | 大和第Ⅵ－１様式<br>（弥生後期前半） | | 有尾類３，無尾類51 |
| | | | | 第Ⅺ層 | 無尾類３：ツチガエル（雌上腕骨R1，腸骨L1），種不明烏口骨１ |
| | | | | 第Ⅻ層 | 無尾類２：ナゴヤダルマガエル（雌上腕骨L1），種不明烏口骨１ |
| | | | | 第XIII層 | 有尾類３，無尾類46：カスミサンショウウオ（胴椎1，上腕骨L1，大腿骨L1），ツチガエル（雌上腕骨R1，L1，腸骨L2），無尾類種不明42 |
| ＳＫ－2138 | 西－<br>北半 | 井戸 | 大和第Ⅲ－１様式<br>（弥生中期中葉） | | 無尾類３ |
| | | | | 第Ⅳ層 | ツチガエル（腸骨L1），種不明椎骨１，上腕骨L1 |
| ＳＫ－2139 | 西－<br>北半 | 井戸 | 大和第Ⅱ－３－ｂ様式<br>（弥生中期前葉） | | 無尾類39 |
| | | | | 第Ⅳ層 | １：種不明腸骨L1 |
| | | | | 第Ⅳ(下)層 | ７：ニホンヒキガエル（肩甲骨R1，雄上腕骨L1），ナゴヤダルマガエル（雌上腕骨L1），種不明４ |
| | | | | 第Ⅴ層 | 31：ツチガエル（雄上腕骨R1，L1，腸骨R1,L1），ナゴヤダルマガエル（雌上腕骨L1），種不明腸骨など26 |
| 38次<br>ＳＫ－101 | 西 | 井戸 | 布留１式<br>（古墳前期） | | 有尾類６，無尾類41 |
| | | | | 第Ⅲ層 | 無尾類２：ツチガエル（雌上腕骨L1），種不明鱗状骨１ |
| | | | | 第Ⅳ層 | 有尾類６，無尾類14：カスミサンショウウオ（胴椎１），アカハライモリ（胴椎５），ツチガエル（腸骨L1），ニホンアカガエル（雌上腕骨L1），トノサマガエル（雄上腕骨R1，雌上腕骨L1），ナゴヤダルマガエル（雄上腕骨L1），無尾類種不明９ |
| | | | | 第Ⅳ(下)層 | 無尾類５：ニホンヒキガエル（脛腓骨R1），種不明烏口骨など４ |
| | | | | 第Ⅴ層 | 無尾類10：種不明撓尺骨など |
| | | | | 第Ⅵ層 | 無尾類10：ニホンヒキガエル（上顎骨R1），ツチガエル（雄上腕骨R1，L1，雌上腕骨L2，癒合頭骨1，R1，前頭骨R1，腸骨左右癒合２） |
| 42次<br>ＳＤ－102 | 環濠帯 | 環濠 | 大和第Ⅳ様式？<br>（弥生中期後葉） | | 無尾類１ |
| | | | | 第XIII層 | ツチガエル（雌上腕骨R1） |
| 48次<br>ＳＫ－1113 | 北 | 井戸 | 大和第Ⅵ－３様式<br>（弥生後期後半） | | 有尾類49，無尾類42 |
| | | | | 第Ⅲ層 | 無尾類８：ニホンヒキガエル（撓尺骨L1，肩甲骨R1），ツチガエル（雄上腕骨R1，雌上腕骨R1，腸骨R1），ナゴヤダルマガエル（雄上腕骨L1），種不明２ |
| | | | | 第Ⅳ層 | 有尾類49，無尾類34：カスミサンショウウオ（上腕骨R1，L3，肩甲骨R1，大腿骨R4，L1，歯骨R1，環椎１，胴椎32，尾椎４，大腿骨L1），ニホンアマガエル（雌上腕骨L1，腸骨R1，L1，大腿骨R1，烏口骨L1），ツチガエル（雌上腕骨R1，L2，前頭骨L1，腸骨R2，L2），ナゴヤダルマガエル（雄上腕骨R1），無尾類種不明20 |
| 51次<br>ＳＤ－103 | 北 | 区画溝 | 大和第Ⅲ－１～３様式<br>（弥生中期中葉） | | 無尾類29 |
| | | | | 第Ⅲ層 | ４：ニホンヒキガエル（雌上腕骨［被熱痕あり］L1，撓尺骨R1），ツチガエル（腸骨L1），トノサマガエル（撓尺骨R1） |
| | | | | 第Ⅳ層 | 18：ニホンヒキガエル（腸骨L1），ツチガエル（雌上腕骨R1，L1），ナゴヤダルマガエル（雄上腕骨L1），種不明14 |
| | | | | 第Ⅳ－ｂ層 | ７：ツチガエル（雄上腕骨L2)、種不明5 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫ－104 | 北 | 井戸 | 大和第Ⅴ－１様式<br>（弥生後期初頭） | | 無尾類85 |
| | | | | 第Ⅲ層 | ３：ナゴヤダルマガエル（雄上腕骨L1），種不明２ |
| | | | | 第Ⅳ(下)層 | ４：ツチガエル（腸骨R1），種不明大腿骨３ |
| | | | | 第Ⅴ層 | 49：ニホンヒキガエル（雄上腕骨R1），ツチガエル（雄上腕骨R1，L1，雌上腕骨R1，L1，腸骨R2，L2），ニホンアカガエル（雄上腕骨R1，L1），トノサマガエル（雄上腕骨L1，雌上腕骨R1，L1），種不明35 |
| | | | | 第Ⅵ層 | 29：ニホンヒキガエル（撓尺骨L1），ツチガエル（雄上腕骨R1,L3，癒合頭骨１，前頭骨R1，腸骨R2，L4），種不明16 |
| 69次<br>ＳＫ－1130 | 南 | 集水<br>施設 | 大和第Ⅲ－３様式<br>（弥生中期中葉） | | 無尾類１ |
| | | | | 第Ⅵ層 | 種不明跗節骨？１ |
| ＳＫ－1137 | 南 | 井戸 | 大和第Ⅲ－３様式<br>（弥生中期中葉） | | 無尾類79 |
| | | | | 第Ⅵ層 | １：ニホンヒキガエル（撓尺骨R1） |
| | | | | 第Ⅵ(下)層 | 57：ツチガエル（腸骨R1，L1），トノサマガエル（雌上腕骨L1），ナゴヤダルマガエル（雄上腕骨R1，L1，雌上腕骨R3，L1），種不明48 |
| | | | | 第Ⅺ層 | 21：ツチガエル（腸骨R2），トノサマガエル（雌上腕骨R1），種不明18 |
| 93次<br>ＳＫ－2111 | 西－<br>北半 | 井戸 | 大和第Ⅵ－３様式<br>（弥生後期後半） | | 無尾類11 |
| | | | | 第Ⅳ(下)層 | ニホンヒキガエル（肩甲骨L1），種不明10 |
| ＳＫ－2115 | 西－<br>北半 | 井戸 | 大和第Ⅴ－２様式<br>（弥生後期初頭） | | 無尾類343 |
| | | | | 第Ⅵ層 | 133：ニホンヒキガエル（肩甲骨L1，大腿骨L1，尾柱１），ツチガエル（雌上腕骨R2，前頭骨L2，腸骨R3，L4），ニホンアカガエル（雄上腕骨R1，L1，腸骨R1，L1），トノサマガエル（雌上腕骨L1），ナゴヤダルマガエル（雌上腕骨L2）、種不明112 |
| | | | | 第Ⅶ層 | 210：ニホンヒキガエル（上顎骨L1，椎骨１），ツチガエル（雄上腕骨L3，雌上腕骨R7，L4，頭骨３，前頭骨R1，L1，腸骨R2，L2），ナゴヤダルマガエル（雄上腕骨L1，雌上腕骨R1,L3），種不明180 |

**田原本町文化財調査年報22**
2012年度

平成26年 3 月24日

編集発行　田原本町教育委員会
印　　刷　株式会社　明新社